

古英詩の世界

藤原保明

目次

| | |
|--------------|----|
| 第一部 古英詩概説 | 一 |
| 第一節 古英詩の成立 | 一 |
| 第二節 古英詩の韻律構造 | 九 |
| 第三節 古英詩のジャンル | 一八 |
| 第四節 古英詩の表現 | 三三 |
| 第五節 古英詩の翻訳 | 四〇 |

| | |
|----------|-----|
| 第二部 古英詩選 | 五〇 |
| 凡例 | 五〇 |
| 第一節 叙事詩 | 五二 |
| ベーオウルフ | 五二 |
| モールドンの戦い | 三三 |
| 第二節 宗教詩 | 四〇 |
| キリストとサタン | 四〇 |
| 創世記 A | 二六 |
| ヘレナ | 三八 |
| ユリアナ | 二五〇 |
| ユデト | 二六九 |
| 第三節 寓意詩 | 二七七 |
| 不死鳥 | 二七七 |
| 訳注 | 二九三 |
| あとがき | 三六 |
| 参考文献 | 三八 |

第一部 古英詩概説

第一節 古英詩の成立

英語の成立

ローマ時代の歴史家タキトゥスの『ゲルマニア』によると、ゲルマン民族の間にはかなり以前から語り継がれ、歌い続けられてきた古い歌がいくつかあった。これらの歌の内容は今ではほとんど何も分からなくなっているが、少なくともその形式は現存する古英詩や他のゲルマン古詩に近かったものと思われる。その理由は、まず第一に、当時は言語的にかなり均質であり、後の東ゲルマン語、西ゲルマン語、北ゲルマン語へと分化していなかったと推測されること、第二に、後二者の言語が分化して出てきた古英語、古高ドイツ語、古ノルド語にはきわめて類似した形式の詩が伝えられていること、第三に、これらの詩の形式はゲルマン語固有の言語特性、とりわけ、語幹の第一音節に主強勢を付与する固定アクセント、およびこの特徴から生じてくる強勢の境界表示機能に深く根差していることである。したがって、古英詩の起源はかなり古くまで溯れるが、古英詩そのものの成立は古英語という言語の成立を待たねばならない。いくら形式が似ていようと、現存するゲルマン古詩は言語そのものが異なっており、厳密には形式も異なるところがあるからである。もっとも、古英詩の題材の中には、たとえば、『ベーオウルフ』のように、舞台はブリテン島ではなくて、デンマークと南スエーデンであり、民族もアングロ・サクソン族ではなくデネ族とイェーアト族である。

古英語の成立は、五世紀の中頃以降にアングル族、サクソン族、ジュート族というゲルマン民族がブリテン島に侵入し、定住し始めてから二、三百年後のことである。それ以前は文献はほとんど残されていないし、豊富な文献が始める八世紀頃になると、ブリテン島の住民の言葉である古英語は、たとえば、この島に移住しなかったサクソン族の子孫たちの言葉、すなわち、古サクソン語と比べてみると、すでに別々の言語と呼ぶに値するほど互いに異なったものとなっている。

古英詩の成立

ゲルマン人がブリテン島で七〇〇年頃から一一〇〇年頃までの間に当時の英語で書き記した詩は古英詩 (Old English poetry) と総称されている。四四九年以降約二〇〇年の長い間に大陸からブリテン島に移り住んだゲルマン人はジュート族、アングル族、サクソン族の三部族から成る。彼らは大陸にいる頃からルーン文字 (runes) と呼ばれる直線的で鋭角的な文字を用いていて、木・石・金属のような硬い材質に文字を刻んでいた。五九七年にキリスト教が伝えられると、各地に教会や学校、修道院が建てられ、ローマ人とアイルランド人の宣教師たちは手書きによる記録の作成を英国人に伝えた。英国人は最初はラテン語で著述を行っていたが、七世紀以降になると、ラテン語の文献の行間や余白に英語で注釈などの書き込み (gloss) をするようになり、ついで、英語だけで文書を作成するようになった。この頃までに、英語は近縁である大陸のゲルマン語のフリースランド語や低地ドイツ語のサクソン語やフランク語とは異なる、独自の言語変化を遂げ、文献も多く残されるようになった。そして、一〇〇〇年頃には、大陸の同族言語とは互いに理解し合えないほど全く異なる言語になってしまっていた。

五世紀の中頃からブリテン島に侵攻し、定住したゲルマン人の中には吟遊詩人 (scop) がいて、宴席などの場で族

長の武勲や伝説的な英雄の戦績を歌っていたのは事実らしい。残念ながら、このような口承による初期の詩で今日まで残っているものは一つもない。しかし、英国ではこのような口承詩はたえず作られ、次第に洗練され、完成されていった。八世紀はその黄金時代といわれている。この頃から口承詩は文字の詩に変わると共に、異教的詩想もキリスト教的詩想に変わっていく。大陸からもたらされた異教の伝説に基づいて作られた『ベーオウルフ』(Beowulf)でさえ、現存する詩はキリスト教の光をくまなく浴びている。英国各地の修道院では、修道士たちが先人の異教の吟遊詩人たちから伝えられたゲルマン民族共通の遺産である韻律・語彙・作詩法・文体を用いて、聖書や聖人にちなむ物語を詩に整えていた。最初は簡単な挿話であったが、後には長編の叙事詩も登場することになる。一〇世紀はこのような作詩活動と、文字で記し、写本に保存するという活動が修道院で盛んに行われた(Mosse, 1963:50-51)。

古英詩の写本

古英詩のほとんどは手書きの写本に保存されたが、これらの写本はヴァイキングによる修道院の略奪と破壊行為によって、大半は消失・散逸してしまった。現存する約三〇、〇〇〇行の古英詩のほとんどは四つの写本(「ベーオウルフ写本(The Beowulf MS)」「エクセター写本(The Exeter Book)」「ユニウス写本(The Junius MS)」「ヴェルチェリ写本(The Vercelli MS)」)に保存されているが、いずれも大なり小なり痛んだり破損したりした状態で伝わっている。

「ベーオウルフ写本」

この通称で知られている写本は大英図書館に収蔵されていて、正式な名称はCotton Vitellius, A.xv.である。かつては別個であった二つの写本を一緒にしたもので、九編の古英語のテキストから成り、詩では『ベーオウルフ』と

『ユデト』(Judith) の二編が含まれている。この写本は一〇世紀ないしは一一世紀初頭に二名の写字生 (scribe) が筆記したもので、いずれもそれより以前の写本に基づいている。詩は行単位ではなく、散文と同じように続けて書かれている。句読点は散在的で不規則であり、長母音の表記には統一が見られないなどの事実から、これらの写字生は無学な記録者であったものと思われる。

この写本は一七世紀初頭に Sir Robert Cotton の蔵書となった。一七三一年に火災の被害にあい、写本の端は焼けこげ、全体にもろくなり、次第に痛みが進行するようになったため、保存対策がとられている。一八八二年、この写本の写真複製版が初期英語テキスト刊行協会 (EETS) から刊行された。

「エクセター写本」

この写本は一〇七二年以来、英国南西部にあるエクセター大聖堂 (Exeter Cathedral) の参事会図書館 (Chapter Library) に収蔵されている。レオフリーチ (Leofric 一〇七二年没) 司教がこの大聖堂に贈った寄贈品の目録では、この写本について、「詩の形式で作成された、さまざまなテーマについての、大きな英語の本」と記されている。しかし、この写本はある時ひどい損傷を受けたらしく、初めの部分のリーフ (leaf) が少なくとも数枚、写本全体のあちこちで七枚のリーフが失われ、本来の写本のかんりの分量が消失したものと思われる。さらに、現存の写本も最初と最後の部分はそれぞれ数頁がかなり痛んでいる。

現存の写本は一〇世紀後半の書体で綺麗に書かれていて、「アングロ・サクソンの筆跡の中では最も上品なもの」と称えられている。収録されている詩の範囲と多様性において、四つの写本の中で傑出している。たとえば、この写本には宗教詩が多く含まれていて、このうちの二つ『ユリアナ』(Juliana) と『キリスト II』(Christ II) には古

英語期最大の宗教詩人キネウルフ (Cynewulf) のルーン文字による署名が入っている。『ユリアナ』は『グースラーク』 (Guthlac) と共に聖人伝説の代表的なものである。『不死鳥』 (The Phoenix) は韻文によるキリスト教の寓話の例としては申し分のないものである。これらの宗教詩と並んで、大陸の伝説に深く根差した詩、『ウィードシース』 (Widsith) と『デール』 (Deor) があり、また、一群の『謎詩』 (Riddles) は、この確立した文学形式が古英語でも用いられたことを示している。やうに、『人間の才能』 (God's Gifts to Humankind)、『人間の運命』 (The Fates of Mortals) や、『ちまたの人』 (The Wanderer)、『海行へ人』 (The Seafarer)、『廃墟』 (The Ruin)、『妻の嘆き』 (The Wife's Lament)、『夫の便り』 (The Husband's Message) などの一連の哀歌 (elegies) は、古英語の叙情詩の代表作となっている。

この写本は書体の安定性や、方言の違いが認められないなどの言語上の統一性という特徴から判断して、一人の写字生によって書かれたと考えられている。しかし、これらの特徴は写字生に負うものではなく、当時すでに存在していた、アルフレッド王 (King Alfred, 849-899) の頃まで溯れる原作に基づくのであって、現存の詩集はこの原作を単に転写したにすぎないという説もある (cf. Sisam 1953:107-8)。活字本で最も新しいのは Bernard J. Muir (編) の *The Exeter Anthology of Old English Poetry* (一九九四年、エクセター大学出版局刊) の二巻本である。

「ユニウス写本」

一六三〇年頃、アイルランドのアーマー (Armagh) の大司教アッシャー (Ussher, James, 1581-1656) はこの写本を手に入れ、それをオランダの神学者ユニウス・デュ・ヨン (Junius du Jon, 1545-1602) に贈った。ユニウスは一六五五年にアムステルダムでこの写本の校訂本を出版した後、写本を英国に返還した。その後、この写本はユ-

415
ニウスが所蔵する他の写本と一緒にオックスフォード大学のボドレー図書館 (Bodleian Library) に収められた。

この図書館ではこの写本はMS. Junius XIとして知られている。

この写本の筆跡は明らかに一〇世紀のものであり、最初の三編の詩は同一の筆跡であるが、『キリストとサタン』(Christ and Satan) はこれとは別の三名の手になる。そして、五人目の手によって写本全体に訂正が施されている。行方不明のリーフが何枚かある。四つの古英詩の写本のうち、この写本には唯一挿し絵が入れられていて、一〇三五年に英国最北のノーサンバーランドのニューミンスター (Newminster) の大修道院長になった人物 (と同一と言われる) エルフウィネ (Elfwine) の肖像画も一枚描かれている。

この写本には『創世記』(Genesis)、『出エジプト記』(Exodus)、『ダニエル』(Daniel)、『キリストとサタン』の四編の詩が含まれているが、写本では二つの部分に分かれているにすぎず、前三者は五五節から成る単一の詩として書き上げられ、『キリストとサタン』の三つの断章は二節から成る単一の詩として書かれている。

これら四編の詩は早くからカドモン (Cædmon) の手になると考えられ、そのために、この写本は「カドモン写本」(The Cædmon MS) と呼ばれることがある。その根拠は、カドモンの九行から成る『讃歌』(Hymn) と『創世記』の最後の数行がわずかに一致すること、および、ベード (Bede) によってカドモンに帰せられている作品のテーマとこの写本の中の詩のテーマが部分的に一致することである。しかし、確証は一つも得られていない。

「ヴェルチェリ写本」

一〇世紀後半に書かれたと思われるこの写本は、いつの頃から英国からイタリアに流出し、現在は北イタリアのヴェルチェリの大聖堂のエウゼビア古文書館 (Eusebian Archives) の蔵書 (No. cxvii) となっている。Kennedy

(1971:358-9) は、この写本は枢機卿 Guala Bicchieri によってイタリアにもたらされたとする説を支持し、その経緯を詳細に述べているが、Brooks (1961:xi-xiv) のように、この説に否定的な学者もいる。

一三五葉から成るこの写本は保存状態はよく、一〇世紀の英国南部出身の英国系アイルランド人のものと思われる筆跡はきわめて綺麗で形も整っている。写字生が一人か複数かは意見の分かれるところである。この写本は、詩集となっている「エクセター写本」とは異なり、詩と散文の説教集の寄せ集めである。キネウルフのルーン文字の署名入りの詩『〈エネ〉』(Elene) と『使徒の運命』(The Fates of the Apostles) の外に、『アンデス』(Andreas)、『十字架の夢』(The Dream of the Rood)、『魂と肉体』(Soul's Address to the Body)、『および「詩編」(Psalm xxviii)』に基づく二七行の断章がこの写本には含まれている。

以上の四つの写本はすべて一〇〇〇年頃に、主として後期ウェスト・サクソン方言で書き留められたものであるが、数世紀前から共通の詩の語彙の一部として残されてきたアングリア方言とノーサンブリア方言の語形が混在している。これらの写本に含まれている詩が、口承にせよ筆記にせよ、元々いつ作られたのか、その正確な時期は不明である。しかし、学者の意見は一般に七世紀後半から九世紀前半に及ぶ早い時期ということまで一致している。『ベール・オウルフ』やカドモンの詩はこの時期に属し、キネウルフの詩は九世紀、『創世記B』や『ユデト』および後期の戦争の詩は九一〇世紀に属する。もっとも、個々の詩の成立時期については学者の意見が一致しないこともある。

その他に、古英詩が含まれる写本は四点ある。一つは、ケンブリッジ大学のコーパス・クリスティ・カレッジ(Corpus Christi College)に収蔵されているMS CCCO 201¹、二つめは、パリの国立図書館にある、「パリ詩編」(The Paris Psalter) と呼ばれるMS Fonds Latin 8824²、あと二つは大英図書館のコットン・コレクションに収録

413
されている「ボエチウス写本」(The Boethius MS)と称される Cotton Otho A.vi, ff. 1-129 v Cotton MS

Tiberius B, I, 115a-b (ここには格言詩六六行が含まれている)である。

古英詩の作者

かつて、すべての古英詩はカドモンとキネウルフという二大詩人によって作られたとする見方があった。そのため、「ユーニウス写本」の作品はカドモンによって書かれ、「エクセター写本」と「ヴェルチェルリ写本」の大半はキネウルフの手になるとされた。この考え方には、韻律・統語・語彙・語法などの分野の研究によって、賛否両論が出されてきた。しかし、当時の英国におけるアングロ・サクソン人たちの広範囲で活発な文化活動に対する認識が深まるにつれ、数世紀に及ぶ作詩活動がわずかに二名の詩人の手だけに委ねられていたとする考え方は崩れてきた。さらに、口承定型理論の指摘に従うと、文学的独創性と模倣という我々の考え方、および、これに基づき個々の詩を特定の作者にあてがうことは、当時の英語が置かれていたさまざまな状況を考慮すると、大幅に修正されねばならない。一〇行以上の古英詩をカドモンの作としたり、ルーン文字で巧みに自分の署名を盛り込んだ四編の詩以外の詩をキネウルフ作とすることは、今日ではだれも納得しないであろう。古英詩の大半の作者はまったく不明である (cf. Cassidy & Ringer, 1971: 272)。

第二節 古英詩の韻律構造

ゲルマン古詩の詩形

古英詩のみならず、古ノルド語、古サクソン語、古高ドイツ語で書かれた現存のゲルマン古詩は別々の発達をとげてはいるが、明らかに共通の詩形に由来している。たとえば、Gallehusの金製の角形酒器にルーン文字で刻まれた四五世紀の銘文と一〇世紀末の一行から成る古英詩の謎詩を例にあげて、詩形を比べてみる。

(1)

(a) Ek Hlewagastir Holfjar horna tawid

I, Hlewagast, Holt's son, made (this) horn.

(b) Ic eom æþelinges æht ond willa. (Riddle 78)

'I am nobleman's property and pleasure.'

両者は五〇〇年ほどの時間の隔たりがあるものの、ゲルマン古詩の特徴は明確に表れている。すなわち、両者とも頭韻長行と呼ばれる一行から成り、行は左右二つの半行で構成されていて、左半行にある一つないしは二つの強勢母音の直前の子音は右半行の一つの強勢母音の直前の子音と一致する。すなわち、(1a) では/h/、(1b) では/ʒ/ (声門閉鎖音) が行中で繰り返されている。なお、語は強勢 (stress) に基づく強弱というアクセント型を示すことから、半行のリズムも、最も短い三音節語一つから成る半行から一〇数音節から成る長い半行に至るまで、強弱型が基本となっていて、長行においても頭韻の有無によって全体として強弱のリズム型を示していたものと思われる。

古英詩の韻律構造

古英詩の構造上の特徴を明らかにするために、『ベーオウルフ』から無作為に一節(二九〇—九)を抜き出してみ
る。以下、頭韻に関わる音(群)は斜体字で示す。また、本書の第二部で邦訳を施してある詩については、引用例に
は原則として英訳ないしは邦訳をつけないことにする。

(2)

Het ða eorla hleo in gefetian,
 heaðorof cyning Hreðles lafe
 golde gegyrede ; næs mid Gēatum ða
 sinemāðpum sēlra on sweordes hād ;
 þæt hē on Biowulfes bearn alegeð,
 ond him gesealde seofan þūsendo,
 bold ond bregostol. Him wæs bām samod
 on ðām leodscipe lond gecynde,
 eard eðelriht, oðrum swiððor
 side rice þām ðær sēlra wæs.

この例から窺えるように、古英詩は韻律上互いに独立した長行 (long line) によって構成されていて、各長行は左
 右の半行 (half-line) それぞれ、第一 (first) 半行、または a-verse、第二 (second) 半行、または b-verse と呼ばれ

る)から成り、間に行間休止(*caesura*)がある。第二半行には、語レベルの主(または副)強勢を有する音節に先行する子音が同一となっている語が一つか二つ、第二半行には必ず一つ、含まれている。このように、強勢音節の冒頭にある特定の子音が一つの長行中で繰り返し生じる現象は頭韻または頭声(*alliteration*)と呼ばれる。頭韻子音は本書では斜体字で示すが、声門摩擦音「*h*」が頭韻している場合、この子音は文字で表記されることはないため、便宜的に後続の母音を斜体字とする。したがって、斜体字はあくまでも母音の頭韻ではないことに注意する必要がある。半行を構成する音節の数は引用例では四から六までであるが、少ない場合には三、多いものになると一〇を超すことがあり、一定しているわけではない。また、半行・長行というのはあくまでも韻律上の単位であることから、それぞれの境界は統語上の単位である句・節・文の切れ目と一致するわけではない。ちなみに、現代の活字による印刷本では、長行は一行ごとに整然と配列されていて、半行の境界も明確に示されているが、現存する当時の手書きの写本では、まるで散文であるかのように続けて書かれていて、また、半行ごとの区分も、一部の写本を除いて、明瞭に記されているとは限らない。

頭韻の原則

ここで、古英詩の最も特徴的な押韻方法である頭韻についてその原則を明らかにしておきたい。頭韻は一般に「強勢音節の初頭位置における同一音の繰り返し」と定義されている(*cf. Busman, et al., 1996:16*)。が、古英詩の場合、強勢は語レベルの主強勢(primary stress)だけではなく、複合語の第二要素に置かれる副強勢(half stress)も頭韻に関与しうる。したがって、次のような例では、形容詞+名詞(*þrice gefēta* 'a powerful prefect' (*Juliana* 19a))や名詞+名詞(*þelle hæftung* 'the captive of hell' (*Juliana* 246a))のちがな句の場合と同様に、二

409 重頭韻が実現することになる。

(3)

- (a) *geond wid-wegas wundor sceawian* 'along the wide ways to see the wonder' (*Beowulf* 840)
 (b) *æfter sæ-side sorge mændon* 'after their sea-journey sorrowfully lamented' (*Beowulf* 1149)

次に、「同一の音」という制約について検討してみる。(2)の例では一行目と九行目は母音が斜体字となっているが、これは文字で示されることのない声門閉鎖音[ʔ]が強勢母音の前にあって頭韻していることを表す。母音の頭韻を想定する学者は多いが、この説だと、子音は同一の音同士が頭韻するのに、母音は同じ音価同士はほとんど頭韻しないのはなぜかという疑問に答えられない。現代英語でも、強調したい語や音節が母音で始まっている場合、声門をいったん閉じてからこの母音を発音する *hard attack* と呼ばれる方法がある (cf. J.C. Wells 1990:327)。一方、(2)の三行目では *goide* は [g]、*gegyrede* は [ʔ]、*Geatum* は [ʔ] が斜体字で示されているが、これはこれらの音がかつては同一であり、頭韻していた名残であり、例外的に許容されている。次の(4)の例の *c*[k] (*cuma*, *collenferhð*) と *e*[t] (*ceoles*) も同様の説明が可能である。

(4)

- cuma collenferhð ceoles neosan* 'the bold-minded (wanted to) go to his ship' (*Beowulf* 1806)
 子音連結の場合、*s* + 閉鎖音 [*p t k*] の場合を除いて、頭韻するのは最初の子音だけである。

脚 韻

古英詩の押韻は頭韻がすべてではない。脚韻も時折用いられることがあり、八七行から成る『脚韻詩』(*The Riming*

Poem) という名の詩も存在する。ここでは古英詩における脚韻の特徴と機能を明らかにしたい。古英詩の脚韻は生じる位置に応じて内部脚韻、末尾脚韻、移動脚韻の三つに区別され、これらはその性質に応じてさらに下位区分されるが、詳細は藤原(1990b)に譲る。より重要と思われるのは脚韻の機能である。これまで、「脚韻は詩句の叙情的調子を引き立たせるのに役立っている」(Schipper 1910: 840) という文体的効果や、「アングロ・サクソン詩人は頭韻と並んで脚韻を詩の飾りとして用いてきた」(Sievers 1893: 899) という装飾機能も認められているが、古英詩の脚韻はすべて頭韻詩の中で用いられていることから、頭韻と脚韻の韻律上の関係が焦点となる。

古英詩の脚韻は偶然の一致による可能性強いが、『*クレナ*』(一二三六―一二五〇)と『*脚韻詩*』(一一八七)ではかなりの規則性が認められ、体系化されている。まず、『*クレナ*』の脚韻部分について検討してみる。ちなみに、母音の不一致は転写された際に他の方言形に置き換えられたために生じた可能性が強い。脚韻部分は下線で示す。なお、邦訳は第二部に譲る。

(5)

| | |
|----------------------------|----------------------------|
| <i>þus ic frōd ond fūs</i> | <i>þurh þæt fæcne hūs</i> |
| <i>wordcræftum wæf</i> | <i>ond wundrum læs,</i> |
| <i>þrægum þreodude</i> | <i>ond geþanc reodode</i> |
| <i>nihtes nearwe.</i> | <i>Nysse ic gearwe</i> |
| <i>be ðære rōde riht</i> | <i>ær mē rūmran geþeah</i> |
| <i>þurh ða mæran niht</i> | <i>on mōdes þeah</i> |

| | |
|---------------------------|------------------------------|
| <i>wisdom onwreah.</i> | <i>Ic wæs weorcum fah,</i> |
| <i>synnum asæled,</i> | <i>sorgum gewæled,</i> |
| <i>bitrum gebunden,</i> | <i>bisgum beþrungen,</i> |
| <i>ær me lare onlæg</i> | <i>purh leohthne hād</i> |
| <i>gamelum tō gēoce,</i> | <i>gife unscynde</i> |
| <i>mægencyning æmæt</i> | <i>ond on gemynd begeat,</i> |
| <i>torht onlȳnde,</i> | <i>tidum gerynde,</i> |
| <i>bāncofan onband,</i> | <i>brēostlocan onwand,</i> |
| <i>leoðucraeft onlæc.</i> | <i>þæs ic lustum brēac,</i> |

引用部分に関して興味深い事実が二点ある。まず第一に、すべての第一半行で二重頭韻が実現していることである。古英詩の韻律の観点からすると、二重頭韻の半行は最良の半行である。しかし、話の脈絡や文法や意味を考慮しつつ、半行という限られた範囲の中で頭韻語を二つ揃えるというのは容易なことではない。そのために、この詩の他の部分とはより、すべての古英詩において、詩人の作詩の技術と努力にもかかわらず、二重頭韻が実現している半行の割合は五〇%前後にすぎない。したがって、引用部分がいかの特異であるかがよく分かる。第二に、頭韻と脚韻はきれいに相補分布をなしていて、互いの実現に障害とはなっていない、ということである。これを言い換えれば、詩人は頭韻を多少犠牲にして脚韻の実現に努めた形跡はなく、むしろ、頭韻に最大限の努力を払った余力で脚韻に取り組んでいると言える。これは実に驚くべきことであるが、詩人がなぜ脚韻にまで作詩のエネルギーを注入したのかは分か

らない。

『脚韻詩』は長いので、ここではすべてを引用するわけにはいかないが、わずか数行でもその特徴は掴めるので、ここでは冒頭の四行に止める。

(6)

Me lifes on lāh sē pis lecht on wrah,
ond þæt torhte ge teoh, fillice on wrah.
Glād wæs ic gliwum, glenged hiwum,
blissa bleoum, blostma hiwum.

He, who revealed this light, and adorned it brightly, displayed (it) fitly, granted me my life. I was glad with pleasure, adorned with beauty, with colours of favours, with colours of blossoms.

「完全な二重頭韻の実現」と「頭韻と脚韻の相補分布」という『ヘレナ』の脚韻部分に認められる特徴は、とても興味深いことに、『脚韻詩』にもそのまま当てはまる。しかし、前者では脚韻は各行の半行の末尾に実現していたのに対して、後者では相前後する二行の末尾でも脚韻が認められる。さらに、『ヘレナ』を含むすべての古英詩では、子音連結は、s + 閉鎖音[p, t, k]を除いて、最初の子音だけが頭韻に関与するが、『脚韻詩』ではほとんどの場合において二番目の子音も同一となるよう工夫されている。このように手の込んだ押韻の結果として、『脚韻詩』では従属節は極力避けられ、独立文が並列し、しかも、文は最長でも二行程度で完結している。また、詩全体が読み解くのにきわめて難解なものとなっている。

このように、『ヘレナ』と『脚韻詩』では頭韻が理想的な形で実現していることから判断して、頭韻を押韻かなめの要とする古英詩の場合、脚韻は韻律上必要不可欠なものではなく、補助的で試行的なものであったと言えよう。

古英詩のリズム

古英詩のリズムに関して学者の意見が一致しないのは、仮に音節という尺度で述べるとすると、半行を構成する音節の数は、少ないものでは三以下、多いものでは一〇以上とまちまちであること、さらに、半行に含まれる語レベルの主強勢も一つとは限らないこと、その結果として、すべての半行に唯一のリズムの型を想定するのは容易ではないこと、などが主な原因である。これらの争点の詳細は藤原(1990a:107-167)に譲ることにして、ここでは、「古英詩の半行および長行では、強弱という優勢な語強勢の型に矛盾しないリズムが実現している」と述べるに止めたい。この仮説の有力な根拠は、(7)にあげたような一語から成る半行が古英詩にはかなり多く用いられていて(たとえば『ベーオウルフ』では二九六例)、これらの語の強勢型は、たとえば『ベーオウルフ』では(7b)の二例を除いて、すべて強弱であることである。なお、(7b)のoferやaのような、主強勢音節に先行する無強勢音節はリズムに関与しないとみなしてよい。その理由として、この種の無強勢音節は、直後に必ず語境界があり、後続の強勢音節群とは区別されていること、現代英語の場合と同様に、強く長く発音される主強勢音節と後続の無強勢音節とは対照的に、これらの無強勢音節は弱く早く発音され、そのためにリズムに関与しにくいこと、などがあげられよう(cf. J.D.O'Connor 1980:90-107)。

(7)

- (a) haldebiile 'sword' (557a), ellensioone 'deprived of strength' (2787a), earfoðlice 'impatiently'

(2303a)

(b) ofer-*higian* 'delude' (2766a), *ābreðwade* 'slew' (2619b)

頭韻語の選択

半行中に複数の語がある場合、どの語を頭韻させるかは厳密な規則に従って行われるのであり、決して恣意的なものではない。当時の詩人にとってこの規則は作詩上の要になっていったものと思われる。ここでは、「頭韻階級原則」(The Principles of Alliterative Hierarchy) と呼ばれる規則を示し、詳細は藤原(1990a:284-285)に譲る。

(8)

(a) 古英語の語彙は四つの類に区分される

(i) 一類…名詞、形容詞、派生副詞

(ii) 二類…本来語の副詞の一部

(iii) 三類…動詞
 一類…非定形
 二類…定形(ただし、be動詞と法助動詞は除く)

(iv) 四類…機能語、本来語の副詞の一部、be動詞、法助動詞

(b) 類の異なる複数の語が同一の半行中で共起する場合、頭韻に加わるのは、より上位(一類↓四類の順に下る)にある類の語である。

(c) 同じ類に属する複数の語が同一半行中で共起する場合、頭韻に加わるのはより左に位置する語である。

(d) 二重頭韻の場合、頭韻語の一つは(a)〜(c)の原則に従わなくてもよい。ただし、この語は一〜三類の語に属し、

第一半行の最も左寄りの位置に来なくてはならない。

第三節 古英詩のジャンル

四つの写本に含まれる古英詩と他の写本に含まれる数編の古英詩は、叙事詩 (epic)、叙情詩 (lyric)、寓意詩 (allegory)、教訓詩 (didactic)、謎詩 (riddle) などのさまざまなジャンルに分けられる。思想や内容が世俗的 (secular) なもの、信仰 (devotion) ないしは信条 (doctrine) に重点が置かれているものもある。一方、ゲルマンの異教の風習 (antiquity) に源を発する詩や、キリスト教のラテン的思想 (Christian Latinity) に由来する詩もある。これらの詩を考察する場合、成立時期が確定しにくいこと、作者がほとんど特定できないこと、などの理由により、主題 (subject matter) に応じて行うのがよいと思われる。具体的には、たとえば Greenfield (1965: 79) は、世俗の英雄、キリスト教の聖者、キリスト、旧約聖書の登場人物、その他の雑多なキリスト教および世俗のテーマを扱ったもの、知識 (lore) や知恵を詩の形式にしたもの、哀歌 (elegy) の順を提案している。本節ではほぼこの区分と順序に添って古英詩の特徴を概観する。

世俗の英雄をテーマにする詩

四〜六世紀のゲルマンの英雄時代と関連のある物語の題材がブリテン島に定住したゲルマン民族の歌の中に生き残っている証拠が古英詩の中にたくさんある。Forrnarric, Theodric, Ingeldといった大陸の英雄たちの物語の題材が『ウィードシース』や『デール』などの詩の中で生き生きと扱われているのを見ると、初期の英国の口承伝統の中

にはこのような題材が確かにあったと思われる。

古英詩にとってこのような特定の登場人物よりも大切なのは、彼らに表れている精神や行動規範である。なぜなら、これらは一一世紀のノルマン征服に至るまで維持されているからである。この英雄精神は、現世と死後の栄光と名声に対する渴望の中に最も強く表れている。行動規範は主君と家臣の間の相互の義務であり、一方では保護と気前のよさ、他方では忠誠心と奉仕である。この相互関係は一一世紀の『モールドンの戦い』でも依然として認められるものである。興味深いことに、この精神と行動規範は適度に形を変えて旧約聖書の物語や聖者伝、あるいはキリストそのものの姿を古英詩に表現する場合にも用いられている。

このジャンルに属する古英詩は、『ベーオウルフ』、『モールドンの戦い』、『フィンズブルフの戦い』、『ブルナンブルフの戦い』、『ワルデレ』などである。

『ベーオウルフ』

『ベーオウルフ』は古英語期における最高の文学作品であり、アングロ・サクソン族のみならず、広くゲルマン諸部族に伝わる英雄叙事詩のうち、完全な形で保存されているものとしては最古の記念碑的存在である。今日に伝わる唯一の写本は一一〇世紀後半にウェスト・サクソン方言で書かれたものであるが、この詩が現存するような形式に整えられたのは八世紀初頭と考えられている。もっとも、この作品で扱われている歴史上の題材はさらに古く、五、六世紀まで遡る。作品の舞台もアングロ・サクソン族が定住することとなったブリテン島ではなく、彼らの遠い祖先の故郷である現在のデンマークとスエーデン南部である。

作品全体は筋の展開上大きく二つに分かれる。第一部では、イエーアート族の若い英雄ベーオウルフは、夜間出沒し

ては人を殺して食う怪物グレンデルを征伐するために、故郷からデネ族の王フロースガールの館へオロットへと出かけ、単独でグレンデルを倒し、復讐にやってきたグレンデルの母親をも殺す。第二部では、この老いた英雄は国土を荒らし回る龍を退治するために出征し、忠実な同族の若者の加勢を得てこの龍を殺すが、自分も深手を負って倒れる。

この詩の作者は不詳であるが、ローマの詩人たちの作品や、古英詩『創世記』などの宗教詩に親しみ、かなりの学問を身につけたキリスト教の聖職者であったと考えられている。英国中部のマーシアの王国の宮廷と関係が深かった人物だとする指摘もある。詩人は、当時のゲルマンの英雄や彼らの行為ではなく、何世紀も前の伝説や歴史上の出来事に登場してくる武人とその手柄、および宮廷文化を称え、上流階級の人々の理想を表そうとしている。描かれている登場人物の思考や行為はゲルマンの異教の理想ではあるが、キリスト教的な理想の影響も強く認められる。

この詩は三一八二行から成り、古英詩では長編の部類に入る。強弱という優勢なリズムの型をもつ語と、頭韻という押韻を用い、ケンニングと呼ばれる代称表現、複合語、ヴァリエーションなどの技法を駆使してこの詩は作られているが、これらはいずれもゲルマン古詩に広く用いられている伝統的な手段にすぎない。題材も決して新しいものではない。しかし、作品の構造上の独創性、伝統的な語りのスタイルの巧みさ、言葉使いの妙技によって、この詩はゲルマン古詩の傑作という高い評価を得ている。

作品全体をもう少し詳しく概観してみる。まず最初に、デネ族の王の系譜を語った「序歌」(一一五二行)から始まり、ベーオウルフがデネ族の国へと遠征し、フロースガール王に歓待された夜、グレンデルと格闘し、この怪物の腕をもぎ取る部分まで(五三三八三六行)が初めの約四分の一を占める。

続く八三七―一六五〇行では、ベーオウルフがグレンデルを倒した後の祝宴から始まり、グレンデルの母親の復讐、

この母親とベールオウルフとの死闘と続き、ベールオウルフがグレンデルの首を携えて凱旋する箇所までを扱う。間にいくつかの挿話が挟まれている。この部分では、国民から親われ尊敬されているが、年老いて実戦力を失ってしまったというフロースガール王という英雄と、身分は王ほど高くはないものの、無双の怪力と実行力に富むベールオウルフという若い英雄の対比が興味深い。その他、登場人物のさまざまな人間模様、風景や格闘の描写なども興味深いものとなっている。

三番目の部分（一六五一―二四五九行）は、ベールオウルフがグレンデルの母親を倒した手柄話から始まり、帰国の旅と母国での歓迎の宴、冒険談と続き、老王ベールオウルフが国土を荒らす龍と対決する直前までの話を扱う。途中、デネ族とイエーアト族の王による訓話、皇女についての挿話、龍の宝の由来、などが含まれる。英雄が備えるべき徳目、現世のはかなさ、信義を守ることの大切さ、晩年のフロースガール王と老王となったベールオウルフという両雄の比較、ヒュイドとモードスリーゾという二人の皇女の対照など、興味深い話題には事欠かない。写本の書き手の交代（一九三九行の途中）に伴う言語上の相異点も見逃せない。

最後の四分の一弱に相当する部分（二四六〇―三一八二行）では、ベールオウルフは火龍退治へと向かい、激しい合戦の末にこれを倒すが、みずからも深手を負って命を落とす。残された人々はベールオウルフを火葬し、遺言どおり岬の上に大きな塚を築き、彼の武勲を称え、遺徳を偲ぶ。これまでの部分と同様、物語は結末に向かってよどみなく進むわけではない。過去の出来事の見聞談が長々と挿入されたり、臨終にある主人公の長口舌、ベールオウルフの血族の者や王の死を告げる伝令の冗舌のために、読者は多少のいらだちを感じることもあるかも知れない。それでも、今から千年以上も前のゲルマン諸部族が抱いていた人間観、この世での命と富のはかなさ、血族や部族間のせめぎ合い、

神の摂理、王者たるもののあるべき姿などはかなり詳しく窺い知ることができる。

『モールドンの戦い』

ロンドンの東北東三七マイルの所にモールドンという港町がある。ブラックウォーター(Blackwater)と呼ばれる川の河口に当たるこの場所で、エセックスの太守ビュルホルトノースに率いられた英国軍はデーン人と戦って敗れた。九九一年のことであった。非業の死をとげたこの隊長を悼み、この詩が書かれた。三二五行という短詩ながら、三〇余名もの味方の武人の名と戦功が連ねられていることを考えると、この詩も他の古英詩と同じく衆人の前で吟詠されたであろう。この詩の聴者は、合戦はもちろん、戦死した兵士たちと深い関わりがあり、しかも、この詩は敗戦後間もなく作られたに違いないと思われる。

この詩の主題は戦であるが、ゲルマン古来の英雄像と勇猛果敢な魂は脈々と武人たちに生き続けていることがよくわかる。詩全体に迫力がみなぎり、暖かな人情味もあふれている。この詩を含む古英語の写本は一七三一年の火災によってほぼ完全に消失してしまった。しかし、幸いなことに、John Elphinstoneなる人物が一七二四年頃に古写本から転写しておいた手稿が残った。現行の活字本はすべてこの手稿に基づいている。古写本と手稿は初めと終わりの部分が欠落した断章にすぎないが、物語の主要部分はほぼ含まれているようである。

キリストをテーマとする詩

宗教詩の中でキリストを主人公とする最も叙情的な古英詩は『キリストⅠ』(Christ I) または『降臨叙情詩』(Advent Lyrics) と呼ばれる四三九行から成るもので、「エクセター写本」の冒頭に位置している。これに続く四四〇一八六六行は『キリストⅡ』(Christ II) と呼ばれ、キリスト昇天がテーマとなっており、『キリスト昇天』(The

Ascension)とも称されている。この詩は基本的にはローマ教皇グレゴリオの説教をキネウルフが韻文に置き換えたものである。三番目の『キリストⅢ』(Christ III)は七九八行から成り、最後の審判についての中編の詩である。『十字架の夢』(The Dream of Rood)では、語り手が、真の十字架を見たこと、十字架が自分に話しかけ、森の中で生えていた木であった当時から、カルヴァリでキリストを上に乗せ、それから数世紀後にヘレナに見えられ、崇拜の対象とされるまでの経歴を語り、次に十字架が夢見る人に自分を崇拜するように促す。今度は、夢見る人が自分が見た十字架の夢がいかに自分の人生を変えたかを説明する。最後の段落では、キリストの受難、死、地獄の征服、昇天が語られている。この詩は一五六行という短詩ながら、その獨創性、表現の美しさ、詩的な力強さにより、古英詩のみならず、広く英文学の中で最もすぐれた宗教詩であるというきわめて高い評価を受けている。なお、この詩は「ヴェルチェリ写本」以外に、スコットランドのリヴル(Ruthwell)の教会にある八世紀の石の十字架にも一部分がルーン文字で刻まれて残っている。その他、『キリストの黄泉降下』(The Descent into Hell)(一三七行)、『キリストとサタン』(七二九行)などがこのジャンルの詩の代表的なものである。この節では『キリストとサタン』について、以下で詳しく説明する。

『キリストとサタン』

『キリストとサタン』という名で知られるこの詩は、七二九行から成り、全体として大きく三つの部分に分かれる。第一部は墮落天使たちの嘆き、第二部は神による地獄の征服、第三部はサタンによるキリストの誘惑をそれぞれ主に扱っている。これら三つの部分は、文学的に見た場合、作品全体の統一に欠けるという理由で、別個の作品として扱う学者もいるが、写本および語学的分析の結果からはこの説を支持する確たる証拠は見当らないと言われている。し

かし、第一部は『グースラークA』(Guthlac A、五二九―六五六行)ときわめて類似しており、また、第二部はキネウルフの詩、とりわけ、『キリスト』、『不死鳥』、『グースラーク』とよく似た特徴が見られることなどから判断して、『キリストとサタン』は八世紀の終わりから九世紀の初め頃に、キネウルフの流れをくむ詩人によって書かれたものと思われる。

次にこの詩の梗概を示す。

第一部(一一三六四) 地獄は奈落の最下層にある広大で風の強く当たる館として描かれている。その床は火と毒の混ざった炎をあげ、門は龍によって守られている。墮落し、呪われた魂が嘆き悲しむ声は、この広くてわびしい空間の隅々にまでこだましている。このような何の希望も持てない館の中で、サタンは苦しみ、喘ぎながら過去の罪を告白し、過ぎ去った栄光を嘆く。サタンの仲間の悪魔たちも、運命の恐ろしさ、事ここに到らしめた首領サタンの愚行と傲慢さと誤った指導に気づいて嘆く。

第二部(三六五―六六四) ここでは、神による地獄の征服が主に扱われているが、キリストの受難と地獄への侵入、復活と昇天、最後の審判といった広範囲な内容が取りあげられている。明け方に雷鳴と騒音が響き渡り、審判者である神が地獄にやってくる。それとともに、呪われた者たちには恐怖が訪れる。神はみずからの力によって地獄を制圧し、選ばれた者たちの魂を救う。エバがエデンの園で犯した罪を語り、自分の娘のマリアの執り成しによって、神の慈悲を請う声が聞こえる。永遠の主は呪われた者たちをより深い闇へとほうり込み、祝福された者を永遠の館である天国へと導く。

第三部(六六五―七二九)

サタンは飢えと野望によってキリストを誘惑しようと試みる。しかし、キリストは拒絶

し、サタンが反抗していたのは神であることを分かせようとして、地獄の果てしない広さを測るよう命じ、地獄に追いつく。

キリスト教の聖者をテーマとする詩

旧約聖書そのものを典拠とする古英詩にもすぐれたものが多く、『創世記A』、『創世記B』、『出エジプト記』、『ダニエル』はその代表的なものである。旧約聖書外典の『ユデト書』に範をとった『ユデト』もすぐれた宗教詩である。もっとも、この詩は叙事詩ともみなせる。キリストの十字架を発見したと伝えられるヘレナを主人公とする『ヘレナ』と、ユリアナというキリスト教徒の殉教を描いた『ユリアナ』は、キネウルフの署名入りの詩であり、彼の代表作となっている。その他、『アンデレ』や『使徒の運命』などもこのジャンルに入る。この節では『創世記A』、『ヘレナ』、『ユリアナ』、『ユデト』の四編について詳述する。

『創世記A』

古英詩の『創世記』は『旧約聖書』の「第一の書」(The First Book)を韻文化したものである。しかし、現存する「ユーニウス写本」には、『創世記』の第一章から第二章一三節までが含まれているにすぎない。しかも、詩全体は『創世記A』と『創世記B』(二三五―八五一)の二つの部分に分かれている。後者は九世紀の後半に古サクソン語の『旧約聖書』から翻訳されたものが、別の詩人によって前者の中に書き加えられたものと考えられている。一方、『創世記A』は成立時期を特定する直接の証拠は今のところ得られていないが、『創世記B』よりも古く、七世紀の終わりから八世紀の初め頃に作られたと主張する学者は多い。この説に従うと、『創世記A』は『ベーオウルフ』よりも古い作品ということになる。

『創世記A』は七〇〇年以降のウェスト・サクソン方言の言語特徴が強く認められるが、アングリア方言のものと思われる語形も多く含まれ、少なくとも二つの方言が入り交っている。作者としてはカドモンないしはその流れをくむ者とみなす説もあるが、カドモンにしては作詩の才能に劣るという意見もあり、広い支持を得ているわけではない。しかし、少なくともこの詩の作者はラテン語訳の『ウルガタ』を自由に使いこなせる聖職者であったことには間違いない。しかも作品のどこどこに認められる表現や描写から判断すると、ゲルマンの吟遊詩人と関係の深い人物であったと想像される。

『創世記A』を読み進んでいくと、この作品はラテン語の原典を忠実に古英語の韻文に置き換えたものではなく、大幅な加筆と削除がなされているのに気づく。したがって、両者の比較対照は興味深いものがあり、韻律をはじめとする言語特徴も他の古英語とは異なる点が少ないため、大いに関心が持たれるところである。

この詩の冒頭の約四分の一の部分は、『創世記』の最初の部分、すなわち、第一章の天地創造から、アダムの系図を記した第五章一四節までである。続く一一六七行から一六三六行までの合計四六九行、すなわち全体の約五分の一に相当する部分は、アダムの系図の後半の部分（すなわち、第五章一五節以降）、洪水物語（第六章―第九章）、およびノアの子供たちの系図に触れた箇所的一部分（第一〇章一節から一〇節まで）に対応している。しかし、他の部分と同様、古英語の『創世記A』は『旧約聖書』の『創世記』を忠実に古英語に対応させて出来上がったものではない。たとえば、登場人物の享年やノアの箱舟の規模、洪水の深さ、物語の展開順序などは『聖書』にかなり忠実であるが、アダムとノアの子たちの系図の記述はかなり簡略化され、また、洪水物語の描写を例にとると、ゲルマン古詩に広く見られる航海や戦いに関係の深い詩的心像（poetic imagery）がふんだんに採り入れられ、『聖書』と比

較すると描写がより裝飾的かつ詳細になっている。もっとも、作品を全体として見れば、Kennedy (1971:173) が指摘するように、この詩は創作というより、手の込んだパラフレーズ (elaborated paraphrase) と言わざるを得ない。

続く一六三七行から二二六〇行までの合計五二三行は、『創世記』の第一〇章のハムの系図の末尾から第一六章六節までに相当する。この部分の中心を成すのはアブラムの系図の前半、すなわち、アブラムの旅である。物語の順序は聖書原典に従っているものの、内容はかなり簡略化されている。しかし、その一方で、二二二〇行のように、原典にはないナイル川への言及があり、また、ロトの争奪に関わる部族間の戦いの描写は増幅され、その詳細は『ペーオウルフ』をはじめとする他の古英詩の場合と酷似している。さらに、神や登場人物を形容する語句は、聖書原典ではごく簡潔なものの以外は用いられていないが、『創世記A』では二重三重に詳述されている。これもゲルマン古来の伝統的な頭韻詩の技巧の一つである。要するに、『創世記A』は聖書を題材にしてはいるものの、アングロ・サクソン詩人が自由自在に内容を取捨選択し、伝統的な作詩の技法を駆使して成ったものである。このことは、古英語期の宗教詩の言語を論じる場合、とかくラテン語聖書の影響や干渉を過大視する傾向があることに對する警鐘となろう。

最後の二二六一行から二九三六行までの合計六七六行では、ハガルの逃亡と出産から、アブラハムがイサクを生け贄として捧げる場面までが語られている。旧約聖書の『創世記』では第五〇章二六節のヨセフの死までが扱われているが、古英詩では第二二章一四節に相当する部分までである。『創世記A』は元々現存する部分で止切れていたのか、それとも続きの部分がかつてはあったのか、我々には知る由もない。残された部分から判断すると、これまでと同様、詩人は聖書を忠実にたどり、その内容を、ゲルマン古詩の伝統に従い、高度な技巧を駆使して、古英詩という形式に立派に表現していることが分かる。文学と語学の両面から見ても、ここには興味深い箇所が少なからずある。

『ヘレナ』

この詩は、古英語の円熟期における宗教詩人キネウルフの晩年の代表作である。この作品は、彼の署名のある四つの詩のうち、最もすぐれ、彼の独自性がより多く認められる傑作であり、アングロ・サクソン人のもつ剛健な気風が洗練されてきたことが窺える格好の作品でもある。作品成立年代には諸説があるが、九世紀にアングリア方言で書かれ、後に現存する形に写し変えられたものと考えるのが妥当であろう。次にこの詩の梗概を示す。

ローマ皇帝コンスタンティヌス一世は異教徒との戦いの前夜、夢の中に現れた美しく輝く十字架に刻まれた文字の教えに従って十字架を作らせ、それを携えて戦場に臨む。皇帝が十字架を掲げると敵軍は敗走する。以来、熱心なキリスト信者となった皇帝は母親ヘレナに命じて、キリストが磔になった真の十字架を探させる。エルサレムに着いたヘレナはユダヤ人たちの抵抗にあうが、苦勞の末、やっと十字架を発見し、また、磔刑の時に使われた釘も探し当て、当地に聖堂を建立して帰路につく。詩の末尾には作者自身の生涯を回顧した述懐があり、ルーン文字による署名が入っている。

『ユリアナ』

キネウルフの手になるこの詩は、四世紀初頭にニコメディアという町に住んでいたキリスト教徒ユリアナの殉教の物語である。ユリアナに言及したラテン語の文献はいくつか存在するが、Boillardと彼の協力者たちの手になる *Acta Sanctorum* という聖人伝に収録されている『ユリアナ伝』が、キネウルフが典拠としたものに最も近いと言われている。詩人の晩年の傑作とされる『ヘレナ』とは対照的に、『ユリアナ』は成立年代が最も古く、作品としての洗練度が低いとみなす学者が多い。その根拠は、原典と思われるラテン語散文から、熟練した手法で、批判的な眼によっ

て、独自の詩を作ろうとした部分は随所に見られるものの、全体として見ると、文体は物語風の詩としては熟達したものである。『ヘレナ』や『アンデレ』などの作品に顕著に窺える活力が欠けていること、後期の作に表れている新鮮で素朴な自然描写に乏しいこと、さらには、詩の末尾に付された著者の述懐の部分が老齡さを感じさせないこと、などがあげられよう。いずれにせよ、この作品が型通りの単調なものに終わっているという批判は当を得ている。とはいえ、この作品は言語的興味と歴史的興味はもちろんのこと、英国が異教の状態から解放放たれてキリスト教化し、一世紀余りたった頃の信仰の様子を窺い知る貴重な記録である。

『ユデト』

『ユデト』はラテン語訳の旧約聖書外典の『ユデト書』(*The Book of Judith*)に範をとり、一〇世紀前半頃にウェセックス地方で書かれたものと推定されている。この詩の原本は聖書外典の『ユデト書』との対比によって、一般には一二〇〇—一五〇〇行程度の分量であったと考えられているが、現存の写本では三五〇行が残されているにすぎない。しかし、幸いなことに、最も重要と思われる物語の中心部分は現存の写本にほぼ完全に含まれている。

この詩は、ヘブライの婦人ユデトが民族存亡の危機に際し、その美貌を利用してアッシリア軍の陣営に入り込み、將軍の寝込みを襲い、その首を奪って持ち帰り、故国に勝利と莫大な戦利品をもたらすという内容であり、英雄的行為が題材となっている。しかし、それと同時に、信仰心の篤い主人公が神の助けを借りて敵將を倒し、その勝利を神に感謝するという典型的な宗教詩でもある。

作者は古英詩人の中では最も型にはまった詩人であるが、頭韻詩の伝統的技法を巧みに駆使する一方、語句の選択や隠喩の使い方、韻律過多の半行の多用に見られるように、注目に値するすぐれた描写能力を発揮し、物語全体に活

391
気をみなぎらせ、きわめて出来ばえのよい詩を作りあげている。

世俗のテーマを扱ったもの

英国にキリスト教が定着すると、英語によるすぐれた宗教詩が作られるようになるが、この新しい信仰と共に英語に入ってきた南方の文化は世俗的なテーマの扱い方にも大きな変化をもたらした。すなわち、古くからの在来 of 伝統とは異なるテーマを詩にすることが行われるようになってきた。たとえば、スコットランドのドラム (Durham) の町を称えた二〇行の断章 *Durham Poem* や、町の荒廃をテーマにした『廃墟』も、破壊をもたらしたのは神ではなく、異教の運命の女神 (Wyrð) であることから、世俗的な詩の部類に入れられることもある。しかし、「エクセター写本」に含まれる謎を扱った九五編の詩は、伝統的な頭韻詩の形式に則りながらも、そのテーマは、「嵐、盾、太陽、白鳥、カッコウ、夜、角、あなぐま、錨、刀、蜂蜜酒、船」など、日常見聞きする雑多なものをテーマとしている点で、この部類の代表格と言えよう。

知識や知恵を詩の形式にしたもの

日常のありきたりの知恵や知識を短く簡潔に、大衆向けに一般化し、韻文の形式にした諺 (sayings) という詩が伝えられている。これらの古英語の諺は、数多くの文書に挿入されたものと、格言詩 (gnomic poems) としてまとめられたものがある。「エクセター写本」に収録されている二〇六行分の格言詩は *Exeter Gnomics* と総称され、A、B、C の三つのグループに分けられている。一一世紀の写本 Cotton Tiberius B I に入っている六六行分は Cotton *Gnomics* と呼ばれている。これらの格言詩とは著しく異なるが、ヘーダ (七三五年没) の *Death Song* と呼ばれる五行の詩も、敬虔な知恵を一片の詩にしたものである。

哀歌

叙情詩の中で特に哀感に満ちたものは哀歌 (elegy) と呼ばれる。いずれも、人生の苦しみやはかなさ、運命の定め厳しさと強さ、あるいは過去の栄光に思いを馳せ、現在の惨めさを嘆くが、やがてはキリスト教の神に慰めを見出し、天国での永遠の喜びを待ち望むことがテーマとなっている。「エクセター写本」には次の七編の哀歌がこの順序で収録されている。流浪の旅人の悲しみを述べた『さすらい人』(一一五行)、陸に住む人の安易な生活と対照させながら船乗りの苦しい経験を回想した『海行く人』(一二四行)、ライバルのために主君の寵愛を失い絶望した宮廷詩人がゲルマンの伝説的な悲運の英雄に思いを馳せて慰みを得て、やがて神に身を委ねる心境を語った『デーオル』(四二行)、恋人ウルフに対する激しい恋心と夫エアドワケルに対する憎しみを歌った『ウルフとエアドワケル』(Wulf and Eadwacer) (一九行)、罪を犯して国外追放となった夫に対する妻の悲しみと恋しさを歌った『妻の嘆き』(五三行)、追放の地で成功を収めた貴族の夫が故国に残された妻を呼び寄せる愛情のこもった詩『夫の便り』(五四行)、廃墟となった都市のかつての栄光と現在の荒廃を対照させ、人間の努力の空しさと失われたものへの愛惜を歌った『廃墟』(四九行)。

寓意詩

「エクセター写本」には『フィジオロゴス』(The Physiologus) (一七九行)と『不死鳥』(六七七行)という二編の寓意詩が収録されている。いずれも、他の宗教詩と同じように救済と天罰という大きなテーマを扱っているが、その扱い方が寓意的である点において、他の詩とは全く異なる種類の詩となっている。これらの詩では、まず鳥や獣の習性や行動が述べられた後、これらの鳥獣が神、キリスト、人間、悪魔に対してどのような意義をもっているかが

389
教訓的に説明されている。動物寓意というジャンルの歴史は長く、紀元前のアレクサンドリアに溯る。このジャンル

が中世でかなり人気が高かったことは、現存するヨーロッパ内外の翻訳の多さからも明らかである。『フィジオロゴス』は「コエウ」(The Panther) についての七四行、「鯨」(The Whale) に関する八九行、「山うぐい」(The Partridge) と思われる鳥についての断片一六行から成る。

『不死鳥』

地中海沿岸地方に古くからあった鳥獣にまつわる民間伝承は早くから英国にも伝えられ、これらの話を基にして寓意詩や説教文が数多く作られてきた。古英語期のこの種の作品としては『不死鳥』が最も注目に価する。

この詩は内容上大きく二つに分かれ、三八〇行までの前半では、東方にあるこの世の楽園と、そこに住む不死鳥の美しさや生活が描かれ、また、この鳥が若返るために千年ごとにシリア (Syria) のフェニックスと呼ばれるやし科の木まで飛んで行って巣を作り、そこで焼かれ、その灰からよみがえった若鳥の様子、この鳥が故郷を目指して飛ぶ有り様などが語られている。なお、この前半の部分は三〇〇年頃に活躍したローマの詩人 Lactantius の手になると言われるラテン語の詩 *De Aue Phoenix* に基づいているが、詩人は原作に拡大、省略、変更などの修正を加え、また、ラテン詩には見られないキリスト教の要素を基調として採り入れた物語としている。

次に、三八一行以降の後半の部分では、前半の物語が説話として拡大され、不死鳥はこの世と来世におけるキリスト教徒の生活の象徴、およびキリストそのものの象徴ともみなされている。すなわち、より詳しく述べると、詩人は三八一―五八八行で肉体の復活の象徴としての不死鳥の伝統的な解釈を發展させ、この鳥を信仰心の厚い有徳の人の生活と永遠の生命への準備の象徴として描き、続く五八九行以降では、この象徴を多様化させ、お供の小鳥たちを待

らせた不死鳥を、神に祝福された人々の魂に取り囲まれたキリストの寓意として表している。なお、六六一―六六六行は神を称える常套的な表現で終わっているが、これに続く六六七―六七七行では、ラテン語と英語を混交した詩によって、善行を積んだ人々に対して来るべき生活で与えられる素晴らしい褒美について語られている。

この詩は盛上りに欠けるが、まとまりがよく、楽しく読める物語となっているという評価を得ている。『不死鳥』は七五〇―八〇〇年頃に活躍したキネウルフの署名入りの四編の詩と類似点が少なくないため、彼をこの詩の作者とみなす説もあるが、この詩にはルーン文字の署名がないことやその他の証拠に乏しいことを理由に、キネウルフ作者説は広い支持を得てはいない。もっとも、作者はキネウルフの流れをくむ詩人であり、アングル族の出身であることは一般に認められており、そして、最もはっきりしていることは、作者が聖職者であったことである。

第四節 古英詩の表現（語法と文体）

古英語で書かれた韻文が散文と異なるのは韻律の面だけではない。半行・長行構造、頭韻、強弱のリズム型という古英詩に特有の制約をまかなうために、さまざまな用語・用法上の工夫がなされている。すなわち、同義語、複合語、ケンニング、ヴァリエーション、口承定型、統語上の許容などの詩的工夫が随所に活用されている。そのため、これらの技法についての詳細な知識なしでは古英詩の読解や鑑賞はおぼつかない。とりわけ、複合語はケンニング、ヴァリエーションとも深く関わっているため、その特徴の把握は不可欠なものである。

同義語

古英詩では、意味が(ほぼ)同じ語が、散文の場合と比べてかなり多く用いられている。これは頭韻の必要をまかなうためであろうと思われる。その根拠は、たとえば、『ベーオウルフ』の場合「人、人間」を表す語は *teorn*, *ceorl*, *guma*, *hæle*, *hæled*, *lēod*, *man(n)*, *manna*, *ring*, *secc*, *wer* の一語が使われているが、語頭の音は /b g h m r s tʃ w/ の九通りあり、一方「戦い、戦争、争い」を表す八語 (*beado*, *camp*, *fechte*, *gūð*, *hild*, *nīð*, *sæcc*, *wig*) は語頭音 /b t g h k n s w/ がすべて異なり、そのため、頭韻音を揃えるのにかなり融通が利くと考えられるからである。

複合語

単独で語として存在しうる語が二つ(まれに三つ)結合し、一語として機能するものを複合語 (compound word) と呼ぶ。複合語は語全体が強弱という強勢型を示す。すなわち、第一要素に主強勢 (primary stress)、第二要素に副強勢 (half stress) が置かれてくる (*hórd-būrn* 'hoard + city' > 'rich city', *béod-cýning* 'people + king' > 'monarch', *wís-hýdig* 'wise + heedful' > 'discreet')。三語から成る複合語は、主強勢を1、第二次強勢を2、第三次強勢を3で表すと、いずれも 1-3-2 という強勢型を示す (*géo-sceaft-gást* 'formerly + creation + spirit' > 'fated spirit', *hago-steald-mon* 'unmarried + man' > 'bachelor, youth, warrior', *wulf-hēafod-tréo* 'wolf + head + tree' > 'gallows, cross')。

複合語が古英詩で頻繁に用いられる理由はいくつかある。まず第一に、当時は副強勢は主強勢に匹敵するぐらいの強さを保っていたために、第一要素のみならず、第二要素も頭韻に加わることができ、その結果として、一語が単独

で二重頭韻（これは、すでに述べたとおり、頭韻の最良の型とみなされている）を形成することになる。たとえば、*wig-weorþunga* 'sacrifice' (*Beowulf* 176a), *helle-heafas* 'lamentations of hell' (*Genesis* A 38a), *bléo-byrg-dum* 'variety of colours' (*Christ and Satan* 292a)。ちなみに、このような例は多くなく、偶然の音の一致の可能性も指摘されよう。しかし、私の調査によれば、『ビ・オウルフ』の場合、Klaeberの刊本に基づく、第一要素と第二要素の二つの初頭音が一致する例は三〇あり、いずれも第一半行だけに生じている。『創世記A』(Krapp 1931)ではこのような例は四、『不死鳥』(Krapp & Dobbie 1936)では七あり、いずれも第一半行に限られている。二重頭韻がまったく生じない第二半行ではこの種の複合語の例は全く用いられていないこと、および、例の大半が現存する古英詩全体で一回しか用いられないいわゆる臨時語 (*nonce word*) となっていることから判断すると、詩人は明らかに頭韻の必要に迫られてその場限りの語を作り出している。

そうすると、このような語は複合語ではなくて句ではないかという疑問がでてくる。しかし、語か句かの判断が校訂者によって異なる例はごくわずかであり、第一要素は第二要素の性・数・格と呼応せず、無屈折のままであるという決定的な言語上の証拠があることにより、複合語と判断してよい。第二に、複合語は構成要素間の情報の種類が必ずしも同じでない、すなわち、二つの構成要素から成る複合語を例にとると、(一) 文法情報は第二要素だけが担う、(二) 韻律、とりわけ頭韻の情報は一般に第一要素が担う、(三) 語全体のリズムは二つの構成要素が担う、(四) 意味情報は主要語である第二要素が担う。したがって、頭韻の必要をまかなうには、文法・意味とは直接の関わりのない別な語を独立語の左側に自由に付加できる複合語という形式は、詩人にとってきわめて便利な手段であったことが分かる。

ヴァリエーション

次にあげた古英詩はキネウルフの『ユリアナ』の一節である。

(9)

Symle heo Wuldor-cyning

herede æt heortan,

heofon-rices God,

in þam nýð-cleofan,

Nergend fira,

heolstre bihelmad.

(238b-241a)

'Always she praised at heart, covered by darkness, in the prison, King of glory, God of kingdom
of heaven, Saviour of men.'

この引用例は一つの文から成っているが、1行目のWuldor-cyning 'King of glory', 1行目のheofon-rices God 'God of the kingdom of heaven', 3行目のNergend fira 'Saviour of men'はそれぞれ3行目のherede 'praised'の目的語となっていて、いずれも「神」を指している。

このように、古英詩では同一の人物、事柄、概念などが、それらを形成しているさまざまな属性や特徴を示す語句によって繰り返し述べられることが多い。このような語句はヴァリエーションと呼ばれ、頭韻の必要をまかなったり、指し示す人物や事物のイメージや概念をよりはっきりさせるなどの働きをしている。したがって、ヴァリエーションは、意味が若干異なる同義語 (synonym) を列挙する列記 (enumeration) とは異なる。

もう一つ、『ヘレナ』から例を抽出してみよう。

"þe þis his béacen wæs

þe mē swā leoht ōðr wde ond mīne leode generede,

tācna torhtost, ond mē fīr forgeaf,

wīg-spēd wið wrāðum, purh þæt wlitiġe trēo." (162b-165b)

"this is his sign, the most luminous token, which appeared to me so beautiful and saved my people, and gave me glory, victory of war against the enemy through that beautiful cross."

この場合「torhtost」の his béacen 'his beacon' 及び「tācna torhtost 'the most luminous token', 四行目の þæt wlitiġe trēo 'that beautiful tree' と同様、キリストの十字架を指している。「彼の印」では何のことかよく分からないが、「最も輝かしい標識」「あの美しい木」と表現を変えたことによって、十字架に対するイメージがふくらんでくる。ちなみに、十字架を表す cross という語は古英詩ではまったく用いられていない。

ケンニング

古英詩では「兵士」や「戦い」と並んで「海」や「船」に相当する語や句が用いられることが多い。「船」を例にとると、scip 'ship' や bāt 'boat' の外に、多少比喩的に flota 'floater', lid (> liðan 'go, travel, sail') 'traveler, sailor' を使われることがあふ。mere-bāt 'sea-boat', seā-bāt 'sea-boat, vessel, ship', wæg-flota 'wave-floater, ship', yð-lid 'wave-vessel, ship' のように複合語で表われることもあふ。これにせよ、「船」という対象物を現実に対応するもので表現しているという点では変わりがない。

ところが、これらの表現方法とは別に、複合語または句を用いて、比喩的に「船」を表す場合がかなり多く見られる。たとえば、次に例示したように、「船」は決して「馬」(hengest, mearh) や「木」(wudu) あるいは「板」(bord) のものではないが、これらの語に「海」(brim, mere, sæ, sund) や「波」(wēg, wæg) などの限定語が添えられると、語や句全体は「船」を表すことになる。このような表現形式はケンニング（または代称表現）と呼ばれている。

(11)

- (a) brim-hengest, mere-hengest, sæ-hengest 'sea-horse', wēg-hengest, wæg-hengest 'wave-horse'
- (b) sæ-mearh, wēg-mearh 'wave-mare'
- (c) wæg-bord, wēg-bord 'wave-board'
- (d) brim-wudu, sæ-wudu, sund-wudu 'sea-wood'
- (e) fāmig-heals 'foamy-necked (one)', wudu wunden-heals 'wood with twisted prow'

ケンニングは限定語 (limiting word) + 基底語 (base-word) という形式から成り、基底語は語または句全体が表す概念に対応し、比喩的な意味を持たねばならないという制約がある。さらに、限定語によって示される特定状況においてのみ基底語は現実の指示対象 (referent) と結びつけられるため、限定語によっては語または句全体の概念をはっきりと表すことができず、一種の謎のような表現となることがある。古英詩に限らず、広くゲルマン諸語の古詩にケンニングが好んで用いられたが、その主な原因は、頭韻を基調とする詩の構造のため、同じ概念をさまざまな変化した表現を繰り返し用いる必要があったこと、当時のゲルマン人たちが隠喩 (metaphor) や謎 (riddle) を好んだことにある。(この項と次の項は藤原 (1993: 巻IV) に負っている。)

口承定型

古英詩を何編か読むと、まったく同一の表現が何度も繰り返して使われているのに気がつく。たとえば、*in fyrndagum* ‘in past days’ を例にとると、この前置詞句は七編の詩 (*Exodus, Daniel, Christ and Satan, Andreas, Elene, Christ, Guthlac*) で用いられ、いずれの場合でも、この前置詞句だけで一つの半行を形成している。しかも、これらの詩では、この句と並んで、意味がまったく同じで前置詞の種類だけが異なる *on fyrndagum* という句も多く用いられている。このような事実は、前置詞 + *fyrndagum* が一つの定まった型として広く使われていたことの反映であると考えられる。さらに、これらの前置詞句以外にも *in geardagum, on geardagum, in ealdagum, in ærdagum* などの句がまったく同じ意味でよく用いられている。これらの事実から判断すると、前置詞 + X-dagum という、より抽象的な型の存在を想定することができる。これらの句はいずれも X、X というリズムの型と「副詞」という機能を共有しているため、頭韻や文脈の必要に応じて、この枠の中の前置詞と X の部分に適切な語を挿入することにより、比較的容易に半行を表現することができたものと思われる。

当時の吟遊詩人たちは修行時代に詩の骨格を成す半行の型をたくさん習い覚え、基本的には不変である物語詩の型を新たに作り出し、聴衆の面前で吟詠することのできる技術を体得したものと思われる。古英詩に見られる定型と同じものが他のゲルマン古詩にも見つかることが多いことから、口承による定型はアングロ・サクソン人が英国に渡るずっと以前にできあがり、発達していたものと推定される。このような考え方は口承定型理論 (Oral Formulaic Theory) と呼ばれる。しかし、古英詩は本来ほとんど無学と思われる当時の吟遊詩人たちが口頭で朗詠していたものを、教養豊かな聖職者や詩人が聞き、それをまねて書き留めたものが少なくないことから判断すると、口承の伝統

がどの程度現存の写本の中に残されているかはつきりせず、しかも複雑で特殊な構文は口承定型の訓練をうけたただけの吟遊詩人では作るのはほとんど不可能であったと考えられることなどから、この説を疑問視する学者も多い。

第五節 古英詩の翻訳

古英語が成立してから一〇世紀以上の間に、英語は字母から正書法、語形、語義、統語法にわたるすべての面で大きな変化をとげた。その結果、いかに現代英語に精通していても、古英語の知識なしに、散文はおろか難解な詩を読み解くことはまったく不可能な状態にある。古英詩の現代英語訳や日本語訳が必要とされるゆえんはここにある。事実、古英詩（とりわけ『ベーオウルフ』）の現代英語訳と日本語訳は少なからず出版されている。したがって、新たに古英詩の翻訳を試みる場合には、その意義を明らかにせねばならないであろう。この節では『ベーオウルフ』の冒頭の一行をKlaeber(1950)からとり、代表的な訳例をいくつかとりあげ、古英詩の翻訳の問題点とあるべき姿について論じてみたい。

原典『ベーオウルフ』(一一一一)

Hwæt, wē Gār-Dena in gēardagum,
 þeōdcýninga þrym gefrūnon,
hū ðā æþeþingas ellen fremedon!
Of Scyld Scēfing sceapena þrēatum,

monegum mægþum meodosetla ofteāh,
 egsode eorl[as], syððan ærest wearð
 feasceaft funden ; hē þæs frōfre gebād,
 wēox under wolcnum weorðmyndum þāh,
 oð þæt him æghwylc ymbsitendra
 ofer hronrāde hýran scolde,
 gomban gyldan ; þæt wæs gōd cyning!

現代英語記

最初に現代英語記をよむこと。

(12) 語文論 Charles W. Kennedy (1940)

Lo! we have listened to many a lay
 Of the Spear-Danes' fame, their splendor of old,
 Their mighty princes, and martial deeds!
 Many a mead-hall Scyld, son of Soef,
 Snatched from the forces of savage foes.
 From a friendless foundling, feeble and wretched,
 He grew to a terror as time brought change.

He throve under heaven in power and pride

Till alien peoples beyond the ocean

Paid toll and tribute. A good king he!

ケネディ訳では「一行は四つの拍（すなわち強音）から成り、頭韻を踏む」ことが原則となっている。しかし、各行のすべての強勢音節が必ず頭韻に関与するわけではなく、古英詩の伝統的な半行型が厳密に守られているのでもない。余剰頭韻が認められる二例（四行と五行）および三重頭韻（六行）の例を除くと、すべての行で二重頭韻が実現している。一方、自然な四拍が見られる六例（二、三、五、六、八、九の各行）に対して、一行目のLo: we haveはどの語が強音となるのか不明であり、四、七、一〇の各行では主強勢を担う複数の語のうちのいずれが弱化するのかはっきりしない。これらの不備は、半行のリズム型を用いなかったために弱音部の機能と分布が無視される結果になったことに起因している。さらに、行中で占める頭韻語の分布になんらの原則は見出せない。少なくとも最後の強音部は頭韻させないくらいの工夫は必要である。また、この訳は一行から成る原典より一行少なくなっている。ケネディ（1940: vii）は母音の頭韻を認め、九行目ではそれが実現しているが、これは当を得ていない。頭韻は子音に限るべきである。全体として見ると、不明確なリズムと頭韻の不確定な分布が目立つが、訳そのものは分かりやすい。

(13) Edwin Morgan (1952)

How that glory remains in remembrance,

Of the Danes and their kings in days gone,

The acts and valour of princes of their blood!

Seyld Scefling: how often he thrust from their feast-halls

The troops of his enemies, tribe after tribe,

Terrifying their warriors: he who had been found

Long since as a waif and awaited his desert

While he grew up and throve in honour among men

Till all the nations neighbouring about him

Sent as his subjects over the whale-fields

Their gifts of tribute: king worth the name!

モーガン訳の特徴は強勢に基づくリズムと現代の用語の使用にある (cf. Morgan 1952:xxv)。しかし、四強音が明白なのはわずか五例(すなわち、二、三、五、七、八の各行)にとどまり、四例(すなわち、一、六、九、一〇の各行)では言語上の無強勢を韻律上の主強勢へと昇格させ、逆に、二例(すなわち、四行と一一行)では言語上の主強勢を韻律上の弱強勢へと降格させねばならない。このような操作をしないと、彼の言っている stress metre は実現しない。頭韻はすべて強音部に実現しているが、その分布はまちまちで無原則なものとなっている。また、全一一行のうち四行(すなわち、三、六、八、一一の各行)は無頭韻である。用語は確かに平易であるが、全体として見ると内容は原典に忠実とは言えず、英文も理解しやすいものではない。

(14) 散文訳 John R. Clark Hall & C.L. Wrenn (1950)

Lo! We have heard of the glory of the kings of the Spear-Danes in days of yore—

how those princes did valorous deeds!

Often Scyld scefing took mead-benches away from troops of foes, from many peoples. He terrified the nobles, after he was first found helpless; he met with consolation for that, increased under the heavens and throve in honour, until each one of those who dwelt around, across the whale's road, had to obey him, and to pay him tribute. A noble king was he!

クラーク・ホールの散文訳の目的は「研究に資するため」と、明白である (cf. Clark Hall 1950:x)。この訳は韻律に対する配慮がなくてすむため、原典にかなり忠実な、しかも現代英語としても読みやすい文章となっている。

Gār-Dena 'the Spear-Danes', gēar-dagum 'in days of yore', meodo-setla 'mead-benches', fēa-sceaft 'wretched', weorð-myndum 'honour', hron-ræde 'the whale's road' などの複合語も、韻律が考慮の対象外であるため、語とするか句とするかの選択の幅が大きく、この点でも原典になるべく忠実になりうる。

このように見えてくると、韻律、すなわち、頭韻とリズムを現代英語に盛り込もうとすると、かなりの困難が伴い、しかも結果として得られる韻文にはさまざまな問題がはらむことが分かる。古英語における頭韻や半行構造に関わるさまざまな特徴は、境界表示機能を有する強勢アクセントや屈折という古英語の言語特徴に深く根差すものであること、古英語の複合語化の原則は現代英語の場合とはかなり異なっていること、古英語と現代英語では同義語の量に大きな相違があること、などを考慮すると、頭韻を韻律の要とする現代英語訳は得るところが少くないと言える。むしろ、たとえば弱強五歩格のようなリズムと脚韻を基本とする韻文訳にした方が希望が持てる。私見では散文訳で十分である。

日本語記

(15) 日本語記（韻文）羽染竹一訳（一九八五年、原書房）

きけ！ 我らは伝え聞いている、遠い昔の

槍のデネたち、民の王らの誉れを、

また武人らが 武勇の業をなした様を。

シェーヴィングのシルドは、最初のころ

頼るものとてなかったが、しばしば敵の軍隊、

数多の種族から 酒宴の席を奪い、

戦士らを脅かした。 やがて辛苦は報いられ、

天が下に栄え 栄光とみに上がり、

ついには近隣の 各種族はやむなく

鯨の道を越えて 彼に帰服し

貢物をするにいたった、名君だったこと！

羽染氏は、古英詩の邦訳は「現代口語訳でなければならない」、「頭韻の手法を採り入れるのが望ましい」という二つの原則に基づき、邦訳をしている。しかし、最初の原則はおおむね守られてはいるものの、「我ら」、「頼るもの」と、「天が下」、「とみに」などの文語的な表現が散在していて、現代の口語に徹しているとはいえない。さらに、最後の「名君だったこと！」は先行する部分とのつながり具合と、このように表現したことの意図がはっきりしない。

二番目の原則である頭韻は、氏の意図に反して、指摘されねば気づかないほどの微々たる役割しか果たしていない。この理由は、まず第一に、古英詩の頭韻の音質に関する原則と大きくかけ離れた原則を氏が許容したことにある。たとえば、「デネ」と「民」のように、有声子音の[p]と無声子音の[p̥]を同一と許容し、「シェーヴィング」と「シルド」と「最初」の語頭の三つの摩擦音[f, s, θ]を同等とみなし（同じことは「種族、酒宴」と「席」、「戦士」と「辛苦」にも当てはまる）、さらに、「天が下」と「栄光」と「上がり」では母音の頭韻が想定されている。古英語では、現代英語と同じように、子音の有声・無声の対立は語の弁別上きわめて厳密に守られている。この弁別機能は日本語の場合にも当てはまるため、頭韻上同一とみなすのははなはだ不合理である。一方、氏は古英詩には母音の頭韻が存在しないことの認識が欠けている。仮に、古英詩で母音の頭韻が意図されていたなら、同じ音質の母音が繰り返されていて当然であるが、このことを裏付ける事実は存在しない。邦訳に母音の頭韻を導入するのなら、一行中に同じ母音で始まる語を二・三あてがわねばならないであろう。第二に、氏には語中の頭韻音の位置に関して大きな誤解がある。古英詩では、頭韻は語レベルでの最大強勢を担う音節の初頭位置に実現するため、その子音は最も際立つものとしてごく自然に耳に入ってくる。しかし、高さ（pitch）を主体とする語アクセントが特徴となっている日本語のような言語では、高さに基づく卓立は語のさまざまな位置で起こるため、氏のように語頭にだけ頭韻音をあてがうのは理屈に合わない。三番目に、氏の邦訳では行中における頭韻語の分布に必然性がない。古英詩では、たとえば、同一の語彙範疇の語が同じ半行に複数あれば、頭韻の権利はより左に位置する語に与えられる。これは、語強勢に基づく卓立が語のより左の位置にあることと密接な関わりがある。これは、邦訳に頭韻を導入するなら、考慮すべき点の一つとなりうる。

古英詩にとって、頭韻は語呂合わせではないし、単なる装飾でもなく、言語に内在する特徴に根差すものである。したがって、古英詩を韻文の日本語に訳すのであれば、モーラ (Foot) と呼ばれる、「古池や・・・」のように指折り数えられる音量の特徴を活かして、俳句や短歌のように、七五調か五七調にすべきであろう。もっとも、長い詩の最初から終わりまでこの調子で訳すのは至難のわざであろうが。

(16) 散文訳 厨川文夫訳（一九四一年、岩波文庫）

聴け！ その昔の、槍のデネたち、民草を統べ給ひし王達の御稜威、さてはそのころ君達が武勲を樹て給ひけることのありさまは、語り傳へて我等が耳に達せり。

スケーヴィングのスキュルドは屢々仇なす者共、あまたの宗族より酒宴の席を奪ひき、武者共を怖れしめぬ。されどその始めは寄邊なき者なりしなり。苦は酬はれて天の下に彼は榮え、その誉は増し、やがて四隣の者共ことごとく鯨の路を越えて彼に従い貢を献ぜざるべからざるに至れり。雄々しき君なりけり。

この訳は、散文の文語訳に徹していて、細部に至るまで原典に忠実で、学問的にもしっかりとした名訳の誉れ高いものである。そのため、原典を読む時に参照するのに適している。事実、私も原典の読解に窮した折、この訳書のおかげで難題が氷解した記憶が少なからずある。しかし、刊行後半世紀以上たった今日、一般の読者はもとより、古英詩の若手の研究者にとっても、この訳文は決して平易なものではなくってしまっている。もっとも、『ベーオウルフ』の邦訳の古典として末永く残す価値は十分にある。

(17) 忍足欣四郎訳（一九九〇年、岩波文庫）

いざ聴き給え、そのかみの槍の誉れ高きデネ人の勲、民の王たる人々の武名は、

貴人^{あてびと}らが天晴^{あつぱ}れ勇武の振舞をなせし次第は、

語り継がれてわれらが耳に及ぶところとなった。

シェーフの子シュルドは、初めに寄る辺^べなき身にて

見出されて後、しばしば敵の軍勢より、

数多^{あまた}の民より、蜜酒^{みつばけ}の席を奪い取り、軍人^{いくさびと}らの心胆を

寒からしめた。彼はやがてかつての不幸への慰めを見出した。

すなわち、天^{あめ}が下に栄え、栄光に充ちて時めき、

遂には四隣^{よろ}のなべての民が

鯨^{いさな}の泳ぐあたりを越えて彼に靡^{なび}き、

貢^{みつぎ}を献ずるに至ったのである。げに優れたる君主ではあった。

忍足訳はこれより半世紀前に出された厨川訳の後継として上梓されたものである。訳者は解説の末尾に「『作品』としての『ベーオウルフ』を一般読書子に提供したい」という訳出の意図を記しているため、ここではこの意図が達成されているかどうかに関点を当てて論じてみたい。一読して気づくことは、文語的表現の度が過ぎて、現在の一般の読者向けの日本語とはなっていないことである。手柄を「勲」（いさおし）、高貴な人物を「貴人」（あてびと）、「鯨」を（いさな）と呼ぶなどの雅語的表現は、古代・中世の詩歌や物語・日記の中で用いられたものであるため、古さを出すには効果的であろうが、現代では和歌や俳句をたしなむ者以外にはなじみの薄いものである。「勇気があって戦に強い」という意味の「勇武」はともかく、「四隣」という漢語的表現や「君王」は読み方も意味も分からない

読者の方が多いと思われる。訳文は、原典の行にほぼ対応するように分かち書きされているが、語句が必ずしも統語上の疎密の関係を考慮して区切られているわけではないため、読みにくくなっている。むしろ、散文にふさわしく続けて書かれている方が読みやすいであろう。散文訳にも文語訳にも徹しきれない中途半端な訳に終わっている。

以上の邦訳に対する分析結果を総合すると、現代の日本語では、古英詩を韻文の名に値する形式に訳することは、とりわけ、長編の詩の場合には、不可能ではないにしろ、「労多くして功少なし」の感が強い。むしろ、口語散文によって原典の趣を余す所なく伝える試みの方が訳者にとっても読み手にとっても得る所が大きいように思われる。

第二部 古英詩選

凡例

- 一 本書は八編の古英詩の全訳である。それぞれの詩の翻訳に用いたテキストは参考文献に、解説は第一部第三節に記す。
- 一 各詩の段落区分および各節の見出しは、内容に応じて、また、さまざまな文献を参考にして、訳者が適宜行ったものである。各段落の末尾の丸括弧内の数字は原典の行数を示す。
- 一 丸括弧内の字句は訳者が補填したものである。
- 一 …は写本における欠落を表す。
- 一 丸括弧の漢数字は訳注の番号を表す。

第一節 叙事詩

ベーオウルフ

序歌 シュルドの死（一一五二）

さて、我々は槍で名高いデネ族⁽²⁾の王たちのかつての栄光を、すなわち、これらの高貴な人々がいかに武勇を発揮したかを伝え聞いている。（一一三）

シェーフの子シュルド⁽³⁾は元は不憫⁽⁴⁾な身の上であつたが、敵の軍勢から、多くの部族から、しばしば酒宴の場所を奪い取り、兵士らを恐れさせた。幼少の頃の労苦は報われ、彼は雲の下で勢力を拡大し、名譽を勝ち得て栄えた。そして、ついに近隣の人々は全員、鯨の道⁽⁵⁾を越えて帰順し、貢ぎ物を納めることとなった。彼は実に偉大な王であつた。この王の亡き後、宮廷に幼い男の子が生まれた。この子は国の人々の慰めとなるように神が授けられたものである。神は王が長い間不在であつたことによって人々が受けた深い悲しみに気づかれ、生命の守り手であられる栄光の神はこの子にこの世での名譽を授けられたのである。シュルドの息子ベーオウルフ⁽⁶⁾はシェデランド⁽⁷⁾で名を上げ、彼の声望は各地に広まった。このように、若者というものは善行を積み、父親の所有する美事な贈り物を家臣に施すことにより、老いた後も親しい仲間が自分の元に止まり、戦が起これば加勢してくれるようにせねばならない。どの部族であれ、人は称賛に値する行いによって必ずや成功するものである。（四一二）

勇名を馳せたシュルドも、定められた刻限がきて、神の庇護の元へと旅立ってしまった。そこで、親しい家臣たちはシュルディング族⁽⁸⁾の守護者であつた王がまだ言葉を操れる間に、すなわち、この国のかげがえのない支配者が長く国を治めていた間に、王がみずから要望したとおり、王を波打ち際まで運んだ。その港では、船首が環状になった高貴な人の船が水に覆われ、船出の準備を整えて停泊していた。人々は大切な王を、高名な宝物の付与者を、船底の帆柱の近くに安置した。遠い国々から集められたたくさんの宝物や飾り物が船に運び込まれた。船が武具、甲冑、刀、鎧によってこれほど美しく飾られたという話を、私はこれまで聞いたことはない。王の胸の上にはたくさんの宝物が置かれたが、これらは王と共に海の支配下へと遠く旅することとなつていった。人々は贈り物や立派な宝物で王を飾つたが、その宝物は、人々が幼少の王を初めて一人で波の上へと送り出した時に飾り付けた宝物と比べて、決して劣るものではなかった。人々はさらに王の頭上に黄金色の軍旗を高々と掲げ、海の水が王を運ぶに任せ、大海原へと王を委ねた。人々の心は悲しみに満ち、胸は苦痛で一杯になった。広間に集う参議官も、天の下の勇者も、だれがこの船荷を受け取ることになるのか正しく告げることはできなかった。(二七—五二)

第一節 ヘオロットの館(五三—一四)

シュルディング族のベーオウルフは国の人々から敬愛される王として、城塞において、兵士らの間で、長く高い名声を保つていた。彼の父王はすでにその地から他界していった。その後、ベーオウルフには気高いヘアルフデネ⁽⁹⁾が生まれた。ヘアルフデネは存命中は老いてもなお勇名を馳せ、シュルディング族を慈悲深く導いた。軍の統率者であるヘアルフデネに四人の子供が次々とこの世に生まれた。すなわち、ヘオロガール⁽¹⁰⁾、フロースガール⁽¹¹⁾、立派なハールガ⁽¹²⁾、それと(ユルゼ)⁽¹³⁾である。私が聞いた話では、ユルゼは、戦の誉れ高いシュルヴィング族⁽¹⁴⁾のオネラ⁽¹⁵⁾の後、すなわち、

彼の最愛の伴侶となった。(五二一—六三)

フロースガールは戦での勝利、すなわち、戦闘の荣誉を勝ち得た。そのため、家臣は喜んで彼に従った。そして、若い兵士たちにはついに強力な軍隊を編成するに至った。そこで、フロースガールは宮殿を、すなわち、人の子らがこれまで聞いたことのない巨大な酒宴の館を建立するよう命じ、その館の中で、公の土地と人々の命は別として、神から与えられたすべての物を若者や老人に分け与えたいという気持ちを抱いた。その後、私が聞いたところによると、この世の至る所の多くの人々に対して、この館を飾る仕事につくようにとの命令が発せられた。やがて、最大級の館は人々が見守る中ですみやかに整えられた。みずからの言葉によって広い地域を支配していた王はこの館をへオロットと名付けた。王は約束を違えることなく、宴席で宝環や寶石を分け与えた。高くて広い破風のついた館はそびえ立ち、迫りくる炎と激しい火災を待つこととなった。^(六〇)しかし、激しい憎しみゆえに生じることになる義理の父親と息子との間の争いの刻限はまだ迫ってはいなかった。^(六〇)(六四—八五)

その頃、暗闇に住む怪力無双の魔物は来る日も来る日も館での大きな歓楽の声を聞かされ、渋々その苦痛に耐えていた。その館では豎琴の音と吟遊詩人の澄んだ歌声が響き渡っていた。人類の始まりを遠い昔から説き明かすことのできる詩人は歌った——全能の主が大地を、すなわち、海が取り囲む美しい草原を作られたこと、勝利を誇る王が地上に住むものたちの明かりとして太陽と月という光を定められ、そして、大地の表面を木の枝と葉で飾られたこと、さらに、生きて動き回っているすべての種に生命を与えられたことを。このように、高貴な武人たちは地獄の魔物が罪を犯し始めるまで、喜びにあふれ、幸せに暮らした。この恐ろしい悪魔はグレンデル^(六七)と呼ばれ、荒れ野や湿地、あるいは奥深い所に住む悪名高い辺境の放浪者であった。創造主がカイン^(六八)の末裔として罪を宣告なされて以来、この不

幸な生き物は、長い間、怪物たちの巢窟を守っていた。カインがアベル(二)を殺したため、永遠の主はこの殺害の復讐をなされた——創造主はこの殺意を喜ばれず、カインをその罪ゆえに人類から離して遠くへと追放された。しかし、あらゆるたぐいの悪の末裔が、すなわち、怪物、妖精、悪霊、巨人が、カインから生まれ出て、長い間、神に反抗した。神は彼らにその報復をなされた。(八六一―一四)

第二節 グレンデルの襲来(一一五―一八八)

さて、そんなある夜、グレンデルは鎖帷子(くさりかたびら)を着たデネ族の人々が酒宴の後どのように過ごしているのか確かめようと、高い館にやってきた。そして、高貴な者たちが宴の後、館の中で寝ているのを見つけた。彼らは苦悩を、すなわち、死すべき者の悲惨な運命を、知る由もなかった。獐猛(どうもう)で貪欲、凶暴かつ残忍なこの破壊者は、直ちに身構え、寝床にいる王の家臣三〇名を捕まえた。獲物に満足した怪物は亡骸(なきがら)をたくさん携え、家路につくため、すみかに戻るため、その場から立ち去った。夜が明けてから、薄暗がりの中でグレンデルの仕業が人々に知れ渡った。宴の後、朝になって、大きな泣き声と叫び声が上がった。立派な英雄である高名な王は悲痛のあまり座り込んでしまった。権勢並びなき王は、敵意を抱いた呪われた魔物の仕業を見て、家臣の苦悩と悲しみを耐え忍んだ。この苦痛との葛藤はあまりにも激しく、厭わしく、また長く続くものとなった。魔物は長い間を置かず、一晩後に再び、しかも前より多くの殺害を行い、人々の敵意を募らせ、罪を重ねたが、そんなことは全く意に介さなかった。魔物は罪深い行為に強く捕らわれていた。広間の守り手(二九)の憎しみが動かぬ証拠と共に人々に示され、事実として語られると、人々は館から遠く離れた別の場所に憩いの場を、寝室の中の寢床を求めた。魔物から逃れた者はその後はなるべく遠くで安全な場所に住んだ。このように、魔物は一人で荒れ狂い、正しい者、すべての者に敵対した。そして、最高の建造物もついに空

になってしまった。その期間は長かった——一二年もの間、シュルディング族の王は苦しみとあらゆる困難、深い悲しみに耐えた。そのため、グレンデルが長い間、多年にわたり、フロースガールと争い、激しい敵意、罪深い気持ちと憎しみ、永続的な敵愾心てきがいしんを抱いたことが、歌によって余すところなく人の子らに悲しみを込めて伝えられた。グレンデルは大勢のデネ族のだれ一人とも和睦しようとせず、恐ろしい悪事をやめることもなく、また、金品で償おうとしなかった。そのため、いかなる賢者といえど、この殺人鬼の手から名誉ある罪の償いを期待する根拠は全くなかった。それどころか、闇の悪霊とも言うべきこの怪物は、老若の区別なく、兵士を襲い、待ち構えていて罠に掛けた。この地獄の悪魔は長い夜を霧深い沼地で過ごしていたため、どこをうろついているのか、人々には分からなかった。(一一五—一二三)

このように、人類の敵は、恐ろしい孤独の放浪者は、しばしば多くの暴虐とひどい迫害を行い、暗い夜は綺麗に飾られたヘオロットの広間で過ごした。もっとも、グレンデルは神によって禁じられていたため、館の玉座に近づくことも宝物に触れることも許されず、まして、神慮は知る由もなかった。グレンデルによってヘオロットが占拠されていたことは、シュルディング族の統率者にとって大きな苦悩であり、痛恨の極みであった。高い地位にある大勢の者たちは、すなわち、勇者たちは、突然の恐怖に立ち向かうための最善の策は何であるのか、相談を重ね、論議した。彼らは時おり偶像の安置所で生け贄を捧げ、国の難儀に対して悪魔が自分たちに救いの手を差し伸べてくれるよう声に出して祈った。異教の人々の習慣や慰みとはその程度のものであった。彼らは地獄のことは念頭にあったものの、行為の審判者であられる創造主も、主なる神も、栄光の支配者であられる天上の守護者を称える術も全く知らなかった。ひどく苦しみながら魂を火の真只中へ投げ込み、救済を望まず、頑として変わろうとしない者に災いあれ！死後

365
に主の元を訪れ、父なる神の腕に抱かれ、平穩無事を願う者には幸いあれ！（一六四—一八八）

第三節 ベーオウルフの遠征（一八九—二五七）

このように、ヘアルフデネの息子はこの災難にたえず悩まされていた。彼は賢明な勇者であつたが、この苦しみを取り除くことはできなかった。人々に降りかかった災難、恐ろしい迫害、夜の最悪の不幸はあまりにも厳しく、厭わしく、また、長い間続いた。（一八九—一九三）

イエーアト族^(一〇)の勇者であるヒエラーク^(一一)の家臣は自分の国でグレンデルの仕業を耳にした。彼は、その当時、この世の人としては一番の力持ちであり、位も高く、偉大な人物であつた。彼は立派な船を用意しよう命じた。彼は人々が自分が必要としているため、白鳥の道^(一二)を越え、高名な統率者、勇猛な王を訪れたいと言つた。賢明な人々にとって彼はかけがえのない存在であつたが、彼らはこの遠征に異議を唱えなかつた。彼らはこの勇士を激励し、吉凶を占つた。この勇者はイエーアト族の中から最も勇敢であると思われる兵士を選んだ。そして、彼は一四名の兵士と共に海を進む木のある所まで行つた。航海に長けたこの勇士は波打ち際まで先導して行つた。時が過ぎた。帆船は波に浮かび、崖の下で停泊していた。旅仕度を整えた兵士たちは船首に上がつた。潮は渦巻き、波は勢いよく海岸に打ちつけた。勇者たちは美しい宝石と立派な武具を船底へと運び込んだ。男たちは帆船を目一杯回した船を、待ち焦がれた航海に向けて出航させた。そして、船首が泡まみれの船は風に押され、まるで鳥のように波高い海の上を進んだ。このようにして、二日目のほぼ同じ時刻に、舳先^{へきさき}が湾曲した船は進み、水夫たちは陸地や崖や険しい山々、それに広大な岬が輝くのを眺められる所まで来ていた。船は海を横切り、船旅は終わった。ウェデル族^(一四)の人々はさっそく急いで上陸し、船を係留した。武具と甲冑はガラガラと音をたてた。彼らは航海が快適であつたことを神に感謝した。（一九

その時、海岸の警備に当たっていたシュルディング族の見張り役は、彼らが輝く盾と準備の整った武器を舷門の上へと運び上げるのを城壁から見届けた。彼は相手は一体何者なのかという好奇心に駆られた。そこで、フロースガールの家臣は馬に跨がり、海岸まで駆けつけた。彼は両手に持った大槍を力強く振り回しながら、礼儀になかった言葉で尋ねた。「このように鎖帷子に身を包み、海路を越え、大海原を横切り、丈の高い船をこの国まで運んでこられるとは、あなたがたは一体どこの国の兵士なのか？ 私は沿岸の警備兵として、いかなる敵も海軍力を頼みにデネ族の国を侵害することがないよう、長い間、海岸を見張ってきた。あなたがたのように盾を携えて公然とこの国に遠征してきた兵士はこれまでいなかった。あなたがたは兵士の合い言葉を全く知らず、血族の者の許しも得ていない。私は甲冑に身を固めたあなたがたの中の一人の勇者より背の高い貴人に出合ったことはない。顔つきとたぐい稀な立派な風貌に偽りがなければ、あの御方は武器で格好をつけた家臣などではない。斥候であるかも知れぬあなたがたが、これ以上デネ族の国に足を踏み入れる前に、あなたがたの氏素姓を聞いておかねばならない。遠くに住む水兵たちよ、私の率直な気持ちを伝えよう。どこから来られたのか、至急明らかにされたい。」（一九四―二五七）

第四節 ベーオウルフ、遠征の目的を語る（二五八―三一九）

最年長の軍の統率者はこれに答えて口を開いた。「我々はイエーアト族の一員で、ヒイエラークの家臣だ。高貴な武將である私の父はエッジセーオウ（五）と呼ばれ、天下にその名を知られていた。父は年老いて他界するまで長い年月を過ごした。世間広しといえど、父のことを覚えていない賢者はいない。私たちは友好的な気持ちを抱いて、あなたの御主君、ヘアルフデネの御子息、この国の守護者を訪ねてきた。よろしく御案内していただきたい。私たちは高名な

デネ族の王に大切な用命を帯びている。何事も包み隠すことのないようお願いしたい。どのような魔物か分らないが、暗い夜になると、摩訶不思議な略奪者がシュルディング族に対して、恐るべき方法で、前代未聞の暴虐、迫害と殺戮を行うという話を実際に聞いたことがある。あなたはそれが事実かどうか御存知でしょう。私は全くの善意からこのことについてフロースガール王に御助言申し上げたい。賢明で勇敢な王がどうしたら悪魔を倒せるか、惨事の終わりと救済が再び王に訪れるように、その策を進言したい。そうなれば、極度の苦悩も和らぐであろう。さもないければ、最高の館が高い場所に留まっている限り、王は永久に苦悩と難儀を耐え忍ばねばならないであろう。」(二五八—二八五)

恐れを知らぬ哨兵は馬に跨がったまま言った。「盾を持つ勇敢な兵士は、心の正しい者ならば、相手の言葉と行為を逐一吟味せねばならない。あなたがたはシュルディング族の王にとって友好的な一行であると思われる。武器と甲冑を身につけたままついて来てください。案内しましょう。舳先が曲がった船が大切な御方を再び海を越えてウェデル族の国へ運ぶまで、あなたがたの船が、海辺に停泊している樹脂を塗りたての帆船が、すべての外敵から守られるよう部下に命じましょう。勇敢に振る舞う者はだれであれ、戦の嵐の中でも無事に切り抜かれるであろう。」(二八六—三〇〇)

そこで、兵士たちはその場を離れた。水に浮かぶ物は静かに留まった——底の広い船は索具につながれ、しっかりと錨を降ろした。彼らの面頬めんぼの上には、黄金で飾られ、火で鍛えられた、眩しく輝く猪の像が光っていた——勇ましい猪の像は勇者の頭上でその命の守り役をしていた。英雄たちは急ぎ足で共に行軍し、黄金で飾られた壮麗な館が立っているのが見える辺りまでやってきた。それは地上の住人にとって空の下で最も名高い宮殿であり、高貴な人

物の住まいであった。この館の明かりは地上をくまなく照らしていた。その時、戦において勇敢な男は高貴な人々の輝く館を指さした。それで、一隊はその館を目指して真っすぐに進むことができた。その哨兵は直ちに馬の向きを変え、次のように言った。「私はこの辺りでお暇せねばなりません。全能の父が御慈悲によってあなたがたの遠征を無事で安全なものとしてくださいますように！ 私は海まで行き、敵の軍勢が来ないよう見張るつもりです。」(三〇—三一九)

第五節 ベーオウルフとウルフガール (三二〇—三七〇)

道は石で舗装されていた。勇者たちは一団となってその道を進んだ。彼らが厳めしい武具を身につけて初めて宮殿に入った時、手で結び合わされた丈夫な鎖帷子は光り、輝く鉄製の輪は武具の中で響いた。航海に疲れた武人たちは幅の広い盾と強固な円い盾を館の壁にもたせかけ、それから長椅子に腰を降ろした。鎖帷子と勇士たちの武具は音を立てた。投げ槍、航海者たちの具足、先端が灰色に輝く槍はまとめて置かれた。武装した一隊は剣を携えていた。すると、勇敢な一人の兵士がその場で戦士たちにその素姓を問うた。「あなたがたは板金で覆われた盾、灰色の鎖帷子、面頬のついた兜、たくさんの槍をどこから運んで来られたのか？ 私はフロースガールの使者で、またその家臣でもあります。これほど大勢の勇敢な異国の方々にお目に掛かったことはありません。あなたがたは決して流浪の身ではなく、勇敢さゆえに、高邁な目的のために、フロースガール王の元を訪ねてこられたのでしょうか。」すると、強力で高名なウェデル族の勇敢な部将は、兜を被った勇者は、直ちにその男に答えて言った。「私たちはヒエラークの食卓を囲む一同であり、私の名前はベーオウルフといひます。私は、ヘアルフデネの御子息に、すなわち、名高い王であられるあなたの御主君に、用件をお伝えしたい。もっとも、これほど立派な御方に我々が拝謁することを殿がお許しく

ださるならばの話ですが。」ウルフガール(二七)は言った。彼はウエンデル族(二八)の出であり、その勇氣と気概と知恵は多くの人々に知れ渡っていた。「私はデネ族の支配者、シュルディング族の王、宝環の付与者、高名な王に、あなたの御要請どおり、この度の遠征についてお伺いし、勇敢な王の御返事を直ちにあなたにお伝えしたい。」(三二〇―三五五)

それから、この男は、老いて白髪となったフロースガールが高貴な人々と一緒に座っている場所へと急いだ。強力(二九)の譽れの高いこの武人はデネ族の王の正面に歩み出て、王の前に立った。ウルフガールは家臣としての習わしを弁え(三〇)ていた。彼は親しい王に語った。「イエーアト族のかたがたが広い海を越えて遠方から訪ねて来られ、こちらにお着きになりました。戰士たちは最年長の者をベーオウルフと呼んでいます。殿、彼らは殿と言葉を交わしたい旨、願ひ出ております。仁慈深いフロースガール王よ、彼らに拒絶の返事はなさらないでください。武具を身につけたあのかたがたは高貴な人々であるように思われます。中でも、戰士たちをこの国に導いてきた武將は並の者ではありません。」(三五六―三七〇)

第六節 フロースガールの歓迎(三七一―四五五)

シュルディング族の守り手であるフロースガールは語った。「私は幼い頃の彼を知っている。彼の老いた父親はエツジセーオウと呼ばれていた。イエーアト族のフレイゼル(三一)は一人娘を嫁として彼に与えた。今、その息子が遅く成長して親しい同胞を訪ねてこの国へとやって来たのだ。さらに、イエーアト族に敬意を表して宝物を贈り物として運んだ船乗りたちの話によると、戦で名声を馳せているベーオウルフは、手で握る強さは三〇人力とのこと。聖なる神は、慈悲深くも、私の期待したとおり、グレンデルの壺行に立ち向かう我々西のデネ族のためにベーオウルフを遣わされたのだ。私はこの偉大な人物の果敢な義侠心に対して財宝を贈るつもりだ。急いで行って、一同全員中に入ってもら

い、私に顔を見せるよう伝えよ。さらに、あなたがたはデネ族にとって歓迎すべき賓客である旨、口頭で告げよ。」そこで、この高名な戦士は扉の所へと向かい、館の中から次のように告げた。「戦勝の誉れ高い王は、東のデネ族の統率者は、あなたがたの血統が高貴なものであることを御存知であること、高邁なあなたがたは海の波を越えてこの国に訪ねてこられた王の賓客であること、以上のことをお伝えするようにとの御下命です。具足と兜を身につけたまま、どうぞさらに奥に入り、フロースガール王にお会いください。盾、槍、危ない槍の軸は、謁見が済むまでここに留め置きください。」(三七一―三九八)

そこで、勇者(ベールオウルフ)と彼の回りにいた大勢の男たち、すなわち、勇敢な従者の一行は立ち上がった。数名の従者は、この勇者が命じたとおり、その場に留まり、武器の見張り番をした。案内役の先導に従い、一行はヘオルットの屋根の下を急いだ。兜を被った勇敢な武人(ベールオウルフ)は進み行き、炉辺の床の上に立った。ベールオウルフは言った——彼の鎖帷子、すなわち、鍛冶師の技によってつなぎ合わされた鎧は、光り輝いていた。「フロースガール王、お目にかかれて光栄です。私はヒエラークの血族で、王に近侍する武士であります。若い頃、多くの輝かしい手柄を立てました。グレンデルの仕業は国におりました私の耳にもはっきりと達しました。船乗りたちの話では、最高の建物であるこの館も、夕べの薄明かりが空の下へと隠れてしまうと、グレンデルのために一人も居着かず、無用の長物となってしまうとのこと。そこで、フロースガール王殿、最も勇敢で分別に富む私の国の戦士たちは、私の腕の力の強さのほどをよく知っていますので、殿を訪ねるよう勧めてくれたのです。彼らはかつて私が返り血を浴びて戦場から、敵の元から戻った時、私の力の強さを実感しました。その戦で私は巨人族五人を縛りあげて退治し、夜は波の上で海獣を倒し、恐ろしい難局を乗り越え、ウェデル族の苦悩の仇を討ち、海獣に苦汁をなめさせ、敵を滅

ばしました。今度は、グレンデルと、すなわち、あの悪魔、あの怪物と一人で対決するつもりです。そこで、輝くデネ族の王、シュルディング族の守り手であられる殿に一つお願いがあります。戦士たちの守護者、国の民の親しい友であられる殿、このように遠路はるばる参ってきました私と部下の戦士の一隊、この勇敢な一同が単独でヘオロットを浄化することを拒否なされませんように。怪物は無謀にも武器の使用を好まないという話も聞いています。そこで、わが主君であるヒエラク殿が私の勇気を喜ばれることを願って、刀や幅の広い盾、黄色の円盾を格闘の場に携えていくことはやめ、その代わり、素手で敵に挑み、互いに命を賭けて戦いたいと思います。その格闘で死んで運び去られる者は神の裁きを甘んじて受けねばなりません。グレンデルが勝てば、奴は戦士たちの館の中でこれまでどおり幾度となくヒエアート族の人々を、栄光の男たちの一団を、ためらうことなく貪り食うと思われま⁽³⁰⁾す。たとえ死が私を奪い去ったとしても、奴は血が滴る私を手に入れようとするでしょうから、殿が私の頭を布で包まれる必要はありません。孤独な奴は食らうつもりで血まみれの死体を運び去り、ためらうことなくかぶりつき、湿原の根城を汚すことでしよう。私の体が餌⁽³¹⁾となってしまうとしても、殿がそのことを嘆かれるには及びません。もしも合戦で私が他界することになりましたら、私の胸を守っている最良の鎖帷子と最も立派な具足をヒエラク王に送り届けてください。これはフレーゼルの形見で、ウェーランドの手になるものです。いつであれ、運命はなるようにしかなりません。〔三九九―四五五〕

第七節 フロースガール、グレンデルについて語る（四五六―四九八）

シュルディング族の守り手のフロースガールは語った。「わが友ベーオウルフよ、あなたは責任感と人情ゆえにこの国を訪ねて来られた。あなたの父は戦によって最も大きな不和を招いてしまった。ウィルフィング族⁽³²⁾のヘアゾー

フをその手で殺害してしまつたからだ。それゆゑ、イエーアト族は弔い合戦を恐れ、彼を匿かくまつておくことはできなかった。やむをえず、彼はうねる波を越えて南のデネ族、すなわち、誉れの高いシュルディング族の元に身を寄せた。その当時、私はデネ族を統治し始めたばかりで、若くして広大な王国、勇士たちの豊かな都を守っていた。その時はヘオロガールは死んでしまつていた——私の年長の血族の男であるヘアルフデネの息子は生きてはいなかった。彼は私よりもすぐれていたのだが。その後、私は例の不和を金品で解決した。私は先祖伝来の宝物を波の背のあなたに住むウィルフィン族に送り届けた。エッジセーオウは私に誓いを立てた。グレンデルが悪意を抱いてヘオロットの館でどれほどの危害を加え、どのような攻撃を浴びせたか、だれに語るにせよ、私にとっては心の痛むことである。私の館の衛士である兵の一団は減つてしまつた。運命は彼らをグレンデルの恐ろしい行為に委ねてしまつた。しかし、神はこの狂暴な敵と行為をたやすく断ち切つてくださるであらう。戰士たちは大杯をかたむけて麦酒を飲みながら、刃の鋭い剣を携えてグレンデルとの合戦を祝宴の間で待ちたいと何度となく大口をたたいた。ところが、夜が明け、朝日が差す頃になると、この酒宴の広間は、高貴な人々の楼閣は、血の海となり、床はすっかり血にまみれ、広間は戦いの血で濡れていた。死が彼らを奪い去つたため、私のかげがえのない味方の勇士の数はその分減つてしまつた。さあ、祝宴の席に着き、心に期することや勝利の自信のほどを気のおもむくまま戰士たちに語ってください。」(四五六—四九〇)

そこで、イエーアト族の戰士のために祝宴の広間の中に長椅子が用意された。勇猛果敢な者たち、腕に覚えのある者たちは、その席についた。飾りのついた大杯を手にした下僕が接待役を務め、生一本の美酒を注いだ。吟遊詩人は時おりヘオロットの中で澄んだ声で歌つた。その場は勇者たちの歓喜にあふれ、戦に長けたデネ族とウェデル族の戦

357
士が大勢いた。(四九一―四九八)

第八節 ウンフェルスの侮辱、ベールオルフとブレカの競争(四九九―五五八)

シュルディング族の王の足下に座っていたエッジラーフの息子ウンフェルスは口を開き、(ベールオルフに)喧嘩をしかけた——彼は、だれであれ、他人がこの世で、空の下で、自分より高い名声を得ることを望まなかったため、勇敢な船乗りベールオルフの遠征は彼にとって大きな頼の種であった。「大海原でブレカと争い、水泳の技を競ったベールオルフとはあなたのことですか？二人は自尊心ゆえに海に挑み、無謀にも深い海に命を委ねたそうですね？二人が海で泳ぎ始めた時、敵も味方も、だれも二人の嘆かわしい冒険を思い止どまらせることはできなかった。その海で二人は潮の流れを腕で捕らえ、海の道を横切り、手で水を掻き、海の上を滑って行ったとか。海は波で、冬の大波で、荒れ狂っていた。二人は七夜の間、海に捕らわれたまま悪戦苦闘した。ブレカは水泳であなたを破り、力もあなたに優っていた。それから、彼は海に運ばれ、翌朝ヘアゾ・レーム族の国の岸边に打ち上げられた。国の人々にとってかけがえのない彼は、そこから大切な故郷へ、ブロンディング族の国へ、美しい城塞へと戻った。その地で彼は人々と都と宝物を支配していたのだ。ベールアンスタインの息子(のブレカ)はあなたとの約束をすべて忠実に果たした。それゆえ、あなたはどこであれ攻撃や残酷な格闘は得意でしょうが、ここであえてグレンデルを一晚待ち構えるといわれるのなら、あなたにとって以前より悪い結果に終わると思いますかね。」(四九九―五二八)

エッジセーオウの息子ベールオルフは言った。「さて、わが友ウンフェルス殿、あなたは麦酒に酔った勢いでブレカについて全く冗舌となり、彼の冒険談をたぷりと語ってくださった。私は他のだれよりも泳ぐ力はすぐれていたものの、波間で悪戦苦闘したのは事実だ。我々少年二人は、その頃は共にまだ小さかったが、命を賭けて海に飛び込

もうと言って誓い合い、そのとおり実行に移した。二人が海で泳いだ時、共に丈夫な抜き身を握っていて、それで鯨から身を守ろうと考えた。彼は海の波の上を私から遠く離れて泳いだり、私より早く大海原の上を泳ぐことはできず、私も彼と離ればなれに泳ぎたくなかった。そこで、我々は五夜の間、海の上にいたが、激しい流水のため二人はとうとう別れ別れとなり、波のうねる海と、酷寒、次第に暗くなる夜、厳しい北風が二人を襲った。波は荒かった。海獣は気嫌を損ねていたが、手でしっかりと結び合わされた鎖帷子が私をこの敵から守ってくれた。黄金で飾られ編みあげられた胴着は私の胸を包んでいた。恐ろしい敵は私を海の底へ引きずり込み、獐猛な敵は私を強く掴んだ。しかし、幸いなことに私は刀の先で怪物を突き刺し、激しい格闘の末、力の強い海獣を自分の手で倒した。(五二九―五五八)

第九節 ブレカとの競争(後半) (五五九―六六一)

このように、怪物たちは何度も激しく襲ってきたが、私は鋭い剣で巧みに応酬した。そのため、邪惡な破壊者も私を捕らえて海の底で酒盛りをするという喜びは全く味わえなかった。それどころか、翌朝になると、彼らは剣で傷つけられ、刀で息の根を止められて死に、波打ち際で仰向けになって横たわっていた。そのため、その後、彼らは荒れ狂う海を越えて旅する船乗りたちを邪魔することは全くなかった。光りが、明るい神の印が、東方から現れ、波が静まったので、私は岬と風の強く当たる岸壁を眺めることができた。運命の女神も、まだ寿命の尽きていない戦士の勇気が優っている時には、しばしばこのような勇者を救ってくださるものです。ともかく、私は刀で九頭海獣を倒したが、真夜中に、大空の下で、しかも潮流の上で、これ以上に激しい戦とこれほど困窮した男の話は私にこれまで聞いたことはない。この冒険では疲れ果てたものの、敵の捕虜にはならず、なんとか生き延びることができた。それから、海が、次々と押し寄せる波が、波立つ潮の流れが、私をフィン族^(四)の国へと運んでくれた。(ウンフェルス殿、)

このような格闘や全く恐ろしい刀による戦いがあなたに関わる話として語られるのを私は聞いたことはない。ブレカもあなたも、戦場で血まみれの刀を振るってこれほど勇敢な働きをしたことはこれまでにない。私はこのことをあまり声高に言うつもりはないが、あなたは自分の血縁である実の弟を殺害したではないか。どんなに知恵を絞って（逃れようとして）みても、そのことで地獄であなたに天罰が下るのは間違いない。エッジラーフの御子息殿、はっきり言わせてもらおうと、あなたの言葉どおり、あなたに気迫がみなぎり、気概があふれていたなら、恐ろしい怪物グレンデルも、このヘオロットであなたの御主君に対してこれほど多くの恐怖と危害を与えることはなかっただろう。事実、グレンデルはあなたの国の人々である勝利のシュルディング族の敵意と激しい攻撃が恐れるに足るものではないことを見抜いている。奴は力づくでデネ族の人々を大勢奪い去り、哀れみを示すどころか、喜々として殺害しては餌食とし、槍で名高いデネ族から攻撃されるなどとは思ってもいない。しかし、これからまもなく奴にイエーアト族の力と勇気と闘志をみせてやろう。明日、朝の明かりが、光に包まれた太陽が、南から人の子らの上を照らす時、勇者は再び蜂蜜酒の席に着くことになるであろう。」（五五九—六〇六）

すると、白髪交じりの戦で名高い宝物の付与者は喜んだ。輝くデネ族の王はベーオウルフの力添えを頼りにした。この人々の守り手はベーオウルフの決意が固いことを知った。（六〇七—六一〇）

その場では戦士たちから喜びの声が上がり、ざわめきが広がり、快活な言葉が交わされた。フロースガールの后、黄金で飾られたウェアルフセーオウは、礼を尽くすべく進み出て、広間にいる勇士たちに挨拶した。それから、この高貴な女性は最初に東のデネ族の国の守り手に大杯を差し出し、酒宴の席では楽しく、家臣たちには情け深くあるようにと請うた。戦勝の誉れ高い王は広間で祝宴と杯を喜んで受けた。次いで、ヘルミング一族^(四三)の女性は老若を問わ

ず歩み寄り、全員に立派な大杯を回した。それから、宝環で飾られた心優しい后が蜂蜜酒の杯をベーオウルフに回す時がきた。聡明な后はイエーアト族の統率者に挨拶し、そして、苦難からの救済を一人の勇士に託せる喜びが訪れたことに對して神に感謝の気持ちと言葉で表した。勇猛な戦士はウェアルフセーオウの手から大杯を受け取り、合戦の意気込みに燃えて語った——エッジセーオウの息子ベーオウルフは口を開いた。「私は海に船出し、仲間の兵士たちと船に腰を降ろした時、ぜひともこの国の人々の希望を叶えたい、さもなければ、敵の魔手に強く掴まれて合戦の場で死のうと決心しました。戦士にふさわしい武勇を発揮するか、それとも、この蜂蜜酒の広間で死を待つか、いずれかでしょう。」この一言、すなわち、イエーアト族の男の誇りに満ちた話は、王妃を大いに喜ばせた。黄金で飾られた気品あふれる女王は王のそばに行き、席に着いた。(六二一—六四一)

それから、広間の中では再び今までどおり話に花が咲き、人々は喜びにあふれ、戦勝の誉れ高い人々からざわめきが上がった。やがて、ヘアルフデネの息子は夕べの休息をとりに行きたく思った。人々が太陽の明かりを見ることができなくなり、暗くなっていく夜が万物を覆い、暗闇が創造したもろもろの黒い影が雲の下を滑るようにやってくる、この高い広間が怪物に襲われることを王は知っていた。一同は起立した。勇者フロースガールはもう一人の勇者ベーオウルフに会釈し、幸運と酒宴の広間の警護を願って、次のように言った。「私は自分の手と盾を上げられるようになってからこれまで、あなた以外の人にデネ族の人々の立派な広間を任せたことはない。さあ、最高の館を引き受けて守ってください。名誉を忘れず、大いに勇気を奮い、敵の見張りをしてください。この度の大胆な冒険から生き延びることができれば、望みの品は何でも取らせよう。」(六四二—六六一)

第一〇節 ベーオウルフ、館を見張る（六六二一七〇九）

それから、シュルディング族の守り手フロースガールは家臣と共に広間から立ち去った。軍の統率者は寝床を共にする后ウェアルフセーオウの元に行きたいと思った。人々が聞いて知ったところによると、栄光の王である神はグレンデルに対抗すべく、館の護衛者を配置なされた——ベーオウルフはデネ族の王のために特別な任務に着き、怪物の見張り役をすることになった。事実、イエーアト族の武將は自分の武勇と創造主の慈悲を固く信じていた。そこで、彼は鉄の鎖帷子を脱ぎ、兜を頭から取り、宝石で飾られた刀、選りすぐられた剣を従者に渡し、武具の番をするよう命じた。そして、イエーアト族の勇者ベーオウルフは床に着く前に誇りに満ちて次のように語った。「武勇と戦の腕前はグレンデルに劣るとは思わない。それゆえ、やろうと思えばできるが、奴を刀で倒して命を奪うつもりはない。相手がたとえ腕力に秀でていたとしても、私を打ちのめし、盾を引き裂く高度な技は知らないだろう。奴があえて武器を用いない戦を望むなら、今夜は互いに刀の使用を差し控えねばならない。そうすれば、賢明な神、聖なる主は、自分の意に叶うと思われるどちらかの手に栄光を与えてくださるだろう。」（六六二一六八七）

それから、戦に強い勇者は体を横たえ、顔を長枕にうずめた。次に、彼の周囲にいた大勢の勇敢な海の戦士たちが広間の中の寝床に横たわった。彼らはだれ一人なつかしい国へ、生まれ育った町や村へ、戻れるとは思ってもみなかった。この酒宴の広間では、これまできわめて多くのデネ族の人々が殺戮によって命を奪われたことを彼らは聞いて知っていたからである。しかし、神はウェデル族の人々に戦の勝利という好運、救済と援助をお与えになられた。そのため、彼らは一人の勇士の技と力によって敵を完全に打ち負かすこととなった。力強い神が長い間人類を支配してこられたという真実は広く知られているところである。暗い夜になると、闇の放浪者は忍び寄るようにやってきた。破風

のある館を守るはずの弓の使い手たちは、一人を除いて全員眠っていた。恐るべき悪魔も、神が望まれない時は、人々を暗がり引きずり込むことはできない。このことは人々に広く知れ渡っていることである。それはともかく、ベール・オウルフは眠らず、敵に憤りを抱きながら、腹立たしい思いで戦の結末を待っていた。(六八八―七〇九)

第二一節 グレンデルの来襲(七一〇―七九〇)

すると、グレンデルは神の怒りを背負いながら湿原を出て、霧深い山の麓を通り、館へとやってきた。この恐ろしい敵は人間を一人高い広間の中で捕まえようとたくらんでいた。怪物は雲の下を進み、酒宴の館まで、すなわち、金箔で輝く戦士たちの黄金の広間であると確認できる場所までやってきた。グレンデルがフロースガールの居城を訪れたのはもちろんこれが最初ではなかった。怪物はこれまで厳しい試練に遭遇したことも、自分より強い館の衛士に会ったこともなかった。喜びを奪われた怪物はそれから館を目指して進んだ。扉は火で鍛えられた金具でしっかりと閉じられていたが、グレンデルが両手で掴むとすぐ開いた。悪事を胸に抱いた怪物は怒りにまかせて館の入口を突き破った。悪魔は石が綺麗に敷き詰められた床の上へと直ちに足を踏み入れ、怒りもあらわに侵入した。悪魔の両眼から炎にそっくりな恐ろしい光が出ていた。怪物は多くの兵士が、血族の戦士の一団が、若い家臣の一行が、館の中で一緒に寝ているのを見た。その時、怪物の心は躍った。たくさんの獲物が得られる機会が訪れたので、恐ろしい怪物は日の出前にそのうちの一人の肉体から命を奪おうと考えた。もっとも、その晩以降、怪物がさらに人間を捕まえられる運命とはなっていなかった。力の強いヒューラクの血族の勇者はこの悪の張本人がどのように襲ってくるのか見守った。敵は襲撃をためらうことなく、まず、寝ている兵士を素早く掴み、難なく引き裂き、関節を噛み砕き、流れ出る血を飲み、肉の塊を飲み込んだ。怪物は瞬く間に死んだ男のすべてを、足や手まで、平らげてしまった。敵はさらに

近くに歩み寄り、寢床で横たわっている勇敢な戦士を片手で掴もうとして手を伸ばした。ベールオウルフは敵意もあらわにそれを受けとめ、片手について体を起こした。悪辣な行状の守り手はこの世の各地にいる人間の中でこれほど強い握力の持ち主に出合ったことがないことを直ちに思い知らされた。怪物は心の底から恐れたが、もはや一步もその場を離れることはできなかった。敵は立ち去りたい気持ちに駆られ、隠れ家へと逃げ帰り、魔物の群れへと戻りたかった。しかし、その時の敵の境遇はこれまでの生涯に見られたものとは異なっていた。ヒューラクの血族の勇者はその時、夕べの言葉を思い出し、立ち上がって相手をしっかりと掴んだ。敵の指は折れた。怪物は外へ逃れようとあがいたが、勇者はさらに攻撃を加えた。悪名高い怪物はできることならその場から遠くへと逃れ、沼沢の隠れ家へ戻りたいと思ったが、指を敵に握られ、自由がきかないことを知った。ヘオロットへやってきたことはこの邪悪な敵にとって悔やまれる企てであった。王侯の館は地響きを立てた。デネ族の人々、城の居住者、勇者、戦士たちは一人残らず恐怖心に襲われた。厳しい館の守り手たちは、(すなわち、ベールオウルフとグレンデルは)互いに怒りをあらわにした。館はどよめいた。酒宴の広間がこの戦士たちの格闘に耐えたこと、壮麗な館が地上に倒れなかったことは、全く信じられないことであった。この館は鉄の板と巧みな技によって内も外もしっかりと補強されていたのであった。私が聞いた話では、敵対する者たちが争った場所では黄金で飾られた酒宴の長椅子の多くは床から外れてしまった。シュルディング族の賢者たちは、この壮麗な鹿の枝角の飾りのついた館は火に包まれ炎に呑み込まれるのでなければ、だれがどうしようとも壊されたり倒されることはないと考えていた。聞き慣れない物音が何度か響き渡った。神の敵の泣き声を壁越しに聞き、怪物が恐ろしい物音を立て、敗戦の叫びを発するのを耳にし、地獄の奴隷が苦痛を嘆くのを聞くと、北のデネ族全員に物凄い恐怖心が沸き起こった。その頃、この世で当時最も力の強かった勇者は怪物をしっ

かりと掴んでいた。(七二〇—七九〇)

第二節 ベーオウルフ、グレンデルの腕をもぎ取る (七九一—八三六)

高貴な人々の守護者は殺戮の訪問者を生きて帰すことを決して望んでおらず、怪物の命はだれにとっても有益なものだとも思わなかった。ベーオウルフの部下の戦士の多くは、できることならその場で父祖伝来の刀を抜き、高名な武将である主君の命を守りたかった。勇敢な戦士たちはこの戦いに加勢し、あちこちから切りつけ、怪物の命を奪おうと思ったが、この世の最高の鋼も、いかなる戦の剣も、この残忍な悪漢を攻撃できないことを知った。それもそのはず、怪物はすべての剣の先が勝利の武器とならないよう呪文をかけていたのである。怪物がこの時点でこの世で命を落とすということは、惨めなことであり、また、この異国の悪霊が悪魔たちに支配されるために遠くへと旅をすることを意味した。その時、これまで人々に心の痛みと苦悩を何度も与えてきた神の敵は、ヒューラクの血族の勇士が自分の手を掴んでいたため、体の自由がきかないことを知った。二人は生きている限り互いに厭わしい存在であった。恐ろしい怪物は体に深手を負った。怪物の肩には不治の傷がはつきりと見てとれた。腱は裂け、関節は砕けていた。戦いの栄光はベーオウルフに与えられた。グレンデルは致命傷を負い、その場から沼沢地へと逃れ、喜びのない根城へと行かざるを得なくなった。グレンデルに命の終わり、すなわち、寿命がきたことが一層はつきりした。命を賭けた戦いの後にはデネ族のすべての人々に喜びが訪れた。そして、しばらく前に遠くから訪れた賢明で気丈な男はフロースガールの館を敵の攻撃から守り、清めた。彼は夜の手柄、立派な働きに満足した。イエーアト族の武将は東のデネ族に対して誇らしげに語ったとおりに実行し、同時に、彼らがこれまで経験し、困窮ゆえに忍ばねばならなかったあらゆる苦悩、悲しみ、少なからぬ屈辱を癒した。グレンデルが掴むためのすべてのもの、すなわち、手、腕、肩

349
を、戦いで勇敢な男が広い屋根の下へつるした時、これらは彼の手柄の紛れもない証拠となった。(七九一—八三六)

第三節 ヘオロットでの歓喜(八三七—九二四)

私が聞いた話では、翌朝になると、王の贈り物が下賜される広間の周囲にはたくさんの兵士が集まった。各地から遠くの地域から、族長たちが驚くべき物、憎むべき敵の足跡を一目見ようとやってきた。怪物の死は、すなわち、怪物が戦に敗れ、意気消沈して瀕死の状態でその場から逃走し、獣たちの住む湖へと死出の旅に出た有り様は、この不名誉な者の足跡を眺めたすべての人にとって何ら悲しむべきこととは思えなかった。波立つ湖は血で染まり、恐ろしい波のうねりは熱い血と混ざり、戦で流れた血は沸き立った。喜びを奪われ、死すべき運命にあった怪物は、(しばらく)沼地の巢窟に隠れていたが、その後、命を、すなわち、異教の魂を捨てた。そして、彼は地獄に受け入れられた。(八三七—八五二)

老いた家臣や大勢の若者はその場を離れ、楽しい帰路の旅についた。勇敢な戦士たちは馬に跨り、白馬を走らせ、湖を後にした。その道中、ベールオウルフの立派な手柄が語られた——彼よりすぐれた者は、北にも南にも、二つの海に囲まれた広大な大地の上にはいない、広い空の下にも、盾を構えた戦士の中にも、王国にふさわしい者の中にも、一人もいないと、多くの人々は何度も語り合った。親しい主君である仁慈深いフロースガールは立派な王であつたため、彼らが王を咎めるいわれはもろくなかつた。戦の誉れ高い者たちはうってつけだと思われる道で、質の高さで定評のある朽葉色の馬を時おり疾駆させ、競争させた。一方、昔の物語をたくさん覚えていた王の家臣は詩の朗読に長じていて、作詩に余念がなかつたが、彼は事実に基づいて新たな物語を作った。この男はベールオウルフの偉業を見事に整え、言葉に置き換え、時宜を得た話を流暢に吟じた。——彼はすべてを、すなわち、シイエムンドの武勲

についての多くのこと、知られざる数々の事柄、ウェルスの息子(四三)の戦いと遠征、不和と罪について語った。これらの話は彼のそばにいたフィテラ以外の人の子らが全く知らないものであった。シイエムンドとフィテラはどの戦においても常に苦樂を共にしたので、この叔父は甥にそのような事柄を折々に語って聞かせようとしたのである。彼らはおびたらしい数の巨人族を刀で倒した。戦に強いシイエムンドが宝物を守っていた龍を退治したことにより、その名聲は彼の死後少なからず高まることとなった。高貴な人の子である彼は単独で灰色の岩の下に挑むという大胆な行動に打って出た。この時はフィテラは一緒ではなかった。しかし、シイエムンドの剣は奇怪な龍を貫き、この名剣は岩壁に突き刺さった。龍は殺されて死んだ。この戦士は勇氣ある行為によって宝物を自分の意のままにすることとなった。ウェルスの息子は美事な宝物を船底に積み込み、船で運んだ。龍は自分の熱で溶けてしまった。(八五三—八九七)

シイエムンドは武勇によって諸国の冒険家の中で最も広く名を知られた戦士たちの守り手であった。それゆえ、ヘレモードの豪胆さと力と勇氣が衰えた時、シイエムンドの声望はいつそう高まった。ヘレモードはジュート族に騙され、悪魔の手に落ち、まもなく殺された。悲しみは波のように押し寄せ、長く彼を苦しめた。国の人々、すべての高貴な人々にとって、彼は大きな悲しみの種となった。彼に不幸からの救済を期待し、この王の子孫が栄え、父の後を継ぎ、国民と宝物と宮殿、勇者たちの王国、シュルディング族の国を守ってくれと信じた多くの賢者も、この英雄の運命を度々嘆いた。その頃、ヒエラークの血族ベールオウルフは、味方の者たちにとっても、すべての人にとって、いっそう期待される存在となっていたが、ヘレモードの方は罪に捕われていた。――(八九八—九一五)

馬に乗った人々は時おり競争しながら淡黄色の道を駆け抜けた。朝の明かりが輝くやいなや、多くの人々は驚くべきものを見ようと心を弾ませながら高い館にやってきた。宝物の守り手であり高德で知られた名高い王も大勢の侍者

347
を率いて後の部屋を出た。后も侍女の一行を伴い、王と一緒に蜂蜜酒の広間へ通じる道を進んだ。(九一六―九二四)

第四節 フロースガールによる祝賀(九二五―九九〇)

フロースガールは広間に行き、階段の上に立ち、黄金で飾られた高い屋根とグレンデルの手を眺め、次のように語った。「この光景に対して全能の神に直ちに感謝の気持ちを表さねばならない。グレンデルには厭わしい事や苦渋をたくさんめさせられた。栄光の王であられる神が永遠に奇蹟を次々に生み出されんことを。最高の宮殿が血で穢れ、血糊がついたままになっていた頃は、私のすべての苦しみからの救済は永遠に期待できないと思っていたが、それは今からそれほど遠い昔のことではなかった。長い間、兵士たちの砦を憎むべき悪魔や悪霊たちから守れるとは思えなかったすべての賢者にとって、苦難の大きさは計り知れなかった。知恵を絞ってもこれまでだれ一人成し遂げられなかった偉業を、この戦士が神の力を借りてやってのけたのだ。これほどの男子を人々の間にもたらすほどの女なら、いかなる者であれ、今生きていれば、偉大な神は自分の誕生に慈悲深くあられたと言うであろう。最も優れた武人ベールウルフ殿、私は自分の息子に対するのと同じ愛情を心からあなたに示したい。新たな友好の絆をこれからもしっかりと守ってください。この世の望ましい物で、私の意のままになる物なら、あなたには何一つ不自由させないつもりだ。私はこれまで、あなたの手柄に比べると見劣りのする場合でも、戦であなたより劣る兵士にも報奨を、高価な贈り物を、何度も与えてきた。あなたは名声が永久に残る手柄を自分自身の手で成し遂げられた。万物の支配者はこれまでどおり恩寵によってあなたに報われることであろう。」(九二五―九五六)

エッジセーオウの息子ベールウルフは言った。「私たちは大胆にも悪魔の力に挑み、このような力業と戦いを成し遂げましたが、これらはすべて殿に対する好意ゆえであります。武装した敵が瀕死の状態にある様子をお見せで

きたらよかったのですが。私は敵をこの強い握力で急いで死の床にねじ伏せようと考えました。そうすれば、敵は逃げ出さない限り私の手に捕らえられて死の苦しみを味わいながら倒れるはずでした。しかし、神がそれを望まなかったため、私は敵の逃亡を防げませんでした。私は恐ろしい敵をそれほどしっかりと掴まえてもいませんでした。敵が逃亡しようとした時にみせた力は相当なものでした。もっとも、敵は命を守るために手と腕と肩を後に残しました。しかし、哀れな生き物は逃亡先でいかなる慰めも得られず、悪の張本人は罪に責められて、これ以上は生きられないでしょう。敵は深手という恐ろしい束縛と致命的な足枷あしかせに捕らえられています。罪深い怪物は若くして厳しい審判を、栄光の神が下される裁きを、逃亡先で待たねばなりません。」(九五七―九七九)

高貴な人々が戦士の武勇のおかげで高い屋根の上に魔物の手と指を眺められるようになってから、エッジラーフの息子(ウンフェルス)は自分の戦の手柄話について口数が少なくなった。グレンデルの指先の固い爪は、恐ろしく不気味な異教の戦士の手の針は、いずれも鋼のようだった。どんなに固い物であれ、父祖伝来の剣であれ、あのような敵に切りつけ、その敵から血まみれの手をもぎとることはできないだろうと、だれもが口々に言った。(九八〇―九八九)

第一五節 宴と贈り物(九九一―一〇四九)

それから、ヘオロットの内部を手を尽くして飾りたてるよう直ちに命令が下された。大勢の男女が酒宴の間となる迎賓館を飾った。金糸で織り出された錦は壁の上で輝いた。それは眺めるすべての人にとって全く素晴らしい光景であった。壮麗な宮殿の内部は鉄の締め金具で補強されていたが、痛みがひどく、蝶番は外れてしまっていた。魔物は暴虐の罪を背負い、命が助かる見込のない状態で逃亡したが、宮殿の屋根は全く無傷のまま残った。だれがやってみ

ようとも、死から逃れることは容易ではない。人は、魂を授けられた者は、人の子らは、地上に住む者たちは、宴の後で肉体を死の床にしっかりと捕らえられて眠りにつく時、運命に急^せぎ立てられて自分たちに用意されている場所を探さねばならない。さて、ヘアルフデネの息子が広間に行くちようどよい時機となった——王は自分も祝宴に加わりたく思った。宝物の付与者の近くで、しかも、大勢の人々の中で、これほど立派に振る舞える人々が外にいるということを私はこれまで聞いたことがない。それから、名高い人々は長椅子に座り、料理に舌鼓を打った。彼らの血縁である勇敢なフロースガールとフローズルフ^(四五)は高い広間の中で蜂蜜酒の杯を喜んで何度も受けた。ヘオロットの中には同志で満ちあふれていた。その頃は、シュルディング族は裏切りを企てるようなことは全くなかった^(四六)。それから、ヘアルフデネの息子は、戦勝の褒美として、金色の旗、飾りのついた軍旗、兜、鎖帷子を、ベールウルフに与えた。大勢の人々は有名な宝剣がこの英雄の前に運ばれてくるのを見た。ベールウルフは広間の床の上で大杯を受けた。彼は槍兵たちの前で立派な贈り物を受けることを恥じる理由は全くなかった。これほど多くの人々が酒宴の席でこれほど親しみを込めて黄金で飾られた宝物を四つも贈ったという話を私は今まで聞いたことがない。兜の頂上部には金属板の縁飾りがついていて、それが外側から兜を守っていた。そのため、盾を持った戦士が敵に立ち向かう時は、やすりで磨き上げられた強い剣も兜をひどく傷つけることはできなかった。次に、兵士たちの守護者は金糸が編み込まれた手綱のついた八頭の馬を館の広間の床の上に連れてくるよう命じた。そのうちの二頭には、巧みに装飾が施され、宝石がちりばめられた鞍が置かれていた。それは、高貴な王であるヘアルフデネの息子が戦に臨んだ時の鞍であった。高名な王の武勇は兵士たちが戦の最前線で倒れて死んだ時も決して衰えることはなかった。イングの味方^(四七)の守り手は馬と武器の所有権をベールウルフに譲り渡し、これらを十分に使いこなすようにと言った。このように、兵士たちの

宝物の守護者である高名な王は激しい合戦の労苦に対して馬と宝石で立派に報いたのである。そのため、正義に従って真実を語ろうと望む者はこれらの褒賞を決して批判することはないであろう。(九九一—一〇四九)

第六節 フィン王の挿話 (一) (一〇五〇—一一二四)

ついで、高貴な者たちの王はベールオウルフと共に海の道を越えてきた戦士全員にその宴席で宝物や先祖伝来の財宝を贈った。さらに、王は先刻グレンデルに惨殺された一名の戦士には黄金で償うよう命じた。賢明な神と英雄の勇気が運命を転じなかったら、グレンデルはさらに多くの者を殺そうとしたであろう。神は、現在もそうであるが、これまで人類を全員支配してこられた。それゆえ、この事実を知ることと他界後のことを心に描くことは常に最も大切なことである。この世で長く葛藤の日々を過ごす者はたくさんの苦楽を味わわねばならない。(一〇五〇—一〇六二)

ヘアルフデネ(の息子)の武将(フロースガール)の前では歌声と楽器の音が共に響き、歓楽の木が弾かれ、物語が朗読された——フロースガールのお抱えの詩人が祝宴の長椅子で余興をする時間となった。この余興は、フィン王の家臣たちに災難が降りかかり、ヘアルフデネ族の英雄であるシュルディング族のフネフがフリジア族との戦いの場で倒れる物語の朗読であった。(一〇六三—一〇七〇)

〔詩人の物語〕 当然のことながら、ヒルデブルフにはジュート族の誠実さを称える理由は全くなかった。彼女は何の罪もないのに盾が衝突する場所でかけがえない息子と兄弟を奪われた。二人は槍で傷を負い、定められた運命に身を委ねた。彼女は悲劇の人であった。かつてこの世で最高の喜びに浸っていた場所で、身内の者の悲惨な死を翌朝目の当たりにすることになった。そのため、ホークの娘が悲しい定めを嘆くのはもっともなことであった。フィン王の家臣は若干の者を除いてすべて戦に奪い去られてしまった。そのため、彼は合戦の場でヘンリエストを相手に武

勇を發揮することも、残兵を戦場とこの王の部将から救い出すこともできなかった。そこで、フリジア族はデネ族に對して次のような和平の条件を提示した。すなわち、他の館、広間、および玉座を完全に開け渡すこと、フリジア族はジュート族の子供たちとそれらの支配権を折半すること、金品を分け与える時は、フォルクワルタの息子（フィン王）はその都度デネ族にも敬意を表し、フリジア族の人々を酒宴の席で激励した物と同じ物を、金箔で飾られた高価な宝物や宝環を、ヘンイエストの兵士たちにも与えること、という内容であった。それから、彼らは双方で和平条約をしっかりと結んだ。フィン王はヘンイエストに對して厳かに、力を込めて、次のような誓いを立てた。すなわち、惨めな生き残りの兵士たちについては、賢者たちの判断を仰いでフィン王が手厚く保護する、だれであれ言葉や態度で条約を破ってはならず、また、主君を奪われたため、宝環の付与者である自分たちの王の殺害者にやむなく従うものの、いかなる時であれ、条約に對する不満を惡意を込めて漏らさない、さらに、フリジア族のだれかが万が一にも無礼な言葉で（デネ族）の敵意を誘うようなことがあれば、その時は劍の先で決着をつける、という趣旨の誓いであった。火葬用の薪が用意され、黄金は蔵から運び出された。戦に強いシュルディング族の兵士たちの中で最も勇敢な男（フネフ）は薪の上に載せられた。血まみれの胴衣、金色の猪の像、鉄のように固い猪の彫像、傷ついて倒れた多くの高貴な人々がその薪の上に載せられるのがはっきりと見えた。たくさん兵士が戦場で倒れてしまった。ヒルデブルフはフネフの火葬用の薪のそばで自分の子供を炎に委ね、遺体を燃し、叔父と肩を並べて火葬するよう命じた。彼女は嘆き悲しみながら哀悼の言葉を述べた。勇者は薪の上に載せられた。最も大きな火葬の炎は墓の盛り土の前で大きな音をたてて燃え、渦巻きながら雲まで達した。頭は碎け、敵から受けた傷口は大きく裂け、体から血が吹き出した。最も貪欲な惡靈とも言うべき炎は、戦が（あの世へと）運び去った双方の部族を全員飲み込んだ。彼らの栄光は

去ってしまった。(一〇七——一二四)

第七節 フィン王の挿話 (二) (一二五——一九一)

さて、味方を奪われたフリジア族の兵士たちは自分たちの住まいを求めるために、母国と故郷と大きな都を訪れるために、その場から立ち去った。その頃、ヘンイエストは殺戮の血で穢れた冬を暗胆たる思いでフィン王の元で過ごした。(冬のため、) 舳先が環状になった船を大海原へと繰り出すことはできなかったが、彼は国のことを思っていた。海は嵐のために波立ち、風と争った。冬は氷という束縛で波を閉じ込めていたが、やがて新しい年が人々の住まいを訪れ、現在と同じようにいつも季節を違えずやってくる眩しい陽気となった。冬は過ぎ去り、大地の面は美しくなった。客人となっていた勇者(ヘンイエスト)はその居城を出たい気持ちに駆られた。彼は航海よりも自分が受けた扱いに対する復讐により強く思いを馳せ、戦を起こせないものかと思案した。それというのも、剣を見るとジュート族の息子たちのことを思い出すからであった。そのため、フインラーフの息子(五七)が戦の光線(五八)を、すなわち、最もすぐれた剣を(贈り物として)彼の膝の上に置いた時、彼は大勢の戦士の統率者(であるフィン王との合戦)を拒まなかった。その刃はジュート族の間ではよく知られていた。そして、剣による恐ろしい死が自分の館にいた勇猛果敢なフィン王を襲った。それは、グースラーフとオースラーフ(五九)が航海を終え、(フリジア族による)激しい攻撃を彼らが涙ながらに語り、彼らの大きな苦痛の咎めをフィンに向けた時であった。二人はもはやはやる気持ちを押えきれなかった。そして、館は敵の死体で埋め尽くされ、近衛兵に守られていたフィン王も殺され、后は捕らえられた。シュルディング族の射手たちはフィン王の宮殿で見つけられる限り多くの首飾りや珍奇な宝石といったこの国の王の家財をすべて船に運んだ。彼らは高貴な后を海の道を越えてデネ族の所へと運び、后の国の人々の元へ連れ戻した。——(二〇二)

341
物語、すなわち、吟遊詩人の哀歌は終わった。(一一二五—一二六〇a)

再び歓喜の声が上がり、長椅子からどよめきが響きわたった。執事たちは立派な器からぶどう酒を注いだ。ウェアルフセーオウは金の宝冠を被り、二人の勇者、すなわち、叔父と甥が座っている席まで行った。その頃は、二人はまだ固い絆で結ばれていて、互いに相手を信頼していた。^(六八)同様に、側仕えのウンフェルスもシュルディング族の王の足元に腰を降ろしていた。ウンフェルスは剣が振り回される場では血族に対してさえ情け容赦しなかったけれども、大いなる勇気の持ち主であること、大概が高邁であることをだれもが信じていた。シュルディング族の王妃は言った。

「宝物の付与者である高貴な殿、この大杯を受けてください。寛大な殿、ご気嫌よく振る舞われ、王にふさわしく、イエーアト族の人々に優しい言葉をかけてあげてください。イエーアト族に対しては親切になさり、各地から^(六九)手に入れられた贈り物を施すことを忘れないでください。人の話では、殿にはあの兵士(ベーオウルフ)を自分の息子として迎え入れたい気持ちがありとか。宝環が付与される輝く館へオロットは清められました。なるべくたくさんの褒美を分配なされ、そして、定められた運命と出合い、この世から去らねばならない制限になりましたら、血族の者たちには国民と王国を残してあげてください。シュルディング族を支配されている殿、私の考えでは、もしもあなたが情け深いフローズルフよりも先にこの世を去ることになりましたら、あの子は若い兵士たちを手厚く処遇してくれることでしょう。小さかった頃、あの子の喜びと出世のために私たちが与えた恩義をすべて忘れずにいるなら、あの子は私たちの子や孫に立派に報いてくれるでしょう。」そう言って、彼女は息子フリースリーチとフロースムンド、^(七〇)勇士の子供や若い兵士たちが一緒に座っている長椅子の所まで行った。イエーアト族の勇士ベーオウルフはこの兄弟のそばに座った。(一二六〇b—一二九一)

第一八節 ベーオウルフに褒美が下賜される（一一九二—一二五〇）

大杯がベーオウルフの所に運ばれ、親しそうな声で酒が勧められた。そして、らせん状の金の飾り物、腕飾り二個、胴鎧、鎖帷子、さらに、私がこの世でこれまで聞いたことのないほど大きい首飾りが厳かに贈呈された。ハーマがブロージング族の首飾りと太陽の形をした宝石、および、高価な器を輝かしい都へ運んで以来、私は空の下でこれに優る兵士たちの宝石があるという話を聞いたことはない。ハーマはエオルメンリーチの悪巧みから逃れ、永遠の教えを選んだ。スウェルティンクの甥であるイエーアト族のヒエラークは、軍旗の下で宝物を守り、略奪を防いだ自分の最後の遠征の折、この首飾りを身につけていた。勇敢であるがゆえに難儀に挑み、フリジア族に対して戦をしかけた。そして、運命は彼を運び去った。この権勢並びなき王は装飾を施された武器や宝石を身につけて波の大杯の上を越えていったが、盾の下に倒れてしまった。王の遺体、胴鎧、および、あの首飾りは、共にフランク族の手に落ちた。殺戮の後、雑兵たちは倒れた戦士たちの身ぐるみを剥いだ。イエーアト族の人々の遺体は野に満ちた。——館には拍手喝采の音が鳴り響いた。ウェアルフセーオウは語った。彼女は大勢の前で次のように述べた。「立派な武人ベーオウルフ殿、この首飾りを末長く使ってください。それから、この胴鎧と数々の美事な財宝を愛用され、存分に活躍なさることを願っています。持てる力を十二分に發揮され、この子らの良き指導者となられんことを。御恩は決して忘れるはいたしません。あなたが成し遂げられたことは、風のすみかである海が崖を取り囲む広い地域で、人々が永久に称賛するに値するものです。勇ましい人よ、この世にある限り、幸せであられんことを！立派な宝物をたくさんお贈りしましょう。神に祝福された人よ、私の息子には親切に接してあげてください。この国では、高貴な人はだれも他の人には正直で、心優しく、主君には忠実です。家臣は忠誠心に富み、国の人々は全く快活で、酒で頬を赤らめてい

339
る兵士たちも私の命じたとおり動いてくれます。」(一一九二—一二三二)

そして、后は席に着いた。そこには選りすぐられた料理が準備されていた。男たちはぶどう酒を飲んだ。彼らは運命を、すなわち、これまで多くの兵士に降りかかったような恐ろしい古の定めが再び起こることなど知る由もなかった。そして、日が暮れ、高貴な王フロースガールは自分の住まいの寢床へと向かった。大勢の衛兵は、これまで何度も行ったように、館の見張りについた。彼らは長椅子を片付けた。そして、寢床と長枕が用意された。近々死ぬべき運命にあった麦酒に酔った一人の兵士も館の長椅子の上に体を横たえた。兵士たちは枕許に戦闘用の盾、輝く木の板を置いた。戦場において兵士たちの頭上でそびえる兜、鎖で作られた鎧、丈夫な盾が長椅子の上に置かれているのははっきりと見てとれた。居城であれ、戦場であれ、主君の万が一に備え、いつでも戦える用意をしておくのが彼らの習わしであった。この戦士の一団は勇敢であった。(一二三三—一二五〇)

第十九節 グレンデルの母親の襲来(一二五一—一二三二)

衛兵たちは眠りについた。このうちの一人は夕べの休憩のためにひどい報いを受けることとなった。それは、グレンデルが黄金の館を占拠し、危害を加えた後で、死という結末がくるまで悪事を働いた時にしばしば起こったものと同じであった。憎むべき敵の死後も、闘争のごたごたが去った後も、グレンデルの敵討ちをする者が長く生き残っていたことが明らかとなり、人々に広く知れ渡ることとなった。グレンデルの母親である女の怪物は惨めな思いを忘れかねていた。それというのも、カインが父方の血族であるただ一人の弟を刀で殺害して以来、彼女は恐ろしい水の中に、冷たい海の中に、住まねばならなくなったからである。カインは殺人の罪で穢れ、人として生きる喜びから逃れて旅立ち、荒れ野に住んだ。悪運の定めを負った霊がたくさん彼から生まれ出た。憎むべき呪われた怪物グレンデル

はそのうちの一人である。怪物は一人の男がヘオロットの中で寝ずに格闘を待ち構えているのに気づいた。そこで、怪物はこの男に掴みかかった。しかし、男は自分の力の強さ、神から与えられた豊かな才能を忘れず、支配者である主からの恩寵、救済、支援を信じた。その甲斐があつて、彼は敵に打ち勝ち、地獄の悪魔を退治した。人類の敵は、不名誉なことに、喜びを奪われ、死の床を求めて立ち去った。そこで、貪欲で陰気な怪物の母親は息子の死の仇を討つために苦しい旅に出ようと思つたのである。(一二五—一二七八)

さて、女怪は鎖帷子のデネ族^(Dene)の兵士が広間のあちこちで眠っているヘオロットへとやってきた。グレンデルの母親が広間に足を踏み入れた時、兵士たちにとって事態はたちまち一変した。しかし、女の力というものは、一介の女の戦力は、男の場合と比べて劣るため、恐怖はそれだけ少なかった^(less)。男なら、そのような場合、金の環で飾られた刀、鉄槌^(鉄槌)で鍛えられ、血糊のついた、刃の丈夫な剣で、兜の上の敵の像を叩き割るであろうが。その時、広間の中では刃の丈夫な剣が席の上で抜かれ、たくさんの広い盾が手でしっかりと握られ、掲げられた。恐怖が兵士たちを襲った時、だれも兜や広い胴鎧を身につけることなど思いもつかなかった。女怪は見つかった時、あわてふためき、その場から立ち去り、命を守ろうとした。女怪は急いで高貴な一人の男をしっかりと掴み、沼沢地の方へと向かった。この男はフロースガールにとってこの世の家臣の中で最もかけがえない勇士、強力な盾の戦士、高名な武人であった。その男を女怪は寢床で殺したのだ。ベーオウルフはその場にはいなかった。宝物が贈られた後、名高いイエーアト族の男には別の宿舎があてがわれていたのである。ヘオロットでは叫び声が上がった。女怪は血が滴る例の(グレンデルの)腕を持ち去った。悲しい出来事が繰返され、しかも、またその同じ住まいの中で起こってしまったのである。怪物と人間が互いに味方の命の償いをするというのは決して好ましいやりとりではなかった。白髪の戦士である賢王は大切

な腹心の部下が倒れて息絶えたことを知って悲痛な気持ちになった。戦勝の誉れ高い男ベーオウルフは直ちに王の居間へと呼び寄せられた——夜が明けると、一人の勇者が、高貴な闘将が、部下を率い、賢者（フロースガール）が待つ所へと出かけた。王は全能の神が悲報の後で事態の好転を望んでおられるのかどうか案じていた。戦の誉れ高い男は手勢を引き連れ、床に沿って進み——広間の床板はきしんだ——イングの味方の賢王（フロースガール）に口頭で挨拶し、昨晩は王にとってお望みどおり快適なものであったかどうかと尋ねた。（二七九—一三二〇）

第二〇節 フロースガール王の嘆き（一三二—一三八二）

シュルド族の守り手フロースガールは答えた。「快適なものとはとんでもない！デネ族の人々の悲劇が繰り返されたのだ。アッシュヘレ^(七四)が殺されたのだ。ユルメンラーフ^(七五)の兄、わしの腹心の部下、相談役であったが。我々が戦で身を守った時や、歩兵の部隊が衝突して（兜の上の）猪の像を打ち砕いた時は、彼は頼もしい味方であったが。高貴な者、立派な英雄たらんとする者は、アッシュヘレの如くあらねばならぬ。さまよえる殺人鬼はヘオロットで彼を殺害した。恐ろしい怪物は獲物に満足し、戦利品に喜んで帰っていったが、それがどこへなのかわしには分からない。グレンデルは長い間わしの家臣を殺してはその数を減らしていった。しかし、あなたは一昨晚その強い握力によって、すさまじい方法でグレンデルを倒された。女怪はその仇を討ったのだ。グレンデルは格闘で倒れて命を失ったが、今度は、力が強く恐ろしいもう一人別の敵がやってきて、血族の仇を討とうとしたのだ。それにしても、このような仇討ちはひどすぎる。この宝物の付与者^(七六)のために心から涙を流す多くの武士にとって、これは全く苦しい痛みだ。好ましいあらゆる事のためにおまへたちに差し伸べられた彼の手はもう動かなくなった。（一三二—一三四四）

この国の住人やわしの家臣、それに館の相談役たちの話によると、図体の大きな辺境の放浪者、異国の妖怪が二人、

荒れ地に住んでいるのが目撃されたとのこと。彼らが確信を持って言えるのは、怪物の一人は女の姿をしていたことだ。もう一人は、どの人間よりも体が大きいことを除いて、男とそっくりな姿で、みすばらしく流浪していたそうだ。地上の住人はかつて奴をグレンデルと呼んでいた。グレンデルの父親については何も知られていないし、グレンデルと母親にこれまでに悪霊が生まれたかどうかも分からない。奴らは人里離れた場所、狼の隠れ家、風当たりの強い岬、危険な沼沢地に住んでいる。その辺りでは、山から流れ出た水が滝となり、岬の暗がりの下へ、大地の下へと落ちていく。そこから何マイルも離れていない所には湖があり、霜の降りた木がその湖の上に枝を伸ばし、しっかりと根を張った木が水面を覆うように立っている。そこでは、恐ろしい物が、火が、湖面の上で夜ごと見られる。湖底の様子が分かるほどの物知りはいない。猟犬に追われた雄鹿や丈夫な角を持つ赤鹿が遠くから逃れてきて、この森にたどり着いたとしても、森に逃げ込んで体を隠すくらいなら、水際で命を落とすことを望む。それほどそこは安全な場所ではないのだ。風が忌まわしい嵐を引き起こすと、湖から黒々とした竜巻が雲にまで舞い上がる。そして、ついには空が暗くなり、天が雨を降らす。ところで、今回も救いの手はあなた以外からは得れない。罪深い者がいるすみかを、危険な場所を、御存知ないでしょうが、なんと少しでもその場所を探し出していただきたい。そこから戻ってこれたら、これまでと同じように金品で、父祖伝来の宝によって、金の環を贈って、その労に報いるつもりだ。」(一三四五—一三八二)

第二一節 湖への遠征(一三八三—一四七二)

エッジセーオウの息子ベーオウルフは語った。「思慮深くあられる殿、御心配は無用です。味方の死を嘆き悲しむより、仇を討つことの方が何よりも大切です。人間だれしもこの世における命の終わりを経験せねばなりません。で

きることなら死ぬ前に名譽を得たいものです。武士にとって名譽は死後の最高のものとなりましょう。王国の守り手であられる殿、立ち上がってグレンデルの母親の足跡を今すぐお見せください。お約束いたしましたし、女怪がどこへ行こうと——たとえそれが巢窟の中、大地の懷、山の茂み、海の底であれ——逃がしはしませんと。どんなにつらくとも、今日のところはこらえてください。」すると、老王は、この男が語ったことに對し、強力な主である神に感謝した。(二三八三—二三九八)

そして、フロースガール王の馬に、たてがみが縮れた駿馬に、鞍が取り付けられた。賢王は馬に跨って堂々と出かけた。盾を持った歩兵の一団は前進した。女怪が通った大地の上の足跡は森へ通じる道に沿ってはつきりと認められた。女怪は暗い湿原を真つすぐに進み、フロースガールの宮殿を警護していた家臣の中で最も勝れた者を殺して運び去った。ついで、貴族の子らは険しい岩の斜面、狭い小道、窮屈な一本道、だれも足を踏み入れたことのない道筋、切り立った岬、海獣のすみかをいくつも通り抜けていった。フロースガールは他の数名の熟練兵と共に進み行き、平原を見渡した。すると、山の木々が、気味の悪い茂みが、灰色の岩の上を覆っているのが突然彼の目に入った。その下には血の色をした荒れ狂う湖が横たわっていた。水辺の崖の上にアッシュヘレの頭を見つけた時、デネ族のすべての人々にとって——シュルディング族の家臣たち、多くの兵士、高貴な者たちそれぞれにとって——その苦痛はまことに耐え難いものであった。湖水は血で、熱い血潮で沸き返っていた。彼らはそれを眺めた。はやる戦の曲が時おり角笛によって奏でられた。歩兵は全員腰を降ろした。その時、いろんな種類の蛇、奇妙な海蛇のたぐいが湖面を泳いで渡るのが目撃された。水棲の獣が岬の斜面の上で体を横たえているのも見られた。これらの蛇や獣は、午前中湖面でしばしば災いをもたらすような行動をする。彼らは物音が、すなわち、戦の角笛が響き渡るのを聞くと、怒り

狂って湖底へと逃げ去った。イエーアト族の部将が放った強い矢はそのうちの一頭の心臓に当たり、命と泳ぐ力を奪った——死が海獣から命を奪い去ったため、湖の上を泳ぐ力は萎えた。この奇怪な波間の放浪者は直ちに波の上で鋭い鉤のついた猪狩り用の槍で強く突かれ、激しく攻撃され、岬へと引き上げられた。男たちは薄気味悪い見慣れないこの獣を眺めた。ベーオウルフは武器を身に付けた。彼は自分の命など全く気にかけず、手で巧みに編んで作られた立派な胴鎧を身につけて湖に挑むこととなった。この鎧は、敵の攻撃が、すなわち、怒れる者の魔手が、彼の心臓を傷つけて命を奪うことのないよう、体を防護することができた。さらに、寶石で飾られ、綺麗な金属板で取り巻かれた輝く兜は彼の頭を守り、湖底を荒らし、逆巻く波の下を訪れることになっていた。武器職人は、その昔、剣や戦の凶器が兜に食い込まないようにこの兜を鍛え、見事に飾り、猪の像を取り付けていた。さらに、フロースガールの側仕え（ウンフェルス）が万が一に備えてベーオウルフに貸与した剣も大いに役立つものであった。柄のついたこの剣はフルンティングという銘で呼ばれた。それは伝来の宝物の中で最高のものであり、刃は鋼で作られ、鉞が施され、戦の時の血潮で一層強固なものとなっていた。恐怖の戦へ、敵の戦場へ、あえて赴こうとする者はだれであれ、この剣を握れば戦場で失望させられることは決してなかった。この剣が活躍することになるのは今回が最初ではなかった。事実、力の強いエッジラーフの息子（ウンフェルス）はこの剣を自分より勇敢な剣の使い手（ベーオウルフ）に貸与したが、その時、彼はぶどう酒に酔った勢いで自分が口走ったことを覚えていなかった。ウンフェルス自身には命を賭けて逆巻く波の下へと潜り、武勇を発揮するだけの気概はなかった。それゆえ、彼は名声も武勇の誉れも失ってしまった。もう一人の勇者（ベーオウルフ）が合戦の身支度を整えた時は事情は全く違っていた。（一三九九—一四七二）

第二節 女怪との闘い（一四七三—一五五六）

エッジセーオウの息子ペーオウルフは語った。「へアルフデネの高名な御息、人々への黄金の付与者であられる賢明な殿、私はこれから合戦に臨みますが、さきほど互いに約束しましたことを思い出してください——殿の一大事で私が命を落とすことになれば、殿はいつでも私の父親代わりになってくださるということ。それゆえ、この度の合戦で私が死ねば、私の若い部下である親しい仲間たちの保護者になってください。それから、かけがえのないフロースガール殿、私が頂戴しました宝物はヒエラク王に送り届けてください。そうすれば、フレーゼルの御息であられるイエーアト族の王がその宝物を眺められた時、私が生前この上なく立派な王に、宝物の付与者に巡り合い、その御方の恩恵を受けていたということに気づかれるでしょう。それから、広く世に知られたウンフェルス殿には伝来の品、波型紋のついた刃の鋭い立派な私の剣を差しあげてください。私はフルンティングを用いて名誉を得るか、それとも死に運び去られるかのいずれかです。」（一四七三—一四九二）

ウェデル・イエーアト族の部将はこう言い残し、力強く足速に出かけた。この闘将は王の返答を待つことなく、波立つ湖へと入って行った。彼が湖底に達するまでかなり長い時間がかかった。水の流れる地域を五〇年間守り続けてきた獐猛で気味が悪く貪欲な獣は、一人の男が異国の生き物の住まいを上方から探りにきたことにすぐ気づいた。そこで、この怪物は腕を伸ばし、恐ろしい手でこの戦士を掴んだ。しかし、そんなことで彼の逞しい体をたやすく傷つけることはできなかった。鎖帷子が外側から戦士を守っていたため、女怪はその恐るべき指をもってしても、武具をつなぎ合わされた胴鎧を、突き破ることはできなかった。この湖の雌狼は湖底に達すると、鎖帷子を身につけた武將を自分の住まいへと運んでいった。そのため、彼は勇敢ではあったが、武器を振るうことができなかった。それどこ

ろか、無数の怪物が水中で彼を傷つけ、たくさんの水棲の獣が鋭い牙で鎖帷子を引き裂き、自分たちの敵を痛めつけようとした。その時、この戦士は自分がどこかの敵の根城にいること、そこでは水は全く障害とはならないこと、この根城には屋根があるため洪水に襲われる心配がないことに気づいた。彼は火の光が、眩しい光線が、輝いているのを見た。(一四九二―一五一七)

その時、勇者は湖底に雌狼が、すなわち、力の強い水棲の魔物がいることに気づいた。彼は剣で攻撃し、手加減はしなかった。そのため、鉞が施された剣は女怪の頭を激しく打ち、恐ろしい音が響いた。しかし、その時、侵入者(ベーオウルフ)は剣で相手を傷つけ、命を奪うことはできず、苦戦を強いられている自分には刃は役立たないことを思い知らされた。この剣はこれまで数多くの合戦に耐え、しばしば兜や死すべき運命にある者の武具を叩き割ったことがあったが、その瞬間、このすぐれた宝剣の栄光もついに失墜した。(一五一八―一五二八)

一方、ヒエラークの血族は決然としていて、力を緩めることなく、栄えある武勲を心掛けていた。そこで、怒った戦士は、宝石がちりばめられ、鉞が施された剣をほうり投げた。強い刃をもつ剣は地面の上に投げ出された。彼は自分の力を、すなわち、並外れた強い握力を頼みの綱としていた。戦う力によって永続的な名誉を得ようと望む者は、彼のように自分の力を信頼せねばならず、自分の命を気にしてはならない。戦勝の誉れ高いイエーアト族の部将はグレンデルの母親の肩を掴んだ。彼はこのような取っ組み合いを物ともしなかった。格闘に強い彼は怒りに任せて恐ろしい敵を投げ飛ばした。女怪は土間の上に倒れた。怪物は直ちに恐ろしい爪で反撃に転じ、彼に掴みかかった。最強の戦士である歩兵の頭^{かぶ}はひるんでつまずき、倒れ伏した。すると、女怪は巢窟への侵入者に馬乗りになり、幅が広く、さらさら光る刃がついた腰刀を引き抜いた。女怪は自分の一人息子^この仇を討とうとした。しかし、編み上げられた鎖

帷子は彼の肩を包んでいて、彼の命を守った。切っ先も貫通することはなかった。エッジセーオウの息子、イエー・アト族の闘将といえど、鎖帷子と強い胴鎧が助け船となり、聖なる神が勝利をもたらしてくださらなかったなら、広い湖底で死んでしまっていたらう。賢明な主であられる天上の支配者はベーオウルフが再び立ち上がった時、正しくも、しかも容易に、彼を助ける決心をなされた。(一五二九—一五五六)

第三節 ベーオウルフの帰還(一五五七—一六五〇)

その時、ベーオウルフは勝利の誉れ高い剣が、すなわち、巨人たちが鍛えて作った鋭い刃のついた伝来の剣である戦士の栄光の品が、武具の中にあるのを見つけた。それは武器の中では最高の質を誇るものであった——もつとも、巨人たちが鍛えた立派で見事な剣はベーオウルフ以外の人が戦場に携えて行くには大きすぎたが。そこで、このシュルディング族の勇者は環で飾られた柄つかを無我夢中で握りしめ、宝環のついた剣を引き抜き、命を捨てる覚悟で、怒りに任せて振り降ろした。すると、剣は女怪の首に強く食い込み、頸椎を砕いた。刃は瀕死の体を貫いた。女怪は土間の上に倒れ、剣は血にまみれた。勇者はこの手柄を喜んだ。(一五五七—一五六九)

巢窟の中に光が差し込み、明るくなった。それはまるで空のろうそくが天から明るく照らしているかのようであった。彼は巢窟を眺め渡し、壁に沿って進んだ。ヒューラクの家臣は怒りもあらわに丈夫な剣の柄を決然と握りしめ、高々と掲げた。刃はこの戦士にとって無用のものではなかった。彼はグレンデルの度重なる襲撃に対して早くその仕返しをしたかった。事実、グレンデルは一度ならず、再三にわたり、西のデネ族を襲い、フロースガールの家臣を就寝中に殺害し、眠っている一五名のデネ族の男を食らい、さらに恐ろしいことに、これと同じ数の人々を獲物として運び去っていた。しかし、勇猛な闘士はグレンデルにこの仕返しをした——ベーオウルフはグレンデルがヘオロッ

トでの合戦で深手を負い、戦に疲れ果て、寝床の上で死んでいるのを目撃した。グレンデルは死んでから（ベーオウルフに）打たれ、丈夫な剣で切りつけられたため、体が大きく裂け、さらに、首も刎^はねられた。（一五七〇—一五九二）

フロースガールと一緒に湖面を眺めていた用心深い勇者たちは、波立つ水が、湖面全体が、あつという間に血で染まるのを見た。白髪交りの老人たちはあの勇者（ベーオウルフ）には二度と会えないだろう、勝利の誉れ高い男も高名な王の元を再び訪れることはなからうと、勇者について語り合った。その時は、多くの人々は湖の雌狼がベーオウルフを殺害したと思った。そして、その日の第九時の刻^ハとなった。勇敢なシュルディング族の人々は岬を後にして立ち去った。彼らの気前のよい王もその場を離れ、家路についた。一方、この国の訪問者（であるイエーアト族の人々）は悲痛な思いで座りこみ、湖面を見つめていた。彼らは親しい隊長に会えることを願ったが、それは思いもよらぬことであった。さて、例の剣は、戦の刃は、合戦の場での流血の後、血を滴らせながら溶け始めた。時間と季節を支配する——それは真の神たるゆえンであるが——父なる神が霜の束縛から解放され、水の足枷を外される時のように、剣は驚くべきことにすっかり溶けてしまった。ウェデル・イエーアト族の部将は怪物のすみかの中にたくさんの宝物を見つけたが、女怪の首と宝石で美しく輝く剣の柄以外は持ち帰らなかった。刃に鉋を浮かせた剣はすでに溶け、燃え尽きていた。怪物の血はそれほどまでに熱く、巢窟の中で死んだ異国の悪霊にはそれほど毒気があったのだ。合戦の場で敵が倒れ伏すのを目撃した勇者は、直ちに泳ぎ始め、湖面まで泳いで昇った。異国の悪霊が命ある日々とはかないこの世を放棄した時、逆巻く波と広大な地域はすっかり清められた。（一五九二—一六二二）

さて、水夫たちの勇敢な守り手は岸まで泳ぎついた。彼は自分が持ち帰った湖での戦利品、大きな荷物に満足した。

すると、彼の有能な部下たちは駆けつけ、無事に再会できたことに對して神に感謝し、隊長を喜んで迎えた。彼らは急いで勇者から兜と鎖帷子を外した。湖は、殺戮の血で汚れた水は、空の下で静まり返っていた。彼らは心も軽やかに踏みならされた道に沿ってその場から離れ、大地の上の道を、人々によく知られた大通りを、駆け抜けていった。彼らはいずれ劣らぬ勇敢な男ではあったが、やっとの思いで水際の崖からグレンデルの頭を持ち帰った。勇猛な兵士のうちの四名は、グレンデルの首を槍の柄につるし、苦勞して黄金の館まで運ばねばならなかった。ほどなくして、勇敢で行動力に富む一四名のイエーアト族の人々は宮殿に着いた。兵士たちの頭、^{かしこ}大勢の人々の中で勇氣ある者は、部下と共に酒宴の館に通じる草地の上を踏みしめるようにして進んだ。そして、戦士たちの指揮者、行動の勇敢な男、戦において大胆な勇者は、栄光に包まれ、フロースガールに謁見するために館の中へ入った。ついで、グレンデルの首は、すなわち、恐ろしい驚くべき見せ物は、髪を掴まれて人々が酒を飲んでゐる広間の中へと、高貴な人々の面前へと、その場に居合わせた王妃の目の前へと運ばれた。人々はその首を眺めた。(一六三—一六五〇)

第二四節 ベーオウルフの手柄話、フロースガール王の訓話(一六五—一七四)

エッジセーオウの息子ベーオウルフは語った。「シュルディング族の長であられるヘアルフデネの御子息殿、御覽のとおり、私たちは湖での勝利の品を栄光のしるしとして喜び勇んで殿の元へ運んでまいりました。私は命をかけて湖底での合戦に挑み、苦心したあげく、辛くも難局を切り抜けました。神の御加護がなかったなら、戦は瞬く間に終わっていたことでしょう。フルンテイングは丈夫ではありませんでしたが、この度の合戦ではこの武器は全く使い物にはなりませんでした。しかし、人類の支配者であられる神のおかげで——神は味方を失った者に対してこれまでしばしば救いの手を差し伸べてくれました——私は美しい巨大な古刀が壁に掛けられているのを見つけ、この武器を引

き抜きました。そして、好機を見計らい、巢窟の守り手を戦の場で倒しました。すると、この戦の刃は、鉞を施された剣は、これまで戦で流された血の中で最も熱い血が吹き出したとたん、燃え上がりました。そこで、私は敵の元から柄^{つか}だけ運び去ったのです。こうして、デネ族の人々を殺害した憎むべき罪は当然のことながら報いを受けました。それゆえ、殿にお約束いたしましたよう、殿はこれからは心配事から解放され、家臣の一団に囲まれてヘオロットで眠ることができ、この国の家臣は、老いも若きも、すべて安眠できるようになると。シュルディング族の王よ、これまでのようにグレンデルとその母親が家臣を襲撃するのではと恐れる理由はありません。」そして、巨人たちの手になる遠い昔の細工物、金色に輝く剣の柄は、白髪まじりの戦士に、老將軍の手に任せられた。こうして、柄は、驚くべき技を身につけた刀鍛冶たちの細工物は、魔物たちの死後デネ族の王の手に落ちた。その時、この王に敵意を抱く者、殺人の罪を負った神の敵とその母は、すでにこの世を去っていた。この柄は、海に囲まれたシェデンイーイ^(A)において宝物を分け与えてきたこの世の最高の王が所有することとなった。(一六五—一六八六)

フロースガールは太古の昔から伝わる柄を眺めながら語った——その柄の上には、洪水が、すなわち、押し寄せる激しい潮流が、巨人の一族を殺し、大いに苦しめた昔の受難の始まりについて刻まれていた。その一族は永遠の主にとって疎遠な存在であった。それゆえ、神は激しい水の流れによって彼らに最後の審判を下されたのである。美しい黄金の柄の頭の上には、蛇の装飾を施した最高の剣が当初だれのために作られたかについて、ルーン文字によって克明に刻み込まれ、記されていた。ヘアルフデネの息子の賢王は語った——一同は静まり返った。「老いたとはいえ、私は王としてこの国の人々と共に真理と正義を実行し、遠い昔のことをすべて覚えていますが、この勇者はだれよりもすぐれた者としてこの世に生まれてきたと言える。私の大切な家臣ベーオウルフ殿、あなたの名声は各地に、す

べての国民に達している。あなたは力と分別をしつかりと身につけておられる。先日二人で言い交わした約束をこれから果たさねばならない。あなたはこれから末長く国民の励みとなり、兵士たちの頼みの綱となられるに違いない。エッジウェアの^(八)末裔である誉れ高いシュルディング族のヘレモードの場合はあなたとは事情が違っていた。彼は成長してデネ族の人々の喜びとなるどころか、迫害者、殺害者となってしまった。悪名高いこの王は、人としての喜びを奪われて一人で他界するまで、腹を立てると仲間や無二の親友までも切り殺した。強力な神は彼の素晴らしい力、すなわち、その腕力を見込んで彼の栄達を計られ、すべての人々に勝る地位につけられた。ところが、彼の心の中には残忍さが芽生えてきた。デネ族の人々に金品を贈って（気前のよい王という）榮譽を得ようとはせず、何の楽しみもなく暮らし、その結果、彼はみずからの暴挙の代償を、すなわち、（地獄での）永遠の苦しみを受けることとなった。ベーオウルフ殿、このことを肝に銘じ、善行を積んでください。私は齢を重ねて分別もついてきたので、あなたのためを思つてこのような話をしたわけです。強力な神が高邁な精神に基づき、人類に知恵と住まいと勇氣をどのように与えてくださるのかを語るのは素晴らしいことだ。神は万物の支配權を持つておられる。神は時おり高名な部族の一人の男の心を意のままに操り、祖国にいるその男にこの世の樂しみを与え、人々が住む都を統治させ、この世の広大な一部の地域を支配させ、愚かにも自分には終わりはこないと思わせる。男は何一つ不自由なく暮らす。病氣も老いも妨げとはならず、悲しみが心を暗くすることはなく、不和がどこかで争いとなって現れることはなく、この世はすべてこの男の意向に従う。男は傲慢さが自分の心の心でかなり増大してくるまで、事態が悪化してきていることに気付かない。」（一六八七—一七四一a）

第二五節 フロースガールの訓話の続き、ベーオウルフの帰国の準備（一七四一b—一八一六）

「警護者である魂の番人はその時は眠っている。苦しみにしつかりと捕らわれた眠りはとても深い。魂の殺害者はすぐ近くにきていて、悪意を込めて弓から矢を射る。すると、男は、呪われた魂の邪悪な教唆によって、鋭い矢で胴鎧の下に心臓を射抜かれる。男は身を守る術^{すべ}を知らない。長い間所有してきたものが自分には少なすぎると思えてくる。苛立った男はますます貪欲となり、金で裝飾された宝環を誇らしげに分け与えることなく、来世のことを忘れ、栄光の支配者であられる神がかつて与えてくださった栄誉を軽蔑する。そして、滅ぶべき運命にあるはかない男の体は、ついには朽ち果ててしまう。そして、宝物を、すなわち、父祖伝来の英雄の宝を、惜し気もなく何ら執着心を抱かず分配する別な人物が、男の遺産を受け継ぐことになる。親愛なるベーオウルフ殿、最も勇敢な戦士よ、あなたがこのような邪心によって身を持ち崩すことのないように。あなたにとって良い道を、永遠の恩寵を選ばれよ。高名な闘将よ、決して傲慢にならないようにと私は願っている。あなたの力に對する名声もほんの一時のものにすぎない。遅かれ早かれ、病氣、刃、火の襲来、激しい洪水、剣による攻撃、投げ槍の飛来、恐ろしい老いが、あなたから力を奪い、目の輝きは衰えて暗くなる。高貴な戦士よ、あなたが死に襲われるのも時間の問題である。」（一七四一b—一七六八）

「私はこれまで五〇年間、空の下で宝環のデネ族を統治し、この世の至る所で多くの部族との戦から、槍と刃から、人々を守ってきた。そのため、私には広大な空の下にいかなる敵もいないと思えた。それだけに、旧敵グレンデルが館に侵入した時、わが国には転機が、すなわち、歓楽の後に苦しみが訪れた。奴がもたらす災禍は、たえず私の心の重荷となった。長い戦いの後、私は生きている間にこの目で奴の血まみれの首を眺めることができた。それゆえ、永

325
遠の神であられる創造主には感謝あるのみである。戦の誉れ高い者よ、さあ席に着いて祝宴を楽しんでください。翌

朝になれば山のような宝物を贈るつもりです。」(一七六九—一七八四)

イエーアト族の男は心から喜び、王の指示に従って直ちにその場を離れ、席へと向かった。広間に居並ぶ勇者たちにはこれまでと同様に見事な祝宴の席が新たに準備されていた。——それから、高貴な兵士たちの上に暗い夜のとばりが降りた。兵士は全員立ち上がった。シュルディング族の白髪交じりの老王は寢床につきたいと思った。盾を携えたイエーアト族の勇敢な戦士ベーオウルフも休息したい気持ちに駆られた。そこで、執事は冒険に疲れた遠来の客を広間の外へと導いた。この執事は、水兵たちがその日欲しいと思う必需品をすべて手際よくまかなった。(一七八五—一七九八)

強い心の持ち主はそれから体を休めた。黄金で飾られた高い館はそびえていた。快活な黒い渡り鴉が天の喜びを告げるまで、遠来の訪問客は部屋の中で眠った。そして、明るい光が暗がりの上に被さるようになってきた。兵士たちは急いだ。高貴な者たちは国へ戻る準備をした。勇敢な来訪者はそこから遠くにある船へと行くことを望んだ。(一七九九—一八〇六)

エッジラーフの勇敢な息子はフルンティングを持ってこさせ、この刀を、大切な鉄剣を受けとるよう(ウンフェルスに)言った。ベーオウルフはこの剣を借りたことに対して礼を述べ、この剣は丈夫で、戦に強いと思われると付け加えた。彼はこの剣の刃を言葉に出しておとし貶めることはしなかった。彼は実に立派な男であった。——さて、兵士たちは出発の準備を整え、武器に身を固めた。デネ族の人々が敬愛する勇者は、戦で勇敢な兵士は、もう一人の勇士フロースガールのいる高い玉座へ行き、別れの挨拶をした。(一八〇七—一八一六)

第二六節 ベーオウルフの別れの挨拶（一八一七—一八八七）

エッジセーオウの息子ベーオウルフは語った。「遠来の船乗りたちはヒェラークの元へ戻ることを心待ちにしています。私たちはこの国で心から歓待されました。殿は十分なもてなしをしてくださいました。それゆえ、これまでの殿の御好意に優るものが多少なりともこの世で得られるのでしたら、人々の統率者であられる殿のために直ちに勇敢に戦います。怪物たちがかつて殿を苦しめた時のように、もしも近隣の人々が恐ろしい行為によって殿を悩ませているということを広い海のかなたで聞き及びましたら、勇敢な数千の兵士を援軍としてお送りしましょう。イエーアト族の王であり国の守り手であられるヒェラーク王は、歳は若いものの、言葉と行為によって私の後押しをしてくださるでしょう。そうなれば、殿の兵が足りなくとも、私は殿の徳を十分に称え、殿の元へ助っ人として、援軍として、槍を携えて行けます。さらに、フリースリーチ王子がイエーアト族の宮廷を訪問なされば、そこには味方がたくさんいることに気づかれるでしょう。有能な人にとって、遠い国々は訪れる価値は大きいと思われます。」（一八一七—一八三九）

フロースガールはベーオウルフに答えて言った。「あなたのその言葉は、賢明な神があなたの心に送り込まれたものに違いない。私はあなたのように若い人がこれほど思慮に富む話をするのをこれまで聞いたことがない。あなたが力が強いだけでなく、気概は高く、言葉は分別に富んでいる。フレーゼル殿の御息が、あなたの主君である国の守護者が、槍や激しい戦によって命を奪われ、病氣や剣によって倒されたとしても、あなたが無事ならば、そして、あなたが血族の人々の王国を守りたいと望まれるなら、海のイエーアト族はあなたよりすぐれた人物を兵士たちの宝の守護者として、また、王として、選ぶことはないであろう。私はそう思う。親愛なるベーオウルフ殿、時間がたてば

たつほど、あなたの気概は私を一層喜ばせてくれる。イエーアト族と檜のデネ族の人々はこれまで互いに争いと憎悪に苦しんできたが、これからは平和を共有し、戦も憎しみもなくなることであらう。これもあなたのおかげだ。私が広い王国を支配している間は、宝物のやりとりがなされることであらう。たくさんの人々が贈り物を携えて海鳥の水浴場ハセのかなたの他国を訪れ、舳先が宝環で飾られた船が贈り物と友好のしるしを海の向こうへと運ぶことであらう。これらの国の人々は、敵味方の区別なく、節度を守り、これまでのしきたりに従い、万事がそつ無く執り行われるであらうと私は思う。」(一八四〇—一八六五)

このように語った後、兵士たちの守護者であるヘアルフデネの息子は館の中でさらに一二個の贈り物をベーオウルフに与えた。そして、王はベーオウルフにこれらの贈答品を携えてなつかしい国へと直ちに無事に戻るよう勧めた。血統の立派なシュルディング族の王は、それから最も勇敢な武人に口付けをし、首に手を回して抱きしめた。白髪老王から涙が流れ落ちた。老いて経験豊かな王は二つの事を予測していた。とりわけ、そのうちの一つは、勇敢な二人が再会する見込みはないであらうという推測であつた。王はこの勇者をとて敬愛していたので、熱い思いを押さえることができなかった。この勇敢な男に対する秘かな思ひは、強い糸でしつかりと王の胸の中に結びつけられていて、血の中で燃えた。そして、戦士ベーオウルフは贈られた黄金を誇りに思い、宝物に喜びながらその場を去り、草原を横切つて行つた。錨を降ろしていた船は船主を待っていた。帰路の途中、フロースガールからの贈り物に対して何度も称賛の声が上がつた。フロースガールは、多くの人々をししば痛めつけた老いが誇るべき力を奪い去るまで、すべての点で非の打ち所のない立派な王であつた。(一八六六—一八八七)

第二七節 帰国の旅、ヒエラーク王の居城へ到着、ヒュイドの挿話（一八八八—一九六二）

きわめて勇敢で若い兵士の一行は、波打ち際までやってくると、鎖帷子を、すなわち、編み上げられた胴鎧を身につけた。沿岸警備兵は、英雄たちがここに到着した時と同じなりをして帰路につこうとしているのに気づいた。彼は突き出た崖から軽蔑の目で会釈したのではなく、訪問客の所まで馬で駆けつけ、輝く武具を身につけた賓客のウェデル族の兵士に対して船まで進み行くよう促した。それから、波打ち際の大きな船に武具が積み込まれた。船先が環状になった帆船には馬と宝物が運び込まれた。帆船はフロースガール王から贈られた宝物の上で高くそびえた。ペーオウルフは船の見張り役に黄金の飾りのついた剣を贈った。先祖伝来のその宝物のおかげで、彼はその後宴席でこれまで以上の名譽を与えられることとなった。さて、船はデネ族の人々の国から離れ、深い海をかき分けながら進んだ。

その時、海の布ともいふべき帆は綱でしっかりと帆柱に固定されていた。海の木はきしんだ。風は波の上の船の進行を防ぐことはなかった。船は進んだ。泡にまみれ、曲がった船先をした船は波の上を、激しい潮の流れの上を、前進した。そして、船員たちはイエート族の人々の国の崖となつかしい岬を眺められる所までやってきた。船は風に急かされて突進し、陸に乗り上げた。これまで長い間岸边で親しい人々を遠くから待ち焦がれていた港の見張り役は、喜びにあふれた木の船が強い波によって運び去られることがないように、錨綱いかりづなで船をしっかりと岸に固定した。次に、彼は高貴な人々の宝物、飾りのついた武具、金の延べ板を陸に運び上げるよう命じた。宝物の付与者であるフレールの息子ヒエラークは、その場から遠く離れていない海岸の近くの居城で家臣と共に住んでいた。（一八八八—一九二四）

宮殿は立派で、国王は名高く、広間の中の高い席にいた。ヘレスの娘ヒュイド（八五）はとても若くて賢く、この城で過ご

321
した年月はわずかであったが、すでにその名声は高かった。彼女はイエーアト族の人々への宝石などの贈り物は惜し

まず、洩ることは決してなかった。——一方、国の高貴な女王モードスリーゾは^(八七)かつて恐ろしい残忍な行為を胸に

秘めていたことがあった。そのため、彼女の夫となるべき王を除いて、家臣の中の勇敢な者もだれ一人、あえて公然と彼女と目を合わせようとはしなかった。目が合えば、手で編み上げられた死の綱が自分に用意されることを覚悟せねばならなかった。すなわち、逮捕されるとすぐ、剣によって決着がつけられた——鈍を浮かせた剣が引き抜かれ、

死が告げられることとなった。彼女は絶対的な存在ではあったが、幸せをもたらすべき者が侮辱されたと思ひ込み、

大切な家臣の命を奪うというのは、決して女王にふさわしい行為ではなかった。しかし、ヘミングの血族^(八八)（のオッフア）

は彼女を諫めた。酒盛をしていた者たちの話によると、彼女は父親の命令に従い、淡黄色の海のかなたへと旅をし、

オッフアの館を訪れ、この若い闘将の後となつてからは、黄金に飾られた血統のよい彼女は人々を迫害したり、敵意

をあらわにすることは全くなかった。それで降、気前の良さで評判の彼女は玉座にあり、運命によって定められた

人生を正しく歩み、私の知る限り、二つの海の間では最高の人物である兵士たちの統率者（オッフア）に深い愛情を

示した。それというのも、オッフアは槍の名手であり、贈り物と戦の力によって広く名を馳せ、国を立派に治めてい

たからである。その後、戦に強いエーオメール^(八九)が、兵士たちの力となるべく、ガールムンドの孫^(九〇)として生まれた。

（一九二五—一九六二）

第二八節 歓迎の宴、遠征の報告、フレアアフル姫の挿話（一九六三—二〇三八）

さて、勇士バーオウルフは従者の一行と共に海岸に沿って進み、浜辺を、広い岸辺を、横切って行った。この世のろうそく、すなわち、太陽は、南からさっと昇り、輝いた。一行は、兵士たちの守護者が、すなわち、オンイエンセー

(九)
 オウを倒した男として知られる若くて勇敢な王が、城の中で鎖帷子を分け与える場所として知られている所まで、早足で歩き続けた。ベーオウルフの帰還は、すなわち、兵士たちの守り手が、盾を携えた同士が、戦から無事に生き残り、大通りを行進し、城に向かっていくとの知らせは、直ちにヒューラクの元に寄せられた。権勢を誇る王が命じたとおり、歩兵たちのために広間の内部が急いで整えられた。(一九六三—一九七六)

戦から生き延びた者が快い言葉で親しい主君と儀礼的な挨拶を交わした後、両者は直ちに向かい合って、すなわち、血族の者同士が互いに相対して座った。ヘレスの娘(ヒュイド)は蜂蜜酒の杯を持って広間を回り、人々を歓待し、兵士たちの手元へ酒器を運んだ。ヒューラクは海のイェーアト族の旅がどんなものであったかという好奇心に駆られ、高い館の中で陽気に部下に尋ねた。「ベーオウルフよ、おまえは突然塩の海を越えて遠征し、ヘオロットでの戦に挑む決心をしたが、その旅はどうであったか？世に知れ渡ったあの災難のことで、名高いフロースガール王のために多少なりとも力になってくれたか？そのことでわしは心配になり、悲しみに沈んでいたのだ。わしは大切な家臣の旅を信頼していなかった。おまえがあの殺戮の悪霊に一步も近づくことがないよう、南デネ族の人々が自分たちの力でグレンデルとの争いに決着をつけるよう、わしは長い間祈っていた。おまえに無事再会できたことに対して、わしは神に感謝の気持ちを伝えたい。」(一九七七—一九九八)

エッジセーオウの息子ベーオウルフは語った。「殿、グレンデルが勝利の誉れ高いシュルディング族の人々に対して常々大きな悲しみと苦しみをもたらしていた場所で、私とグレンデルがどう戦ったか、この大乱闘の一部始終は多くの人々に知れ渡っています。私は仇を討ちました。それゆえ、罪に捕らわれ、厭わしい種族に囲まれて最も長生きするグレンデルの血族でさえ、明け方の大騒動をこの世で自慢するいわれはありません。私はまずフロースガール王

にお目にかかるために宝環の館へ駆けつけました。ヘアルフデネの名高い御子息は、私の心の内を知ると、直ちに王子のそばに席を用意してくださいました。その場の人々は大喜びでした。私はこれまで広間に集う人々が天の覆いの下でこれほど陽気に蜂蜜酒を楽しむのを見たことはありません。国民に幸せをもたらす高名な女王は、時おり広間をくまなく歩いて回られ、若者たちを激励しておられました。后は席に着かれる前に人々に宝環を分け与えておられました。フロースガール王の娘御は、時々練達の兵士たちの前や高貴な人々の元へくまなく酒器を運んでいかれました。姫君がその広間で飾りの鉾がついた酒器を兵士たちに渡される時、私はその場に居合わせた人々がこの姫をフレーアワルと呼んでいるのを耳にしました。黄金の飾りをつけた若いこの姫君は、フローダ^(九三)の心優しい御子息と婚約しておられました。シュルディング族の統治者、王国の守護者は、この婚約は有利だと判断なされたようです。王はまた姫君のおかげで恐ろしい不和や争いを鎮められれば得策であると考えておられます。もっとも、花嫁の存在がいかに効果的であろうと、王が崩御なされると、どの国であれ、恐ろしい槍がじっとしているのはほんの束の間です。」(一九九
九一〇三二)

「ヘアゾベアルド族^(九四)の王が后と共に広間に入ってこられた時、デネ族の高位の人々が盛大に歓待されているのを見ると、王や国のすべての家臣にとってそれは不快なものとなります。なぜなら、ヘアゾベアルド族の先祖伝来の宝は、環状の飾りのついた丈夫な剣は、デネ族が武器を揮^{ふる}える間は彼らのそばで輝くことでしょうから。」(二〇三二—二〇三八)

第二九節 フレーアワル姫の挿話の続き、グレンデルとの格闘談 (二〇三九—二〇九二)

「もっとも、彼もいずれは盾がぶつかり合う場で大切な家臣と自分たちの命を破滅させることでしょうが。さて、

宝剣を見て、槍で死んだ兵士全員のことを思い出した老いた槍兵は、宴席で口を開きます。彼の心は荒んでいます。彼は深い悲しみに沈みながら、若い兵士の心を試し、戦へと駆り立てようとし始めます。そして、次のように唆します。『味方の者よ、あなたの父上が兜を被り、戦場へと携えて行って最後を遂げられた刀、あのすぐれた鉄剣はどれだか分かりますか？その戦場でデネ族の者たちは父上を殺害したのですよ。そして、シュルドの勇敢な末裔たちは、兵士たちが死に、ウィゼルユルドが倒れた後、戦場を占拠しました。その殺戮者の一人である若者は宝剣に喜び、この広間へと入ってきて、殺害を自慢しています。しかも、あなたが当然所有すべき貴重な宝を身につけて。』このように、彼は悲しげな口調で何度も唆し、昔の事を思い出させようとするのです。そして、この若者は後の父親の行為ゆえに命を失い、剣で切られ、血まみれの状態で永遠の眠りにつきます。もう一人の（若い兵士）はその国の様子をよく知っているため、その場から無事逃れます。こうして、高貴な人々の誓いは双方で破られます。そうになると、インィエルドに対する敵意は激しく沸き上がり、その無念さゆえに妻に対する愛情も冷えていきます。それゆえ、私にはヘアゾベアルド族の好意、全面的な同盟、および友情は、デネ族に対して誠意ある確固たるものとは思われません。

——さて、それでは、（私とグレンデルという）敵同士の取っ組み合いがその後どうなったか、宝物の付与者であられる殿に詳しくお話しいたしましょう。天の宝石が大地の上を滑るように通り過ぎ、私たちが広間でゆったりと体を休めていた時、恐ろしい闇の悪魔は怒りもあらわに私たちを襲ってきました。そして、命運が尽きたホンドシオーホ^{（九七）}にとって致命的な戦い、すなわち、壮絶な死が訪れました。剣を腰に帯びたこの兵士は真っ先に狙われました。グレンデルは名高いこの若い家臣を食^{（九八）}るように食らい、大切な若者の体をすっかり飲み込んでしまいました。しかし、悪事に心を奪われ、齒が血まみれとなった殺人鬼は、手ぶらで黄金の館を去るつもりは全くなく、力の強い奴は私の

様子を窺い、身構え、そして私を掴みました。奴は紐でしっかりと閉じられた、大きくて風変わりな袋を下げていました。それは魔物の技と龍の皮によって実に巧妙に作られていました。大胆不敵な奴は大勢の兵士の中から罪のない私を一人選び、袋の中にほうり込もうとしました。しかし、私が怒って立ち上がったため、それは叶いませんでした。」

(二〇三九—二〇九二)

第三〇節 格闘談の続き、フロースガールから褒美の下賜 (二〇九三—二一四三)

「奴の悪業の一つずつに対して私が国民の敵にどのように報いたかお話ししたいのですが、長すぎてそれはできません。私は自分の手柄によって殿の国の名誉を高めました。奴は逃亡しましたが、余命を味わえたのはほんのわずかな間だけです。奴は右腕をヘオロットに残し、不名誉なことに意気消沈してその場から湖底へと潜ってしまいました。翌朝、私たち一行が宴席に着くと、シュルディング族の支配者は命をかけた合戦に対して金の打出し細工やたくさんのお宝によって十分な報いをしてくださいました。広間には歌声や陽気な話し声が響いていました。シュルディング族の古老は豊富な知識を身につけていて、遠い昔の話をしてくれました。戦に強い人が歓楽の木と呼ばれる豎琴を奏しように弾いたり、苦痛に満ちた実際の話を吟唱したり、気概高邁な王が儀式に則り、驚くべき話をしてくださりました。高齢のために体の自由がきかなくなった白髪の兵士が若い頃のことや戦う力について嘆いていたこともありましたが。この老人はいろんなことを思い出し、胸の中に熱いものが込み上げてきたようでした。このようにして、人々に次の夜が訪れるまで、私たちは館の中で終日楽しく過ごしました。その頃、グレンデルの母親は急いで（息子の）傷の仇を討つ準備をし、悲痛な思いで出かけました。その時すでにウェデル族の憎しみともいふべき死が息子に奪い去っていました。この無気味な女怪は力づくで兵士を一人殺害し、息子の恨みを晴らしました。賢明な老顧問官

アッシュヘレは、その時、命を落としたのです。女怪が遺体を抱えて滝壺へと運んだため、翌朝になっても、デネ族の人々は亡くなった敬愛すべき男を火で燃やすことはおろか、火葬用の薪の上に乗せることすらできませんでした。このことは、国の長であられるフロースガール王にとって、これまで長い間に降りかかった苦しみの中で最も大きなものとなりました。王は悲痛な面持ちで、御自身の命にかけて、私が波の荒い湖の中で武勇を發揮し、命がけて名譽ある手柄を立てるよう懇願されました。王は私に褒美を約束してくださいました。それから、私は広くその名を知られている恐ろしく狂暴な湖底の守り手を見つけました。我々二人はその場でしばらく取っ組み合いをしたため、湖は血で沸き返りました。私は巨大な剣を振るい、湖底の洞の中でグレンデルの母の首を刎ね、やっとの思いでその場から逃れました。その時は私にはまだ死ぬべき運命がきていませんでした。兵士たちの守護者、ヘアルフデネの御子息は、私に改めてたくさんの宝物を贈ってくださいました。」(二〇九三―二一四三)

第三一節 ヒエラーク王と王妃への宝物の献上、ベールオウルフへの剣と領地と館の下賜、王と王子の戦死後ベールオウルフ王位につく、火を吐く龍が国土を荒らす(二一四四―二二二〇)

「このように、国民の王フロースガールは立派な習慣を守っておられ、それで私は報酬を、すなわち、手柄に対する褒美をもらい損なうどころか、ヘアルフデネの御子息は私が望む限りの宝物をくださいました。これからその宝を殿の元へ運んできて、喜んでお贈りいたします。私のすべての喜びはいつでも殿の手から得ております。ヒエラーク王以外に私には血縁は一人もおりません。」(二一四四―二二五一)

ベールオウルフは部下に命じて猪の頭を象った軍旗、戦で頭上に輝く兜、灰色の鎧、壮麗な軍刀を運んでこさせてから、次のように語った。「この武具は私が賢王フロースガールからいただいたものです。王はまずその由来について

殿に語るよう私に指示されました。王の話によりますと、それはシュルディング族の長であるヘオロガル王が長い間所有されていたものだそうです。また、王は御子息のヘオロウェアルドは勇敢で自分に忠実ではあるが、この胴鎧は御子息には譲りたくないとおっしゃいました。それゆえ、いずれも大切にお使いくださるようお願いいたします。」私が聞いた話では、飾りのついた武器の次に、よく似た鹿毛の駿馬が四頭贈られた——ベーオウルフはこれらの馬と宝物を贈り物として王に差し出した。血族たる者はこのようであればならず、他人に対しても秘かに策を弄して悪辣な罠を張り巡らしたり、身近な仲間^{（九八）}に死を準備したりすべきではない。戦に強いヒエラークに対して甥のベーオウルフはとても忠実であり、二人は互いに相手の為を思っていた。私の聞いたところによると、ベーオウルフは王侯の娘ウェアルフセーオウから贈られた首飾り、燦然と輝く宝石を、装飾を施された鞍のついた細身の馬三頭と共にヒュイドに進呈した。後は首飾りを受け取ると、それで自分の胸を飾った。（二五一一二七六）

エッジセーオウの息子、すなわち、戦で名高く行動が立派な男は、このように武勇を発揮し、栄光を追いつ求めた。彼は酒に酔った腹心の部下を殴るなどということは断じてなく、心が冷淡になるということもなかった。戦において勇敢な彼は神から与えられた豊かな才能を、人類の中では最も強い力を、身につけていた。もっとも、イエーアト族の子らはかつては彼を強いと思わず、ウェデル族の王も彼を酒宴の席にふさわしい人物だとみなさなかったため、彼は長い間軽んじられていた。人は彼を鈍くて弱々しい男だと強く信じていた。しかし、この高名な男にはこれらすべての侮辱に対する転機が訪れた。（二七七一二八九）

さて、兵士たちの守護者、戦の誉れ高いヒエラークは、部下に命じて黄金で飾られたフレーゼルの遺品を運び込ませた。その当時、イエーアト族の間では質においてこれに優る宝剣はなかった。王はそれをベーオウルフの膝の上

に置き、さらに七千（ハイドの土地^(九九)）と領主の座を与えた。このように、この国で土地が、すなわち、先祖伝来の領地と権利が、二人に受け継がれたが、とりわけ、広い王国は位の高いヒエラークによって継承された。（二一九〇—二一九九）

その後、年月を経てから起こった戦乱の最中に、ヒエラークが倒れ、さらに、ヘアルドリードも剣で斬られて盾の下に倒れた。ヘレリーチの甥^(一〇〇)ヘアルドリードは勇敢なヘアゾ・シュルフィング族の兵士たちによって勝利の誉れ高い国の中にいるのを発見され、激しい攻撃をうけた。そこで、広い王国はベオウルフの手に委ねられることとなった。彼は五〇年間よく国を治め、名君ではあったが、国の守り手としてはすでにかなり老いていた。その頃、一頭の龍が高台の荒れ野で宝物と石を積み上げた塚を見張り、暗い夜になるとわが物顔に振る舞っていた。塚の下には一本の道がついていたが、それは人々には知られていないものであった。異教徒たちの宝の近くを通りがかった一人の男が、塚の中に入り込み、酒杯を、すなわち、大きくて光り輝く宝を、手で掴んだ。龍は眠っていたため盗人の技にしてやられたが、この行為を見逃してはおかなかった。国の住民も、近隣の国の勇士たちも、龍が怒っていることに気づいた。（二二〇〇—二二二〇）

第三節 龍の宝の由来、龍の復讐の開始（二二二一—二二三一）

龍をひどく怒らせた男は、自分の力で、自ら進んで、龍の蔵に押し入ったのではなく、ある勇士の息子の奴隷であったこの男が、止むに止まらず恐ろしい（主人の）鞭から逃れ、住む所がないために、罪の意識に捕らわれながら蔵に忍び込んだのである。この侵入者は、たちまち^(一〇一)自分の身に恐ろしいことが振りかかったことに気づいた。そして、惨めなことに、^(一〇二)それから、男は突然不幸に見舞われた^(一〇三)——その昔、ある人物が慎重な配慮から高貴な一族の莫

大な財宝を、高価な宝石類を、地下室に隠したため、このような古の宝石がその場にはたくさんあった。その宝も、持ち主が死ぬと、手元から運び去られ、今度は、最も長生きしたその国の兵士の一人が同胞の死を嘆きつつ国を守った。しかし、この男も同じ運命をたどり、遠い昔の宝物を所有できたのはほんのわずかな間だけであった。岬のそばの波打ち際の平原の上に、厳封された新しい塚が築かれた。宝環の守り手は高貴な人の宝物を、すなわち、埋葬するにふさわしい莫大な金の打ち出し細工を、塚の中に運び入れ、言葉少なに次のように言った。「大地よ、勇者も守れなかった高貴な人々の財産をお預かりください。勇者もこの宝物をかつて大地から手に入れました。私の主君は戦死という恐ろしい災いによって次々と奪い去られ、この世での命を捨て、館での宴も見納めとなりました。私には剣を携える人も、金の打ち出し細工が施された盃、見事な酒器を磨く人もいません。頼りになる勇士は他界されました。黄金で飾られた丈夫な兜も（だれかに）飾り物を奪い去られるに違いありません。兜を磨くべき人々は死の眠りについています。戦場で盾がぶつかり合う最中に剣の食い込みに耐えた胴鎧も、勇者の亡き後は同じように朽ち果ててしまします。鎖帷子も、鬪将の死後は勇者たちのそばについて遠征することはできなくなります。豎琴を聞く喜び、歓楽の木の樂しみはなくなり、立派な鷹は館の上を飛ぶことはなく、駿馬は城の庭を駆け回することはありません。苛酷な死は何世代にもわたってたくさんの人々をあの世へと送り出してきました。」このように、他のすべての人々の死後、たった一人で残された男は悲しみにあふれて嘆き、夜も昼も喜びを奪われてさまよい歩き、そして、ついに死が洪水のようにどっと押し寄せ、心臓を捕まえてしまします。——さて、老いた夜の破壊者は蔵が開いたままになっているのに気づいた。肌がつるつるした龍は、夜になると、火を吐きながら塚にやってきて、火に包まれて飛び回った。地上の住人たちはこの龍をひどく恐れた。龍は齡を重ねつつ、異教の黄金が収められている地下の宝物庫に行くのが

習慣になっていた。しかし、だからといって、龍には何の利益にもならなかった。(二三二—二二七七)

国の敵は一人の男が気嫌を損ねるまで、このようにして三百年間地中の大きな蔵を守ってきた。男は金の打出し装飾のついた酒器を主人の元へ持ち帰り、許しを請うた。蔵が荒らされ、宝物が一つ紛失した経緯はこのとおりである。惨めな男の願い出は聞き入れられた。男の主人は生まれて初めて人類の遠い昔の遺産を眺めた。しかし、龍が目覚めると、新たな争いが生まれた。恐れを知らない龍は匂いを嗅ぎながら岩伝いに進み、敵の足跡を見つけた。——男はこっそりと(洞に忍び入ったが、)龍の頭に近寄りすぎた。神の恩寵によってまだ死に至らない運命にある者は、この男のように災難と破滅を容易に逃れることができる。——宝物庫の守り手は眠っている間にひどい仕打ちをした男を探し出そうと必死に地面を嗅ぎ回った。怒り狂った熱い龍は塚の外を何度もなくまなく歩き回った。荒れ野には人は一人もいなかったが、龍は一騒動できることを喜んだ。龍は何度も塚に戻り、貴重な器を探してみたが、金の宝はやはりだれかが持ち出してしまっていた。蔵の見張り番は夕刻になるまでかろうじて我慢して待った。このおぞましい塚の番人は怒りを露わにし、大切な酒器の仇は炎で討つてやろうと思った。その時、龍の望みどおり、日はすでに沈んでいた。龍はもはや洞の中に留まろうとせず、(体内に)火を蓄え、火を吐きながら外へ出た。事の発端はこの国の人々にとって恐ろしいものとなり、国の宝の贈り主(であるベーオウルフ)にとっても、直ちに悲惨な結末をもたらすこととなった。(二二七八—二三二一)

第三三節 龍による破壊、ベーオウルフの即位の経緯(二三二—二三九〇)

侵入者は火を吐き、美しい宮殿を焼き始めた。人々が恐怖の目で見守る中、燃える火が吐かれた。憎むべき空飛ぶ龍は生きた物をその場に一つも残さないつもりであった。龍の力、災いをもたらす敵の暴虐、この破壊者がイエーア

ト族の人々を憎んで苦しめた様子は、各地で見られた。龍は夜明け前に蔵へ、秘密の洞へと急いで戻った。この国の人々は火と炎と燃え木で包まれていた。龍にとって塚と自分の力と洞は頼みの綱であった。もっとも、この期待は裏切られることとなったが。(二三二―二三三)

さて、最高の館であるベーオウルフの居城とイエーアト族の玉座が押し寄せる炎で焼失してしまったという驚くべき事実が、直ちにベーオウルフに告げられた。このことは、この勇者にとって心の痛手、最大の悲しみとなった。この賢者は、自分が昔からの掟に背いたため、支配者であられる永遠の神の激しい怒りを買ったのだろうかと疑った。このような事はいつもあることではないため、彼の心は曇り、千々に乱れた。火龍は人々の要塞を、海に臨んだ国を、大地の守り場を、外側から火で破壊した。ウェデル族の長であるおさ閼将は龍にその仕返しをする計画を立てた。そして、兵士たちの守護者、高貴な人々の主君は、自分用に鉄製の立派な盾を作るよう命じた。火に立ち向かうには木の盾では役に立たないことを彼は十分知っていた。かねてより勇名を馳せてきた王も、長い間秘蔵の宝の見張りをしてきた龍も、共に借りものの日々の終わりを、すなわち、この世での命の終末を待つこととなった。鎖帷子を着た王は集団で、すなわち、大軍の力を借りて、空飛ぶ龍を探すことを軽蔑した。もちろん、王は龍との合戦を恐れはせず、龍の覇氣と力と武勇さえ全く意に介さなかった。その理由は、勝利の誉れ高い彼が、フロースガール王の宮殿の厄払いをし、グレンデルとその厭わしい血族を戦場で倒して以来、これまで多くの困難に挑み、幾多の敵と戦から生き延びてきたからである。――ヒエラークが殺された時も、すなわち、イエーアト族の王、国民の親しい支配者、フレゼルの息子が、フリジア人たちの国で嵐のような戦の中で剣で打たれ、刀の先で突かれ、血を流して死んだ時も、決して些細な小競り合いではなかった。この折、ベーオウルフは自力で戦場から脱出し、海を泳いで渡った――海に

飛び込んだ時、彼は三〇名分の武具を抱えていた。ベーオウルフめがけて盾を構えて突撃していったヘトワレ族^(二〇五)の歩兵たちはこの戦に満足する理由は全くなかった。闘將ベーオウルフから逃れて自分の住まいへ戻った者はほとんどいなかったからである。その際、エッジセーオウの息子は無念にも単独で広い海を泳いで渡り、国の人々の元へ戻った。そして、ヒュイドは宝物と王国、宝環と玉座を彼に与えようとした。ヒュエラークが死んだ時、彼女は息子が異国の軍隊に対抗して先祖伝来の国を守っていけるとは思わなかった。しかし、(主君を失った)哀れな人々は、この勇士がヘアルドレードの主君となることも、その王国を譲り受けることも望んではないことを知った。もっとも、ベーオウルフは、ヘアルドレードが成長し、ウェデル・イエーアト族を統治できるようになるまで、その国にいて、親切で愛情のこもった助言を与えて補佐した。さて、追放されていたオーホトヘレ^(二〇六)の息子たちは海を越えてヘアルドレードを訪問した。彼らはシュルフィン^(二〇七)グ族の守護者、すなわち、スウェード族の国で宝物を分け与えてきた海洋国の高名な最強の王に反逆していたのであった。彼らの訪問はヘアルドレードにとって命取りとなった。すなわち、ヒュエラークの息子は彼らをもてなした返礼として、剣の殴打による致命的な傷を受けた。そして、ヘアルドレードが倒れた時、オンイエ^(二〇八)ンセーオウの息子オネラは再び国に戻り、ベーオウルフを王位につかせ、イエーアト族の守り手とさせた。彼は実に立派な王であった。(二三二四―三三九〇)

第三四節 オネラへの復讐、火龍への攻撃、惜別の辞(二三九一―二四五九)

ベーオウルフは国の惨禍に対して報復することをいつまでも忘れることはなかった。彼は哀れなエーアドイルス^(二〇九)の味方となり、広い海のかなたに軍隊を送り、兵士と武器によってオーホトヘレの息子を支援した。エーアドイルスはその後、寒くて厳しい遠征を敢行して仇討ちを行い、王(オネラ)の命を奪った。(二三九一―三三九六)

このように、エッジセーオウの息子は龍と戦うことになる日がくるまで、すべての戦、危険な争いや力による攻略のいづれからも生き延びてきた。さて、イエーアト族の王は怒りにあふれ、一名の従者と共に、龍の様子を窺うために出陣した。その時、彼はすでに龍の敵意と人々の激しい苦しみがどこから出てきたのか知っていた。すっかり名の知れ渡ったあの貴重な器は、発見者の手を経てベーオウルフの所有するところとなっていた。この度の騒乱のきっかけを作った奴隷は一人目の従者として一行に加わった。悲愴な思いの奴隷は不名誉なことにその場から道案内をせねばならなくなった。男はしぶしぶ自分の知っている一つの洞、すなわち、波が砕ける海辺の近くの地下の墓穴まで行つた。洞の中は宝石や飾り物で満ちていた。身の毛もよだつ洞の番人、油断のない闘士、地下の老いた龍は、宝物を見張っていた。それを手に入れるというのはだれにとつてもたやすい事ではなかった。戦において勇敢な王は岬の上に腰を降ろした。それから、イエーアト族への黄金の付与者は腹心の部下に別れの挨拶をした。彼の胸は悲しみと不安と死の予感で一杯であった。この老人を捕らえ、魂の宝庫を襲い、体から命を奪うに違いない運命は迫っていた。その時がくれば、この勇者の命はもはや肉で包まれることはなくなってしまう。(二三九七—二四二四)

エッジセーオウの息子ベーオウルフは語った。「私は若い頃に数多くの戦の嵐、合戦の時を切り抜けた。それらのことはすべて今だに覚えている。宝石の付与者、国民の親しい統治者が、父の元から私を引き取ってくださった時、私は七歳だった。このフレーゼル王は私を守り育て、財貨を与え、宴席に呼び入れてくださり、二人の友好的な関係をお忘れにはならなかった。王の存命中は、王子ヘレベアルドとヘスキュン、^(二〇九)あるいは、わが主君ヒエラークと比べてみても、私は城の中の武士として決して厭わしい存在ではなかった。ヘスキュンは角状に曲がった弓から矢を放ち、自分が仕えている親しいヘレベアルドに傷を負わせ、的が外れたと分ると、今度は血で汚れた投げ槍で血族を、

すなわち、弟が兄を倒してしまった。その時、不当にも、長兄は自分の血族の手によって死の床が敷かれたのだ。それは金品で償うことのできない争いであり、きわめて罪深く、気が滅入る行為であった。それにもかかわらず、この王子はだれからも仇を討ってもらえないまま命を捨てねばならなかった。(二四二五—二四四三)

これと同じように、息子が若くして絞首台の上に登らねばならないということは、老いた親にとって耐えがたい苦しみである。息子が首吊りにされて渡り鴉の餌食となろうとしているのに、老いて分別のできた父親が息子のために何もしてやれないとなると、挽歌を、悲しみに満ちあふれた歌を唄う以外にない。朝になるといつも息子が他界したことを思い出さずにはおられない。人は(息子の)死という苦しみによってひどい打撃を経験すると、次の跡取りが生まれることを城の中で待つという気持ちにはなれない。男は悲嘆にくれ、明るさを失い、息子の部屋、^{ひとけ}人気のない酒宴の間、隙間風の吹き込む居間を眺める。騎兵たちも勇士たちも墓場で眠っている。墓にはかつて城の中であつたような竖琴の響きも歓楽もない。」(二四四四—二四五九)

第三五節 ベーオウルフ、話を終え龍退治へと向かう。闘いの始まり(二四六〇—二六〇一)

「それから彼は寢室に行き、亡き人を偲んで一人寂しく挽歌を唄う。野山も住まいも、何もかも自分には広すぎるように思われる。——ウェデル・イエーアト族の守護者もヘレベアルドのことで同じように胸に込み上げてくる悲しみを抱いていた。それでも、彼は被害者に対する恨みを晴らすことはどうしてもできなかった。好ましからざる人物であるとはいえ、憎悪すべき方法でその兵士を迫害することは彼にはついに叶わなかった。そして、自分の身に降りかかったあまりにも深い悲しみを抱いたまま、彼は世俗の喜びを捨て、神の光明を選んだ。彼はこの世から旅立つ時、豊かな人がするように、子や孫たちに土地と村落を残した。」(二四六〇—二四七一)

「フレールゼルが亡くなると、スウェーオン族^(二二)とイエーアト族の間では、憎しみと争い、小競り合い、激しい敵意が、広い海の上で起こった。オンイエンセーオウの息子たちは勇敢で好戦的であり、海上での友好を望まず、フレールゼル^(二二)ナベオルフの近くでしばしば恐るべき殺戮を行った。周知のごとく、私の血族の人々へ、すなわち、ヘスキュンとヒエラーク^(二二)は、その敵対心と暴挙の復讐をした。しかし、このうちの一人はその代償として自分の命を投げ出すという厳しい取り引きを迫られた。イエーアト族の首領ヘスキュンにとってこの戦は命取りとなった。私が聞いた話によると、オンイエンセーオウがエオヴォール^(二三)と会った場所で、その翌朝、(ヘスキュンの)血族の一人(ヒエラーク)は殺害者(オンイエンセーオウ)に剣の先を突きつけ、血族の仇を討った。兜は割れ、老いたシュルフィング族の男は深手を負って倒れた。彼の手は激しい敵意を忘れてはいなかったが、止めの一撃^(二四)を振り降ろせなかった。」(二四七—二四八九)

「私はヒエラーク王から宝物を贈られたが、戦場で好機が訪れた時、きらめく剣によってその返礼をした。——王は私に土地と快適な住まいを与えてくださった。そのために、王はイフス族や槍のデネ族の元を、あるいはスウェーオン族の国を訪れ、私より劣った兵士を探し、金品で雇う必要は全くなかった。王のために私はこれまで常に単独で軍や戦の最前線にいることを望んだ。私はフーグ族^(二五)の闘将デイフレヴン^(二六)を勇士たちの面前で倒した。そのために、彼はフリジア族の王の元へ装飾を施した宝物や胸飾りを身につけて行くことはできず、軍旗の守り手であるこの高貴な男は戦場で雄々しく倒れ伏した。私は剣の先で彼を殺したのではなく、私の恐るべき腕の力で彼の体と心臓の鼓動を破壊したのだ。もっとも、この剣はいつまでも何度も私に加勢してくれるであろうが。この剣が持ちこたえてくれる限り、私は今後とも徹底的に戦う覚悟である。剣の先、手、強い刃が、これからも宝物をめぐって戦に加わることに

なるであろう。」(二四九〇―二五九)

ベーオウルフはさらに口を開き、誇らしげに最後の決意を表明した。「若い頃は度々戦に挑んだが、今でも恐るべき敵が洞から出てきて攻撃してくるようなことがあれば、老いたりとはいえ私は国の守り手だ。受けて立ち、名誉を得たいと思っている。」そして、親しい家臣たち、兜を被った勇者たち一人一人に最後の挨拶をし、次のように言った。「かつてグレンデルと対決した時のように、剣や武器を持たず、あの龍と、あの怪物と堂々と戦える方法があるのなら、ぜひともそれで争いたいものだ。しかし、龍には熱い恐るべき火と息と毒があると思われる。それで、私は盾と胴鎧を身につけるつもりだ。洞の番人からは一歩たりとも逃げたくはない。運命という万民の神が定められたとおり、洞の壁の近くで我々二人の間で戦が起こるであろう。私には勇氣がある。だから、飛龍に向かって空威張りはやそう。おまえたちは武器に身を固め、鎖帷子で守られて塚の上で待ち、恐ろしい戦の後、我々二人のうちどちらが傷を受けずにすむか見届けてくれ。魔物を相手に力を出し、武勇を発揮するということは、私は別として、おまえたちのやることではない。人がやろうとしてできるたぐいのことでもない。私が力づくで黄金を手に入れないければ、戦が、命に関わる恐ろしい災いが、おまえたちの主人(である私)を奪い去るであろう。」(二五一〇―二五三七)

それから、この高名で勇敢な戦士は兜を被り、盾を抱えて立ち上がり、鎖帷子を着たまま岩壁の下へと進んで行った。彼が信じていたものは自分一人の力であった。彼のこのような態度は憶病とはほど遠いものである。歩兵の部隊が衝突する激しい戦を何度も勇敢にくぐり抜けてきた勇猛な男は、弓形の石が岩壁のそばにあり、洞から水が激しく流れ出ているのに気づいた。この激しい水流は恐ろしい火で熱くなっていた。彼が龍の火によって燃されることなく洞の中の道を通り、宝物に近づくことは不可能であった。ウェデル・イエーアト族の王は苛立ちを抑え切れなくなり、

心の底から（怒りの）言葉を發した。勇敢な男は叫んだ。澄んだ挑戦的な声は灰色の岩の中に届いた。宝物の見張り役は男の声を聞きつけ、敵意を抱いた。その場では和睦を求めるゆとりは全くなかった。すぐさま、怪物の息が、すなわち、熱い毒々しい蒸気が、岩の間から吹き出てきて、地鳴りがした。イエーアト族の首領である勇士は見知らぬ恐ろしい相手と対峙し、部隊の下の辺りで盾を構えた。その時、とぐろを巻いた龍は受けて立つ決意を固めた。勇敢な闘将はすでに剣を、すなわち、鋭い刃の父祖伝来の宝刀を、引き抜いていた。敵対する両者にとって互いに相手は脅威であった。龍が素早くとぐろを巻くと、味方の族長は決然として盾を高くかざして身構えた。彼は武器に身を固めて待ち構えた。すると、龍は火を吐き、身をくねらせながら進み、死すべき運命へと急いだ。盾は高名な王が願っていたほど長く命と体を守ってはいけなかった。彼は生まれて初めて運命が戦の勝利を約束してくれない一日をその場で送らねばならなかった。イエーアト族の王は手を高く上げ、先祖伝来の剣を不気味な色の怪物めがけて振り降ろした。輝く刃は龍の骨に当たったが、刃は苦戦を強いられている国の長が期待したほど強く喰い込まなかった。洞の番人はこの一撃に機嫌を損ね、必殺の火を吐いた。龍の好戦的な炎は遠くまで飛んだ。イエーアト族の王は栄光の勝利の喜びを味わえなかった。むき出しの戦の刃も、無双の鉄剣も、これまでもとは異なり、この合戦の場では役立たなかった。エッジセーオウの高名な息子が喜んでこの大地を捨てるといふのは決して楽なことではなかった。すべての人がはかない（この世での）日々に別れを告げるように、彼は意に反してどこか別の場所で暮らさねばならなかった。

—— 敵対する者同士が再び対峙するまで長くはかからなかった。宝物の番人は気を取り直し、激しく呼吸することによって心臓を再び沸き立たせた。これまで国に君臨してきた者も火に包まれて苦境に立たされた。彼の親しい味方の者たち、高貴な人々の息子たちは、隊列を組んで彼のそばで堂々と構えるどころか、命からがら森へと逃げ込んだ。

しかし、そのうちの一人は無念さで心が張り裂けそうになった。志を同じくする者にとって、血縁関係を無視することはできなかったのである。(二五三八—二六〇一)

第三六節 ウィーイラーフの助太刀。ベオオウルフ、致命傷を負う。(二六〇二—二六九三)

この男はウィーイラーフ^(二二七)と呼ばれ、ウェーオホスターン^(二二八)の息子、盾を携えた立派な兵士、シュルフィング族の王子、エルフ^(二二九)への血族であった。彼は面頬のついた兜を被った主君が(火龍の)熱で苦しめられているのに気付いた。その時、彼はベオオウルフがかつて与えてくれた財宝、ウェーイムディング族^(二三〇)の人々の立派な住まい、父親が持っていた国の権限の一つずつを思い浮かべた。そのため、彼は退散できず、黄色いしなの木の盾を手に握りしめ、先祖伝来の剣を引き抜いた。その剣はオーホトヘレの息子エーアナムンド^(二三一)の遺品として人々の間で知られていた。——ウェー

オホスターンは味方を失い流浪の身となったエーアナムンドを戦場で刀の先で殺害した。そして、茶色の兜、鎖帷子、オネラ^(二三二)がかつて贈った巨人族によって作られた古の剣^(二三三)、血族の者の馬具、立派な武器を、彼の血族の人々の元へと送り届けた。このように、ウェーオホスターンはオネラの兄弟の子を殺したが、オネラはこの不和については一切語ら

なかった。彼は自分の息子が老父のように武勇を発揮できるようになるまで、これらの宝物を、すなわち、剣と鎖帷子を長い間保管しておいた。そして、老いてこの世での生活から訣別する時、彼はイエーアト族の人々が見守る中、息子に無数の武器を与えた。——さて、若い兵士(ウィーイラーフ)にとって高貴な主君と一緒に激しい戦に臨むのはこれが初めてであった。この戦で彼に勇気が欠けるということはなく、血族(である父親)の剣が役立たないということもなかった。二人が力を合わせて龍に立ち向かった時、龍はそのことを思い知らされた。(二六〇二—二六

三〇)

ウィーイラーフは口を開き、同僚たちに向かって非難の言葉をたくさん浴びせた。彼は残念な気持ちで一杯であった。「我々が蜂蜜酒を飲んだ時、武具、兜、丈夫な剣をくださった主君に向かって酒宴の間で誓ったではないか。この度のような災難が主君に振りかかったならば、これらの御下賜品に報いようではないかと。殿は今回の出兵にあたり、御自分の希望で我々を軍の中から選ばれた。殿は我々の名譽をお忘れにならず、我々にこれらの貴重な品々を与えてくださった。これは殿が我々槍兵を屈強で勇敢な武人であると見なしておられるからである。しかし、国の守護者であられる殿はこれまで人々の中で最も名譽ある行為、勇敢な働きをしてこられたため、今回も我々のために一人で武勇を発揮しようと考えておられる。主君が勇敢な兵士の力を必要とする日がきたのだ。恐ろしい火が待ち受けている。行つて鬪將の助太刀をしよう！ 神も御承知のとおり、主君もろとも炎が私の体を包んでしまう方が私にはずっと好ましい。我々がまず敵を倒し、ウェデル族の王の命を守れば、盾を携えて城に戻るのは好ましくない。私はそう思う。イエーアト族の兵士の中で王一人が苦しい思いをして戦で倒れねばならないというのは、王のこれまでの功績にそぐわない。剣、兜、胴鎧、鎖帷子——これらは王と私を共に守るべきものだ。」それから、恐ろしい蒸気ももうもうと立ち込める中を彼は兜を被つて進み、王の助太刀に駆けつけた。彼は言葉少なに次のように言った。「殿、かつてお若い頃、生きている限り自分の栄光を捨て去ることはないとおっしゃいました。その御言葉どおり、すべて最後まで立派に成し遂げてください。武勇の誉れ高い気丈な殿、全力を振り絞って命を守られるべき時です。御力添えいたします。」（二六三——二六六八）

この言葉の後、怒った龍は、恐るべき敵は、燃え盛る火に赤く染まりながら、人間という憎むべき敵を襲うため、再び姿を現した。盾は迫りくる炎によって鋌のあたりまで燃え上がり、胴鎧もこの若い槍兵の役には立たなかった。

自分の盾が火で損なわれると、若者は自分の血族の盾をかざして突進した。その時、戦の誉れ高い王はまだ名譽を忘れてはいなかった。彼は渾身の力を込めて剣を振り降ろした。すると、剣は激しい勢いで龍の首に突き刺さった。灰色に輝く父祖伝来のベールオウルフの剣はこの一撃で折れ、役に立たなくなった。鉄の刃がこの戦で役立って欲しいという彼の願いは叶わなかった——彼の腕力は強すぎた。聞いた話では、驚くほど丈夫な武器でも、戦場に携えていく時には、彼は剣を一本一本振り回して強度を試していたとのことである。しかし、その甲斐はなかった。(二六六九—二六八七)

国の敵、熱くて戦に強い恐るべき火龍は、戦意を失わず、隙を見て勇者ベールオウルフに三度目の攻撃をしかけた。そして、鋭い牙でベールオウルフの首に噛みついた。血が激しく吹き出し、彼は血まみれとなった。(二六八八—二六九三)

第三七節 火龍の死後、瀕死のベールオウルフはウィーイラーフに宝物の探索を命じる。(二六九四—二七五一)

私が聞いた話では、国王の一大事を目撃した高貴な兵士はすかさず立ち上がり、無我夢中で力と技と勇氣を振り絞った。武器に身を固めた彼は龍の頭部には構わず——そのため、血族の王を救出している間に、この勇敢な男の手は焦げた——憎むべき敵の頭部のやや下の方に切りつけた。装飾を施された輝く剣は深く食い込んだ。すると、火の勢いはその後弱まり始めた。そこで、王は氣を取り直し、鎖帷子に忍ばせていた鋭い戦闘用の短剣を引き抜いた。ウェデル族の守り手は龍の胴体を切り裂いた。二人の高貴な血族は敵を倒し、止どめを刺した。武勇が敵の命を奪ったのである。従者たる者は危機存亡の時にはこうでなければならぬ。この合戦は王にとって自分で立てた手柄としてはこの世で最後のものとなった。——地上の龍がさきほど彼に負わせた傷が熱を帯び、膨れ始めた。彼は恐ろしい毒

が心臓に回ってきたのにすぐ気づいた。そこで、思慮深い彼は壁のそばまで歩いて行き、腰を降ろした。彼は巨人たちの仕事を眺め、永久の土の館が弓形の岩屋根を柱でしっかりと支えている様子を観察した。この上なく勇敢な家臣は血に染まった高名な王を、戦いに疲れ果てた親しい主君を、手ですくった水で洗い、王の兜を外した。(二六九四—二七二三)

ベーオウルフは口を開いた。彼は傷を、深手を押して語った。この世での喜びの時間が過ぎ去ったことは彼にはよく分かつていた。その時、すでに彼の余命はいくばくも無く、死がすぐ間近に迫っていた。「死後、わしの後を継いでくれる息子という分身がいたなら、武具を喜んで譲れたものを。わしは五〇年間国を守ってきた。近隣の国々には剣でわしを襲い、恐怖に陥れようとする族長は一人もいなかった。わしは定められた運命^{さだめ}を国で待ち、自分の分を守り、策略を巡らしたことはなく、みだりに誓いを立てたこともなかった。深手を負って死にかかっているが、わしはこれらすべてのことに対して満足している。命がわしの体から離れる時、人類の支配者であられる神は、わしが血族の人々を殺害したという理由でわしを咎めることはなさらないからである。敬愛するウィーイラーフよ、龍は宝を奪われ、致命傷を負って倒れ、死の眠りについた。だから、一刻も早く灰色の岩の下にある宝物を見に行ってくれ。遠い昔の財宝、黄金、眩しい光を放つ宝石を、わしがこの目ではっきりと見られるよう、急いでくれ。宝の山が手に入れば、それで心置き無く、長く守ってきた自分の命と国から別れることができる。」(二七二四—二七五二)

第三八節 辞世の言葉、ベーオウルフの死(二七五二—二八二〇)

私が聞いた話によると、ウェーオホスターンの息子はベーオウルフの話の後、戦で傷ついた瀕死の王の指示に従い、鎖帷子を着て、編み上げられた胴鎧に身を固めたまま、直ちに塚の屋根の下まで行った。勝ち誇った勇敢な若い家臣

が（洞の中の龍の）座席のそばまで行った時、莫大な量の宝石と黄金が地面の上で光を放っているのを見た。岩壁の上には驚くべき物、龍の巢窟、老いた夜の飛翔者、大杯、磨かれず、飾り物のとれた昔の人々の酒器があった。そこには、古くて錆びたたくさんの兜、巧みにひねって作られた多くの腕飾りもあった——地上の宝石や黄金は、それが隠してみても、たやすく人の目に触れるものだ。また、彼は金色の軍旗が、高度な技術によって織られた最高の手工芸品が、宝物の上に高々と翻っているのを眺めた。軍旗が光を放っていたため、彼はしっかりと地面の上に立ち、宝をはっきりと確認することができた。龍はすでに刃によって命を奪われていたため、龍の姿はそこにはなかった。私が聞いた話によると、この男は一人で塚の中の宝物を、遠い昔の巨人たちの手作りの品を奪い取り、自分で選んだ杯と皿を抱え込んだ。さらに、彼は軍旗の中で最も綺麗なものを一本手に入れた。老いた領主の剣は——刃は鉄製であつた——長い間宝物の見張り役であつた龍をすでに倒していた。この龍は殺されるまで、真夜中は宝物を守るためにめらめらと燃える恐ろしい熱い炎を（体内）に蓄えていた。（ベールオウルフの）使いの男は（手に入れた）宝物にも急かされ、戻りたい一心で駆けた。彼は大胆な心の持ち主ではあつたが、さきほど後に残してきた弱り果てたウェデル族の王に元どおりの場所で生きて再会できるかどうかとも気がかりだった。彼は宝物を抱えて帰ったが、主君が、高名な王が、血まみれの状態でまさに息を引き取ろうとしているのに気づいた。言の穂が（ベールオウルフの）胸から出てくるまで、彼はもう一度ベールオウルフに水を振りかけた。——英雄たちの老いた王は黄金を眺め、悲しい面持ちで語った。「ここで眺めているすべての宝に対して、主に、栄光の王に、永遠の神に、言葉で感謝申し上げます。おかげさまで、死ぬ前にこれほどの宝物を国の人々のために手に入れることができました。——わしは宝の山と引き換えに、老いた命を売り払ってしまった。おまえたちはこれから国の人々の望みが叶うよう努めてくれ。わ

しはもうこれ以上ここに留まっておれない。わしを火葬にした後、海に近い岬に栄光の塚を築くよう勇士たちに命じてくれ。そうすれば、その塚は国の人々の記念碑として「鯨が岬」の上に高くそびえ、遠方から暗い海を越えて船を漕いでくる水夫たちによって「ペーオウルフの岬」と呼ばれるようになるであらう。」気丈な王は首から金色の飾り物はずし、これと、金で飾られた兜、宝環、胴鎧を従者の若い兵士に与え、大切に使うよう命じ、次のように言った。

「おまえは我々ウェーイムンディング一門の中の最後の生き残りだ。運命はわしの血族の勇敢な兵士たちをすべて死へと奪い去った。わしは彼らの後を追わねばならない。」これは、老いた王が火に、熱くめらめらと燃える炎に包まれる前に、彼の胸の中から出てきた最後の言葉であった。彼の魂は正義の人々の審判を受けるためにその胸から離れた。

(二七五—二八二〇)

第三九節 ウィーイラフ、憶病者たちを叱責する。(二八二—二八九)

その時、若者はつらいことにこの世で最も敬愛する王が人生の終わりに苦しみに喘ぐのを目の当たりにすることになった。被害者である恐ろしい龍も命を奪われ、苦しみに捕らわれて倒れていた。剣の先、強く鋭い物、鉄鎚が産み出した物が龍の命を奪い去ったため、とぐろを巻いた龍はもはや宝物を掌握することはできなかった。空飛ぶ龍は傷のために動けず、宝物庫の近くの地面の上に倒れていた。貴重な財宝を誇った者も、もはや真夜中に飛びながら空中を徘徊し、その雄姿を現すことはなくなり、闘將の力技のために大地の上に倒れ伏していた。私が聞いた限り、この世の豪傑の中で、どれほど大胆に振る舞える者であれ、番人が洞の中で見張っていることを知りながら、毒を含んだ息を吐く敵に挑み、素手で宝環の館を探し回れる男はほとんどいない。莫大な宝石類はペーオウルフの死によって償われた。両雄はいずれもはかない命に終わりを告げた。さて、さきほど主君の一大事にあえて槍で戦おうとしなかつ

た憶病者たち、一〇名のだらしない裏切り者たちが挙^{こぞ}って森から出てきたのは、それからそんなに後のことではなかった。彼らは、恥知らずにも、老王が死んで横たわっている所まで盾と武具を携えて行き、ウィーイラーフを見つめた。この歩兵の隊長は疲れ果て、王の肩のそばに座り、王に水を振りかけてよみがえらせようとしていたが無駄であった。

——強く望んだものの、彼はこの世で將軍の命を守ることも、支配者であられる神が定められたものを変えることもできなかった。神は、現在もそうであるが、すべての人間をその行為によって裁かれることを望まれた。——その時、さきほど勇気を喪失した者たちの耳に若者から激しい怒りの声が届いた。ウェーオホスターンの息子ウィーイラーフは悲しみに沈んで言った。彼は憎むべき男たちを睨みつけた。「よく聞け。真実を語りたいと思う者は、おまえたちが身につけている宝石や武具を与えてくれた殿は、次のように言うであろう——この武將は、酒宴の席で館に居並ぶ人々に、自分の家臣に、兜や鎖帷子や各地で入手しうる限りの最高の品々を何度も贈られたが——一度戦^{いくさ}が自分の身に振りかかるや、残念なことに、家臣はこれらの武具をすべて脱ぎ捨ててしまったと。それゆえ、国民の王には自分の戦友を自慢する理由は全くなくなってしまった。しかし、勝利の支配者である神は、武勇が必要な時に、ベーオウルフが単独で刀の先で仇を討つよう望まれた。私は戦いの場で王の命を守ることはできなかったが、それでも、私は持てる力を出し切って血族を助けようと努めた。私が恐ろしい敵に剣で切りつけると、龍はそれで弱くなり、口から吐き出す火の勢いは衰えた。王に一大事が訪れた時、回りに集まった衛兵はほとんどいなかった。宝物の受領、劍の贈呈、家庭でのあらゆる喜び、慰め、これらはこれからおまえたちの一族からなくなるであろう。敵前逃亡というおまえたちの不名誉な行為が各地の高貴な人々の耳に達すれば、おまえたちの家族は全員土地の権利を奪われて放浪せねばならなくなるであろう。兵士ならだれしも不名誉な生活をするより死ぬ方がましだ。」(二八二—二八九)

第四〇節 ベーオウルフの訃報、戦争勃発の懸念、「鴉が森」での戦の挿話（二八九二—二九四五）

そして、ウィーイラーフはこの度の戦いについて崖の上の砦で語るよう（伝令に）命じた。砦では盾を携えた兵士の一隊が大切な人の最後と帰還の両方を予感しながら悲痛な思いで昼まで待っていた。岬の上まで登って行った男は、最新の知らせを包み隠すことなく、全員に聞こえるようにありのままに語った。「ウェデル族の人々に喜びを与えてくださった御方、イエーアト族の王は、すでに死の床にしっかりと捕らえられ、龍の仕業によって殺戮の床に眠っておられる。恐るべき敵は、殿のそばで刀傷で命を落として倒れている。殿は剣で怪物に傷を負わせることはどうしてもできなかった。ウェーオホスターンの息子のウィーイラーフはベーオウルフのそばに座り、すなわち、英雄が亡くなられたもう一人の英雄の近くに座り、畏敬の気持ちを抱いて、敬愛すべき人と憎むべき怪物の首の見張りをしている。——王の崩御がフランク族とフリジア族に広く知れ渡ると、戦争の不安が人々の間で高まってくる。かつて、ヒエラークは海上の部隊を率いてフリジア人たちの国に遠征した。ヘトワレは戦場でこれを迎え撃ったが、この争いはフーグ族の人々には敵しいものとなった。しかし、彼らは優勢な軍事力によって勇気づけられ、武器に身を固めたヒエラークを打ち、歩兵部隊の中に沈めた。それで、この王が百戦練磨の兵士たちに宝物を与えることはなくなった。それ以降、メレウィーオイング王が我々に情をかけることはなくなった。——」（二八九二—二九二二）

「私はスウェーオン族の人々には友好も誠意も期待していない。イエーアト族の人々が傲慢さゆえに戦の誉れ高いシユルフィング族を初めて攻撃した時、オンイエンセーオウが「鴉が森」の近くでフレーゼルの息子ヘスキュンの命を奪ったことが遠くにまで知れ渡った。すなわち、オーホトヘレの賢父は老いてもなお恐るべき人物であったが、この老王はすぐに海の覇者ヘスキュンを倒し、自分の嫁を、黄金を奪われた自分の妻を、すなわち、オネラとオーホトヘ

レの母親を救い出した。そして、王は憎むべき敵兵を追跡した。隊長（ヘスキュン）を失った者たちは命からがら「鴉が森」に逃げ込んだ。王は剣（の恐怖）から逃れたものの、深手を負って弱り果てた者たちを大軍で包囲した。王は夜通し惨めな兵士たちを何度も脅し、苦しめた。王は、朝になったら剣の先で殺し、全員木につるして猛禽の餌食にしてやると言った。夜明けと同時に、兵士たちはヒエラーク王の角笛とラッパ、物音を聞いた。剛勇の王は精銳を率いて兵士たちの後を追ってきた時、悲愴な覚悟でいた者たちも安堵の胸をなで降ろした。」（二九三—二九四五）

第四一節 伝令の回顧談の終わり。全員、ベーオウルフの元に駆けつける（二九四—三〇五七）

「スウェーオン族とイエーアト族の人々の血の跡、兵士たちの死闘、これらの人々が互いに敵意を騒き立てた様子は遠くまで知れ渡った。老いた勇者は非常に残念な思いで血族の者たちを引き連れ、砦を指して立ち去った——戦士オンイエンセーオウはより遠くへと移動した。彼は意気盛んな男ヒエラークの武勇と戦術を承知していた。そのため、彼は抗戦を、すなわち、海の男である水兵たちと争って財宝や妻子たちを守れるとは考えていなかった。そこで、老王はそこからさらに土の壁の裏へと逃れた。それから、スウェーオン族の人々に追っ手が差し向けられ、ヒエラークの軍旗は彼らの避難場所の上へと迫った。フレーゼルの軍勢は砦へと押し寄せた。白髪交じりのオンイエンセーオウは剣の先で脅され、その場に留まることを余儀なくされ、この国王はエオヴォルという一人の男の判断に身を委ねざるを得なかった。ウォンレード^(二二五)の息子ウルフは腹立ちまぎれに王を武器で打った。その打撃によって王の髪の毛の下の血管から血が吹き出した。しかし、シュルフィン族の老いた国王は少しも恐れず、体勢を整えるやいなや、すかさず（自分が受けたもの）より強い痛烈な打撃で応酬した。ウォンレードの勇敢な息子は老兵に反撃できず、オンイエンセーオウはウルフの頭の兜をたたき割った。そのため、ウルフは血まみれとなり、よろめいて地上に

倒れた。しかし、彼は傷ついてはいたものの、その時はまだ死に瀕してはおらず、氣を取り戻した。ヒエラークの勇敢な家臣（エオヴォル）は、弟が倒れた時、刃の広い剣で、太古の昔の巨人の刀で、盾の上から（老王の）大きな兜をたたき割った。そのため、国の守り手である王は致命傷を負って倒れた。大勢の兵士は戦場を掌握すると、エオヴォルの血族の傷口を縛り、急いで抱え起こした。その間に、一人の兵士がオンイエンセーオウが身につけていた鉄の鎖帷子、柄のついた丈夫な剣、さらに、兜も奪い取った。兵士は老王のこれらの武器をヒエラーク王の元へと運んだ。王はこれらの武器を受け取り、人々が見守る中で上機嫌で報酬を約束し、そのとおり実行した。フレーゼルの子であるイエーアト族の王は城に戻ると、エオヴォルとウルフに見事な宝物を与え、激しい戦（の手柄）に報い、それぞれに一〇万（シエ^{（二七）}アト）の土地とつながり合された宝環を贈った——だれかが手柄を立てた時、他人がこの世でその報酬についてその人を非難してよい理由はない。さらに、王は家の華として、友情のあかしとして、一人娘をエオヴォルに与えた。」（二九四六―二九九八）

「以上は、スウェーオン族の人々が（我々に抱いている）敵意と不和、人々の激しい憎しみ（の元）である。我々の王が亡くなったことを知れば、彼らはそれを根にもち、我々を襲ってくるであろうと私は予想している。かつて英雄たちが亡くなった後、宝と王国と勇敢な盾の兵士たちを敵から守り、国民の利益のために尽力され、さらに英雄にふさわしい手柄をあげられたのは我々の王だ。——今なにより大切なことは急ぐことだ。国民の王にお目にかかり、我々に宝を分け与えてくださった王を火葬用の薪のある場所に通じる道まで運ぼう。勇敢な御方と一緒に溶け去るものがごくわずかであってはならない。宝の山、危険を冒して獲得された莫大な黄金、それと、つい今しがた王が自分の命と引き換えに手に入れた宝がある。燃え木は、火は、それらを包み込み、焼き尽くすことになる。軍の指

揮官が笑いと喜びと楽しみを捨て去られたからには、高位高官にある者は王の思い出につながる装飾品を身につけることはなくなり、美しい女性も首を鎖で飾ることはなくなるであろう——人々は黄金を奪われ、悲嘆にくれ、一度ならず再三再四、(奴隸として)異国の土地をさまようことになるであろう。王の訃報を知ると、明け方、敵はまだ冷たいたくさんの槍を指で握りしめ、手で掲げ上げるであろう。豎琴の音が兵士たちを目覚めさせることはなく、運命の尽きた者たちを待ち構えている黒い渡り鴉は、狼と競って死体を略奪した時に、いかにして獲物にありついたか、驚に向かつて長々と語って聞かせることであろう。」(二九九九—三〇二七)

このように、勇敢な男は厭わしい話の語り手となった。彼は事実も言葉も全く偽ることはなかった。兵士は全員立ち上がった。彼はかつて自分たちに宝環を分け与えてくれた王が命を失って砂の上を臥所ふしどにしているのを見た。その時、勇敢な王に最後の日が訪れ、戦の王であるウェデル族の長は壮絶な死を遂げていた。彼らはその場で真っ先に奇怪な生き物、憎むべき龍が王と反対側の地面の上に横たわっているのを目撃した。恐ろしい火を吐くまだらマダラの龍は炎で焦げていた。横たわっている龍の丈は五〇フィートもあった。この龍はかつては喜々として夜空を飛び回り、巢窟カウに戻る時には舞い降りていたが、すでにしっかりと死に捕らえられ、土の洞で最期を遂げていた。龍のそばには酒器酒杯、大杯、皿がころがり、立派な剣もまるで千年もの間地中深く埋もれていたかの如く錆づいていた。その時、莫大な遺産、太古の昔の人々の黄金は、呪文をかけられていた。そのため、人間の守り手であり勝利の王であられる神が自ら宝庫を開けてやろうと願う者に、まさに自分の意に叶うと思われる人間に、許可されなかったなら、だれ一人その宝環の館に手を触れることはできなかったであろう。(三〇二八—三〇五七)

第四二節 人の運命が計り知れないことについて。火葬の準備。(三〇五八—三一三六)

その時、明らかにったことは、何の権利もないのに塚の内側に宝石類を隠し続けるという行為は成功しなかったということである。塚の番人が最初一人の男を殺した。今度は、この恨みが厳しく晴らされた。武勇の誉れ高い兵士がどこで人生の終わりを迎えるのか、人はいつ血族の者たちと一緒に酒宴の間で席を占めることがでなくなるのか、全く計り知れない。ベーオウルフが塚の番人と対決した時、彼はまさにそのような状況にあった。この世との別れがどのようにして訪れるのか彼には分からなかった。その塚に宝物を納めた高名な王侯貴族たちは、最後の審判の日がくるまで宝物に強い呪いをかけていたため、神が黄金を熱心に求める者に御親切にもあらかじめみずから進んで恩寵を授けてくださらなかったなら、その場所を荒らす者は罪の咎めを受け、魔の森に閉じ込められ、地獄の束縛に捕らわれ、悪疫に苦しめられることになったであろう。(三〇五八―三〇七五)

ウェーオホスターンの息子ウィーイラーフは言った。「我々の身に及んだように、一人の意志によって多くの兵士が苦痛に耐えねばならないことがしばしばある。敬愛する王が、王国の守護者が、黄金の番人を攻撃しないよう、また、この世での命の終わりがくるまで王が馴れ親しんだ場所で体を横たえ、自分の住まいに留まれるよう、我々は王に進言することができなかった。王は神意に従われた。蔵は暴かれ、徹底的に略奪された。国の王をこちらへと導いた運命は残酷すぎた。私は洞の中にいて、折をみて蔵の貴重な品々のすべてをこの目で確かめた。地下の塚の中へ足を踏み入れるのは決して容易なことではなかった。私は手に持てる限りの財宝を素早く掴み、王の所まで運び出した。その時は王にはまだ脈があり、意識もはっきりしておられた。老王は苦しみに喘ぎながら、多くのことを語られた。王は私に皆の所へ戻り、親しい支配者の功績を称えるために、高く大きくて立派な墓を火葬の場に築くよう命ぜられた。この墓は、王が城の富を所有することが許された間、この世の至る所で人々の立派な指導者であられたことの

しるしである。それでは、もう一度岩壁の下まで急いで行き、宝石の山と驚くべき光景を眺めようではないか。あなたがたがたぐさんの宝環と莫大な黄金を近くから眺められるよう、私が案内しましょう。塚から出てきたら、急いで棺を用意し、支配者であられる神の庇護の下で末長く留まることになる場所まで、我々の大切な王を運ぼう。」(三〇七六―三一〇九)

それから、ウェーオホスターンの息子、戦において勇敢な兵士は、たぐさんの戦士と高位高官にある者たちに対して、これらの人々の指導者たちが遠くから勇者の所まで火葬用の薪を運ぶよう命令を下し、次のように言った。「さあ、これから火が、黒い炎が立ち昇り、兵士たちの指導者を焼き尽くすであろう——矢が盾の壁の上を嵐のように勢いよく飛び交い、矢の軸が矢羽根に急かされ、折れることなく^{せむし}鏃の後を追う時、矢の嵐を何度もくぐり抜けてきた王を。」(三一一〇―三一一九)

実際、ウェーオホスターンの賢明な息子は部隊の中から王の最強の近衛兵を七名呼び出し、自身もこれらの戦士の一行に加わり、人を拒んできた岩屋根の下へ入って行った。先頭に立った者は手に松明をかざしていた。莫大な宝物が蔵の中で無造作に横たわり、巧ち果てるべく散らばっているのをこれらの兵士たちが眺めた時、だれがその財宝を持ち帰るか、くじで決められていたわけではなかった。だれもためらうことなく見事な宝物を急いで運び出した。また、彼らは龍を、あの怪物を、海の崖の上まで運び上げ、この宝物の番兵を波に捕まえさせ、潮流に飲み込ませた。荷車の上には無数の金のひねり飾りが積まれていた。英雄は、白髪の戦士は、「鯨が岬」へと運ばれた。(三一二〇―三一二六)

第四三節 ベーオウルフの火葬 (三一二七―三二八二)

そして、イエーアト族の人々はベーオウルフのために地面の上に火葬用の薪をしっかりと積み上げ、彼の遺言に従い、その回りに兜、盾、光り輝く鎖帷子をつるした。それから、兵士たちは涙を流しながら高名な王を、大切な主君をその真中に安置した。そして、兵士たちは崖の上の最も大きな薪の山に火をつけた。黒い煙とめらめらと音を立てる炎は人々の泣き声に包まれながら火の上へと立ち昇り——風はすでに止んでいた——彼の体は中心まで熱く燃える火によってついに破壊された。人々は主君の死に落胆し、嘆き悲しんだ。髪を束ねた老女も同じように悲嘆にくれ、ベーオウルフを偲んで挽歌を唄い、自分に災難の及ぶ日々を、大量の戦死者がでることを、兵士に襲われる恐怖を、傷つき捕らわれの身になることをひどく恐れていると、何度も何度も語った。空は煙を飲み込んでしまった。

(二三三七—三二五五)

それから、ウェデル族の人々は船乗りたちが遠くからでも見えるように、高くて大きな塚を崖の上に築き、戦で勇敢だった王の軍旗を一〇日以内に完成させた。賢者なら当然見つけ出せるようにと、燃え残った品々は壁に塗り込められた。宝環と宝石は、すなわち、勇敢な男たちがかつて宝物庫から手に入れてきた装飾品は、すべて墳墓の中に埋葬された。高貴な人々の所持品や黄金は地中に埋め、そこで守らせた。これらの宝は、かつてそうであったように、人々の役に立たないものとして現在も地中に眠っている。その次に、戦で勇敢な兵士たち、貴族の息子たち、総勢一二名は、塚の回りを馬で駆け、哀悼の意を表し、王の死を嘆き、挽歌を唄い、この英雄について語り合おうとした。彼らは王の偉業を称え、勇氣ある行為を絶賛した——親しい指導者が肉体から離れ、この世を去らねばならない時、人はこのように自分の主君を言葉で称え、心の中でいとおしむのがふさわしい。このように、イエーアト族の人々は、親しかった家臣たちは、主君の死を嘆いた。彼らは語った、王はこの世の王の中でだれよりも人々に優しく、だれよ

りも親切で、だれよりも国の人々に情深く、そして、だれよりも熱心に名誉を求めた、と。(三一五六―三一八二)

(完)

モールドン^(一)の戦い

第一節 英国エセックス軍と海賊のデーン軍が対峙し、舌戦を繰り広げる(一一六二)

…は破られた。^(二)そこで、ビュルホトノースはそれぞれの兵士に命じて馬を放って遠くへ駆けさせ、前に行かせ、自分たちの手と強い勇氣に頼らせた。オッフアの血族の者は、この隊長が臆病さには我慢ならないことを看^みて取ると、直ちに大切な鷹を自分の手から放ち、例の森^(三)に向けて飛ばせ、戦へと歩を進めた。このことから明らかのように、この家臣は一度武器を手にすると、合戦に怯^{ひる}むことを望まなかった。エーアドリーチも同様に、自分の主人である隊長に従って戦うことを望み、槍を携えて戦闘へと進んだ。彼は楯と広い刃の剣を両手に握り締めるだけで勇敢な気持ちになった。彼は自分の主君の前で戦わねばならなくなった時、(家臣としての)誓いを果たした。(一一六六)

それから、ビュルホトノースは家臣たちを励ました。馬に跨^{またが}って采配を振り、兵士たちがどのように配置につき、所定の場を守ればよいか指示した。ついで、兵士たちに楯を両手でしっかりと真っ直ぐに立てて構え、決して恐れるなど命じた。ビュルホトノースは部隊を十分に激励した後、自分に最も好ましい場所、すなわち、最も忠実であると思われる自分の家臣に囲まれて、馬から降りた。すると、海賊たちの使者は河岸に立ち、大声を張り上げ、言葉を発した。この使者は土手の上に立っている隊長ビュルホトノースに向かって船人たちの伝言を傲慢な口振りで告げた。

「勇敢な海の男たちはわしをおまえの元へと遣わし、おまえの身の安全と引き換えに、直ちに宝環を送り届けるよう伝えよと命じた。このように強い我々が戦いを挑むよりも、貢ぎ物と引き換えにこの槍の攻撃を避けた方がおまえらの身のためになるぞ。もしもおまえたちがこの申し出どりに実行すれば、我々は殺し合う必要はない。我々は黄金と引き換えに休戦協定を結ぶことを望んでおる。ここで最高の権限を握っているおまえが、家臣たちを除隊し、和平と引き換えに望みどおりの金品を水兵たちに引き渡し、我々と和睦することを決意すれば、我々はその財宝を持って船に向かい、海上へと赴き、おまえたちを平和にしてやりたい。」（一七一—四一）

ビュルホトノースは言った。楯を握り、細い槍をしごき、言葉を発した。彼は怒りにあふれて決然と使者に返答した。「海賊よ、ここの兵士たちが何と言っているか聞いたか？ 槍と毒の塗られた槍先、古びた刀、それに戦で、おまえたちの役に立たない武具を貢ぎ物としておまえたちにくれてやりたいと思っている。海賊たちの使者よ、帰って伝えろ。この国を、すなわち、わしの主君エゼルレード王とその民の土地を守ろうとする勇敢な隊長は、軍勢と共にここで立ちほだかっている。このきわめて不愉快な知らせをおまえの仲間に告げる。異教の輩は戦で倒れる運命にある。おまえたちがこのようにはるばると我々の国を訪れたからには、戦わずして我々の貢ぎ物を船に持ち帰ることは甚だ不名誉なことだ。わしにはそう思われる。おまえたちにそう安々と宝物を手に入れさせるわけにはいかん。我々が貢ぎ物を差し出す前に、槍先と刃、激しい攻撃が我々の最初の調停役となってくれるであろう。」（四二一—六二一）

第二節 前哨戦の後、戦闘開始（六二一—一四八）

それから、ビュルホトノースは兵士たちに楯を携えて進軍するよう命じた。そこで、全員が川の堤の上へと立った。部隊は水のために対岸へ渡ることができなかったのである。引き潮の後に高い上げ潮がとうとうと押し寄せ、潮流が

合わさった。両軍が共に槍を構える時まで相当の時間がかかるように思われた。エセックスの尖兵たちと敵の槍兵たちはパンテ河(3)の流れに沿って戦闘隊形を整え、待機した。飛んできた矢によって死者が出た以外、だれ一人相手方に危害を加えることはできなかった。潮は引いた。海賊たち、すなわち、入江の住民の多くは、合戦に焦れ、準備万端の状態であつてゐた。一方、兵士たちの守り手であるビュルホトノースは戦に強い一人の兵士に橋を守備しよう命じた。この男はウルフスターンと呼ばれ、一族の中の勇者であつた。彼はチェーオラの息子であつた。その時、彼は大胆にも橋の上に進み出た最初の男を槍で突き刺した。恐れを知らぬ武者たち、すなわち、エルフヘレとマックスという二人の勇者が、ウルフスターンと共にその場に立っていた。彼らは浅瀬の所から逃走しようとは思わず、武器を揮うことができる間は、決然と敵に向かい、身を護つた。海賊たちは手強い橋の守り手たちがその場にいることを知り、状況をはっきりと見定め、それから、この憎むべき異邦人たちは奸計を巡らし始めた。彼らは、橋に登り、浅瀬を渡り、歩兵たちを率いて進軍することを許してくれるよう懇願した。(二一八)

そこで、隊長は自らを頼むあまり、かなり広い場所を憎い敵軍に譲り始めた。そして、ビュルホトヘルムの息子ビュルホトノースは冷たい水の向こう側へ呼びかけた。兵士たちは聞き耳を立てた。「さあ、場所を空けたぞ。兵士たちよ、急いで我々との合戦に駆けつけろ。だれがこの戦場を手中に収められるかは神だけが知っておられる。」すると、殺戮の狼たち、すなわち、海賊の一隊は水を物とせず、パンテ河を越えて西へ渡った。船乗りたちは澄んだ水を越え、槍と楯を陸地へと運んだ。そこでは、ビュルホトノースが兵士たちと共に敵に備え、隊列を整えて立っていた。彼は楯で密集方陣を作り、味方の軍勢を敵からしっかりと守るよう命じた。その時、合戦が、すなわち、戦闘隊列の栄光が真近に迫っていた。運の尽きた者たちがその場に倒れる時がきた。そして、闘たたかいの声が上がリ、大鴉おおがらすと死肉に

飢えた鷲は旋回した。大地の上に叫び声が上がった。兵士たちはやすりのように硬い槍を、鋭く研がれた投げ槍を、手から放った。弓は休みなく（引き絞られ）、槍の先は盾に当たった。（八九一一〇）

この攻撃は激しく、双方の側で兵士が倒れ、戦士たちは死んで横たわった。ビュルホトノースの血族のウルフメー
ルも傷つき、殺戮の床を選んだ。このビュルホトノースの姉妹の息子は刀で激しく切られ、倒された。海賊たちに対
してその復讐がなされた。私が聞いたところによると、エーアドウエアルドは敵の一人に刀で強く斬りつけ、打撃を
止めなかった。そのため、運の尽きた兵士は彼の足下に倒れ伏した。彼の主人ビュルホトノースは折りを見てこのこ
とで彼に謝辞を述べた。このように、勇敢な兵士たちは合戦において自分の持ち場を守った。武器を手にした兵士た
ちは、その場でだれが最初に運の尽きた者から槍の先で命を奪い取ることができるか真剣に考えた。死体は地面の上
に倒れていた。兵士たちはしっかりと立っていた。ビュルホトノースは彼らを励まし、デネの一族の間に分け入って
名誉を得ようと望む者は、全員、合戦に専念せよと命じた。その時、戦に強い海賊の一人が進み出て、武具を、すな
わち、楯を、防禦のために高く掲げ、ビュルホトノースの方に歩み寄った。そこで、不屈の隊長はこの下賤の者に向
かって行った。彼らは互いに相手を傷つけようと狙った。そして、この海賊は南国渡来の槍を投げつけた。そのため、
兵士たちの頭は傷ついた。彼がすかさず楯の縁を体に押しつけると、槍の柄が折れ、槍は壊れ、跳ね返った。この闘
士は怒った。彼は自分に傷を負わせた傲慢な海賊を槍で突き刺した。この武人は老練であった。自分の槍でその若者
の首を貫いていた。彼の手は槍を自在に操った。こうして、彼は敵の命を奪った。ついで、彼は素早く別な男を突き
刺した。すると、男の胴鎧は砕けた。男は環鎧を通して胸に傷を負い、毒の塗られた槍の先は心臓に突き刺さって
いた。隊長はそれだけ一層機嫌がよくなった。そして、この勇敢な武人は笑い、神に与えられたその日の成果に対し

て感謝の気持ちを述べた。(一一一一一四八)

第三節 隊長ビュルホトノースの戦死と家臣の逃亡(一四九—二〇一)

すると、敵の一人の兵士が手から、掌から、槍を放った。そのため、槍は標的を目がけて飛び、エゼルレードの高貴な家臣ビュルホトノースを貫いた。そのそばの合戦の場には、彼の従者である若い兵士が立っていた。この若者、すなわち、ウルフスターンの子ウルフメールは、素早くその勇者から血塗られた槍を引き抜き、とても強いその槍を投げ返した。槍の先は突き刺さり、そのため、さきほど彼の主君を痛撃した兵士は地に倒れた。すると、武器に身を固めた(また別の)兵士がその隊長(ビュルホトノース)に近づいた。男はこの武人から宝環、武器、指輪、それに飾りを施された剣を奪い取ろうとした。そこで、ビュルホトノースは幅広く褐色の刃のついた剣を鞘から抜き、男の胴鎧に斬りつけた。ちょうどその瞬間、海賊の一人が邪魔をし、隊長の腕を傷つけた。そのため、黄金の柄のある剣は地に落ちた。彼は強い剣を持つことも武器を揮うこともできなかった。それでも、白髪の武人は次のような言葉を発し、若者たちを励まし、勇敢な仲間の人々に前進するよう促した。この時、彼はもはや両足でしっかりと立つことはできなかった。彼は天を眺めやった：「人々の支配者よ、神よ、私がこの世で受けたすべての喜びに対し感謝いたします。慈悲深い主よ、天使たちの王よ、私の魂が主の元へと旅し、神様の庇護の元へと無事に赴くことができませう、主が私の魂に祝福を与えてくださることが今の私には何よりも必要なことです。悪魔たちが私の魂を苦しめることがないように、神様に切にお願いいたします。」(一四九—一八〇)

ついで、異教の輩は隊長を切り倒した。そして、傍に立っていた勇者エルフノースとウルフメールも共に殺され、倒れた。彼らは主君のすぐそばで命を失った。すると、その場にいることを望まなかった者たちは戦に背を向けた。

オッダの子ゴッドリーチは真つ先に戦闘から遁走し、しばしば何頭もの馬を与えてくれた勇者を見捨てた。彼は主君の所有していた軍馬の鞍の上に飛び乗った——やってはならぬことであつたが。おまけに、彼の二人の兄弟ゴッドウィネとゴッドウィイも一緒に走り去つた。彼らは戦には目もくれず、合戦に背を向け、例の森へと向かつた。そして、その中の皆へと逃げ込み、みずからの命を救つた。ビュルホトノースが与えてくれた恩寵のすべてを彼らが覚えていたなら、それに見合つた数の者ですんだであろうが、それよりも多くの者が（森へ逃れて命を救つた）。かつてビュルホトノースが評定^{ひやうじやう}を行つた時、いづれ後で困難に直面すれば持ち堪えられないであろう多くの者が、その場では勇ましい発言をしていたということを、オッフアがその評定の席でビュルホトノースに語つたことがあつたが、やはりそのとおりであつた。（一八一—二〇二）

第四節 隊長の弔い合戦（二〇二—二三五）

さて、軍の隊長であるエゼルレド王の太守は倒れた。家臣たちは全員自分たちの主君が横たわっているのを見た。しかし、誇り高い家臣たちは戦を進めた。勇敢な男たちは熱心に先へと急いだ。彼らは全員二つに一つのこと、すなわち、命を捨てるか、それとも、大切な主君の仇を討つかを望んだ。そこで、年若い武人エルフリーチの息子エルフウィネは前進するよう彼らを励まし、言葉を發した。彼は語り、雄々しく口を開いた。「酒宴の席で何度も語つた言葉忘れてはならぬ。武人である我々は館の椅子の上で激しい戦について話をしたではないか。今やだが勇敢か私は試すことができる。皆に私の高貴な生まれを知らせたい。私はマーシャ人たちの中の偉大な一族に生まれ、私の老いた父はエアルドヘルムと呼ばれ、この世で成功を収めた賢明な領主であつた。私がこの軍隊から離脱し、郷里に帰ることを望んだとしても、主君が合戦で切り倒されて横たわっているからには、故国の家臣たちは私を非難すること

はないであろう。主君の戦死は私には最も大きな悲しみである。彼は私の一族であり、主君でもあった。」(二〇二—二二四)

そして、彼は前進し、仇討ちを忘れず、敵軍の中の海賊一人を槍の先で突き刺した。そのため、男は彼の武器で殺され、大地に横たわった。ついで、彼は自分の仲間、友達、待者らに前進するよう励ました。オッフアは槍を振り回し、口を開いた。「エルフウィネ殿、この難局に臨み、家臣全員によく諭^さしてください。我々の主君である隊長が地に倒れ伏されたからには、武器を、すなわち、硬い刃と槍、それと立派な剣を手に持ち、握ることができる限り、銘々が他の兵士を合戦へと鼓舞することは我々全員の務めである。オッダの憶病息子ゴッドリーチは我々を裏切った。彼が馬に、すなわち、あの立派な駒に跨^{またが}った時、たいがいの者はそれは我々の主君であると思った。そのため、軍勢はこの戦場で離散し、楯の列は乱れてしまった。この場であれば多くの者たちを逃亡させた奴の仕業に呪いあれ!」

(二二五—二四二)

レーオフスヌは語った。そして、しなの木の厚板の楯を防禦として掲げた。彼はその勇者(オッフア)に言った。「わしは一步たりともここから逃げることを望まず、さらに進んで戦い、わが主君の仇を討つことを誓う。わが殿が亡くなられた以上、わしが主君を失って故国に戻り、合戦に背を向けたとしても、確固不動の兵士たちはストゥール川の河口^セの辺り^{あた}で、そのことで口に出してわしを非難することはないであろう。それでも、わしは武器を、槍の先と剣を握むぞ。」彼は激しい勢いで進み、決然と戦い、逃亡を軽蔑した。ついで、老いた歩兵ドゥン・ネレが口を開き、槍を振り回し、全員に呼びかけた。彼はどの兵士もビュルホトノースの仇を討つよう促した。「軍勢の中で主君の仇を討ちたいと望む者はためらってはだめだ。命を気にしてはならん。」そして、彼らは前進し、命を物ともしなかった。

家臣たちは、すなわち、勇猛な槍の使い手たちは、果敢に戦い、親しかった主君の仇を討ち、敵に破滅をもたらすことが出来ますようにと神に祈った。あの人質も熱心に彼らの手助けを始めた。彼はノーサンブリアの豪族の出であり、エッジラフの息子で、名をエッシュフェルスといった。彼はその戦闘に臆することなく、頻繁に矢を放った。ある時は楯の上を射て、またある時は人を傷つけた。武器が揮える限り、再三再四、敵に危害を与えた。(二四四—二七七)

同じ頃、長身のエアドウェアルドは依然として戦列の中にあり、構えは万全、意欲は満々であった。彼は、自己より勇敢な主君が倒れたからには、たとえ一歩たりとも逃走したり、退却することは望まないと自信に満ちた言葉で言った。彼は敵の楯の壁を破り、敵の兵士たちを相手に戦い、海賊の中で立派に宝物の付与者の仇を討ち、そして、ついに自分も屍の間に倒れ伏した。高貴な仲間であり、熱烈で血気にはやるエゼल्लीーチも同じように必死に戦った。シービュルホトの兄弟と他の大勢の者たちは船形の楯を打ち砕き、勇敢に防戦した。さて、オッフアはその合戦で海賊を傷つけ、そのため、男は地の上へと倒れた。しかし、ガッデの血族(オッフア)もその場で大地に倒れ伏した。彼はその戦闘であつという間に切り倒されてしまった。しかしながら、かつて彼は自分の宝環の付与者に対して、共に城壁のある都へ馬に跨って無事に戻るか、それとも、敵の軍勢の中で倒れ、戦場で傷ついて命を落とすかのいずれかだと誓ったが、そのとおり、彼は主君に対する約束を果たした。家臣にふさわしく、彼は主君のそばで倒れた。

(二七三—二九四)

その次に、楯の衝突が起こった。海賊たちは戦に苛立ち、前進した。槍は命運の尽きた者の胴をししば貫いた。ついで、スルスターンの息子ウィースターンが進み出て、敵兵たちと戦った。ウィィエリーンの息子は屍の間に倒れ

るまで、敵の軍勢の中で三人を殺した。激しい衝突があった。兵士たちは戦闘の中で毅然としていた。戦士たちは傷で弱り果てて倒れた。屍は大地の上に落ちた。オズワールドとエーアドワールドの兄弟は、終始共に兵士たちを励まし、自分たちと同じ一族の者たちに対して、試練の場で耐え抜き、決然と武器を揮うよう言葉で要請した。ビュルホトワールドは語った——彼は年老いた家臣であったが、盾を握り、槍を揮い、とても熱心に兵士たちに説いて聞かせた。「わしらの力が衰えるにつれ、気概はいよいよ増大し、心はますます強く、勇気は一層大きくならねばいかん。わしらの偉大な殿はずたずたに切られて砂の上に倒れておられる。今、この合戦に背を向けようと願う者は永遠に嘆くことになる。わしは年寄りだ。逃れたいとは思わん。殿のそばで、大切な人の傍でわが身を横たえようと考えておる。」エゼルガールの息子ゴッドリーチも同じように全員を戦へと励ました。彼は何度も投げ槍を、殺戮の槍を、海賊めがけて投げつけた。このように、彼は率先して敵陣に分け入り、戦闘で倒れ伏すまで切りつけ、打ち負かした。彼は、しばらく前に合戦から逃げ去ったあのゴッドリーチではなかった。(二九五—三二五)

第二節 宗教詩

キリストとサタン

第一部 キリストに背いて天国から墮ちた天使たちの嘆き（一―三六五）

序（一―三三）

神が力と強さを持っておられるということが地上に住む者たちに知れ渡ったのは、神が大地の表面を定められた時であった。神はみずからその驚異的な力を發揮なされ、太陽と月、石と大地、大洋へと流れ出る川、海と空とを定められた。神は深い広大な海とこの世のすべてをみずからの力の及ぶ範圍内にすっかり収めておられる。神の正当な御子であられる創造主は、海を、すなわち、大洋の底を、見通すことができ、しかも、降り注ぐ雨の一滴一滴さえも数えることが可能である。神はみずからその眞^{まこと}の力を發揮なされ、日々の数を定められた。このように、創造主は栄光の聖靈の助けを借り、高い天国において六日かけて大地のそれぞれの地域と深い海とを企画し、設定なされた。^①永遠の神を除けば、一体だれがその巧みな業^{わざ}をことごとく知っているであろうか？（一―一八）

神は喜びと力と言葉とを与えてくださった——最初にアダムを、その次に彼の高貴な一族を、そして、後に滅びてしまった天使たちの先祖を、この世に授けてくださった。これらの墮落天使たちは、神と同じように自分たちも天上の主^{きりす}に、すなわち、栄光の支配者になれるのだという考えを心の中に抱いた。これらの悪魔たちが地獄の中へと、すなわち、燃え上がる焰によるひどい苦しみ^{くるしみ}に耐えねばならない恐ろしい洞穴の中へと、次々にすみかを構えた時、

もっと恐ろしいことがその地獄の中で起こった——貪欲で飢えた者たちは、天上の光と至高の住居を天国で享受することは全く許されず、恐ろしい渦巻く炎の中へ、すなわち、大地の下へ、地獄の底へと落ち行かねばならなくなるのだ。その罪深い多くの悪魔たちを神がどのような方法で追放されたのかは神だけが御存知のことである。(一九一—二三)

第一節 墮落天使たちの最初の嘆き (三四—二三)

さて、そうなると、旧敵サタン⁽²⁾は地獄から大声で叫び、恐ろしい口調で言葉を、すなわち、哀れな文句を、並べたてずにはいられない。「わしらが天国で享受することになっていた天使としての栄光は一体どこへ行ってしまったのだ？ このすみかは暗く、火の中で鍛えられた強い鎖でしっかりと固定され、床はゆらめく焰の中で毒々しく熱せられている。わしらが責め苦や苦悩や困窮を忍び、栄光の報酬である高貴な館での喜びを天上で味わうことがなくなってしまう時は、今からそんなに遠い先のことではないのだ。何たることか！ かつてわしらは天上で今よりも好ましい日々を過ごし、主の前で祝福を受け、歌を唄ったものだ。今、その天国では、高貴な者たちが永遠の主の回りで、すなわち、玉座の周囲に立ち、言葉と行為に表して神を称えている。それにひきかえ、このわしは苦痛の中に、束縛の内に、住まねばならず、わしの傲慢な振る舞いのせいで、これ以上のすみかは永久に期待できないのだ。」(三四—五〇)

すると、忌わしくて罪深い、恐ろしい精霊たちは責め苦に怯えながら魔王に言った。「おまえはわしらを騙し、救世主には従わなくてもよいと信じ込ませたのだ。天上と地上のすべてを掌握し、自分こそ聖なる神であり、創造主そのものだと思っていたのはおまえだけだった。そして、今ではおまえも罪人の一人として、燃え立つ牢獄にしっかりと

と固定されているのだ。栄光に包まれていた頃は、おまえは宇宙を、すなわち、すべてに対する権力を握っていると信じていた。そして、わしら天使たちも、おまえと共にそうであると信じていた。それにしても、おまえの容貌はなんと醜いことか！おまえの嘘偽りのおかげで、わしらは全員このような惨めな暮らしをする羽目となった。おまえは、人類の創造主は自分の息子であるというのは本当だとわしらに言ったではないか。そのおまえが、今ではわしらよりもひどい責め苦を受けているのだ。」（五一―六四）

このように、罪深い悪魔たちは、反逆的な言葉と悲痛な口調で、自分たちの頭に向かつて語った。キリストは喜びを奪われた悪魔たちを追放なされたのだ。彼らは傲慢な振る舞いのために、神の光を天上から捨て去り、自分たちの楽しみとして地獄の床を、すなわち、焼けつくような苦痛を受け取ったのである。青ざめた醜い悪魔たちはさまよい歩いた——罪人となった惨めな悪霊たちは、かつて犯した尊大な行為のために、恐怖の巣窟をうろつくこととなったのだ。（六五―七四）

その後、悪魔たちの首領は再び口を開いた——彼は自分に課せられた罰の大きさを感じて、改めて恐怖におのいた。彼が物を言うと、その口から火と毒の交じった閃光が放たれた。苦痛に喘ぐサタンが次のように語る時、これほど大きな喜びは外にはないのだ。「かつて天上にいた頃、わしは聖天使であり、神の寵愛を受けていた。わしは、ここにいる大勢の仲間たちと同様に、神と共に主の面前で大きな喜びを得ていた。ところが、このわしは、天の光を、すなわち、救世主の御子を亡き者にし、都のすべての権限を自分のものにしたいという気持ちを心に抱くようになった。^(三)わしが地獄へと連れていった惨めな仲間たちもそうだった。わしが罰せられて下へと、すなわち、大地の下へ、奥深い奈落の底へと追放された時、それは（わしらの運命に対する）明らかな前兆だったとわしは思う。わしはす

におまえた全員をそのすみかから、すなわち、故国から、束縛の状態へと連れ込んでしまった。ここには完全無欠な神の栄光もなければ、富める者たちの宴席も、世俗の悦楽も、それに、天使たちの集団も存在しない——わしらには所有すべき天上界はないのだ。この恐るべきすみかは火で燃えている。わしは神に敵愾心を抱いているのだ。地獄の門の近くでは、体の中が火で熱くなった竜が絶え間なく屯^{たむ}しておる。奴等にはわしらを助けることはできないのだ。惨めなわしのこのすみかは苦痛だらけだ。この深い闇の中には、わしらが自分たちの身を隠すことのできる隠れ家はない。ここには大蛇が住みつき、蛇の立てるシューという音が聞える。天罰によるこの束縛はしっかりと固定されている。悪魔たちは残酷で、陰惨で、おまけに凶悪だ。ここでは（光を遮られた）陰の薄明が優っているため、昼間でも創造主の光が差すことはない。（七五一—一〇六）

主であられる神が、地獄の床の上で罪に穢れたこのわしに命じられるものを、この恐るべき国で耐えねばならなくなるまで、わしはすべての栄光を掌握していたのだ。それが今では、わしは大勢の悪魔たちと共にこの薄暗いすみかへと旅してきているのだ。そして、傲慢さの元祖となってしまったこのわしとおまえたたちの多くは、時おり飛んだり跳ねたりしながら、すみかを探さねばならんのだ。（二〇七—二一四）

栄光の王が、かつてのように、すみかと故国と永遠の力をわしらの財産として喜んで与えてくださるだろうなどと考える道理はない——王の御息がすべてのもの、すなわち、賞罰に対する権限を持っておられるからだ。それゆえ、惨めで哀れなこのわしは、栄光を奪われ、人々から遠ざけられ、なお一層遠くへと立ち去り、流浪の旅路を歩まねばならず、天使たちと共に天上で喜びを享受することなどありはしない。それというのも、このわしこそ天の王国の主であり、被造物の支配者なのだと、以前に公言したからだ。しかし、もっと悪い事がわしには振りかかってきた！」
あるし

(一一五—一二五)

さて、惨めな魂は、すなわち、不正な行為のために咎めを受けねばならないサタンは、自分の苦しみを洗いざらい、さらに次のように述べたてた——毒の混ざった火の光が恐ろしい巢窟の隅々にまできらめき渡った。「罪のひどい痛手を受けたこのわしは、こんなに広いすみかの中でさえ、わが身を隠すことができないような体つきをしている。見ろ、ここでは時おり暑さと寒さが交じり合い、また、地獄の家来たちが、すなわち、泣き悲しむわしの一族の者たちが、大地の下で、時おり底なしの淵を嘆く声がわしの耳に聞えてくる。裸の人間たちが大蛇のそばでのたうち回ることもある。風の強く当たる全く奥深いこの館は、恐怖に満ちあふれている。(一二六—一二七)

わしはこれ以上快適なすみかや町や城を所有することを許されず、あの輝ける被造物(すなわち、天上の王国)をこの目でもう一度眺めることは永久にまかりならんのだ。祝福を受けた子供たちが皆で歌を唄いながら創造主の御子を取り囲んでいたあの天上で、わしらもかつて天使たちと共に天の光を浴び、歌を楽しんでいただけに、そのことは今となっては一層つらい。神が手元に置くことを望まれない魂は別として、たとえどんな魂でも、わしが危害を加えることは許されておらん。わしはそういう魂を束縛の館へと連れ戻し、恐ろしい深みへと運び込まねばならん。わしらは全員かつて天上で美と栄光を享受していた頃とは全く違ってしまっているのだ。わしらが全員主の手足となり、神の回りで、すなわち、尊い御方のそばで、称賛の歌の文言を主に伝えていた間、救世主の御子たちは幾度となく栄光の曲を心に留めていたものだ。それが今では、このわしは犯した行為によって穢れ、罪に傷ついている。わしはこれから地獄の中で喜びへの期待を奪われ、燃えながら、熱い思いをし、この罰の鎖を背に乗せて行かねばならんだ。(一二八—一二九)

その後、苦悩の番人である恐るべき悪魔は、責め苦に辟易へきえきしながら、地獄からまたも多くのことを嘆いた。この魔王が怒鳴った時、毒々しい言葉が火花と共に飛び出した。「おおっ！主の栄光よ！人々の救世主よ！神の力よ！人の世よ！輝かしい昼間よ！神の祝福よ！天使たちの群れよ！天国よ！なんたることか！すべての永遠の喜びを奪われてしまったがために、わが手で天国に達することはならず、わが目で天上を見ることは許されず、そのうえ、わが身で妙たえなるラッパの音を聞くことが永久にありえないとは！このわしが創造主の御子息であられる主をその玉座から追放し、歓喜と栄光と至福の支配権をわが手中に収めようと望んだがために、自分の喜びとしてかつて所有することを許されていことよりも悪いことが天上にいたわしの身に降りかかった。わしはあのきらびやかな（天使たちの）群れから切り離され、光（のある所）からこの厭わしいすみかへと連れてこられたばかりだ。極悪の罪に穢れたわしが、あの世から放逐され、この深い闇へとどのようにしてやってきたのか全くわからん。今にして思えば、天上の王に従おうとせず、神に仕えようと思わない者は、永遠の至福をすっかり奪われてしまうのだ。わしは万軍の支配者であられる神をその玉座から追い出そうと企てたがために、恩寵を剥奪され、これまでに犯した行為に穢れ、苦痛と苦悩、責め苦と困窮に耐えていかねばならん。これから流浪の道を、長い旅路を、悲痛な思いでたどっていかねばならんのだ。」（一六〇—一八九）

神の敵サタンは、罪を宣告された時、地獄へと立ち去った——神が貪欲で飢えきったサタンの家来たちを地獄という名の熱い館へ押し込まれた時も同様だった。だから、だれであれ、王の御子息の怒りを買うことがないよう気を配り、蒼白の悪魔たちが全員その傲慢さのために滅びた有様を、自分への教訓とせねばならない。万民の主を、すなわち、天上における永遠の歓喜であられる天使たちの支配者を我々の喜びとして選ぼう。神は多くの囚とらわれ人を高い

すみかから追放なされた時、みずからが偉大な技と素晴らしい力を保持しておられることを示された。天上におられる聖なる神を、すべての被造物の王と一緒に思い起こそう。キリストと呼ばれている王の中の王と共に、天上にある国を選ぼう。胸に心地よい気持ち、すなわち、親切心と分別を持とう。我々が高貴な館の方に向かって身を屈め、その支配者に御慈悲をお願いする時は、真実と正義を思い起こそう。この世で心豊かに暮らしている人は、後に別な人生を、すなわち、この大地よりも素晴らしい土地を求める時、自分の姿が美しく輝くことを望むであろう。天上には美しく楽しいものがあり、果物は都の中で明るく光り輝いている。また、天の王国には、広い土地が、すなわち、キリストに受け入れられた人々のためのもっと心地よいすみかがある。我々もそこへ出かけよう。勝利の支配者であり、救世主であられる神が貴い館に住んでおられ、玉座の回りには天使たちと至福に満ちた者たちの明るく輝く群れがあり、この聖なる天の一隊は言葉と行為に表して神を称えている。天使たちの姿は栄光の王のそばで永遠に光り輝く。

(一九〇—二二四)

第二節 サタンの再度の嘆きと天上への熱心な勧め (二二五—三二四)

さて、私は悪魔たちがさらに告白するのを聞いた。罪も罰もすべて悪魔たちにはとてもひどいものであった——それというもの、彼らが傲慢さのあまり栄光の王を放棄したためなのだ。悪魔たちは再び口を開き、早口に次のように言った。「わしらが天上の国で罪を犯したことは今や明らかとなった。その罪のために、神の御力ゆえに、わしらはこれから不名誉な試練を永久に受けねばならない。なんたることか！もしもわしらが聖なる神に喜んで従っていたなら、美しい天国の中で暮らせただろうし、神の御座の回りで何千回となく歌を唄うことになっていたに違いないものを。かつて天上にいた頃、わしらは喜々として暮らし、栄光の響きに、すなわち、ラッパの音に聞きはれたものだ。

弁舌爽やかな天使たちの創造主が立ち上がられると、聖なる人々はその高貴な御方に向かって跪ひざまずいた。勝利の誉れ高い永遠の神はわしらの上に立っておられ、神の尊い御子、すなわち、精霊たちの創造主は、罪のない人々を毎日祝福なされた。神自身は天上に到達なされ、しかも、かつて地上で神を信じていたすべての人々の守護者であられた。

(二二五—二四六)

その後、この王が強力で、しかも厳格であられることがわしの氣にいらなくなった。そこで、わしは一人で天使たちの近くに進み出て、彼ら全員に向かって次のように言った。『もしもおまえたがわしの力を喜んで認めるのなら、わしはいつまでも為になる忠告をおまえたちに授けることができる。あの偉大な守護者であられる万民の支配者を捨て、この天の王国の光をすっかりわしらのものとしようではないか。わしらがこれまでずっと耐えてきたものは、むなしい誇りにすぎないのだ。』(二四七—二五五)

その頃は、わしらがこのように神をその貴いすみから、すなわち、王をその都から追放しようという企ては、わしらにはもっともなように思われた。(そのあげく)、あちこちに知れ渡っているとおり、わしらは流浪の旅路に、すなわち、恐ろしい深淵に住まねばならなくなったのだ。神はみずから支配権を保持しておられる。神は唯一の王であり、永遠の主であり、また、力の強い創造主であられる——その神がわしらの腹をお立てになられたのだ。これから先、ここにいる多くの者たちが罪にまみれてこの地獄に横たわり、ある者は空へと逃がれ、地の上を飛び回らねばならなくなるのだ——しかし、たとえ高い所に昇っていても、地獄の火は至る所に、すなわち、だれの上にもあるのだ。首尾よく地獄の大地を離れて空中に舞い上がったとしても、魂を掴むことは永遠に許されん。それどころか、わしはそういう異教徒の集団である神の敵をこの手で捕まえ、深みへと引きずり込まねばならん。ある者は人の住む

国の至る所を歩き回り、人の世の隅々でしばしば争いを巻き起こさねばならなくなるだろう。わしはここで、心悲しく苦渋に満ち、ありとあらゆることに耐え、天上ですみかを得た時にわしが引き起こした厳しい争いの苦渋を舐めねばならない。しかし、永遠の主は、これまでと同じように、天の王国で、わしらの所有物として、家と土地を永久に与えてくださるであらう。」(二五六―二七九)

このように、熱い者たち、すなわち、神の敵は地獄で嘆いた。救世主であられる神は彼らの不敬な言動に対して腹をお立てになられた。それゆえ、心が清いもの、すなわち、生きとし生けるものはすべて、邪な考えと憎むべき冒瀆をわが身から取り去るように気を配らねばならない。我々は常に創造主の御力を心に留め、全能の神がおられる天上の天使たちの元へと至る緑の道を、自分たちのために準備せねばならない。そして、もし我々が地上で前もってそのことに配慮し、聖なる御方に我々への援助を期待すれば、神の尊い御子は我々を喜んで抱擁してくださるであらう。しかも、神は我々を見捨てられることはなく、天上の天使たちの中で生命を、至福に満ちた喜びを与えてくださるであらう。栄光に満ちあふれる神は、堅固な住まいを、すなわち、輝く都の外壁を我々に見せてくださるであらう。祝福された魂が天の都と王の住まいに永遠に住むことを許されるなら、この魂は苦痛から解放され、美しく輝くことであらう。これらのことを広く伝えようではないか！この世で生きている間に、もっと早く、首尾よく主の秘密を述べ伝え、謎を解き明かし、気高い心で理解しようではないか！もしも我々が天上のかなたに行くことが許され、しかも、それ以前にこの地上でそれにふさわしいことをしておれば、千人もの天使たちが我々を迎えにやってくることであらう。したがって、たえず偽りの誓いを咎め、創造主に仕え、罪の根を絶とうとする者は祝福されるであらう。事実、神はみずから次のように述べられた。「父の王国、すなわち、逃れの町において、正しい人々は美しく飾られ、太陽

のように輝くであろう。」創造主であられる人類の父はみずからそういう人々を取り囲んで保護なされ、天の光の中へと丁寧に掲げ上げてくださる——彼らはその光の中で永遠に栄光の王と共に住み、主である神と共に永久に、そこそ果てしなく、無類の喜びを享受することができるのである。(二八〇―三二五)

第三節 天国と地獄の最後の比較 (三一六―三六四)

ああ、それなのに、なんとということか！あの呪われた悪魔は、恐ろしいことに、天上の王であり慰安者であられる父には従わないと心に決めてしまったのだ。熱い地獄の床は囚われ人たちの足下で毒々しく波打った。悪魔たちは大声で叫び、風当たりの強い館のあちこちで不運と痛みと責め苦を嘆いた。このようにして、多くの者たちは地獄で燃された。これらの一行の者たちの中で最初に地獄へやってきた頭が火と焰にすっかり包まれた時、その苦しみたるや全く大変なものだった。それはまさに永久に続く天罰だった。彼の手下の者たちもその恐ろしい国に住まねばならず、地獄より上で、彼らが天使たちに取り囲まれてしばしば素晴らしい奉仕を受けた天の王国で、聖なる歌をもはや聞くことはない。このように、彼らはすべての恩寵を奪われ、しかも、人々の嘆きと悲しみ、歯ぎしりと泣き叫ぶ声が聞こえる深い淵の炎の中、それと惨めな住まい以外では住むことを許されない。寒さと暑さ、苦悩と拷問、大蛇の群れ、龍と毒蛇、陰鬱な館を除き、彼らは何の希望も持てない。そのため、地獄から一二マイルの距離まで近づく者には嘆き悲しんでいる歯ぎしりの大きな音が聞こえるであろう。神の敵たちは上からと外から火に熱せられ——彼らには苦痛はどこにでもあるのだ——罰に疲れ果て、栄光から引き離され、喜びを奪われ、地獄中を飛び回っている。彼らが天国で居を構えていた時、救世主キリストから天の王国を奪おうというサタンの恐ろしい計画に彼らは心を痛めた——しかし、当然のことながら、キリストは天国の住まいと神聖な御座を維持なされた。(三二六―三四八)

天国では、天使たちが祝福された喜びを享受し、聖なる人々が神の前で歌を唄う。その天国において、創造主の力によって、天の光が高貴な一族の人々の周囲で輝く様子があるがまさに語れるほど賢明で、強力で、しかも分別に富む者は、神を除いて外にはいない。人類の父が地上からやってきた人々を抱擁なされ、右腕で十字を切って、彼らの命である天上の住まいと輝ける都を永遠に享受できる光へと導かれる時、彼らは祝福され、神の御言葉そのものである花の香りと素晴らしい草木を胸に抱くことであろう。救世主に従おうと思うすべての人々には繁栄がもたらされるため、それができる人は幸福である。(二四九―三六五)

第二部 磔刑から最後の審判に至るまでにキリストに降りかかった出来事(三六六―六六四)

序 魔王の来歴の要約(三六六―三七九a)

今ではもう昔のことになるが、神の王国にはかつてルーキフェルと呼ばれる明かりの運び役の天使がいた。^⑧ところが、この魔王は誇りを得たいばかりに天国で争いごとを起こしてしまった。サタンは罪深いことに天上で永遠の主と共に自分も玉座を手にしたと考えたのである。彼はまさに(地獄の民の)頭であり、悪の張本人であった。救世主の憎しみの対象である彼とその一味の者たちが共に地獄へと身を屈し、不名誉な所へと落ちゆかねばならなくなった時、彼らはその企てを再び後悔し、しかも、救世主の永遠の御姿に接することは今後は一切許されなくなった。(三六六―三七九a)

第一節 地獄の征服(三七九b―五一)

神が地獄の門扉をこわされ、ねじ曲げられた時、恐怖が、すなわち、最後の審判者の前での喧騒が、悪魔たちの耳に達した。(一方、地獄にいるその他の)人々は救世主の顔を目にした時、喜びにあふれた。そして、我々が前に述

べた恐ろしい者たちに……。すると、風の吹きすさぶ館の至る所でだれもかれも恐れおののき、嘆き、そして語った。「この騒ぎが生じた以上、御供の者を引き連れた勇者であられる天使たちの王が出てこられたからには、ただごとではすまないぞ。わしらが天上で天使たちと共に過ごしていた頃を別とすれば、これまで自分たちの目でいつも見てきたものより美しい光が主の前を進んで行くぞ。神は栄光の力を用いて、これからわしらの苦しみをすべて終わらせようと考えておられる。この恐怖が、主の前での騒ぎが、やってきたからには、この哀れなわしら一行はこれから間もなく恐怖にさらされるに違いない。あの御方はまさしく支配者の御子息であり、天使たちの主であられる。主は魂をここから上へと導いていこうと考えておられる。そうすると、わしらはあの腹立たしい行為のために、今後永久に不名誉に耐えていかねばならなくなるのだ。」(三七九b—三九九)

さて、神は人の子のためにみずからの御力によって地獄へと向かわれた——神は何千という数の人々をそこから上へと、すなわち、祖国へと連れ戻したいと思われたのである。そして、明け方になると、天使たちの立てる物音が、ざわめきが、聞こえてきた——主はすでにみずからあの魔王を退治なされていたのだ。それでもなお、早朝になり、かねてからの恐怖が悪魔たちに訪れた時、彼らの敵意があらわになった。次に、神は祝福を受けた魂、すなわち、アダムの一族の者たちを引き上げられた。しかし、エバは、次のように口に出して言うまで、天を一瞥することは依然として許されなかった。「永遠の神よ！ アダムと私の二人は大蛇の憎しみによって食べてはいけないうりんごを食べてしまい、かつて神様のお怒りを買ったことがありました。そして、現在、束縛されたまま燃え続けている恐ろしい魔王が、栄光と聖なる住まい、それと天の国を手に入れるよう、私たち二人に頻りに勧めました。そこで、私たちはあの呪われた者の言葉を信じ、聖なる木になっている美しい果物を手で取りました。私たちがこの熱い巢窟に入り、長

い間、それこそ何千年もの間、焰にひどく炙^{あぶ}られながら、ここに留まらねばならなくなった時、神様はその行為に對して私たちに大変な報いをお与えにされました。(四〇〇—四二一)

さて、天上の王国の守護者様、こちらに連れてこられた人々の前で、神様と天使のみなさんがたにお願いします。私の一族の者と一緒に、どうか私をここから天上へと行かせてください。ところで、救世主の従者(である魔王)は三日前にすみかへと、すなわち、地獄へとやってきました。この魔王は、現在、束縛のために厳しい思いをし、責め苦に弱り果てています——このように、栄光の王は魔王の無礼な振る舞いに対して御立腹なされたのです。神様は、みずからこのすみかへ、すなわち、地獄の住人のところへ、降りて行きたいと、私たちにお話しくださいましたが、それは事実です。それで、だれもかれも、起き上がり、腕を頼りにして座り、手でもたれかかりました。地獄の恐怖はおぞましく思われましたが、みんな苦痛に喘ぎながらも、高貴な主が自分たちを助けに地獄にこられることを望んでおられることに満足しました。(四二二—四三六)

そして、エバは天国の王に向かって手を差し出し、聖母マリアの執り成しによって、次のように救世主に御慈悲を請うた。「お聞きください。主よ、あなたは人々をお助けになるため、私の娘からこの世にお生れになったのです。あなたは神そのものであり、すべての被造物の永遠の根源であられることが今や明らかとなりました。」すると、永遠の主はアダムたちを天上へと向かわせられた——一方、神はすでに悪魔たちには罰の束縛を課され、いっそうひどく意気消沈した彼らを深い闇へと突き落とされていた。そこでは、惨めな敵サタンと恐ろしい悪魔たちは今頃は責め苦に疲れ果て、腹黒い話をしていることだろう。彼らは栄光の明かりを享受することは許されず、地獄にいて、その底を暖めるだけである——これからさき、天国に帰ることを夢みることにすら永遠に認められない

のだ。このように、主なる神は彼らに腹をお立てになり、恐ろしい罰の鎖と身の毛もよだつ恐ろしい物、暗くて陰気な死の影、熱い地獄の底、および、死の恐怖を、持ち物として彼らに与えられた。(四三七―四五六)

さて、(アダムたちの)一行が上へと、すなわち、天の国へと戻り、人類の永遠の主も彼らと共に名高い都に帰り着かれたことは、誠に素晴らしいことであつた。聖なる人々、すなわち、予言者アブラハムの一族の人々が、自分たちの手で主を上方へと、天の国へと、押し上げたのである。その時は、神はすでに死を克服なされ、魔王を追放なされていた——予言者たちは神がこれらのことを望んでおられることをずっと以前に述べていた。騒々しい物音が天上から聞こえてきたのは曙光が見え始めた夜明け前のことであつた。それから、神は地獄の門扉をこわしてねじ曲げられた——悪魔たちがとても眩しい光を見た時、彼らの骨は砕けてしまった。(四五七―四六九)

それから、神の最初の御子は大勢の人々の中に座られ、真実のこもつた言葉で次のように語られた。「分別ある魂たちよ、私はみずからの力によって、おまえたちを創造した——まず、アダムとその高貴な妻を。その後、これら二人は神の命令に従つて四〇人の子供をもうけた。そのため、これら四〇人からさらに多くの者たちがこの世に生まれることになった。その後、魔王がこの者たちを罪に陥れることになるまで——悪魔はどこにいても敵意をみせるものだが——これらの者たちは何年もの間、この土地に住むことを許されていたのだ。：(四七〇―四八〇)

私は大枝のついた新しい木を天国に植えた。そのため、それらの枝はリンゴの実をつけた。そこで、おまえたち二人は憎むべき地獄の召使(サタン)が命じたとおり、あの見事な果物を食べてしまったのだ。救世主の言葉を無視し、あの恐ろしい物を口にしたために、おまえたちは熱い(地獄の)底を甘んじて受けることとなった。おまえたち二人に邪な考^{よこしま}えを吹き込んだ恐るべき奴はおまえたちよりも一足先に地獄にきていた。(四八一―四八八)

その後、私は自分の手になる創造物が牢獄の鎖を耐え忍ばねばならないことを後悔した。しかし、その時は、かつて報いとして懲罰を定められた救世主である神を除いて、おまえたちを助けることのできる人々の力も天使たちの強さもなく、また予言者の業^{わざ}も人の知恵もなかったのだ。そこで、私は処女（マリア）の執り成しによって、天上にある先祖代々のすみかから地上へと旅をして、この地上で多くの拷問と大変な難儀に耐えた。大勢の者たちは、すなわち、この地上の王国の顧問官たちは、昼も夜も、私のことについて画策した——どうしたらこの私に死の苦しみを与えることができるか、彼らは相談し合った。そして、定められた期限が過ぎ去り、あの苦しみを受ける前に、私はすでにこの世で三三歳になっていた。主の尊厳と人々の栄光を享受できるよう、私が束縛から解放し、天上の故国へと連れ戻さねばならない多くの人々のことを——そうなれば、彼らは喜びに包まれて暮らし、何千回も天上の至福を受けることであろうが——私は惨めなすみかにおりながらも、長い間、忘れはしなかった。兵士たちが木の上で、すなわち、十字架の上で、私を槍で突き刺した時、私はおまえたちのことを（神に）執り成した。その時、若い一人の兵士が私に切りつけた。そして、その後、私は天上で聖なる神から永遠の至福を受けたのである。』…（四八九―五二三）

第二節 キリストの復活と昇天、および聖霊降臨祭（五一四―五九七）

天国の守護者であり、人類の創造主であられる主なる神は、死の床からよみがえられた後、早朝になってから、言葉に表して先のように述べられた。神は鉄（の外壁）ですっかり取り囲まれていたものの、神の偉大な力に抵抗できるほどの強固な石は（墓の上に）置かれてはいなかった。そこで、天使たちの主は墓から外へと出られ、最も輝かしい天使たちに一一名の使徒たちを連れてくるように命じられた——とりわけ、シモン・ペテロ^①には、以前と同じよ

うに、ガリラヤ^{ガリラヤ}において永遠で強力な神に会わねばならない旨伝えおくよう、天使たちに指示された。(五一四―五二五)

その後、私はこれらの使徒たちが全員連れ立ってガリラヤに向かったということを聞いて知った。彼らは魂の祝福を受け、聖なる神の御子を見た——彼らはガリラヤで創造主の御子が、すなわち、永遠の主であられる神が、空高く立っておられる場所を眺めた。永遠の主が立っておられる間に、使徒たちは挙^{こぞ}って神の方へとかけ寄った。彼らは大地へとひれ伏し、跪^{ひざまず}いた。そして、彼らは天使たちの創造主をこのように目のあたりにすることができたことに對して神に感謝した。(五二六―五三三)

そして、シモン・ペテロは直ちに語った。「主よ！これが栄光に飾られた神であられますか？ 私たちはかつて一度お会いしたことがあります。それは、異教徒たちが手で神を憎むべき束縛の上へと乗せた時のことです——彼らが後でその結末を知ったら後悔することでしょう。」(五三六―五四一)

トマス^{トマス}と呼ばれる男が両手で救世主の脇腹を抱きかかえるまで——その時はすでに主は血を流され、洗礼の沐浴(へ、すなわち、血と水)は地に落ちていた——彼らの何人かはそれが高貴な御方であられることを心の中で把握することができなかった。(五四二―五四六)

高貴な神であられる我々の王が耐えられた行為は素晴らしいものであった。神は木の上に、すなわち、十字架の上に登られ、みずからの魂の御力によって血を流された。神は私たちを束縛から解放され、天上の国へと導いてくださった。そのため、私たちは神の栄光を享受することができ、さらに、喜びにひたって暮らすことができる。それゆえ、神の行為と創造なされたものに対して、いついかなる時であれ、私たちは神に感謝の気持ちを言葉に表さねばならな

265
い。正しい思いを抱く私たちには、輝かしい天上の光が示されることであろう。(五四七―五五七)

さて、永遠の神であられる天の都の住民の支配者は、聖なる魂を偉大な被造物へと、天の王国へと導きたいと思われるまで、四〇日間この地上で大勢の人々に従われ、人々の前に姿を見せておられた。そして、天使たちの創造主であられるたくさんの人々の支配者は天国へと昇られた。すると、雲の奏かなでる聖なる歌が天上から聞こえてきた。神の手はその雲の中にあり、高貴な主を掴み、天上の王は主を神聖なすみかへと連れていかれた。天使たちは何千と群れをなして主の回りを飛び交った。救世主キリストがその一〇日後に、みずからの魂の恩寵により、自分の弟子の十二使徒を力づけたとおっしゃった時、ちょうどそのようなことがおこった。そして、生きておられる神へ、すなわち、キリストへは、無数の魂を(キリスト教徒として)お認めになられた。かつて栄光の救世主であられる神を裏切り、生け贄にしたユダはその時は居合わせていなかった。彼は銀の宝物と引き換えに王の御子売り渡したため、その行為は自分の利得になることはなかった——邪悪な魔王は地獄の中で意地汚く彼にその報復をしたのである。(五五八―五五九)

さて、今、神の御子は、父の右手の上に座っておられる——万民の神はこの地上の至る所で、毎日人の子らに援助と救済の手を差し伸べておられる。栄光の御力ゆえに、キリストだけがすべての被造物の創造主であり、支配者であられるということは多くの人々に知れ渡っている。支配者であられる聖天使へ、すなわち、キリストへは予言者と共に天の王国に住んでおられる。栄光の御子は天空に包まれた御自身の玉座を持っておられる。主は救いによって私たちを天の光へと招いておられる——私たちは主と天使たちと共にそこに住み、その同じ光を享受することを許され、また、神の聖なる御供の人々も喜びに包まれてそこに暮らしていて、天の王国の輝かしい繁栄はここでは表れて

いる。我々が喜んで救世主キリストに従い、そして仕えるよう十分な配慮をしよう。天上には我々が地上でいつも享受できる生活よりも素晴らしい生活がある。(五八〇―五九七)

第三節 審判の日(五九八―六四一)

さて、高貴な王であり、全能の神であられる主は、最後の審判の日に私たちに：約束なされた。主は、町の家々や地上の隅々にまで：聞こえるよう、大きな音でラッパを吹き鳴らすことを大天使たちに命じられる。すると、人々はこの大地から目をさます——死者たちは神の御力によって土の中から起き上がる。そのため、救世主が来られる時は、すなわち、支配者が雲を引き連れてこの世に旅して来られる時は、最も長い日となり、また、最も大きな騒ぎが聞かれるであろう。(五九八―六〇八)

それから、主は美しい者と醜い者、善良な者と邪悪な者を区別なされ、二手に分けられる。そして、心正しい者たちは天の守護者と共に王の右手へと、すなわち、憩いの場へと昇っていく。それから、至福に満ちた人々は都へ、すなわち、神の王国へ入ることを許され：、そして全能の王は右手で十字を切ってこれらの人々を祝福なされ、全員に向かつて次のように言われる。「皆の者、よく来た。栄光の輝きの中へ、天の王国へと入り、そこでいつまでも永遠の憩いの場を楽しむがよい。」(六〇九―六一九)

そうになると、罪を犯したことのある悪人たちは立ち上がる——神の御子がみずからの行為の御力によって審判を下すことを望まれる時、彼らは震えあがる。彼らは他の人々と同じように高貴な都へ、上方の天使たちの元へ、昇っていくことを許されると期待していたが、永遠の神は彼らに語りかけ、全員に向かつて次のように言われた。「呪われた者たちよ！大急ぎで苦痛の館へと降りて行け。今後のおまえたちの行く末は私の知ったことではない。」この御言

葉の後、惨めな魂である地獄の囚われ人たちは、直ちに一団となって旋回しながら落ちて行き、悪魔たちの巢窟へとみずからを誘導し、奈落の底へと、激しい苦しみの中へと、突進することになる。そして、その後は、地獄から昇っていくことは永久にかなわず、その場で惨めな罰や束縛や牢獄、それに冷たく深い地獄の底に耐えねばならない。さらに、黒い悪魔たちがしばしば彼らを慰み物として扱い、また、これらの敵が彼らの憎しみと罰を咎めることのできる方法を相談し合う時、その話を我慢して聞かねばならない——それというのも、彼らは自分たちの喜びとすべき高貴な主を、永遠の支配者を、しばしば蔑ろ^{ないがし}にしてきたからだ。(六二〇—六四三)

第四節 勸告の言葉(六四四—六六四)

さあ、この世のどこであれ、救世主に従おうと心に決めよう。魂の喜びを、すなわち、祝福された神の御子たちが高い天空で座っておられる有り様を、神の御慈悲におすがりして熱心に考えてみよう！栄光の輝きの中へと、神の王国へと進み行くことを許されている者のために、天上の黄金の扉は宝石で飾られ、喜びに包まれ、そして、美しい天使たちの魂とこの地上から旅して行く至福に満ちた魂は、(天の都の)外壁の回りで光り輝く…。一方、その都の中では、殉教者たちは創造主に仕え、司教たちは聖なる声で王を称える。そして、だれもかれも次のように言う。「主よ、あなたは人々の守護者を、天の王国の審判を、天使たちの創造主を、地上の子孫たちを、この祝福された住まいへと引き上げられました。」このように、王のそばにいる御供の人たちは栄光の守護者を言葉に表して称える。玉座の辺りには大いなる荘厳さと歌の響きがあり、万物の主であられる王は永遠の被造物(すなわち、天国)の中心におられる。(六四四—六六四)

第三部 荒野でのキリストへの誘惑(六六五—七三三)

第一節 飢えについての誘惑（六六五―六八〇）

私たちの代わりに死の苦しみを受けられたのは主であり、天使たちの王である。さて、人類の創造主は四〇日の間、みずからの恩寵の力によって断食をなされた。^(二〇) 天国から追放された惨めな魔王がかつてすべての被造物の王を試した時、地獄へと落ちたのは当然のことであった。魔王はキリストの膝の近くに平たい石をいくつか持ってきて——もしもおまえがそれほど偉大な力の持ち主なら、と言って——自分の空腹を癒すために、（これらの石から）パンを作ってみよと言った。すると、永遠の神は魔王に次のように答えられた。「呪われた者よ、私一人を除いて何も書き印されていないとおまえは考えたのか：勝利の保持者よ、あなたは天上の王国で生きている者たちに対して光を、すなわち、限りのない報いである聖なる喜びを用意なされました。」（六六五―六八〇）

第二節 野望についての誘惑（六八〇A―七〇九）

：すると、恐ろしい悪意に満ちた禍の精（サタン）は、嘲るつもりで救世主であられる神を両手で掴み、肩の上に掲げ上げ、山の上へと登り、その山の上で神を降ろした。（そして、次のように言った。）「地上の住民たちをよく見よ。おまえの名誉となるように、わしはおまえに人と大地をくれてやる。もしもおまえが天使や人間の本当の王なら、かつての願いどおり、今ここでわしの手から町と広大な住まいである天の王国を自分の所有物として受けとれ。」（六八〇A―六八九）

すると、永遠の神は悪魔に答えて言われた。「呪われたサタンよ、苦痛の巢窟へと立ち去れ。おまえには神の王国ではなく責め苦が定められ、準備されているのだ。そればかりではない。最も崇高な力によって、私はおまえに次のことを命じよう——おまえが地獄の住人たちに希望をもたすことではないということ、おまえがすべての被造物

の創造主である人類の王に会ったという最大の苦痛を彼らに告げること。立ち去れ！呪われた者よ、血に穢れた地獄の天蓋がいかに広く長いかを知るために手で測ってみよ。地獄の底の方へ向かって手を伸ばし、その大きさがすっかり分かるまで、そのままの状態に進んで行け。まず上から底まで測り、次に黒い湯気がどのくらい広く満ちているか測定せよ。おまえが恐ろしい死の家を、すなわち、地獄の中がいかに広く深いものかということを手で測った時、自分は神に背いて争ったのだということがそれだけいっそうはっきりと分かるだろう。自分に定められた家を測り終えるまでに二時間立ってしまわないよう、直ちに出かけよ。」(六九〇―七二〇)

第三節 サタンの地獄への帰還(七二一―七三三)

さて、この惨めな者に応報の時が迫っていた。邪悪な敵サタンは駆け、責め苦の中へと落ちて行った。時おりサタンは手で苦痛と悩みの大きさを測った。この憎むべき悪魔に向かって黒い炎がめらめらと上がることもあった。囚われた者たちが地獄で横たわっているのを目撃することもあった。そして、彼らがこの恐るべき魔王を見た時、驚きの声が上がった。神の敵たちは争った。黒い悪の魂は地獄の底に降り立った。すると、その場所から地獄の門までは千マイルの百倍もあるように思えた——このように、強力な神はその御力によって魔王に苦しみを測ることを命じられた。そして、魔王は自分が地獄の底に立っていることを実感した。数多くの悪魔たちのこの上ない恐怖が姿を現すまで、このぞつとするような偽りの生き物はその目で厭わしい巢窟中を眺め渡した。すると、惨めな魂たちは苦痛に喘ぎながらサタンに言った。「見よ、これからおまえはこういう状態で辛酸をなめるのだ！おまえはこれまで良い事は何一つ望みはしなかっただろう！」アーメン。(完)(七二一―七三三)

創世記A

第一節 天使たちの地獄への追放（一―八一）

天の守護者であられる万物の栄光の王を言葉で称え、心の中で愛することは我々の大切な務めである。王は諸々の力の統率者であり、すべての高貴な創造物の支配者、全能の神であられる。主にはこれまで起源が、すなわち、始まりが訪れたことはなく、永遠の神の終末がこれから訪れることはない。それどころか、王は天の玉座の上にいつまでも力強く坐っておられる。尊い栄光に包まれた正しく豊かな主は天の内奥を支配してこられた。天は神の力によって栄光の王の子らと魂の保護者のために広々と大きく築かれたものである。天使の一群は自分たちの創造主の面前で、喜びと幸せ、素晴らしい祝福を得ていた。天使たちの栄光には大いなるものがあつた。（一―一四）

高貴な召使たちは主を称え、喜びに満ちて称賛の言葉を発し、生命の支配者を賛美した。王に選ばれた者たちの中で天使たちはこの上もなく幸福であつた。罪を犯すことを知らず、悪事を成す術^{すべ}を知らず、主と共にたえず平穩無事に過ごしていた。天使たちは天上で正義と真実以外の何事も成すことはなかった。しかし、一部の者たちは傲慢さゆえに過ちを犯すに至つた。墮落天使たちはもはや理性に従おうとはせず、神との友愛から遠ざかってしまった。そして、大勢が結託すれば、広くて神々しい栄光のすみかは神と共有できるといふ、とても横柄な考えを抱いた。争いを渴望する者が天の王国の北側にすみか高い席を得たいと口を滑らした時、その天使には苦しみ、妬み^{ねた}、傲慢さ、それに、悪巧みを最初に計画し、準備を整えて扇動した驕^{おご}りが表れた。そのため、神は腹をお立てになられ、かつてみ

ずから美と栄光を与えて称えられた天使の一群に対して怒りを露にされた。主はその天使の企てに対する報いとして、地獄の嘆き、厳しい拷問となる惨めなすみかを裏切り者たちに割り当てられた。我々の主は、地獄が永遠の闇に取り囲まれ、悲惨さに満ちあふれ、火と激しい寒さ、煙と赤い炎に満たされているのをはっきりと見届けられると、喜びを奪われた深い懲罰の館に向かって、(悪い)魂の守り手となるべき追放者たちを待つよう命じられた。ついで、王はその呪われた館全体に拷問の恐怖が漲るよう命じられた。恐ろしいことに、墮落天使たちは神に対して悪業の数々を積み重ねていた。それゆえ、それに対する厳しい報いがやってきたのである。(一五一—四六)

恐ろしい墮落天使たちは王国を占有したいと思い、また、その願いはごく容易に叶えられると言っていた。(しかし)魔王の支配者であられる天帝が天使の一群に対して手を高々と上げられた時、墮落天使たちの期待は裏切られた。高名な王が分別を欠いた腹黒い者たちの傲慢さを取り除き、驕りを抑えられたため、これらの天使たちは主に對して力を行使することはできなかった。主は御立腹なされ、罪人たちから勝利と力、栄光と繁栄を奪われ、そして、魔王からは喜び、保護、あらゆる楽しみ、輝かしい栄光を取り去り、みずからの御力によって敵を荒々しく地獄へ突き落とすことにより、憤りの復讐をなされた。主は毅然たる態度で臨まれ、激しく怒り、魔性の者たちを憎しみに満ちた手で掴み、怒りのあまり、腕の中で破壊させられた。このようにして、気高い王は敵を栄光のすみから追放された。(四七一—六四)

このように、我々の創造主は高慢な天使たちに審判を下され、この不信心者たちを天の王国から追放なされた。天の支配者は敵意を抱いた者たちの一行を、すなわち、惨めな魂たちを、地獄への長い旅へと送り出された。天使たちの誇りは碎かれ、高慢な心は挫かれ、力は押えられ、栄光は汚された。それ以後は、墮落天使たちは惨めにも苦痛の

中に身を委ね、地獄への旅ゆえに声を出して笑ういわれもなく、疲れ果てて地獄の拷問の中に留まり、不幸を、すなわち、苦痛と悲しみを味わった。墮落天使たちは神に対して戦を挑んだことによって、闇に包まれ、苦痛を、厳しい天罰を受けたのである。一方、天国では以前と同じように真の平和が、心地よい平穩な状態が訪れ、支配者であられる天上の王は自分に仕えるすべての者たちに愛されていた。至福に満ちた大勢の人々の栄光は天帝の近くで増大した。
(六五—八二)

第二節 天地の創造 (八二—一三四)

さて、栄光の館である天上に住む者たちは仲が良かった。荒くれ者たちが光を奪われて天国を去ってから、天使たちの間には争い、不和、敵対は途絶えた。疲れ果てた悪霊たちが惨めな流罪の地である拷問の囲いの中へと旅して以来、豊かな栄光に満ち、神の恵みがあふれ、きらびやかで榮譽のある席は、坐る者がいなくなり、あちこちに残されたままになっていた。(八二—九二)

そこで、我々の王は、高慢な敵が譲り渡した天上の輝かしい高い館を、栄光の創造物である居住地を、どうすれば再び善良な者たちのために整えることができるか、心の中でじっくりとお考えになられた。そして、聖なる神は強大な力を行使なされ、自分の保護の下から謀叛者として放逐なされた悪魔たちの代わりとして、地と天と海と生き物がこの世で、天の広がりの下で、みずからの強大な力によって創造されることを望まれた。(九二—一〇二)

その頃、地上には暗闇以外の何物も現れておらず、この広い大地は深く暗く、主の目に触れることなく、空で無の状態であった。決意を固められた王は、その大地を眺められ、そこには喜びが欠けているのに気づかれ、天の下では絶え間なく続く夜のために暗く、黒く、そして不気味で空しい闇が垂れ込めているのを見届けられた。そして、栄

257
光の王の御言葉によって、この世という創造物がついに出現することとなった。(一〇三—一一)

全ての創造物の守護者であり、全能の神であられる永遠の王は、まず初めに天と地を創り、空を定め、そして、強大な力によってこの広い大地を設けられた。その頃は大地にはまだ草の緑がなかった。暗い永遠の夜が海を、黒い波を、広く遠く包んでいた。そこで、栄光に輝く天の守り手である聖霊が大至急海の上に連れてこられた。生命の付与者であられる天使たちの王は広い大地の上に光が現れるよう命じられた。至高の王の命令は直ちに実行に移された。神聖な光は創造主が支持なされたとおり不毛の地の上にあった。(一一—一二五)

それから、勝利の支配者であられる王は海の上で、光を闇から、すなわち、明かりを影から分離なされた。つい、生命の付与者はこれらに名前を与えられた。美しい創造物である光は王の御言葉によって初めて昼と名づけられた。生産的な時である最初の昼は始めのうちは主にとって十分に満足のいくものであった。その昼は黒くて暗い影が広い大地の到る所から消えて行くのを見届けた。(一二六—一三四)

第三節 天地万物の完成(一三五—一八七)

ところが、時間はこの世という構築物の上を急いで通り過ぎていってしまった。そこで、我々の創造主であられる神はこの輝かしい光の後に最初の夕べをもたらされた。昼間の明かりの後を暗い闇が急に迫ってきた。主はみずからその闇に夜という名を与えられた。我々の救世主は両者を分割されたのである。両者はその後も引き続き地上で王の意図を実行し、役目を果たした。それから、闇の後に次の昼が、すなわち、光がやってきた。その時、生命の守護者は海の真中に希望に満ちた天の構築物が現れるよう命じられた。このように、我々の支配者は海を分割し、その次に天空という砦を作られたのである。そして、強力で全能の神はみずからの御言葉によってその砦を大地から引き離し、

上へと持ち上げられた。神聖な御力によって、流れる水は天空の下で分けられた。その水は国々の屋根となっている天空の下で今日でもなお存在している。(二三五—二五三)

次に、よく知られている三日目の朝が大地の上を急いで飛びながらやってきた。しかし、広い大地と道はまだ神の役に立つ状態ではなく、地面は流れる水にすっぱりと覆われていた。天使たちの主はみずからの御言葉によって水に集結するよう命じられた——その水は今では天の下で定められた場所と通り路を守っている。すると、聖なる王が命じられたとおり、広い海は直ちに天の下で一ヶ所に集まった。海はこの時に陸から分けられたのである。そして、選ばれた人々の保護者であられる生命の守り手は乾いた場所が広々と現れてくるのを眺められ、栄光の王はその場所を大地と名づけられた。王は広々と流れる水、すなわち、波にふさわしい通り路を設け、固定された。(二五四—一六八)

第四節 エバの誕生(一六九—一八七)

さて、天の守護者は、天国での新しい創造物であり、天国の守り手と保持者であるアダムがこれ以上一人であることは好ましくないと思われた。そこで、全能の神であられる至高の王はアダムの助けとなる者を創られた。生命の光の源であられる神は愛する人間のために女を創り、力添えとして与えられた。主はアダムの体から物質を切り離された。すなわち、主はアダムの脇腹から肋骨を手ぎわよく引き出された。アダムはぐっすりと寝込み、深い眠りについていて、痛みや苦しみは少しも感じず、傷からは血が少しも出なかった。天使たちの王はアダムの体から成長する骨を、すなわち、人間を、傷つけずに引き出された。神は骨から意のままに女を作られたのである。王は生命という永遠の魂を女に入れられた。このようにして、アダムの花嫁は魂を与えられ、二人は天使のようであった。二人は主の

御力によって共に若く美しく輝いた状態でこの世に生み出された。彼らは悪事の元を作ったり、引き起こすことは知らず、彼らの胸の中には王の燃えるような愛があった。そこで、全ての創造物の王であられる慈悲深い主は、父と母であり、男と女である人類の最初の二人に祝福を与えられた。そして、主は次のように言葉に表し、彼らに告げられた。「これから子を産み、増やせ。緑で一杯の大地を子孫で、すなわち、おまえたちの種族で、息子たちと娘たちで満たせ。塩の水とこの世のすべての創造物はおまえたちの思うとおりになるであろう。繁栄の日々と海の幸、それに空の鳥を味わうがよい。神聖な家畜、野生の獣、大地の上を歩く生き物、鯨の通り道の至る所から流れる水が命を与える生き物、これらはおまえたちの手に委ねられている。すべてはおまえたちのものだ。」(一六九—二〇五)

そして、我々の創造主はみずからの行為の美しさとみずからの創造物である生物の繁栄ぶりを眺められた。樂園は神の恩寵という永遠の恵みに満たされ、立派で神聖な状態にあった。流れ出る水は、泉は、その快適な土地に美しい水を注いだ。その広々とした地の上にこれまで黒い雲が風を伴って雨をもたらしたことはない。それにもかかわらず、その国は草木で覆われていた。この新しい樂園から四本の立派な川が流れ出た。主が大地を創造なされた時、これらの川はすべて主の力によって一つの美しい海から分けられ、この世に送り出された。地上に住む人々はこれらの川の一つをビソンと呼んでいる。この川は美しく流れる水でハビラという国の一部を外側から広く取り囲んでいる。聖書が我々に語っているように、人間は、すなわち、人の子らは、最も良質の金や宝石をその国の在来(こころ)の土壌の中(こころ)のあちこちで見つけ出している。次に、二番目の川は名前をギホンと言い、広大な王国エチオピア(3)の国と領土を外側から取り囲んでいる。第三の川はヒデケルである。この川は水量が豊富で、アッスリヤ国を囲んで流れている。四番目の川も同様である。現在、この川は多くの国のあちこちでユフラテと呼ばれている。(二〇六—二三四)

すると、高名な主であられる全能の王は正后過ぎにみずからの意志によって樂園の中へと入ってこられた。慈悲深い父であられる我々の救世主は自分の息子の成したことを確かめたく思われたのである。主は自分がかつて美を与えた者たちが罪深いことを知っておられた。アダムとエバは主の聖なる声を聞いて恐れ、悲しくなり、喜びを失い、木蔭へと逃げ込み、暗がり身を隠した。すると、天の王は直ちにみずから創造なされたこの世の守り手に尋ねられた。強力な王は息子にすぐ自分のところへ来るよう命じられた。すると、その哀れな男は衣類を身につけない状態で神に答えて言った。(三三五―八六六)

「私の生命の主よ、私は衣類がないのでここで身を隠し、葉で体を包んでいます。恐ろしく、痛々しいことに、罪深く冷酷な心が私の胸の中に宿っています。神の目の前に思い切って出ていくことはできません。全くの裸です。」(八六七―八七一)

第五節 蛇の誘惑(八七二―九一七)

すると、神は直ちにアダムに答えられた。「アダムよ、なぜおまえは恥ずかしそうに物陰を求めるのか？理由を言いなさい。おまえが私の手から受け取ったのは恥などではなく、すべての物に対する喜びなのだ。私が言葉に出して禁じた木からおまえがリングゴを取って食べたのでなければ、なぜおまえは苦しみを感じて恥部を隠し、悲しみを認め、そして自分の体を葉で覆い、惨めで嘆かわしい様子で命を氣遣い、自分には衣類がないと言うのか？」(八七二―八八一)

そこで、アダムは主に答えて言った。「王よ、美しい女である私の妻が、あの果物を私に手渡し、それを私が受け取ったため、主の御怒りを買ったのです。そのため、私は今自分の体の中に明らかな印印を帯びています。それだけに

一層多くの苦痛を味わっているのです。」(八八二―八八六)

そこで、全能の神はエバに尋ねた。「エバよ、おまえはみずから望んで木に手を伸ばし、木の枝から果実を取り、そして、私の非難を知りつつ、その有害な物を食べ、私がみずからの言葉によっておまえたちに厳しく禁じた果物をアダムに与えた。その時、とても豊かなる物、天国の新たな創造物、増大する恩寵に包まれていながら、おまえは何をしたのか？」すると、美しい女は、すなわち、恥じ入った(アダムの)妻は、神に答えて言った。「一匹の蛇が、まだら模様の大蛇が、私を騙し、甘い言葉を使い、邪悪な行為へ、罪深い欲望へと、頻りに私を唆したので。それで、恥ずかしいことに、私は憎むべき行為をやってしまい、厭わしい行いをし、——よくないことと知りつつ——茂みの中の木を掴み、その実を取って食べてしまいました。」(八八七―九〇二)

すると、全能の神であられる我々の救世主は蛇に、すなわち、まだら模様の大蛇に向かって、遠い旅に出るよう命じ、言葉で伝えられた。「命と魂がおまえに宿っている限り、永遠に呪われ、広い大地の上に胸と腹を押しつけ、足のない状態で動き回らせてやる。おまえには永遠に砂を喰わせてやる。おまえが憎むべき罪を犯したため、あの女はおまえを憎悪し、天国の下での敵とみなし、憎いおまえの頭を自分の足で踏みつけることであろう。新たな争いの場では、あの女の踝(の攻撃)がおまえを待っているぞ。この世が雲の下にある限り、おまえたち双方の間には争いが続くことであろう。悪意に満ちた人類の敵よ、おまえがどのような一生を送ることになるか、これでよく理解できたであろう。」(九〇三―九一七)

第六節 樂園からの追放（九一八一—二〇〇一）

ついで、神はエバに向かって腹立たしく言われた。「喜びから遠ざかれ！おまえを男の支配下に置かせ、男に対する畏怖に強く束縛させ、惨めにも自分の行為の間違ひに苦しませ、死を待ち望ませ、そして、苦痛の叫びと嘆き、大変な痛みの中で息子と娘をこの世に生ませてやる。」（九一八一—九二四）

生命の光の創始者であられる永遠の神はアダムに対しても同じように不快な宣告をなされた。「裸で惨めな者よ、おまえには別なすみかを、すなわち、もっと居心地の悪い場所を探させ、樂園の栄光を奪われた状態で流浪の旅をさせてやる。おまえには肉体と魂の訣別を定めてやる。見よ、おまえは憎むべき罪を犯してしまったのだ。それゆえ、おまえがこの世で生きている限り、すなわち、さきほどリンゴを通して飲み込んだ重い病がおまえの心臓を激しく襲うまで——それゆえ、おまえは死なねばならないのだが——おまえはこの大地の上で苦勞して自分の食料を手に入れ、額に汗してパンを食べることになるのだ。」（九二五—九三八）

さて、我々の恐ろしい苦しみとこの世の悲しみがどこから生じてきたのがこれで分かる。ところで、我々の創造者であられる栄光の守護者は衣服で二人を包まれた——主は最初の衣類^㉑で二人の恥部を隠すよう言いつけ、樂園から離れ、より厳しい生活へと入っていくよう二人に命じられた。二人が去った後、一人の聖天使^㉒が主の命令に従い、燃える剣を用いて喜びと快樂にあふれる居心地のよいすみかに鍵を掛けた。神ゆえに、すなわち、大勢の者にとって大切に偉大な生命を保持しておられる守護者が、力と強さを維持しておられるため、悪意に満ちた罪深い者はだれも樂園に入ることはできないのである。このように、アダムとエバは神に背いたが、全能の父は最初からすべての恩寵を二人から取り去るおつもりではなく、その時から、神聖な星で飾られた天蓋を二人を慰める物として留まらせ、豊

かな大地の富を二人にお与えになられた。神は結婚した二人がこの世で楽しめるものとして、実を結ぶことのできるあらゆる種類の果実を産み出すよう、海と大地に命じられた。二人は罪を犯してから、（罪深い）行為の後、放逐以前前の故国と比べてあらゆる点で劣る悲しい国に、すなわち、貧しい住まいと国へと落ち着いた。（九三九―九六四）

それから、二人は神の命令に従い、主が命じたままに、子供を産み始めた。アダムとエバの男の子たち、すなわち、カインとアベルという二人の立派な男の子が生まれた。聖書は行為の創始者であるこれらの兄弟がどのような方法で多くの富や食べ物を獲得したか我々に語っている。最初に生まれた一人は大地に対してみずからの力を行使した。もう一人はかなり多くの日々が過ぎ去るまで父親を助けて土地と財産を守った。そして、二人とも主に贈り物を捧げた。すべての創造物の王であられる天使たちの支配者はアベルの贈り物の方は自分の目で見られたが、カインの貢ぎ物の方は見ようとはなされなかった。このことはカインの心にとって重苦しい痛みとなった。そして、この男の心の中には苛立ち、無気味な憎しみ、嫉妬による憤りが沸き上がった。そこで、カインはみずからの手で罪深い行動を起こし、血縁である弟アベルを殺し、その血を流した。大地は殺された者の血を、すなわち、人間の体液を吸い込んだ。（九五―九八六）

恐ろしい襲撃の後で、不幸が、すなわち、苦悩の種が芽生えた——あの（りんごの）枝から、その後、憎むべき恐ろしい果実がより一層大きく強く育つようになった。罪深い枝は人間に向かって遠くにまで伸びた——悲しみの枝は触れた子供たちに痛みと苦悩を与えた。その枝から、今日でもなおそうであるように、諸悪の広い葉が芽を出した。我々がその話を、すなわち、過酷な運命を、苦悩の叫び声を上げて嘆くことがあったとしても、それには然るべき理由があるのである。すなわち、アダムが神の口から魂を得て成長して以来、美しい女が、大地の民である人間が、

創造主に対して行った最初の罪によって、我々をひどく苦しめたからである。(九八七—一〇〇二)

第七節 カインとアベル (一〇〇二—一〇八一)

さて、栄光の主は、アベルは地上のどこに居るのかとカインに言葉に出して尋ねられた。すると、神に見放された破滅の創始者はすぐに答えた。「アベルがどこからどこへ行ったのか、近縁の者の運命がどうなったのか、私は知りません。私は自分の弟の保護者ではありません。」すると、幸福の雲である天使たちの支配者はカインに向かって言われた。(一〇〇二—一〇〇九)

「なんとしたことだ！おまえは怒りのあまり自分の手で忠実な人間である弟を死の床へと打ち倒してしまったではないか。アベルの血は私に向かって泣き叫んでいるぞ。おまえはその殺害に対する罰によって苦しみ、永遠に呪われ、迫害の中へと向かわねばならない。大地は、おまえが手を下した被害者の神聖な血を飲み込んだため、美しい産物をこの世の必需品としておまえに提供することはないであろう。それゆえ、緑の大地はおまえから喜びと美を奪い去るであろう。アベルの殺害者となってしまったからには、惨めにもおまえは栄光を奪われ、自分のすみから出て行かねばならない。それゆえ、おまえは流人として、大切な血族にとって憎むべき者として、長い旅をせねばならない。」(一〇一〇—一〇一一)

すると、カインは直ちに神に答えた。「天上の至高の王よ、私は神の恩寵と愛と好意を失いましたので、この世ではもはやいかなる御慈悲も望むわけにはいきません。そのため、遠くであれ近くであれ、兄弟殺しという憎むべき行為を私に思い出させる者が罪深い私と出合いそんな時はいつでも、私は苦痛を予期して遠くへと逃げねばならないでしょう。私は弟の血を、血の塊りを、大地の上に流しました。今日、神様は私を救いから引き離し、住まいから追い

払おうとしておられます。敵意に満ちた者が私を殺しに来るでしょう。主よ、私は呪われて主の視野から離れねばなりません。」(一〇二二—一〇三五)

すると、勝利の王はカインに答えられた。「呪われたおまえは血族から離れて遠くへと旅立たねばならないが、死という恐怖を、死に至る苦痛を、まだ脅えることはない。もしもだれかが手を下しておまえから命を奪うことがあれば、その行為の後で、すなわち、その罪の後で、七倍の罰の苦しみがその者に降りかかることになる。」支配者であり栄光の神であられる主は、いかなる敵も遠くからであれ激しい攻撃をカインに加えることがないよう、カインに印を、すなわち、保護用の標識^(九)をつけられた。そして、神は罪で穢れた者に命じ、自分の家族である母と血族から離れて出て行かせた。すると、親しい者を失った追放者カインは、悲しそうに神の視野から遠ざかり、妻である綺麗な女がカインの血を分けた子供たちを育てている自分の祖国から遠く離れた東の^(一〇)国に、自分のすみかとなる場所を選んだ。カインの長男である第一子はエノクと名付けられた。エノクは後に血族の者たちと共に^(一一)砦を、すなわち、町を築いた。それは剣を帯びた高貴な者たちが築くように命じたすべての砦のうちで、天の下においては最初のものであった。その後、その町ではエノクの妻から子孫が、すなわち、息子たちが初めて生まれた。エノクの最年長の息子はイラデと呼ばれた。その後、一族の子孫、すなわち、カインの血族を増やすことになった者たちが生まれた。メホヤエルはこの世を去るまで父イラデの後を継いで家畜の世話をした。^(一二)(一〇三六—一〇六八)

その後、長い歳月を経て老いたメトサエルは、生命と訣別するまで、すなわち、命を放棄せねばなくなるまで、血族である自分の兄弟のために人間の宝である子供を次から次へと生み与えた。レメクは父の死後に家財を、すなわち、家屋敷を受け継いだ。二人の嫁のアダとチラという女はレメクの家で息子たちを生んだ。そのうちの一人の名前

はユバルであった。レメクの息子ユバルは賢明な配慮によって自分の手で豎琴の音を、すなわち、鳴り響く楽器を奏でた地上の最初の住人であった。(一〇六九—一〇八一)

第八節 アダムの子孫 (一〇八二—一〇八六)

さらに、同じ頃、その一族の中に一人の息子が生まれ、トバルカイン(Tubal-cain)と呼ばれた。この男は豊かな知恵と分別によって、鍛冶の技に秀でた最初の人物であった。このレメクの息子は鋤作りの創始者であった。その後、町の住人である人の子らは真鍮と鉄を広く用いる方法を知った。(一〇八二—一〇八九)

さて、レメクは愛すべきアダとチラという二人の妻に向かって恥ずべき話を言葉で伝えた。「私は身内の者を一人打って殺した。カインを殺害したことによって自分の手を汚し、アベルの殺害者であるエノクの父を自分の手で倒し、大地に人間の殺戮の血を与えた。(カインの)体が倒れた後には、その罪にふさわしい、真の王からの七倍の罰がくることが私はよく知っている。もしも逃げ出せば、私の犯した殺害と死は残忍な恐怖を伴ってより一層強く報われるに違いない。」(一〇九〇—一〇三三)

さて、その後、アダムの家には、アベルの代わりとしてもう一人の子孫が、廉直な息子が生まれた。その名はセツと言った。セツは祝福され、両親のために、すなわち、父アダムと母エバの慰めとして、立派に成長した。セツはアベルのこの世での身代わりであった。それで、人類の先祖は言葉に出して言った。「永遠の勝利の支配者は、生命の源であられる我々の王は、カインが殴り殺した愛すべき者の代わりとして私に息子を授けてくださり、そして、この子供を通して私の心から心配ごとを追ひ払ってくださった。このことに對して神様に御礼申し上げねばなりません。」

(一一〇四—一一一六)

後継者としてもう一人の子供（セツ）が妻から生まれた時、勇敢な男アダムはこの世で一〇〇と三〇年の人生を送っていた。聖書が我々に語るところによると、アダムはその後八〇〇年間にこの地上で自分の子孫を男と女によって増やした。魂と訣別することによってこの世から去らねばならなくなった時、アダムは合計九〇〇と三〇の年を経ていた。（一一一七―一二二七）

息子セツは両親の没後、大切なものを守った。セツは居を定め、妻を娶った。息子と娘をもうけて血族の者たちを増やし始めた時、セツは一〇五歳であった。セツの息子のうちで最年長の者はエノスと名付けられた。アダムが魂を授けられて緑の大地を歩み出して以来、セツは人の子としては初めて神に祈った。セツは神に祝福され、その後、八〇七年間にこの世で息子と娘をもうけた。生命との訣別をせねばならない刻限がきた時、セツは合わせて九一二歳になっていた。（一二二八―一二四二）

セツがこの世を去った後、すなわち、大地が子孫を増やし続けるセツの体を飲み込んだ後、エノスは死後の遺産を受け継いだ。婚姻によってこの世で妻との間に子供をもうけるようになるまで、エノスは神に愛され、九〇年をこの世で経ていた。そして、長男カイナンがエノスの家で生まれた。その後、八一五年間に、主の庇護の下で、この聡明な英雄エノスには若者たち、すなわち、息子と娘が授けられた。九〇五歳になった時、賢明な古老エノスは死んだ。

（一二四三―一二五四）

エノスの亡き後、カイナンが一族の指導者、保護者、族長となった。ちょうど七〇歳になった時、息子が生まれた——一人の跡取りが、すなわち、マハラレルと呼ばれる息子がカイナンの家で生まれた。その後、八四〇年間に、エノスの息子カイナンは生命を持つ人間の数を増やした。この世を去った時、すなわち、天空の広がりの下で寿命が

尽きた時、カイナンの年齢は合計すると九一〇歳であった。(一一五五—一二六八)

第九節 アダムの系図(二) (一一六七—一二五二)

カイナンの亡き後、マハラレルは長年にわたって土地と財産を所有した。この指導者が妻との間に子供をもうけた時、六五歳であった。嫁は、すなわち、その妻は、夫のために人々の元へと息子をもたらした。私が聞き及んだところによると、若い男であるその息子は家族の間でヤレドと呼ばれた。その後、マハラレルは長生きをして、この世での喜び、すなわち、人間としての楽しみと世俗的な豊かさを楽しんだ。そして、他界した時は八九五歳であった。マハラレルは息子たちに土地と国の支配権を譲った。その後、ヤレドは長い間、人々に黄金を分け与えた。^(四)信心深い男であり指導者であるこの領主は氣高く、血族の人々に敬愛された。妻が息子をこの世に産んだ時、ヤレドはこの世の王国において一六五年の歳を経ていた。^(二五)この息子、すなわち、高貴な長男は、エノクと呼ばれた。父親のヤレドはそれ以降も八〇〇年にわたって自分の一族の数、すなわち、息子たちの数を増やした。賢明な男ヤレドが去った時、すなわち、この世を離れ、賢くて愛しい息子に土地と国民の支配権を譲った時、彼は冬の夜の数で勘定して合計九六五歳^(二六)であった。その後、人々の指導者であるエノクは血族の者たちの守り手であった間に、權威、すなわち、保護する力を強め、判断力と統治権を損なうことはなかった。エノクは三〇〇年の間、繁栄の日々を過ごし、子供をもうけた。天上の支配者であられる王はエノクに慈悲深くあられた。この男は生身のままこの世から主の救いという喜びを求めた。そして、神が人間から所持品と食料、この世の宝物、それと命を取り去られる時、老いも若きも共にこの世で行うように、エノクは世俗的な意味での死によって滅びることはなかった。そうではなく、母親が自分をこの世に産む前に魂が受けていた衣を着て、生きたままの状態で、天使たちの王と共にこの世の束の間の生活から(天上

へと）旅立^(二七)った。エノクは国の民を長男である最年長の息子に託した。エノクがこの世を去った時、年齢は合計すると三六五歳であった。その後しばらくの間、メトセラは一族の財産を守った。メトセラは生身のままとしては最も長い期間この世の楽しみを享受した。そして、臨終の日までたくさん息子と娘をもうけた。この老人が人間の元から立ち去らねばならなくなった時、合わせて九七〇歳になっていた^(二八)。その後は息子のレメクが国を治め、長い間この世を支配した。この指導者に高貴な息子と娘が生まれる時期が訪れた時、彼は一〇二歳となっていた^(二九)。その後、多くの民の支配者であるこの領主は雲の下で五九五年間生き、長い歳月を楽しんだ。レメクは民をよく治め、子供をもうけた——子供たち、すなわち、息子と娘が生まれた。レメクはそのうちの最年長の子をノアと名づけた。ノアはレメクが死ぬ前に土地を人々に分け与えた。聖書が語るところによると、高貴な民の指導者ノアが初めて子供をもうけた時、五〇〇歳になっていた。ノアの最年長の息子はセム、二番目はハム、三番目はヤベテと名づけられた。人々は空の下でたくさん子供を産んだ。この世の至る所で家族の数は息子と娘によって増えた。神の子ら、すなわち、人間の子孫たちが神の意志に反して呪われた民カインの一族の中から女を探し、美しく奇麗であるが罪深い女を自分たちの妻として選ぶまで、敬愛された族長セツの一族は主にこの上もなく愛され、そして祝福されていた。(一一六七—一二五二)

第一〇節 洪水(一)(一二五三—一三二六)

さて、天国の支配者は人類に対して怒りの気持ちを伝え、言葉に出して言われた。「カインの子孫たちが私の気持ちから離れてしまったのではなく、この一族の者たちが私をひどく怒らせたのである。今度はセツの子供たちが私の怒りを新たにし、私の敵の娘たちを嫁として選ぶうとしている——女の美しさ、乙女の容貌、それと、永遠の敵

(サタン)が、かつては穏やかであつた大勢の男たちの心をひどく蝕^{むしば}んでしまった。」(一二五三—一二六二)

その後、数でかぞえて一二〇年の間、この世では、死すべき運命にある人々は神の復讐によって苦しめられた。主は信仰を捨てた者たちに苦しみを与え、行いが罪深い巨人の息子たち、神に憎まれた者たち、悪事を働く大男たち、主にとって不愉快な者たちを打ちすえ、死に至らしめようと思われたのである。(一二六三—一二六九)

勝利の支配者であられる神は地上にはさまざまな人間の罪があることをお知りになられ、人間が罪に対して無頓着で、全く邪悪であることをみずから確認なされた時、人間の一族に厳しく復讐し、強い力で人類を激しく、痛々しく圧死させようと考えられた。神はアダムを創造なされた時、この人類の祖先である最初の人間に生命をお与えになられたことにひどく悩まれた。人間の罪ゆえに地上にあるすべてのものを破壊し、胸の中の命と魂を守っている肉体をすべて滅ぼそうと望んでいると神は言われた。主は人の子らに迫りつつあつた来るべき刻限にすべてを破滅させることを望まれた。(一二七〇—一二八四)

レメクの息子ノアは善良で、救世主に愛され、とても幸福で心正しく、正義感にあふれていた。主はこの男の強さは分別によって増大するであろうと思われた。そこで、すべての被造物の守護者であられる聖なる神は、人間に敵愾^{てきがいしん}心を抱いている自分が何を成そうと望んでいるか、ノアに聞こえるように告げられた。主は広く肥沃な平原が、大地が、不正に満ち、罪の重荷を背負い、腐敗で汚染されていることに気づかれた。そこで、我々の救世主であられる支配者は口を開かれ、ノアに語られた。(一二八五—一二九五)

「空と海が産み、育ててきた人間と、あらゆる種類の生き物、家畜と家禽を洪水で殺そうと思う。黒い水が、暗い恐ろしい水の流れが、罪深い惡の張本人である人間たちを飲み込む時、おまえと息子たちは守ってあげよう。自分の

ために船を、すなわち、大きな海の家を作るよう準備なさい。大勢の者が休憩するための場所を船の中に設け、大地が産み出したそれぞれのものにふさわしい席を作りなさい。船の奥には階段状の座席を設けなさい。そして、船は、幅は五〇キュビト¹⁰⁰、高さは三〇キュビト、長さは三〇〇キュビトに作り、継ぎ目の部分が波に耐えられるように強く作りなさい。それから、大地の果物の種子を含むあらゆる種類の生き物の種をその木の要塞の中へ運び込まねばならない。箱舟はその分だけ大きくなければならない。」(一二九六—一三一二)

ノアは救世主に命じられたとおり実行し、聖なる天の王に従い、大急ぎで館を、すなわち、巨大な海の箱を建造し始めた。ノアは恐るべき事態が、すなわち、神の厳しい懲罰が人々に加えられるようとしていることを自分の血族の者たちに告げた。(ところが)彼らは全くそのことを意に介さなかった！(一二三四—一三一九)

それから、かなりの年が過ぎ、約束に忠実であられる神は巨大な海の館、すなわち、ノアの船が、内側と外側を最良の漆喰^{しっくい}によって流れる水から守られ、完成して聳^{そび}えているのを見届けられた——この漆喰は特殊な種類のもので、荒れ狂う水が、すなわち、黒い海水が、強く当たるとそれだけ一層強くなるのである。(一二三二〇—一二三二六)

第一節 洪水(二) (一二三二七—一四〇六)

そこで、我々の救世主はノアに語られた。「人間の中で最も親愛なる者よ、おまえと、おまえが連れて行かねばならない生き物の子孫は、船の中で何十日もの間、深い海を越えて航海することになるが、このことについて私はおまえと約束しよう。私の命令に従い、おまえの息子、すなわち、三人の高貴な子孫たちとおまえたち四人の妻^{さい}を箱舟^{こくふね}の甲板の下へと連れて行きなさい。そして、人間の食料として生きていくことになる生き物を、それぞれ数にして七つずつ、その他のものをそれぞれ二つずつ、船の館の中へ運びなさい。同じように、おまえと一緒に洪水から生き残る

はずの人々のために、食料を、すなわち、大地のすべての産物の一部を、波の板の下へと運び込みなさい。海を旅する生存者のために、私が後で空の下で食べ物を差し出すまで、命あるものに気前よく食料を与えなさい。さあ、それでは家族を連れ、他の仲間の者たちも一緒に、あの館の中へと入って行きなさい。私はおまえが善良で意志の固いことを知っている。おまえも息子たちも私の慈悲と恩寵に価する。これから七晩たったら、私は天上からこの広い大地の上に壊滅的な雨を降らせる。私は四〇日間にわたり人間に復讐をするつもりである。そして、黒い雲が立ち昇り始めた時、箱舟の甲板の外側にあるすべての財産とその持ち主を洪水で滅ぼすつもりである。」（一三二七—一三五五）

そこで、ノアは救世主に命じられたとおり、人間を、すなわち、息子たちとその妻を、箱舟の甲板の下へと、波の板の中へと導くため、その場から離れた。そして、全能の主が子孫として生き残って欲しいと願われたすべてのものは、万民の全能の神がみずからの言葉によって命じられたとおり、屋根の下への食べ物の供給者（ノア）の元へと行った。天の王国の守り手であられる諸々の勝利の支配者はノアの後ろにある海の館の戸をみずからの手で締められた。そして、我々の救世主は、繁榮するようにと、箱舟の中でノアを祝福された。レメクの息子ノアは神の命令に従い、息子たちと共に、若者たちと連れだって、親愛なる者たちと一緒に、甲板の下へと降りて行った。その時、この賢者は六〇〇歳であった。主は天から雨を降らせ、すべての泉を水路から外させ、この世の至る所へと水を押し寄せさせ、黒い水の流れを突進させられた。海の水は岸を越えて高く昇った。水を支配しておられる主は強く、また、厳しくあられた。主はこの世の悪の末裔と人間の祖国を黒い波で包み隠された。神は建物を破壊され、人間に心の痛みを押しつけられた。四〇日もの間、昼も夜も、海は運の尽きた人間の方へと力強い手を伸ばした。この禍わざわいは人間にとって恐ろしく、しかも残酷なものであった。栄光の王の波は不信心な者たちの魂を肉体から追い出した。洪水はすべて

の物を覆った。空の下で荒れ狂う洪水は広い大地の至る所で高い山を包んだ。そして、我々の創造主であられる神は、みずから船の戸を閉じて祝福なされた箱舟と高貴な者たちを、共に大地から海の上へと持ち上げられた。(二三五六—一三九一)

すると、この最高の館は雲の下を、水の通り路の上を、遠くへと進み、船荷と共に動いた。聖なる神が船を運ばれ、守られたため、恐ろしい水は海を行く人々を航海の途中で捕らえることはできなかった。洪水は岡の上(ヒル)一五エルのもの深さがあった。それはよく知れ渡った出来事であった。高い所へと持ち上げられた箱舟を除き、洪水が滅ぼすもののはついに何物も残らなかった——決然たる王であられる永遠の聖なる神は、従順な洪水に対して水量を増して上昇するよう命じられたが、その時、天の神によって守られた箱舟の甲板を除き、大地が産み出した物は水の力によってすべて滅ぼされたのであった。(二三九二—一四〇六)

第二節 洪水(三) (一四〇七—一四八二)

ところで、勝利の支配者であられ、生命という明かりの源であられる神は、水を避けるようにと船の奥へ閉じ込めた航海者たちを、すなわち、レメクの息子とその後継者たちのことを、お忘れになってはいなかった。そこで、万軍の王は約束どおり、(洪水と)戦う者たちを広い大地の上へと導びかれた。湧き上がる洪水は減少し始めた。黒い水は空の下で後退した。真の王は自分の子供たちのために洪水を、輝く水の流れを、元どおりにさせ、雨を止ませた。

(一四〇七—一四一六)

洪水が鯨(びょう)の打たれた板を、すなわち、最高の船を、持ち上げてから、恐怖の時間の長さが日を追って減少していくまで、泡だらけの船は一五〇日の間、空の下を進んだ。そして、海の館としては最大のノアの箱舟は積み荷と共にア

ルメニアと呼ばれる山の上に高々と留まった。黒い波がノアを海の水に乘せて広い大地のかたの遠方へと運んで行ったため、ノアは長い間苦しい思いをした。この聖者、すなわち、レメクの息子は、全能の神であられる生命の守り手がこの恐ろしい旅に憩いの場所を与えてくださるまで、長い間、その山の上で真の約束を待った。(一四一七—一四三〇)

洪水は去っていった。人々は、すなわち、海を行く人々とその妻は、狭い場所から鋸を打たれた甲板の上に出て、海岸の上に行き、閉じ込められていた所から持ち物を運び出すことが許される時を待ち焦れた。さて、船の案内人(であるノア)は空の下で洪水が徐々に引きつつあるのかどうか試そうとした。そして、宝物(である箱舟)と大地が産み出した高貴な者たちが高い山腹に着いてから何日かたった時、レメクの息子は館から一羽の黒い鴉を洪水の上へと飛び出させた。ノアは、鴉が途中で陸地を見つけられなければ、海を越えて波の板まで喜んで戻ってくるだろうと考えた。しかし、ノアのこの期待は裏切られた。なぜなら、この敵は海に漂う死体に止まったからである——黒い羽の鴉は戻ろうとはしなかったのである。(一四三二—一四四八)

それから七晩たった時、ノアは緑の大地がまだ泡立つ海にたとえわずかでも残されているかどうか調べるため、箱舟から灰色の鳩を放ち、増大した水の上を黒い鴉の後を追って飛んで行かせた。鳩は目指す物を求めて広く遠くへと飛んだ。しかし、鳩は休む場所を見つけられなかった。すなわち、洪水のために脚で陸地に止まることができず、険しい山腹まで水で覆われていて、流れる水のために木の葉の上を歩くこともできなかったのである。この野生の鳥は夕方になってから箱舟を目指して黒い波の上を飛び、疲れ果て、腹をすかせて、聖なる男の手の上へと降り立った。

(一四四九—一四六三)

それから一週間たって、この野生の鳩は再び箱舟から飛ばされた。鳩は遠くまで飛び、広い空間に満足した鳩はついに美しい休憩場所を見つけ、そっと木の上に脚で降り立った。鳩はひどく疲れていたため、美しい木の枝の上に座ることができてとても喜んだ。鳩は羽を振って乾かし、土産を持って飛んで戻った。この旅人は緑の小枝を、すなわち、一本のオリーブの木の枝を（ノアの）手へと持ち帰った。それを見て、水夫たちの隊長は救いが、すなわち、苦しい旅からの開放がやってきたことにすぐ気づいた。そこで、この幸運な男は一週間目が過ぎてからもう一度野生の鳩を一羽飛ばせた。鳩は陸地を、すなわち、緑の森を見つけたため、再び船に飛んで戻ることはなかった——もはや鳩にはその必要がなくなったため、この喜びに溢れた鳥はその後、黒い甲板の下や箱舟の上へと姿を現そうとはしなかった。（一四六四—一四八二）

第三節 祝福と契約（一四八三—一五五四）

すると、天の王国の守護者であられる我々の救世主は、聖なる言葉でノアに語られた。「住まい、地上の喜び、航海の憩いの場、大地の上の美しい物、これらは再びおまえに与えられた。箱舟から出て安全な場所へ行きなさい。そして、海が第三のすみか^(一四)を力で覆い、支配していた間に、私が山腹で洪水から守ったおまえの家族とすべての生き物を高い館から大地の表面へと運び出しなさい。」（一四八三—一四九二）

ノアは主に従い、そのとおり実行した。そして、主の声が命じたとおり、とても喜んで岸边に立ち、（洪水の）怒りから逃れた者たちを波の板の下から外へ出した。そして、賢明なノアは救世主へ贈り物をする準備をし、恩寵として主からノアに与えられたすべての物から、すなわち、自分の持ち物の中から、一部分を神への貢ぎ物として急いで取り出した。そして、この高貴な男は天使たちの王であられる神にその捧げ物を提供した。我々の救世主はノアとそ

の子供たちと共に祝福なされた——ノアが感謝の気持ちを込めて貢ぎ物を差し出したこと、若い頃に立派な行為を成したことによって、すべての慈悲において寛大で、すべての恩寵において公平であられる強力な全能の神は、ノアに対しては寛大であるに価することを示された。さらに、栄光の王であられる主はノアに次のように言われた。(一四九三—一五一一)

「さあ、産んで増やしなさい。平和で無事な喜びに包まれ、栄光に浸るがよい。大地を満たし、すべてを増やしなさい。すまい、海の産物、空の鳥、それに野の獣、緑一色の大地と多産な家畜、これらはおまえのものとなるであろう。恥ずべきことに、血を流して、すなわち、罪と生命の血に穢れて、自分たちの食料を得てはならない。^(一五) 槍の先で他の人から命を奪う者はだれでも、真っ先に自分自身から魂の恵みを失うことになる。そのような者は殺害の成果を心から喜ぶいわれはない。なぜなら、人は武器や手を使って悪事を、すなわち、人殺しという流血の惨事を、容易に行えるため、私は殺害者とその兄弟からそれだけ厳しく人の命の代償を求めるからである。人間はそもそも神に似せて創られたのである。聖なる習慣を喜んで維持しようとする者はだれでも、神や天使たちと同じ形をしている。産み、増やし、地上で神の意志と恩寵を享受するがよい。大地の至る所で、おまえの後継者たちで、家族や一族で満たしなさい。私はおまえに約束しよう——この世に、この広大な陸地に、水の力を、水を、二度と再びもたらさないと。この世が存在する限り、私が虹を示す時、私が人間に対してこの約束を果たす明白な証拠をおまえたちは何度でも見ることができよう。」(一五一二—一五四二)

そこで、レメクの賢明な息子である財産の守り手は三人の息子と共に洪水の後で初めて船から出た。(四人の妻は)ベルコバ、オッラ、オリヴァ、オリヴァニと呼ばれた。^(一六) 主は洪水の生存者に対して約束を守られた。勇敢な英雄たち、

すなわち、ノアの息子たちは、セムとハム、三番目はヤベテと呼ばれた。これらの男たちから人が増え、この世全体が人の子で満たされた。(二五四三—二五五四)

第四節 ノアの子孫(二五五—二六六)

さて、ノアは親しい血族の者たちと共に新たに住まいを構築し、食べ物を得るためにみずから大地を耕し始めた。

ノアは(大地と)闘い、働き、ぶどう畑を作り、多くの種を蒔き、そして、緑の大地が四季ごとに素晴らしい贈り物を、すなわち、美しく輝く果物を、自分にもたらししてくれる時期をひたすら待ち望んだ。(二五五—二五六)

さて、この幸運な男は自分の家でぶどう酒を飲み、酒盛りで疲れ果てて寝込み、自分で体から衣類を脱ぎ捨ててしまった。みっともないことに、ノアは裸のまま寝てしまった。ノアは聖なる者(である自分)の館の中で目まいを感じた時、それほど無様なことが自分の家の中で自分の身に起こっていることに少しも気づかなかった。眠っている間にノアの意識はきわめて稀薄となり、そのため、心を奪われたノアは、(神の)栄光の下僕が燃える剣で我々の父や母(すなわち、アダムとエバ)の背後で生命の故国を閉ざして以来、男と女に運命づけられているように、自分の手で体を衣類で包み、恥部を隠すことができなかった。(二五六—二五七)

それから、ノアの息子ハムは、父親が意識を失って横たわっている所へとやってきた。ハムはその場で父親に対して親しげに敬意を表すことも、血族の者から恥部を隠すことも望まず、それどころか、父親が館の中で寝ている有様を笑いながら兄弟に話した。そこで、セムとヤベテはその大切な人をかばうため、巧みに外套の下に顔を隠し、急いで歩み寄った——二人とも立派であった。さて、レメクの息子は眠りから醒めて飛び起きるとすぐ、高貴な者をかばう必要がある時にハムが親切心と愛情を全く示そうとしなかったことに気づいた。このことは聖なる者にとって

心の痛手となった。そこで、ノアは自分の子供に呪いの言葉を浴びせ、ハムは天の下で、大地の上で、血族の者たちの惨めな下僕となるべきだと言った。その後、この呪いはハムとその子孫たちを厳しく苦しめることとなった。(一五七七—一五九七)

さて、洪水の後、高貴な男ノアは三五〇年間にわたるこの世での寿命と広大な国を息子たちと共に享受し、その後亡くなった。(二五九八—一六〇二)

その後、ノアの息子たちは富を分配し、子供をもうけた。彼らの富は素晴らしいものであった。さて、ヤベテには若者たちが、すなわち、息子や娘という幸福な血族が生まれた。ヤベテは立派な男であった——すなわち、(体から)出ていくことを望む魂が神の審判を受けて出て行かねばなくなるまで、彼は常に王国を支配し、子供たちに囲まれ、家族の団らんと繁栄を享受した。その後、ヤベテの息子ゴメルは親しくて血のつながりの強い血縁の者たちに父親の家財を分け与えた。大地が生み出すもののうち、かなりの分がゴメルの血統の子孫で満たされた。(一六〇二—一六一四)

同じように、子孫が、すなわち、ハムの息子たちが、その国で生まれた——年長の(二人)はクシとカナンと呼ばれ、とても立派な人物で、ハムにとって最初の息子たちであった。父親の死後、すなわち、死がハムを襲い、ハムが肉体から離れて以来、クシは高貴な者たちの頭かしらとなり、宝物を、この世の富を、家財を、兄弟たちに分配する者となった。この指導者は寿命が尽きるまで、一族のために種々の意見を述べた。そして、この男は、すなわち、ニムロデの父は、この世の喜びを捨て、別な生命を求めた。その後、広く世に知られた男は、すなわち、クシの長男は、世襲の地位についた。聖書が我々に語るところによると、ニムロデはその当時、人類の中では最大の力と権威を持って

いた。^(二九)高貴な者たちの頂点にいたニムロデはバベル王国の創設者であった。ニムロデはこの国の栄光を築き、広め、そして増大させた。その頃は、言葉はまだ地上の住人にとって唯一共通のものであった。(一六一五—一六三八)

第五節 バベルの塔 (一六三七—一七一八)

このように、ハムの一族から多くの人々が生まれた。この大きな氏族から偉大な子孫が輩出した。(一六三七—一六三九)

さて、多くの人々の賢明な族長セムが年月を経て臥所^{ふしど}を選ぶまで、セムから立派な子供たち、すなわち、多くの息子と娘がこの世に生まれた。この一族の中に勇敢な男たちがいた。セムの息子であるこのうちの一人はエベルと呼ばれた。この勇敢な男から多くの人々が生まれた。地上の住人であるこれらのすべての高貴な人々は、現在、ヘブル人と呼ばれている。(一六四〇—一六四八)

その後、これらの人々は家財、家畜、食料を東へと運んだ。彼らは勇敢であった。屈強な男たちは広い土地を探し求めた。これらの高貴な移住民は子孫がしっかりと定住するにいたった場所に集団でたどり着いた。(一六四九—一六五四)

その後、人々の指導者たちは親しい仲間と一緒に広大なシナルに定住した。彼らが生きている間、平原は緑を保ち、当時の人々にとって大地は美しく、永遠のものであり、あらゆる富が豊かに増えていった。(一六五五—一六六〇)ところが、この国の大勢の人々、すなわち、決然たる勇士たちは議論し、そして、一族の多くの人々がこれから土地を探し求め、大地が生んだ息子たちの中へと分散してしまう前に、自分たちの名譽のために町を建て、その象徴として空の星まで届く塔^{TOUR}を高々と築くことにした。それというのも、彼らはシナルの平原を探し求め、この国で最も力

のある指導者である族長たちがその後長い間（この地で）平穩に暮らしていたからである。人々は族長たちの指示に従い、罪に値するこの作業に精を出し、傲慢さと愚かさゆえに天に向かって階段を高々と建て、名誉を渴望するあまり、力にまかせ、腕づくで、分不相応な石の壁を築きあげた。そこで、聖なる神は人間の仕事を、すなわち、兵士たちの砦とアダムの子孫が天に届けとばかりに高々と建て始めていた標識を、見に来られた。そして、決然たる王はこの邪惡な計画を妨害された。神は怒ってさまざまな言葉を地上の住人にあてがわれたため、彼らはもはや言葉をうまく操ることができなくなった。（一六六——一六八）

そこで、彼らは大勢でその塔のある場所に集まり、（塔の建立という）計画の力強い首謀者たちと会った。（しかし、）だれも他の氏族の者が話す内容をその場で理解することができなかった。その時から、彼らは石の壁を築くのに意見が合わず、言葉によって互いに隔てられ、惨めな思いで当てもなく石を積んだ。神が力を存分に發揮され、人間の言葉をばらばらに分けられてから、どの氏族も互いに疎遠となってしまった。そして、高貴な者たちの子供たちは結束を失い、新たな土地を求めて四方に散った。彼らが去った後、固い石の塔と高台の町はいずれも未完成の状態でシナルに残された。（一六八——一七〇）

その後、雲の下ではセムの一族の者が生まれた。（それから、）バベルでは、この貴族（テラ）に息子たちが、すなわち、二人の立派な子（三）が生まれた。これらの指導者たちは、すなわち、勇敢なこれらの英雄たちは、アブラムとハランと名付けられた。天使たちの主はこれら二人の貴族にとって友であり、指導者であられた。（一七〇——一七二）それから、ハランには生涯にわたり愛すべき一人の息子が生まれた。彼の名はロトであった。若い勇者アブラムとロトは、名誉なことに、主の庇護の下で成長した。それはこの世の王国で年長者たちから受け継いだ高貴な性質が彼

らに備わっていたからである。それゆえ、彼らは現在も大勢の子供たちに広くその恩恵を授けているのである。(一七二一—一七二八)

第一六節 アブラムの召命と移住(一七一九—一八八九)

さて、アブラムが一人の女を、すなわち、妻を、彼が所有していた美しく立派な館へと連れて行かねばならない定められた刻限がやってきた。この女は、書物が我々に語っているように、サライと呼ばれた。二人はその後、何年もの間、この世(での生活)を楽しみ、長年にわたり平穩無事に共に豊かさを享受した。しかし、その時は、輝くばかりに美しいサライがアブラムの跡継ぎを、すなわち、息子と娘を、この世にもたらすことがまだ許されていなかった。

その後、アブラムの父は家族と共に食料を携えてカルデヤ人たちの国を出た。この賢明な男は血縁の者と一緒にカナ人たちの国に行くことを望んだ。主に選ばれた同族の者、すなわち、アブラムとロトは、父と一緒に故国から旅に出た。その後、生まれのよい貴族の子供たちは、すなわち、(二人の)男は、妻と一緒にハランに定住した。忠実な勇士アブラムの父はこの地で命を落とした。年を経て賢くなった彼が運命を受け入れて旅立った時、彼は指折り数えて二〇五歳であった。(一七一九—一七四三)

その時、聖なる御方が、すなわち、天の王国の守護者であられる永遠の神が、アブラムに向かって言われた。「さあ、出かけよ。おまえの財産である繁殖用の家畜を連れていけ。父親の祖国ハランを捨てよ。最も愛すべき男よ、おまえは私の教えによく従うが、私の命令どおり旅をし、そして、私がおまえに見せてやりたい緑一面の国を、広大な国を探せ。おまえは私の庇護の下で祝福されて暮らすことになる。地上の住人のだれかが悪意を抱いておまえを迎えるなら、私はその者に私の呪いと憎しみと永遠の苦しみを与えてやる。しかし、おまえに敬意を払う者に対しては、

私は喜びとたくさんの宝物を授けてやる。地上の住民である人類は全員、おまえのおかげでこの世の王国において平和と友情、私の祝福と恩寵を受けるであろう。大地が、すなわち、多くの国々が、おまえの子孫で満ちるまで、おまえの一族の数は天の下で息子と娘によってずいぶん増えるであろう。」(一七四四—一七六六)

その後、きわめて高潔なアブラムは金と銀を授けられて豊かで幸福になり、勝利の守護者であられる我々の支配者がみずからの言葉によって命じられたとおり、エジプト人たちの国を離れ、財産と家畜を運び出し、ハランと別れてカナン人たちの土地と国へと向かった。そして、神に愛された彼は女たちを、すなわち、自分の妻と甥の妻を、思いどおり父祖の地へと連れていった。彼がハランと一族の者たちの元を去らねばならなくなった時、七五歳であった。

(二七六七—二七七八)

さて、アブラムは全能の父の教えを心に留め、主の命令どおり旅立ち、国境を越え、遠い国を探し求めた。そして、この勇士は首尾よく旅を続け、シケムへ、すなわち、カナン人たちの国へとやってきた。すると、天使たちの王であられる力強い万民の神がアブラムの前に姿を現され、次のように言われた。(二七七九—二七八六)

「これは私がおまえの子孫の支配に任せたいと願う国、全くの緑で覆われた明るい広大な領土である。」そこで、彼は祭壇を築き、命の光の源であり魂の守護者であられる王に生け贄を捧げた。アブラムは自分の目で最高の国を探すために東方から再び旅立った。彼は勝利の王がみずから聖なる言葉で彼に真実を告げられた時、この天の守護者の約束を喜んで心に留めた。そして、大勢の人々はベテルと呼ばれる村に着いた。(その後)、喜びにあふれた男とその弟の息子は、すなわち、敬虔な男たちは、東方から荷物を携え、よく知られた国と壁のように高くそびえる丘陵を通り抜け、彼らの目に美しい平原と映った場所を自分たちの町として選んだ。(二七八七—一八〇四)

第二七節 エジプト滞在（一八〇五—一八八九）

アブラムは再び祭壇を築いた。彼はその場所で素晴らしい言葉で神の名を呼び、自分の命の守護者に生け贄を捧げた。寛大さに富む神は、その行為に対して何ら惜しまれることなく、祭壇において自分の手から彼に褒美を与えられた。

（一八〇五—一八一〇）

その後、恐ろしい苦しみ、苛酷で破滅的な飢饉が、カナン人たちの国へ、すなわち、この国の住民と男たちの元へと押し寄せてくるまで、指導者であるこの兵士（アブラム）は妻と一緒にしばらくの間この町に住み、楽しく過ごした。（飢饉に襲われた時、）主を選ばれた忠実で思慮深いアブラムは活路を見い出そうとしてエジプト人たちの所へと行き、不幸から逃れた。この苦しみはあまりにも強すぎた。（一八一—一八一九）

アブラムはエジプト人たちの破風造りの白い家々と高地にある町が綺麗に輝いているのを見て言った——賢明な男であるこの夫は妻に次のように言葉で指示した。（一八二〇—一八二三）

「妖精のように美しい妻よ、大勢の勇敢なエジプト人たちはいずれおまえの美貌を眺めることになるであろう。そうなれば、貴族の指導者たちは美しいおまえが私の妻であると思い、おまえを自分のものにしたいと望む者も出てくるであろう。邪悪な者が欲情に駆られ、刀の先で私の命を奪おうとするのではないかと私は恐れる。サライよ、我々には見慣れないこの国の人々が、遠方からきた外国人である我々二人はどういう間柄なのかと尋ねたら、自分は私の妹で、血族だと言いなさい。本当の話は彼らには全く伏せておいた方がよい。全能の支配者であられる我々の守護者がこれまでと同様にこの世で私にもっと長い命を授けてくださるなら、おまえはこうすることによって私の命を守ることになるであろう。我々の今回の旅は主が定めてくださったものだ。それゆえ、我々がエジプト人たちのの中にいて

も、彼らに好意と援助を求め、便宜を計ってもらえるはずだ。」(一八二四—一八四三)

そして、勇敢な兵士アブラムは荷物を携えてエジプト人たちの中へと入っていった。この国では、人々は彼を知らず、彼には友人はいなかった。多くの勇敢な者たちは、力を誇りに思う男たちは、彼の妻の容姿について言葉で語った。彼女の美貌は多くの勇者や王の近侍の兵士にとって素晴らしく思われた。彼らはこれほど美しい女を王の前で見たことがないと王に伝え、サライの美しい容姿を言葉で強く称賛したため、宝物の付与者である王はその美しい女を自分の館へと連れてくるよう命じた。そして、貴族たちの守り手は宝物を与えてアブラムをもてなすよう言いつけた。しかし、主なる神はこの女に対する愛ゆえにパロに敵意を抱かれ、怒られた。(そして、)未婚の若者たちの喜びである神はパロとその家族に対して彼女のことで厳しい報いをなされた。そして、兵士たちの王は支配者であられる神が何ゆえに自分を罰の鞭で懲らしめられたかに気づいた。エジプト人たちの王は恐怖におののき、アブラムを自分のところに呼び寄せ、彼の妻である女を彼の元へ返し、どこか別の国で友人や貴族や別の人々を見つけるよう命じた。それから、この国の王は、自分の部下の召使たちに、アブラムを傷つけることなく礼を尽くしてこの国から連れ出し、安全な場所に案内するよう命じた。(一八四四—一八七二)

そこで、アブラムは荷物をエジプト人たちの国の境の外へと運び出した。力の強い者たちはこの女と妻と宝物を運び出した。その結果、彼らは家畜、豊かな富、女、貴重品、この世の宝物を馴染み深い町ベテルまでもう一度運ぶこととなった。その後、彼らは自分たちで町を築き、家を建て、館を再建し始めた。かつてアブラムが西からやってきた時、人々は支配者であられる神のために祭壇を築いたが、彼らはその場所に近い平原で祭壇を作った。神に祝福された彼はそこでもう一度永遠の神の名を称えた。善良な心の持ち主であるこの指導者は天使たちの王に生け贄を捧げ、

229
喜びと慈悲に対して生命の光の主に厚く感謝した。(一八七三—一八八九)

第八節 ロトとの別れ(一八九〇—一九五九)

アブラムとロトはその町に住み、十分な楽しみを得て、富も蓄えた。しかし、彼らはもはやこれ以上その国で繁栄を享受することも財産を所有し続けることもできなくなった。そのため、この敬虔な男たちは遠い別な場所です居住地を探さねばならなくなった。忠実な男たちの間でも不和がしばしばおこり、勇者たちの間でも争いが生じ、多くの人々を巻き込んだ。そこで、名誉を重んじる聖なる男アブラムはロトにやさしく語った。「血縁関係から言うと、私はおまえの伯父であり、おまえは私の甥である。二人の間に不和が生じてはならない。争いが生まれてもだめである。神はそのようなことを望んでおられない。我々二人は血族だからだ。愛が十分長続きすることを除いて、二人の間に何事があってもいけない。ロトよ、国境の周辺には我々に対して傲慢な者たち、兵士と家来で守られた強力な人々、勇敢な戦士を抱えたカナン人とペリジ人が住んでいることを忘れてはならない。彼らは自分たちの土地に対する権利をこれ以上我々に譲ることを望んではない。だから、我々二人はこの国から出て、彼らの敵意をかわし、もっと遠いところで我々が住むべき土地を求めねばならない。ハランの息子よ、私は我々二人の為になることを語り、真実を述べよう。わが愛する者よ、私はおまえの判断を尊重しよう。選択の自由を与えるから、家畜を連れてどの方向に行きたいか自分でよく考えなさい。」(一八九〇—一九一九)

そこで、ロトは土地を、すなわち、ヨルダンの近くの緑の大地を求めて旅立った。その土地は、救世主であられる神がソドムとゴモラの人々の罪ゆえに燃え立つ黒い炎を彼らに与えられるまで、水によって生命を与えられ、神の王国に似ていた。そこで、ハランの息子は住むべき場所を探し、定住した。彼は自分の全財産を、すなわち、指輪や家

財、宝物、ひねった黄金^(三四)をベテルからソドム人たちの町へと運んだ。その後、彼はヨルダンの近くで何年も住んだ。この国の住まいは綺麗であったが、人々は不信心で、神にとって不快な存在であった。ソドムの部族は罪に無頓着であり、行いが誤っていた。彼らはたえず悪い計画を実行した。ロトはその国に住まねばならなかったが、彼らに馴染み深い慣例を決して受け入れようとせず、その部族の習慣、すなわち、虚偽と罪を避け、品行方正で勤勉な彼は、その国でも正しく振る舞った。それは、神の教えを心に留めた彼があたかもこの部族のなすことに気づかないかのごとくであった。(一九二〇—一九四四)

その後、アブラムはカナン人たちの本国に住んだ。天使たちの王であられる人類の創造主はあふれんばかりの喜びとこの世の富、愛と慈悲を与えられて彼を保護された。このことに対して、人間の子孫たち、大地の子供たちは雲の下に至る所で神を称えた。信心深くて賢明なアブラムはこの世に住んでいる間、その住まいで喜んで神に従った。人間は、たとえ無防備であっても、思考の力によって、心と行為において、言葉と知恵によって、賢明な考えに従い、生命と訣別するまで常に神の恩寵を求めるのであれば、主の前でいかなる人間も恐れ怖がることはない。(一九四五—一九五九)

第一九節 王たちの戦い(一九六〇—二〇一七)

その後、私が聞き知ったところによると、エラム人たちの王であり勇敢な指導者であるケダラオメルは遠征を命じた。アムラベルは彼を助けるために大軍を率いてシナルを出発した。四人の王は^(三五)大軍と共にシナルから南へと向かい、ソドムとゴモラを目指した。(一九六〇—一九六六)

そのため、これらの男たちの故国はヨルダン付近で四方を軍隊に包囲された——大地は敵に取り巻かれた。恐怖

のために顔が青ざめた多くの女たちは震えながら異国の者たちに支配される運命にあった。花嫁と宝環の守り手たちは致命的な傷を負って倒れた。その時、彼らを迎え撃つ五人の王が軍隊を率い、激しい攻撃をしかけながら南から駆けつけ、ソドム人たちの町を敵から守ろうとした。かつて一二年もの間、(ソドムの)人々は北からの侵入者のためにやむをえず貢ぎ物を差し出し、税を納めねばならなかったが、彼らは自分たちの宝物によってエラム人たちの王を豊かにすることをこれ以上望まず、ついにこの王に背いた。(一九六七—一九八一)

殺戮を好む両軍は怒りに燃えて進んだ。槍はうなり声を上げた。羽が露に濡れた黒い鳥は槍の飛び交う下で死体を期待しながら歌った。勇気あふれる兵士たちは兜に守られ、強固な隊列を組んで進軍し、南から、北から、遠くから駆けつけた。戦場では激しい闘い、恐ろしい槍の投げ合いがあり、大きな闘いの声、騒々しい争いの音がした。勇士たちは宝環で飾られた切っ先の鋭い刀を鞘から抜いた。勇者たちはこれまでの争いでは満足が得られなかったような戦利品をこの戦場で容易に見つけた。北の人々は南の民を畏に掛けたのであった。黄金の提供者であったソドムとゴモラの住民はその戦場で大切な仲間の兵士を奪われた。住民は逃亡することによって命を守るため、その住まいから立ち去った。彼らが通った跡には、貴族の子供や貴い仲間が刀で切られ、剣の先で突かれて倒れていた。エラム人の軍の指揮者は戦の勝利を手にし、殺戮の場を支配した。刀(の攻撃)から生き延びた者は岩を目指して立ち去った。敵が黄金を略奪し、男たちの豊かな町ソドムとゴモラを大勢で荒らした時、悪名高いこれらの町は幸運に見放された。乙女も新婦も寡婦も身内の者を奪われて住まいから逃げ出した。敵はアブラムの血族(ロト)を財産もろともソドム人たちの町から連れ去った。我々はこの事実をさらに詳しく述べることができる。すなわち、ロトとこの国の人々の財産、および、南の国の人々の宝物を運び去り、勝利を喜んだ戦の狼たちに、その争いの後どのような運命がふりか

かったかについて語ることができる。(一九八二—二〇一七)

第二〇節 ロトの救出(二〇一八一—二〇九五)

この戦から逃れた一人の兵士、すなわち、槍(の攻撃からの)生存者は、アブラムに会うために急いで旅立った。彼はヘブルの貴族(アブラム)に今回の戦闘と、殺された大勢のソドムの人々、住民の財産、および、ロトの消息について告げた。そこで、アブラムはこの悪い知らせを味方の者たちに語った。信頼の厚いこの英雄は(最初に)親しい仲間のアネルに、(次いで)マムレに、そして三番目にエシコルに援助を請うた。彼は最も深い悲しみに沈み、もしも自分の甥が奴隷の苦しみを味わうことになったらとてもつらいことだと言った。彼は自分の血縁の戦士(ロト)が妻と一緒に救出されるような計画を立てるよう、戦闘において勇敢な男たちに頼んだ。腕に自信のある三人の兄弟はこれに答え、すぐに力強い言葉でアブラムの悲しみを和らげた。そして、彼らは協力して彼の苦悩の仇を討つ、さもなければ戦場で倒れようとアブラムに約束した。(二〇一八一—二〇三八)

そして、この聖なる男は自分の家来の一団に武器を取るよう命じた。そこには戦士が、すなわち、主君に忠実な三一八名の槍兵がいた。彼は全員が黄色の楯を携えて堂々と出兵できることを知っていた。そこで、アブラムと彼に誓約をした三人の勇士は軍隊を率いて出発した。アブラムは自分の血族ロトを不幸な事態から解放することをひたすら望んだ。戦士たちは勇敢であり、楯を携えて大地の上を力強く進んだ。戦の狼たちは(敵の)野營地の近くへとやってきた。そして、テラの息子である賢明な男は両側から敵に痛烈な戦いを、激しい打撃戦を見せてやれと指揮官たちに言葉で伝えた。彼は最大の難局に直面していた。彼は聖なる永遠の神がこの槍の戦で自分たちに喜んで力を貸してくださるであろうと言った。(二〇三九—二〇五九)

その後、私が聞き及んだところによると、勇士たちは夜の闇の中をあえて戦鬪へと突き進んだ。野営地では楯と槍の立てる音、兵士の倒れる音、矢が楯に当たる音がした。鋭い槍は男たちの衣類の下を激しく襲い、そのため、敵の命は数多く散った。その場では勇者と家来が勝ち誇って戦利品を運んだ。戦での男たちの栄光である勝利は北国の人々の攻撃から背を向けてしまった。アブラムが甥の身代金として（敵）に与えたものは、決してひねった黄金（の飾り）ではなく、戦争であった。彼はその争いにおいて敵を倒し、殺した。天の王国の守護者は彼に加勢された。四つの軍隊はそれぞれの国の王と人々の指揮官もろとも敗走させられた。喜んだ人々の一行は彼らの後を見送った。ソドムとゴモラの人々から黄金を盗め取り、執事たちを連れ去った兵士たちは倒れ、置き去りにされた。ロトの伯父（アブラム）は彼らに厳しく報いた。エラム人たちの主だった貴族たちは栄光を奪われて敗走し、ダマスコにほど遠からぬ所までやってきた。アブラムは憎むべき男たちの退却を見届けるため、軍用道路に出た。貴族のロトは所持品と一緒に救出され、乙女や既婚の女も喜びを回復した。彼らは猛禽が貴族の殺害者たちの上に乗って引き裂くのをあちこちで目撃した。アブラムは南の国の男たちの宝物と花嫁と高貴な人々の子供たちを家により近い所へ、乙女らを家族の元へ、連れて帰った。この世で生きているすべての人の中で、少数の軍勢で堂々と遠征し、これほど大勢の敵を攻撃した者はいない。（二〇六〇―二〇九五）

第二二節 メルキゼデクの祝福（二〇九六―二二七二）

恐ろしい敵の最後はどのようなものであったかという戦の情報は、その後、その場から南へと、ソドムの人々へと伝えられた。貴族たちを奪われ、味方が少なくなったこの国の王はアブラムに会いに行った。彼はサレムの人々の宝物の守り手と一緒にいた。この人物は国の祭司でもある高名なメルキゼデクであった。彼は贈り物を持ってきて、兵

士たちの指導者アブラムに恭しく堂々と挨拶し、彼に神の祝福を願い、次のように語った。(二〇九六―二一〇六)

「この度の戦においてあなたに槍の栄光を与えられた御方の目の前で、並み居る勇者の中で、あなたは栄誉を授けられました。その御方は神であり、神は憎むべき多くの敵の軍勢を力強く打ち破られ、勇者たちの進む道を武器によって広々と切り開かせ、戦利品を取り戻させ、そして、(敵の)兵士たちを打ち倒させられた。彼らは(死んで)置き去りにされてしまった。敵軍は戦に勝利を収めることができず、神によって敗走させられた。神はこの度の戦において(敵の)優勢な力の恐怖からあなたと指揮官たちをみずからの手で守られました。また、あなたが天の守護者との間で正当に維持しておられる神聖な契約もあなたを守りました。」(二一〇七―二一一九)

そこで、勇士はこの祝福に対して自分の手から彼に褒美を与えた。すなわち、アブラムは神の祭司にすべての戦利品の一〇分の一を贈った。その時、兵士を戦で奪われた闘将、ソドム人たちの王は、アブラムに向かって次のように言った。(二二二〇―二二二五)

「あなたが軍隊の力によって敵の恐ろしい束縛から救い出された私の国の奴隷を私にお返しください。以前は我々の国民のものであったひねった金の飾りと家畜と宝物はお取りください。貴族の子供たち、妻と少年、不幸な寡婦を自由な身で故国へ、わびしい住まいへと連れて帰ることをお許しください。私と一緒に領土を守ってくれるはずだった貴族の後継者はごくわずかな者を除いて死んでしまいました。」(二二二六―二二三五)

すると、勇氣と栄光と勝利の誉れ高いアブラムは直ちに彼に答え、堂々と次のように語った。(二二三六―二二三八)

「戦士たちの指導者よ、私は天とこの大地の所有者であられる聖なる神の前で、言葉であなたに誓おう。私には自

分の物にしたいと願うこの世の富は何もない。^(三九)名高い王よ、貴族の守護者よ、私が兵士たちから取り上げたあなたの財産や金を自分の物にしたいとは思わない。ソドムの人々の王国の富と古来の宝物のおかげで私はこの世で成功したのだと後であなたに言われたくはない。私が戦によって手に入れた戦利品をすべてここから持ち帰ることを許そう。もっとも、指揮官アネル、ママレ、エシコルの分け前は別だ。私はこれらの戦士たちから当然の権利を奪いたくはない。なぜなら、彼らは戦闘で私を補佐し、あなたを助けるために戦ったからだ。さあ、これから出かけ、黄金の飾り、最愛の女、国の乙女たちを連れて帰りなさい。憎むべき兵士たちによる開戦、北国の人々との戦闘を片時も恐れることはない。満腹で血まみれの猛禽は倒れた兵士の死体が累々と積まれた山の斜面に止まっている。」(二一三九―二一六一)

そこで、この守護者は神の恩寵を気づかうヘブル人たちの高德の王が与えた戦利品と共に帰路についた。すると、天の王はアブラムの前に再び姿を現し、聖なる言葉でこの善良な男を励まし、次のように語られた。「おまえの報いは大きいであろう。私の気持ちに忠実な者よ、気を緩めてはならない。私の教えに従っている限り、何者をも恐れることはない。おまえがこの世に生きている間、私はこの手であらゆる困難からおまえを守り、庇^{かば}うつもりだ。怖^{こわ}がることはない。」(二一六二―二一七二)

第二節 神の約束(二一七三―二一八〇)

そこで、勇敢で、長い年月を経て賢明になったアブラムは主に答えて次のように尋ねた。(二一七三―二一七四)
「聖霊たちの支配者よ、私はこのように無力ですが、私の慰めとしてどのような高貴な人々を私に与えてくださるのでしょうか？ 私は自分の息子のために家を建ててやる必要は全くありません。私が死ねば、この世の私の血縁が財

産を分配するでしょうか。神様は私に息子を授けてくださいませんでした。そのため、私はひどい悲しみに沈んでいます。私には良い考えが浮かんできません。私の執事は息子がいることを喜んでいます。彼は、私が死ねば、自分の息子が私の遺産の相続人となることを強く確信しています。彼らは私の妻から子供が生まれないことを知っているのです。」(二一七五—二一八六)

すると、神は直ちに彼に答えて言われた。「執事がおまえの子孫の財産を所有することはない。おまえの肉体が死んで横たわる時、おまえの実の子が宝物を守るであろう。天を眺め、あの飾り物、すなわち、空の星の数を数えよ。今、星は広大な海の上を明るく照らすために栄光の輝きを四方八方に放っている。おまえの大勢の血族は子供に恵まれ、あの星のようになるであろう。おまえの心を悲しみに捕らえさせてはならない。おまえの妻からやがて息子が、子供が生まれるであろう。その子はおまえの死後、遺産の守り手、富で名高い者となるであろう。これ以上嘆いてはならない。何年か前のこと、四人の一人であるおまえをカルデヤ人たちの町から連れ出し、広大な住まいをおまえの財産として与えることを約束したのは神であるこの私だ。ヘブル人たちの男よ、今、おまえに次のことを約束しよう。この地上の広い国の多くの部分、すなわち、エジプト人たちの国境からユフラテ川まで——ここはナイル川(四二)が二つの国の人々の間で広い領土を分け、海が境界として流れる所であるが——これらの土地が、広大な領土が、おまえの子孫にあてがわれるであろう。これら三本の川が流れながら石造りの立派な町々を取り囲み、また、泡立つ洪水が人々の住まいを囲むように、おまえの息子たちはこれらのすべてを、すなわち、いずれの国をも所有することになるであろう。」(二一八七—二二一五)

すると、結婚後アブラムの楽しみとしてまだ一人の子供も、高貴な者も、生まれていないことがサライには心の重

荷となった。そこで、気がかりなこの女は夫に次のように語った。(二二二六―二二二〇)

「天の支配者はあなたがあなたの息子を産んであなたの血族の数を空の下で増やすことをこれまで禁じてこられたのです。私たち二人に跡継ぎが生まれる望みは今の私には全くありません。悲しいことに、私は年をとりすぎています。御主人様、私の言うとおりにしてください。この家には私たちが使っている一人の女、美しい娘、エジプトの婦人がいますね。彼女にあなたのベッドに行くよう、今すぐ命じてください。そして、この女から跡継ぎがこの世に生まれてくるのを主がお認めになられるかどうか確かめてください。」(二二二一―二二三三)

そこで、幸運なこの男は妻の助言に従い、女奴隷に夫人の指示どおり自分のベッドに行くよう命じた。(そして、)アブラムの子を身ごもった時、この女の気持ちは高ぶった。彼女は傲慢にも憎々しげに自分の女主人を軽蔑し始め、意地が悪くなり、下働きに喜んで耐えようとはしなくなった。それどころか、大胆にもサライに強く反抗し始めた。

(二二三四―二二四二)

その後、私が聞き知ったところによると、サライは次のような言葉でつらい胸の内を夫に打ち明け、悲しみに沈んで語り、激しく訴えた。(二二四四―二二四六)

「あなたは私に名誉も権利も与えてくれではありません。私の願いどおり、ハガルが代わりにあなたのベッドに入って以来、あの女奴隷は恥知らずにも言葉と態度で毎日私を苦しめてきました。しかし、あなたはこれまでこのことを黙認してきました。いとしいアブラム、あなたの協力が得られれば、あの女を自分の奴隷として所有し、思いどおりに使用したいのですが。全能の諸王の王が私たち二人の間に立たれ、この件の審判となられますように。」(二二四七―二二五五)

すると、賢明な男は直ちに彼女に次のように言った。(二二五六一―二二五七)

「おまえと私が共に暮らしている限り、おまえの名譽を奪うようなことはしない。だから、自分の女奴隷をおまえの気のすむように扱ってよい。」(二二五八―二二六〇)

第三節 ハガルの逃亡と出産(二二六一―二二三七)

すると、アブラムの妻は自分の女奴隷に対して心の底から不親切となり、腹を立て、冷淡になり、喧嘩腰でこの女に辛辣な悪口雑言を浴びせた。そこで、彼女はこの迫害と苦役から逃れようとした。彼女は自分がこれまで行ったことに対するサライからの虐待と報復に耐えきれず、荒れ野を目指して出奔した。主の栄光の召使である神の天使は彼女が荒れ野で悲しんでいるのに気づき、すぐに彼女に尋ねた。(二二六一―二二七〇)

「惨めな女よ、どこまで旅をしていくつもりか？ おまえはサライのものだ。」(二二七一―二二七二)

彼女は直ちに天使に答えた。「悲しく惨めなことに、私はすべての喜びを奪われ、住まいを出て、女主人の憎悪と苦しい迫害から逃れてきました。今、私は顔に涙を溜めながら、荒れ野で自分の運命を、すなわち、空腹と狼が私の心臓から魂と苦痛を共に奪い去る時を待たねばなりません。」(二二七三―二二七九)

すると、その天使は彼女に答えた。「ここから遠くへと逃れて二人一緒に生活に終止符を打つことに心を砕こうとせず、家に戻り、自分の名譽のために働き、謙虚に繁栄を求め、主人に忠実になりなさい。ハガルよ、アブラムのためにおまえの息子をこの世で授けてやろう。その子は人々の間でイシマエルと呼ばれるであろう。このことを自分の言葉によって今おまえに告げよう。その子は気性が激しく、戦を好み、人間の子孫と自分の血族にとって敵となるであろう。多くの人は武器を手に彼と激しく争うであろう。この指導者から人々と数多くの国が生まれよう。主人の元

219
に戻り、おまえを所有している人々と一緒に暮らしなさい。」(二二八〇―二二九五)

そこで、彼女はこの天使の助言に従い、すなわち、神の聖なる天使が賢明な言葉で命じたとおり、直ちに主人の元へ戻った。アブラムがこの世で八六歳となった時、イシマエルが生まれた。神の忠実な召使である天使がかつてみずからの言葉によってこの女に約束したとおり、アブラムの息子は大きく成長した。(二二九六―二三〇三)

それから一三年後、永遠の主であられる神はアブラムに向かって言われた。(二三〇四―二三〇五)

「親愛なる者よ、私が命じたとおり、我々二人の契約を十分に守れ。いついかなる時であれ、私は富を与えておまえを豊かにしよう。私の望みを勇敢に実行せよ。おまえが苦悩していた時、おまえを慰めるための贈り物として与えた契約を一層確かなものとしよう。おまえの家族を神聖なものとしてやろう。おまえが私を自分の主人として仕え、自分の子孫にとって親しい味方であることを望むのなら、男子には全員勝利の神聖な印(四三)を施せ。もしもおまえが心から私に従い、私の命令を実行に移すことを望むなら、私はこれらの人々の守護者と支持者になるであろう。おまえの子孫の男子は全員すでに幼児の時に、すなわち、この世に生まれてから七日後に、勝利の印を施されるか、それとも私の敵意によってこの世から遠く隔てられ、財産を奪われて追放されるかのいずれかとなるであろう。私の命じたとおり実行せよ。真の信仰ゆえにおまえたちがその印を得るのであれば、私はおまえたちを信頼しよう。おまえには息子を、すなわち、おまえの妻から子供を授けよう。町の住人はだれもがその子をイサクと呼ぶことになるであろう。おまえはこの息子を恥じることはない。私は聖霊の力を通してこの子に神の恩寵を、幸福と共に多くの友を与えてやろう。イサクは私の祝福と恩寵、愛と喜びを受けることになる。この族長から大勢の人々が生まれ、多くの勇敢な指導者、領土の守り手、天下に名声を馳せる王たちが輩出するであろう。」(二三〇六―二三三七)

第二四節 契約と割礼、イサクの誕生の予告（二三三八―二三九八）

そこで、アブラハムは直ちに^(四三)頬を大地につけ、嘲りの気持ちを抱いてこれらの予言について心の中でじつくりと考えた。彼はその時は年老いた妻サラが自分のために息子をこの世にもたらすことができるとは思ってもみなかった。事実、指折り数えるところの女はちょうど百歳になっていることを彼はよく知っていた。そこで、長い年月を経て賢くなっていたアブラハムは主に答えて言った。（二三九九―三三三七）

「主よ、イシマエルが主の望みを果たすべく、昼夜を分かたず、言葉においても行動においても、主の教えに従って暮らし、決然たる気持ちと強い意志を抱いて主に感謝の心を伝えますように。」（三四八―三五二）

すると、全能の神であられる永遠の主は彼に優しくお答えになられた。（三五三―三五四）

「サラは年老いてはいるがおまえのために息子をこの世にもたらすことになる。おまえの運命はこの約束どおりとなるであろう。おまえが自分の長男イシマエルのために懇願しているので、この世で繁栄する子孫と共にこの子が長生きできるよう、私の恩寵によって祝福してやろう。そして、この祝福をおまえにも分け与えよう。しかし、まだこの世に生まれてきていないおまえの息子、幼児イサク^{おきなこ}については、この世にある間、あふれんばかりの喜びとあらゆる富によってより豊かにし、私の心からの約束、聖なる魂の契約をこの子に与え、慈悲深く接しよう。」（三五五―三三六九）

アブラハムは永遠の主が命じたとおり実行し、主の指示に従って平和の印を自分の息子につけてやった。そして、神の契約を心に留めた賢者は、家族の中のすべての男に対して、神が真の契約として与えたその高貴な印を身につけるよう命じた。それから、彼もその輝かしい印を受けた。正義の王であられる神は常にその力を行使してこの世にお

ける彼の栄光と名譽を高められた。すなわち、アブラハムが自分の支配者であられる神の希望を生まれて初めて実行に移すと、神は直ちに彼に名譽を授けられた。^(四四) (二三七〇―二三八一)

すると、決して幸福ではない彼の妻は大勢の人々の主を嘲笑し、年を経た彼女は内心この予言をひどく軽蔑した。

神の言葉は吉報をもたらすという事実を彼女は信じなかった。天の支配者であられる王、聖なる神は、アブラハムの妻が居間で望みを捨てて冷やかに笑った声を聞かれた時、次のように言われた。(二三八一―二三八九)

「サラは私の言葉が真実であることを信じようとはしない。それにもかかわらず、いずれ私が最初おまえに約束したとおりになるであろう。おまえに真実を告げよう。今と同じ季節におまえの妻から息子が生まれる。私がこの住まいをもう一度訪れた時、子孫を増やしてやるという私の約束は実現するであろう。親愛なるアブラハムよ、おまえは息子を、自分の子供を眺めることになる。」(二三九〇―二三九八)

第二五節 ソドムのための執り成し (二三九九―二四一八)

そして、この言葉の直後、準備の整った聖霊たちは予言が伝えられた場所から急いで離れ、立ち去って行った。ロトの血族(アブラハム)もその一行の中にいた。そして、彼らは高い壁に囲まれた町ソドムを見上げることができるところまでやってきた。彼らは城が宝物の上に、館が純金の上に聳えているのを見た。その時、慈悲深い天空の支配者はアブラハムに語りかけ、少なからぬ情報を伝えられた。(二三九九―二四〇八)

「私はこの町の中で騒ぎを聞いた。罪深い者たちの非常に大きな叫び声と酔っ払った愚かな自慢話、それと、家の中で人々が悪意に満ちた話を咲かせているのを耳にした。それゆえ、信仰を破ったこれらの者たちの罪は重い。ヘブライ人の男よ、私はこれからあの者たちが何をしているのか、悪意を抱いて裏切りや悪徳を話題にするほど

彼らの習慣や考えは罪深いのかどうか見極めたい。火と硫黄、それに黒々として熱く激しい炎が厳しく徹底的に異教の民にその報いをする事になるう。」^(四五) (二四〇九―二四一八)

第二六節 ソドムの滅亡(一) (二四一九―二五二二)

男たちは妻と一緒に家の中で懲罰の炎と苦痛を待つこととなった。繁栄を驕る者たちはその豊かさを神に報いるのに悪事をもつてした。そのため、命の創造主であり、聖霊たちの守護者であられる神、決然たる王は、これ以上の憤激に耐えられず、二人の強力な伝令を彼らの元に派遣した。二人は旅をして、夕方ソダム人たちの町に着いた。すると、彼らは町の門のそばに一人の兵士が、すなわち、ハランの息子が座っているのに気づいた。そこで、彼らは若者の姿をしてこの賢い男の目の前に姿を現した。すると、何が正しくてふさわしいことであるのかを弁えている主の召使は聖霊たちの前で立ち上がり、前に進み出て、これらの人々に一夜の宿を提供しようとした。すると、救世主の高貴な伝令たちは彼に答えて言った。(二四一九―二四三六)

「私たちに示された御親切に感謝いたします。私たちは主が明朝太陽を再び上空に出現させてくださる時をこの道で静かに待つつもりです。」(二四三七―二四四〇)

しかし、^(四六)ロトは……その訪問者の足元で腰を屈め、休憩と食べ物、自分の家での雨宿りともてなしを熱心に勧めた。そこで、彼らはこの高貴な男の好意を感謝を込めて受け入れ、このヘブライ人の兵士に案内されるがまま、直ちに後を追って家の中へと入った。高貴で賢い兵士は夕方の薄明かりが消え去るまで、館の中で彼らを気持ちよく歓待した。その後、昼の後を追って夜がきた。夜は水の流れとこの世の栄華、海と広大な土地を闇で包み込んだ。神にとって憎むべきソダム人たちは老いも若きも大挙して押し寄せ、訪問客の身柄を要求し、集団でロトと客を取り囲んだ。彼ら

は神聖な召使たちを高い館から連れ出し、自分たちの手に委ねるよう要求し、恥知らずにも、二人の男と性的交渉を持ちたいと言った。彼らは体面など意に解さなかった。(二四四―二四六一)

そこで、しばしば名案を思いつくロトは家の中で急いで立ち上がり、直ちに外へ出た。そして、ハランの息子は策略を胸に秘め、並み居る群集に向かって次のように言った。(二四六―二四六五)

「この中には穢れを知らない私の娘が二人います。二人とも結婚して男と一緒にになったことはありません。ですから、私の要求どおりにして、罪を思い止まってください。あなたがたが自然な感情に反して人の子らに對して不名誉で貪欲な悪事を働く前に、あなたがたに娘を差し出しましょう。娘を受け取って、客人を解放してください。できることなら、私は神の前であの人たちをあなたがたから守ってあげたい。」(二四六―二四七五)

すると、名譽心が欠落した部族の群集は異口同音に(「皮肉たっぷりに」)彼に答えた。(二四七六―二四七七)

「おまえがこの国から立ち去るといふのは至極当然で当たり前のことだ。おまえは仲間を奪われ、味方を亡くし、遠くからこの国へと流れてきた。差し支えなければ、この町にいて、我々の支配者、人々の指導者になってくたさないだろうか？」(二四七八―二四八四)

私がロトのことについて聞き及んだところによると、異教の群集はそれから憎々しげに彼を手で掴んで捕らえた。

しかし、客人は巧みに彼に加勢し、立派な訪問客は敵の把握から彼を引き離し、家の中へと引き入れ、そして、急いで周囲にいるソドム人たちの目を残らずしっかりと塞いでしまった。住民は全員あつという間に目が見えなくなった。彼らは怒り狂ったが、どうしても客人の後を追って館の中に押し入ることはできなかった。神の召使たちは強かった。訪問客の一行は強い力を持っていて、群集を苦痛で厳しく罰した。そして、神に忠実な平和の使節はロトに向かって

親しみを込めて次のように言った。(二四八五―二四九九)

「私たちの目の前にいるこれらの乙女以外に群集の中にあなたの息子と大切な血族がいるのなら、あなたにとって大切な人々を大急ぎでこの町から連れ出し、掟破りの者たちと一緒にあなたが破滅することがないよう、自分の命を救いなさい。ソドムとゴモラの住民の罪ゆえに、彼らを黒い炎と火に委ね、これらの人々を、すなわち、町の住人を、恐ろしい苦しみによって滅ぼし、そうすることによって神のお怒りの復讐をするよう、支配者であられる王は私たちに命じられました。定められた刻限は近づいています。自分の命を救うために地上の道をたどって行きなさい。主はあなたには慈悲深くあられるであらう。」(二五〇〇―二五二二)^{四七}

第二七節 ソドムの滅亡(二) (二五二三―二五七五)

すると、ロトは直ちに彼らに答えて言った。「ここからそんなに遠くまでこれらの女性と一緒に歩いて旅をし、自分の避難場所を探すことは私にはできません。あなたがたは御親切にも私に愛と友情を示してください、慈悲と恩寵を与えてくださっています。小さな城ですが、高台の砦が近くにあるのを知っています。私たちがそのゾアルで避難場所を見つけられるよう、私に名誉と安全をその地で与えてください。あなたがたがその高台の砦を火から守ってくださるのなら、私たちはそこで無事に時を過ごし、命を守ることができます。」すると、慈悲深い天使たちは親しみを込めて彼に答えた。(二五二三―二五二七)

「あなたがその城塞のことに触れたので、要求を認めましょう。至急その砦へ行きなさい。私たちは平和で安全な場所であなただを守りましょう。あなたが妻子を連れてゾアルまで(無事に)行き着くまでは、私たちは掟を破った者たちに対して神の怒りの仇を討ち、この罪深い部族を滅ぼすわけにはいきません。」(二五二八―二五三四)

そこで、アブラハムの血族の男は件の砦くだんへと急いだ。妻子を連れ、この勇者は歩みを遅らせることなく、妻と子供をゾアルの砦へ案内するまで、大急ぎで歩を進めた。人々の平和のろうそくとも言ふべき太陽が昇った時、私が聞き及んだところによると、天空の主は人々を罰するため、空から硫黄、黒々とした炎、めらめらと燃える火を放たれた。それというもの、彼らがこれまで長い間、主を苛立たせたからである。聖霊たちの支配者は彼らにその報復をなされた。極度の苦しみが異教の民を襲った。憎むべき部族が滅びかけた時、大きな騒ぎが、すなわち、恥知らずの人々の叫び声が町のあちこちで沸き上がった。火は豊かな町中の緑をすべて焼き尽くした。さらに、町の周囲の広い地面は大半が火と恐怖に包まれた。恐ろしい天罰が及んだ人々の広大な土地では、森と大地の恵みは灰と燃えさしとなってしまった。破壊的な火と押し寄せる炎はソドムとゴモラの町の住民が所有していた物をすべて手当たり次第焼き尽くした。主であられる神は人間もろともすべての物を滅ぼした。砦にいたロトの妻はぱちぱちという音と人々の臨終の絶叫を耳にした時、この破壊を見ようとして後ろを振り向いた。すると、彼女はたちまち塩の像に変わってしまった。――聖書はこのように私たちに語っている。^(四八)これは有名な話であるが、このように、彼女は天の召使たちの言葉に従おうとしなかったために厳しく罰せられたが、この像はその場所でそれ以来ずっと不動のまま立っている。この世で定められた年月が過ぎ、神の審判が下るまで、彼女は固く直立したまま、その場で運命を待たねばならない。これは栄光の王が行われた奇蹟の一つである。(二五三五一―二五七五)

第二八節 ロトの娘たち (二五七六一―二六二〇)

夜明けとともにアブラハムは一人で出かけた。そして、この賢明な族長は自分の支配者であられる神と口頭で話をしたことのある場所に再び立った。彼は恐ろしい煙が広い大地から立ち昇っているのを見た。人々は豊かさと飲酒に

ひどく溺れていたため、悪事に狂奔し、犯罪に頓着しなくなり、正義と神の審判を忘れ、町の中での豊かさや幸せを自分たちに与えてくれたのは一体だだったのかも忘れてしまっていた。それゆえ、天使たちの神は熱く燃える火を罰として彼らに放たれたのである。そのような時でも、信頼できる私たちの支配者は、これまで度々あったように、愛すべき男アブラハムのことを慈悲深くもお忘れにはならなかった。そして、大勢の人が死んだ時も、神は彼の血族ロトを守られた。(二五七六―二五九〇)

勇敢な兵士ロトは神を畏怖するあまり、これ以上あえて砦に留まることなく、子供を連れて町を出た。そして、彼らは殺戮の場から遠く離れた住まいを探し歩き、やっと高い山の斜面に洞窟を見つけた。神に愛され、祝福された信仰心の厚いロトは二人の娘と一緒に長い間そこに留まった。^(五九)(二五九一―二五九九)

二人の娘は酔っ払った父親に対して次のような行動に出た。まず、年上の娘が寝床に入った。老いたロトはぶどう酒を飲んですっかり酩酊していたため、娘たちがいつ自分の花嫁になってしまったのか分からず、乙女たちの企てに^(五〇)気付かなかった。(二六〇〇―二六〇六)

若い二人の女は身籠もった。姉妹はこの世に子孫を、すなわち、老いた父親のために息子たちをもたらした。これらの高貴な子供たちの母親、すなわち、ロトの年上の娘は、息子をモアブと名付けた。書物、すなわち、聖書が私たちに語っているように、妹の方は自分の息子をアモンと呼んだ。その後、これらの族長から多数の人々と二つの強力な国が生まれた。地上の住人はだれもがこれらの部族の一方をモアブ人、すなわち、高名な部族と呼び、高貴な人々の子孫たちはもう一方をアンモン人と名付けている。(二六〇七―二六二〇)

第二九節 ゲラル滞在（一）（二六二—二六九〇）

その後、ハランの兄（アブラハム）は妻と共に財産と一家を伴ってアビメレク王の元へと旅立った。アブラハムはサラは自分の妹だと言い触らし、そうすることで自分の命を守ろうとした。彼はこの国に親しい血族や友人がほとんどいないことをよく知っていたからである。すると、王は使者を遣わし、彼女を自分の元に連れてくるよう命じた。アブラハムの妻は異国でまたしても夫から離されて見知らぬ者に身を委ねることとなった。しかし、永遠の主である我々の救世主は、これまで度々あったように、今回もアブラハムに手を差し伸べられた。神は王がぶどう酒に酔って寝ている所に夜一人で姿を現された。正義の主は直ちに夢の中で王に話しかけ、怒って王を威おどされた。（二六二—二六三七）

「おまえはアブラハムの妻を、彼の嫁を、勇者の手から奪い去った。この行為のために、死はおまえの魂を胸から引き離すであろう。」すると、酒盛りで疲れ果てた宝物の付与者は眠ったまま神に返事をした。（二六三八—二六四二）「何ですって！天使たちの至高の王よ、あなたは腹をお立てになられるといつも、正しい習慣に従ってこの世で暮らし、約束を守り、信念を貫き、あなたに慈悲を求める者から命を奪おうとなさるのか？この女は私が尋ねる前に、自分はアブラハムの妹ですと私に告げました。私は彼女に罪を犯していませんし、悪いことは一切やってはいません。」（二六四三—二六五二）

すると、正義の神であられる永遠の主は彼の夢の中で直ちに彼に返事なされた。（二六五三—二六五四）「貴族たちの守護者よ、おまえがこの世での命を少しでも長く望むのであれば、アブラハムの妻であるその女を彼に返し、彼の手に委ねよ。彼は勇敢で賢く、神と話ができ、天の王を見ることができ、おまえが女をあ族長か

ら引き離しておくのなら、家畜と財産もろともおまえを滅ぼしてやる。高潔で忍耐強いアブラハムがおまえからの伝言を急いで私に伝え、健康な状態で喜びと繁栄と宝物を享受できるよう私に取り計らってもらいたいと要求すれば、おまえに命のある限り、その望みを叶えてやろう。」その時、恐れ戦く人々の守護者は突然眠りから覚めた。アビメレクは相談役たちに自分の所に来るよう命じ、恐怖に脅えながら神の言葉を高貴な者たちに急いで語った。彼らは夢の中の予言どおり、王のしたことで神の手から罰が下ることを恐れた。王はアブラハムを大至急連れてくるよう彼らに命じた。(二六五五―二六七三)

そして、権勢を誇る王は語った。「ヘブライ人の男よ、おまえに口頭で伝えたいことがある。アブラハムよ、おまえが家財をこの我々の国へ運んできて以来、わしはおまえのこのひどい策略に値することをしただろうか？異国の者よ、おまえが望んでいるのはこの国で奸計を用いて我々を騙し、罪で汚すことだ。サラは自分の妹で、血族だとはっきりと言ったではないか。おまえはこの女を使ってわしに忌まわしい罪と測り知れない罪悪を押し付けようとしている。我々はおまえを丁重にもてなし、親しみを込め、望みどおり、この国で住まいと土地を与えた。これらの好意に對して、おまえは非友好的な態度で、報いと感謝の気持ちを我々に表そうとしている。」(二六七四―二六九〇)

第三〇節 ゲラル滞在(二)、イサクの誕生(二六九一―二七七二)

アブラハムはこれに答えて言った。「王様に災難や敵意や苦痛をもたらすつもりで私はそのようなことをしたのでありません。兵士たちの支配者よ、聖なる神が私を父親の家庭から連れ出されて以来、私は血族の人々から遠く離れているため、このような策を用いることによって楯の衝突から自分の身を守るしかなかったのです。それ以来、私と連れ合いのこの女は、同胞から離れて数多くの国と見知らぬ仲間を訪ね歩いてきました。この女を自分のものにし

たいと思う悪者が、異国の民である私の命をいつ奪おうとするか知れないという危険を、私はいつも心に留めていました。ですから、流浪の身である私たちが外国人と戦わねばならないこの世の至る所で、サラは自分の妹ですと兵士たちに告げてきました。高名な王様、私はあなたの庇護を求めた後も、この国で同じことをしました。私が初めてこの国を訪れました時、全能の神の恐怖がこの国の人々にあったかどうか私には分かりませんでした。それで、サラは嫁として私の寢床に入ったという本当の話は王様と家臣のかたがたから隠そうとしたのです。」(二六九—二七二)
すると、アビメレクはアブラハムに宝物を与えて元気づけ、彼の妻を返した。彼が妻を受け取った時、アビメレクは償いとして生きた家畜と眩しく光る銀、さらに、召使たちも与えた。それから、この貴族の守護者はアブラハムに次のように告げた。(二七二—二七三)

「わしの所に留まり、この国でおまえの最も気に入った土地と住まいを選びなさい。わしにはおまえが必要なのだ。わしの忠実な友になってくれないか。それなりの財政援助はする。」(二七三—二七四)

この宝物の付与者は間を置かずサラに向かって次のように言った。「妖精のように美しいサラよ、おまえの主人アブラハムはおまえがわしの家の敷居を跨いだことでおまえを非難することはない。アブラハムには輝く銀を与え、この度の屈辱の償いを十分にするつもりだ。この国から離れたどこかで富と見知らぬ友を探そうと思ひ煩わず、ここに住んでくれ。」(二七四—二七五)

アブラハムはこの王が命じたとおりにし、この支配者の要望に添い、王の友情と愛情、さらには親切心を受け入れた。アブラハムは神に愛されていた。それゆえ、彼はこの世で生きている間、幸せて平穏な生活を樂しみ、創造主の保護の翼に守られ、神の庇護の下で暮らした。(二七五—二七六)

しかし、アビメレクが愛すべき二人を、すなわち、妻サラとその夫アブラハムを引き離し、彼らに対して行った罪ゆえに、神は依然としてアビメレクに腹をお立てになっていた。そのため、彼は苦痛と恐ろしい罰を受けた。すなわち、高貴な女も奴隸の女も、主人である男のために子供を産むことができなくなった。それは、聖なる男アブラハムが自分の主人アビメレクのために永遠の神に慈悲を請うまで、神が彼らに出産を禁じられたためである。天使たちの守り手はアブラハムの願いを聞き届けられ、貴族と奴隸の男女の繁殖力を王のために元通りになされた。天の支配者は人々の数、富や財産を再び増やされた。アブラハムが懇願したため、全能の人類の守護者はアビメレクに慈悲深くなられた。(二七四二—二七五九)

その後、我々の支配者であり生命の主であられる全能の神はみずからの言葉どおりサラの元を訪れ、愛すべきこれらの男女に対する約束を果たされた。そして、アブラハムの妻から子供が生まれた。天使たちの神は彼女が高貴な男の子供を身籠る前にその子をイサクと名付けておられた。アブラハムは妻が子供をこの世の人々の元にもたらしてから一週間後に、神に命じられたとおり、自分の手で輝かしい印^(五)を子供に施した。(二七六〇—二七七二)

第三一節 ハガルとイシマエル、アビメレクとの契約 (二七七二—二八三三)

先祖から受け継いだ性質がすぐれていたため、この少年は立派に成長した。うれしいことに妻が自分の息子を産んだ時、アブラハムは百歳であった。神がみずからの言葉を通してこの喜びの日を初めて告げられて以来、彼は長い間この日を待ち望んでいた。(二七七二—二七七七)

その後、アブラハムと妻が敬虔な気持ちで共に宴席に着き、召使たちも全員酒を飲み歌を唄っている時に、彼女はイシマエルがアブラハムの目の前で遊んでいるのを目撃する^(五)という出来事が起こった。その時、この高貴な女は妻の

立場から夫に言った。「指輪の守り手である私の大切な旦那様、お願いです。ハガルがイシマエルを連れてどこかよそへ行くよう命じてください。わがままを許していただけますなら、自分の希望を申し述べます。私たちはこれ以上一緒にいるべきではありません。あなたが命を体から送り出し、亡くなられた後、イシマエルは私の息子イサクと遺産を分け合うべきではありません。」すると、アブラハムには自分の息子を追い出さねばならないことが心の痛手となった。この男の心が苦悩に捕らわれていることをお知りになられた強い真の神は、彼に御力添えをなさろうとやってこられた。天使たちの王であられる永遠の神はアブラハムに向かって言われた。(二七七八―二七九六)

「悲しみと苦悩をおまえの胸から追い払い、おまえの妻であるこの女の言うことに従え。ハガルと息子イシマエルには家から立ち去るよう命じよ。口頭でおまえに約束したとおり、私は彼の一族を子供たちによって、すなわち、子孫を増やし、偉大で強力で幸福なものとしてやる。」(二七九七―二八〇三)

そこで、アブラハムは自分の支配者であられる神の言葉に従い、落胆した二人を、すなわち、女とその息子を住まいと町から追い出した。⁽²⁸⁰⁴⁾(二八〇四―二八〇六)

(アビメレクは言った。)[「分別の力によってあなたに勝利をもたらされ、神聖な恩寵によってあなたの士気を鼓舞なされる真の王、天空の主は、あなたの味方であられることがはっきりした。それだからこそ、あなたはこれまで敵味方の区別なく、言動の如何を問わず、やり出したことはすべてうまくいったのです。支配者であられる神はみずからの手でああなたの望みを実現なさる。このことは町の住民の間で広く知られている。ヘブライ人たちの守護者よ、わしの願いを聞き入れてはくれまいか。あなたが寄る辺のない状態で遠くからこの国へと流れてきて以来、わしがあなたに与えた便宜のお返しとして、わしの信頼できる友人になるという約束に快く同意してくれないか。わしがあなた

に土地と便宜を与えるのを惜しまなかったことに對して、わしに好意で報いてくれないか。運命を司る我々の支配者であられる神が、あなたがこの国で高貴な人々の宝石と貴重品を盾を持つ兵士たちに氣前よく分け与え、領土を守ることをお認めくださるなら、どうかこの国の人々とわしの一族に情けをかけてくれまいか。」そこで、アブラハムはそのとおりにするとアビメレクに約束した。(二八〇七—二八三三)

第三二節 アブラハム、イサクを捧げる(二八三四—二九三六)

その後、神に祝福されたテラの息子、ヘブライ人たちの指導者は、異国の民に囲まれ、味方もなく、長い間、ペリシテ人の国に留まった。天使たちの主は町の住民がベエルシバの国と呼ぶ場所にアブラハムを導かれた。この聖者はその地で高い館と住まいを建て、木を植え、祭壇を築き、その祭壇の上で、天空の下で、素晴らしい生命を与えてくださった自分の支配者であられる神に、贈り物を、すなわち、生け贄をたくさん捧げた。(二八三四—二八四五)

その後、強力な神はこの高貴な男を試そうと思われ、彼の忍耐力はどの程度のものか熱心に確かめられ、厳しい口調で彼に向かって声を出して言われた。(二八四六—二八四九)

「アブラハムよ、急いで出かけよ。自分の子供を連れて旅をせよ。おまえの息子イサクを生け贄として私に差し出せ。私がここから指差している高い山へ自分の足で登り、その高台の円形のところで火を起こせ。おまえの息子を生け贄にするための火だ。それから、刀の先で息子を殺し、黒々とした炎で愛する子供の体を燃し、私に捧げ物を提供せよ。」(二八五〇—二八五九)

彼はためらうことなく、直ちに旅仕度にとりかかった。天使たちの王の言葉は彼にとって恐ろしいものであり、自分の支配者であられる神は彼にとって大切なものであった。神に祝福されたアブラハムは寢床から跳び起きた。聖な

る男は救世主の命令に背くことなく、灰色に輝く刀を帯び、魂の守護者に対する畏怖の念が自分の胸の中にあることを示した。そして、老いた黄金の付与者はろばに鞍を置き、二人の若者に一緒に出かけるよう命じた。彼の息子は三番目、彼自身は四番目であった。彼は主に命じられたとおり、若い息子イサクを連れて家から足速に出かけた。主が荒れ地の上の道を導いてくださったため、彼は急いで前進できた。そして、三日目の始まりを示す輝かしい日が深い海の上に昇った。すると、天空の王が彼に予見なされたとおり、神に祝福された男は高い山が聳え立っているのを見た。アブラハムは召使たちに言った。(二八六〇―二八八〇)

「おまえたちはここで待っていなさい。我々二人に託されたものを神に捧げたら戻ってくるから。」(二八八一―二八八四)

そして、高貴な男とその息子は森を通り抜け、主が指示した場所まで歩いて行った。息子は木を、父親は火と刀を持っていた。そこで、若者はアブラハムにその理由を尋ねた。(二八八五―二八八九)

「お父さん、火と刀はここにありますが、燔祭はんさいとして神様に捧げようと考えておられる素晴らしい御供え物はどこにあるのですか？」(二八九〇―二八九二)

アブラハムは答えた——彼は主に命ぜられたとおりにすることだけを心掛けていた。「人類の守護者であられる真の王は自分にふさわしいと思われるものを御自身で見つけられるであろう。」(二八九三―二八九六)

それから、彼は永遠の主に命じられたとおり、決然として高い山に登り、強力で信頼できる神がみずからの言葉で彼に伝えられた場所、すなわち、高い山の頂上に立った。(二八九七―二九〇一)

彼は火葬用の薪を積み上げ、火を起こした。それから、若い息子イサクの手足を縛り、薪の上に載せ、急いで刀の

柄に手をかけた。彼は自分の手で息子を殺し、この血族の者の血を火に振りかけようとした。その瞬間、天使の一人である神の召使が上から大声でアブラハムの名を呼んだ。彼は身動き一つせずにこの天使に返事をし、伝令の言葉を待った。すると、神の栄光の聖霊は上方の天から急いで彼に告げた。(二九〇―二九一二)

「神に愛されたアブラハムよ、息子を殺してはならない。その子供を、おまえの息子を、生きたまま薪の上から降ろせ。神はおまえに名誉を与えてくださるであらう。ヘブライ人の男よ、おまえは神聖な天上の王の手から褒美を、すなわち、真の勝利の報酬、十分な贈り物を受けることになる。聖霊たちの守護者は恩寵でおまえに報いられるであらう。おまえにとって神の友情と支援が実の息子よりも大切であつたがゆえに。」(二九一―二九二二)

生け贄のための火は燃えていた。人類の主が息子イサクを生きたままアブラハムに返された時、ロトの血族アブラハムの心は明るくなった。その時、神に祝福された男、ハランの兄は、後ろを振り向いた。すると、一頭の雄羊がほど遠からぬ茨の茂みの中で身動きできなくなっているのを見つけた。アブラハムはこの羊を捕まえ、自分の息子の身代わりに、この羊を急いで薪の上に載せた。そして、刀を振るい、煙を上げている祭壇を焼いた生け贄と雄羊の血で飾り、神にこの贈り物を差し出し、慈悲深い主がこれまで与えてくださった褒美とすべての恵みに対し、神に感謝の言葉を述べた。(二九三―二九三六)

ヘ レ ナ

第一節 十字架の幻がコンスタンチヌス大帝の前に出現する（一一九八）

支配者であられる神、すなわち、諸王の栄光であり、信心深い人々の光であられる神が、人間の姿をしてこの地上にお生まれになってから、指折り数えてみると、二三三年もの歳月が人々の前を通り過ぎていた。軍の指揮官コンスタンチヌス⁽¹⁾がローマ人たちの国で皇帝に推挙されてから数えて、ちょうど六年目の治世のことであった。⁽²⁾（一一一〇）

楯で武装したとても勇敢なこの守護者は国民に情け深かった。大帝の国は天の下で栄えた。帝は真の王であり、国民の戦の守り手であった。神は栄光と力を帝に授けられた。そのため、敵に向かって武器を手にする時は、帝はこの地上の至る所で多くの人々の喜びとなり、民の復讐者となった。この皇帝に戦が、すなわち、騒々しい争いが持ち上がった。フン族とあの有名なゴート族⁽³⁾は兵を募り、フランク族とフーグ族⁽⁴⁾も進軍を開始した。これらの部族は勇敢で：戦を好んだ。槍と織り上げられた鎧が輝いた。彼らは鬨⁽⁵⁾の声を張り上げ、楯をかざし、軍旗を掲げた。そして、勇士たちと血族の者たちは全員整然と集い、兵士の群は進軍した。狼は森の中で軍歌を唄い、その残忍な吠え声を隠そうとしなかった。羽が露に濡れた驚は忌まわしい兵士たちの背後で鳴き声を上げた。近隣の町や村に住む兵士の中からフン族の王が戦に狩り出すことができた多くの兵士の一団は隊列を整え、険しい山々を越えて急いで戦闘に駆けつけた。（一一一三四）

最も強力なこれらの軍隊は進撃した。歩兵は援軍を得てその数を増した。その後、これらの勇ましい槍騎兵たちは異国の地ダニューブ川の岸辺の水際で野営することとなった。彼らはローマ人たちの国を軍隊の喧噪で威嚇し、軍勢に物を言わせて略奪しようとたくらんでいた。フン族の来襲はローマの市民に知れ渡った。そこで、皇帝は合図の矢を急遽巡回させ、軍隊を召集して敵との戦闘へと駆けつけるよう命じた。戦勝の誉れの高いローマ人たちはフン族の王の軍隊よりも数は少なかったものの、直ちに武器を整え、戦争の準備をした。彼らは勇敢な皇帝の回りを馬で乗りまわした。すると、楯の縁は軋み、楯板は鳴り響いた。帝は軍隊を率いて戦闘に赴いた。黒い残酷な渡り鴉は高い所から鳴き声を上げた。軍隊は進撃を続けた。喇叭手は走りまわり、伝令たちは叫び、馬は大地を踏みつけた。軍勢は戦闘の場へと急いで向かった。帝は敵のフン族とゴート族の軍隊を見て恐怖に恐れおののいた。そこで、帝はわずかな軍勢をローマ人たちの国の辺境にある河岸の辺りに集結させた。ローマ人たちの王は悲嘆にくれた。多勢に無勢では勝利はおぼつかなかった。圧倒的多数を敵にまわして戦うには、勇敢な兵士と腹心の部下の数があまりにも少なかったのである。敵の行軍を初めて目のあたりにした後、部隊は川の付近に野営し、帝を取り囲むようにして最初の夜を過ごした。(三五一六八)

すると、部下に交じって眠っている勝利の誉れ高い皇帝の前に幻が現れた。後にも先にも、この世で目にしたことがないほど神々しく見える、立派な形をした、白くて明るい一人の男が人間の姿をして現れた。猪の像のついた胄を被り、皇帝は寝床から跳び起きた。天上からきた美しい使者はすぐに語りかけ、帝の名を呼んだ。——夜の帳は消え去った——。「コンスタンティヌスよ、天使たちの王、すなわち、運命の支配者であられる人々の王は、あなたを守るようにと命じられた。それゆえ、たとえ異国の者たちが恐ろしい行為や残酷な戦によっておまえを威嚇しようとも、

201
恐れることはない。天と栄光の守護者を見よ。そうすれば、援助と勝利の印が得られるであろう。」皇帝は直ちにこの

神聖な命令に従って準備を整え、忠実な平和の仲介者である使者が命じたとおり、虚心坦懐になって空を見上げた。

すると、雲の覆いの上に、飾り物で輝き、黄金が鑲められている美しい栄光の十字架が見えた——寶石はきらめいた——その燦然と輝く十字架には、次のように文字がくつきりと明瞭に刻み込まれていた。「この標識を携えて恐ろしい戦で敵を打ち負かせ。憎むべき軍勢を退けよ。」すると、その光は天上へと消え、それと共に、使者も清純な天使の群れの中へと去っていった。兵士たちの頭である皇帝はこの美しい幻のおかげで一層心が軽やかになり、心配ごとから解放された。(六九九—九八)

第二節 戦勝後、大帝は改宗する(九九—一九三)

そこで、高貴な人々の守護者、宝物の付与者、高名な軍の闘将であるコンスタンティヌスは、さきほど空に現れた標識、すなわち、キリストの十字架を、自分の見たとおりに大急ぎで作るよう部下に命じた。それから、夜が明け、早朝になると、皇帝は兵士を起こし、戦闘用の旗を掲げ、聖なる十字架を先頭に携えて、神の御標識を敵軍の真只中に運ぶようにと命じた。ラッパの音が部隊の前で大きく鳴り響いた。羽が露に濡れた渡り鴉はその様子に喜び、驚は行軍と勇猛な兵士たちの戦を眺めた。森に住む狼は大声で吠えた。戦の恐怖が辺りに漲った。楯のぶつかり合う音が響き、兵士たちは疾駆し、刀は強く振り降ろされ、兵の多くは、飛び交う矢に一度当たるとやいなや、大地に倒れ伏した。獐猛な敵は指の力を振り絞り、不運な相手方めがけて雨あられと矢を放ち、黄色い楯に向かって槍を投げつけ、敵陣めがけて投石した。しかし、勇敢で戦闘に強い皇帝軍は前進し、必死になって突進し、敵の楯を打ち破り、刀を突き刺しつつ進撃した。それから、部隊の正面には軍旗が掲げられ、闘の聲が上がった。黄金の冑や槍が戦場できら

めいた。野蛮な異教徒たちは倒れ、息絶えた。ローマ人たちの王が戦闘中に聖なる十字架を掲げるように命じるやいなや、フン族はたちまち退散した。勇者も右に左に逃げ散った。この戦で命を失った者もあれば、命からがらの遠征から逃げ帰った者もあった。半死半生の思いで安全な場所に逃げ込み、岩陰に身をひそめて命びろいをした者、ダニューブ川の辺りに逃れ着いた者もいた。川の流れに飲まれて溺れ死んだ者もいた。(九九―一三七)

このように、大胆な皇帝の部隊は喜び、勇み立ち、朝から日暮れ時まで敵を追撃した。とねりこの槍や矢が飛んだ。楯を携えた憎むべき敵軍は潰滅した。フン族の兵士の中で故郷に再びたどり着いた者はほとんどいなかった。それゆえ、その日の戦闘において、全能の神がコンスタンティヌスに勝利と栄誉とこの世の覇権を十字架を遣わして与えられたことは明らかであった。(一三八―一四七)

さて、部隊の守護者は戦の勝利に満足し、戦に殊勲をたてて帰路についた——戦の決着はすでについていた。兵士たちの守護者、すなわち、戦で名高い皇帝は、楯を宝石で飾り、部隊を引き連れ、自分の城を目指して進んだ。それから、兵士たちの守り手であるコンスタンティヌスは、古い典籍から叡知の力を学び、人々への助言を心の中に蓄えている賢者たちを急いで集会の場へと呼び寄せた。そして、勝利の誉れ高い王である国民の支配者は大勢の中で次のように尋ねた。「老若を問わず、住まいの付与者であられる神とは一体何者なのかについて正しく語り、詩歌に整えて伝えることのできる者はいないか？これはその神の御標識であり、最も輝かしいものだ。このきわめて明るいものが私の前に現れ、わが民を救い、そして、この美しい十字架のおかげで栄誉と敵との戦の勝利が与えられたのだ。」しかし、賢者たちは全く皇帝に答えることができず、勝利の印である十字架についてすぐに正しく語ることはできなかった。(一四八―一六八)

すると、最も知識の豊かな賢者が、並み居る群集の前でそれは天上の王の御標識であり、間違いはありませんと述べた。洗礼を受けて教化されていた者は数こそ少なかったものの、皇帝の面前で福音の恩恵を語り、守護者、すなわち、諸王の誇りであられる神が、三位一体の栄光の中で崇拜され、お生まれになられた様子や、神の御子が大勢の前で厳しい拷問をうけ、十字架の上で磔になられた有り様を語ることが許されたことを知ると、気が楽になり、心がはずんだ。さらに、改宗者たちは神が人の子や悲しみに打ちひしがれた魂を悪魔の誘惑から救われたこと、敵軍が襲来した時に、幻の中で皇帝の前に現れたものと同じ勝利の標識によって、神が皇帝の部隊に恩恵を与えられたこと、兵士の栄光であり万民の支配者であられる神が三日目に墓から起き上がり、死からよみがえって昇天なされた様子を語った。(二六九—二八八)

このように、改宗者たちはシルヴェステルから教わったとおり、聖霊の神秘について、戦勝の誉れ高い大帝に慎重に語った。その後、この国民の指導者はシルヴェステルから洗礼をうけ、生涯にわたり神のために信仰の道を守りとおした。(二八九—一九三)

第三節 大帝の母ヘレナ、十字架を求めてエルサレムへと旅立つ(一九四—二七五)

それ以来、宝物の付与者である戦に強い帝は幸福であった。大帝の心には新たな喜びが与えられた。天上の守護者はこの皇帝にとって最も大きな慰めであり、最高の希望であった。それからというもの、戦に強く、行動的で気前のよい帝は、聖霊の加護をうけ、昼夜をおかず、神の戒律を熱心に語り、神への奉仕に身を献げた。ところで、旧敵(サタン)が策略をめぐらしてユダヤ人たちを惑わせ、欺いたため、彼らは万民の指導者であられる神を磔にすることになり、それが原因となってユダヤ人たちは惨めにも永遠に罰を受けねばならなかったが、その後、国民の保護者

であり、槍を携えた戦に強い勇者である皇帝は、天上の支配者が群衆の喧騒の中で憎しみと悪意のために木の十字架の上で磔刑に処せられた場所を、賢者の教えをうけて神の書の中に見つけ出した。(一九四―二二一)

そして、皇帝の心の中にはキリストを称える気持ちが沸き、あの栄光の十字架をたえず気づかうようになった。そこで、帝は母^母を呼び、大勢の市民や兵士の部隊と共に遠くユダヤ人たちの住む所まで旅をし、栄光の木、すなわち、神聖で高貴な王の十字架が大地の下のどこに隠されているのか、ぜひともつきとめるよう頼んだ。ヘレナはこの旅立ちをためらうことなく、喜びの付与者である自分の息子の言葉を無視せず、鎧に身を固めた兵士たちの守護者である大帝が命じたとおり、すぐに望まれている旅の準備にとりかかった。(二二二―二三四)

多数の兵士たちも急いで航海の仕度を始めた。海上を走る馬、すなわち、船が、岸边に用意され、綱で固定されて海に停泊した。ヘレナが兵士たちと共に波の守り手となる船へと行った時、この女王の旅立ちが人々に広く知れ渡った。多くの高貴な人々が地中海の岸边に立った。兵が次から次へと絶え間なく所定の道を往来^{いさき}し、鎖帷子と楯と槍を船に積み込み、甲冑に身を固めた兵士たちと男女を乗せた。そして、一行は海獣の通る道で、すなわち、波高く泡立つ海の上で、船を走らせた。舳^{ふなへり}はしばしば矢の如く潮流の早い海の上で波の飛沫^{しぶき}に洗われた。海は波音を轟かせた。私はいまだかつて女性がこれほど歓喜に満ちた人々を率いて潮の流れる海を渡ったという話を聞いたことがない。この航海を目^まのあたりにした者は、波間の木、海ゆく馬、水上を漂う船が、帆を膨らませ、海上を疾走するのが見られたであろう。波の砦である海の上を走り、輪状の舳先^{へきさき}のついた船がギリシア人たちの国の港に着いた時、得意満面の兵士たちは喜び、女王はその航海に満足した。一行は海岸に錨を降ろした。長い間波の上のすみかとなった船は、勇敢な女王が大勢の兵士と共に東方の道を越えて再び船に戻るまで、砂に洗われるままの状態でこれらの人々^{きた}の来るべ

197
き運命を海辺で待つこととなった。(二三五―二五五)

兵士たちが編み上げられた胴鎧、選りすぐられた刀剣、装飾を施された武具、面頬のついたたぐさんの冑、猪の像のついた見事な兜を身につけているのが容易に見てとれた。勝利の誉れ高い女王の周囲では槍騎兵である戦士たちが遠征の準備を急いだ。勇敢な兵隊と皇帝の使者、それに、武具に身を固めた兵士たちは喜んでギリシア人たちの国を進んだ。皇帝の下賜品、黄金で鑲められた宝石、すなわち、十字架は、部隊の中にはっきりと見えた。決然とした気持ちと熱烈な心を持ち、至福に満ちたヘレナは、腹心の部下である楯持つ勇者たちの部隊を率い、戦場を越えてユダヤ人たちの国を訪れよという皇帝のたつての願いを心に留め、忘れはしなかった。その後、しばらくして、戦勝に輝く英雄たち、すなわち、槍の名手である強力な兵士たちの部隊は、高貴な女王と共に大挙してエルサレム(10)の町に入ることとなった。(二五六―二七五)

第四節 ヘレナとユダヤ人たちの会見(一) (二七六―三六三)

それから、ヘレナは各地のユダヤ人たちの中で最も賢明な市民をすべて呼び寄せ、真の掟に従って王の秘密を最も詳しく語ることのできる者にその秘密を語らせるため、集会の場にくるよう命じた。すると、モーセ(11)の掟を語ることのできる少なからぬ人々がずいぶん遠い所から集まった。神の秘密を伝えるために選ばれた者の数は三千にも達した。そこで、この称賛すべき女性ヘレナはヘブル人たちに次のように語った。「あなたがたは、その昔、栄光の王と親しく、主に愛され、行動は勇ましかったということを、私は神の書に託されている予言者の秘密の言葉から詳しく知りました。ところが、こともあろうに、栄光の力によってあなたがたを罪と苦悩と束縛から解放しようとお考えになられたあの主を、あなたがたは非難し、敵意のあまり、愚かにも、分別をすっかり放棄してしまったのです。貴い唾か

らあなたがたの目の光を取り戻して盲目を治癒し、また、悪魔の汚れた魂からあなたがたをしばしば救済なされた主の顔に、みなさんは不浄の唾をかけたのです。多くの人々の目の前で、あなたがたの縁者を死からこの世における生命へとよみがえらせてくださったその王を、あなたがたは咎め、死に追いやりました。このように、みなさんは心の目を閉ざし、真と偽、明と暗、愛と憎しみを混同し、邪惡な考えを抱いて罪をでっち上げたのです。だからこそ、その罰が、罪に穢れたあなたがたに重くのしかかっているのです。みなさんは主の輝かしい力を非難し、今日に至るまで邪な考え方^{よこしま}を抱き、嘘と偽りの中で生きてきました。さあ、急いで出かけなさい。きわめて分別に富む弁舌爽やかな賢者たちのことを思いめぐらしなさい。その人々は天賦の才に秀でており、あなたがたの掟をとりわけ心に留め、私が尋ねたあらゆる奇蹟についてみなさんがたの面前で誠心誠意語り、伝えてくれるでしょう。」(二七六―三一九)

すると、モーセの戒律に精通していた人々は塞ぎ込み、恐怖に怯え、悲しみに打ちひしがれてその場をしばらく離れ、そして、求められたとおり、善し惡しを問わず女王に答えられるよう、最も思慮分別に富む秘められた言葉を熱心に探した。そのユダヤ人たちの群衆の中には、古の歴史^{いにしへ}を最も詳しく知っている千人もの賢者がいた。皇帝の血族すなわち、黄金の飾りをつけ、立派で勇敢な皇太后が、御座^{ござ}で威風堂々と待っている所へと賢者たちはこぞって急いだ。(三二〇―三三二)

ヘレナは賢者たちの正面で次のように語った。「分別ある人たちよ、聖なる秘跡と言葉と知恵に耳を傾けなさい。生命の源、すなわち、強力な支配者であられる神が、子供の姿でお生まれになられた有り様をあなたがたは予言者たちの教えによって学びました。イスラエル人たちの守護者モーセは神について歌に詠み^よ、次のように語っています。(二二)

『男の愛によって身籠ったのではないが、ある母親から栄光の力を授けられた男の子が秘かにあなたのためにお

生まれになられるであろう。』また、古の賢者、すなわち、ソロモン(三三)の父であり兵士たちの支配者であるダビデ王(三四)は、神を称える歌を詠み、次のように語っておられます。(三五)『創造主であられる勝利の神を私は予言した。力の支配者、すなわち、栄光の守護者であられる神は、私の目に見える所におられ、また、私の右腕となっておられる。それゆえ、私は一度たりとも神から顔を背けたことはない。』一方、予言者イザヤ(三六)は主の精霊に助けられて深い黙想に耽りながら、人々の面前であなたがたのことを次のように語られた。『私は幼い息子と何人かの子供を養育し、豊かな財産である心の慰めをその子たちに与えた。ところが、その子供たちは私を軽蔑し、憎悪の念を抱いて私を恨み、何らの深い配慮をせず、分別を欠いてしまった。毎日毎日人に追われ、鞭打たれている惨めな家畜でさえ、餌を与えてくれる自分たちの保護者である友人には恨みを抱いたり憎んだり決してしないものだ。ところが、イスラエルの人々は、私がこの世にいる間に、彼らの目の前で数多くの奇跡を行ったにもかかわらず、私を認めようとはしなかった』(三七)
三二―三六三

第五節 ヘレナとユダヤ人たちとの会見 (二)、ユダの熱弁 (一) (三六四―四五三)

さて、創造主であられる神があなたがたに穢れのない栄光と力の繁栄を与えられたこと、また、みなさんがたがいかに天上の主に従い、その教えを果たすべきかについてモーセが語られたことを、私たちは聖なる書から学びました。ところが、あなたがたはそれらのことをすぐに重荷と感じ、正義に敵対し、輝かしい万物の創造主であられる諸王の王を遠ざけ、神の掟に背き、異教に従ったのです。さあ、急いで出けなさい。そして、十分理解した上で私に返答できるよう、あなたがたの掟である昔の聖書(三七)を、知識の力によってもっと詳しく知っている人々をもう一度探し出してきなさい。』(三六四―三七六)

そこで、悲しみに打ちひしがれたこの誇り高い者たちは、皇太后に命ぜられたとおり、こぞって出かけていった。その後、これらの人々は、頭には最高の学問、心には分別を蓄えた賢者の中から選りすぐられた五〇〇名の仲間^えに会った。それからしばらくして、町の守護者であるこれらの人々は再び宮殿に呼び出された。皇太后は全員を見渡して次のように語った。「不幸で惨めなあなたがたは、これまで何度も愚行を繰り返して、先祖の教えである聖書^{おろそ}を疎かにしてきたばかりか、なおひどいことに、盲目の治療を嫌ったり、支配者の御子息、すなわち、唯一の王であり、高貴な人々の頂点であられる神がベツレヘムでお生まれになられた事実と真相を認めようとはしていません。神の掟である予言者の言葉を知っていながら、あなたがたは罪を犯し、真実を認めようとはしなかったのです。」(三七七―三九五)

すると、賢者たちは異口同音に答えた。「お聞きください。私たちは神の契約の箱から、かつて私たちの先祖が知っていたヘブル人たちの戒律について学びました。しかし、女王様がなぜこれほどまでに激しく私たちのことをお恐りになっておられるのかよく分かりません。私たちがこの国で犯した罪とか女王様に対してこれまでに成した法外な侮辱とやらは、私たちの身に覚えのないことです。」(三九六―四〇三)

すると、ヘレナは高貴な人々を前にしてきっぱりと言った——皇太后は並み居る人々の面前で声高に語った。「すぐに出かけなさい。そして、私が尋ねることは何であれ、自信をもって率直に答えられるほどのすぐれた知識と力と分別を申し分なく身につけている者を、各自この国の人々の中から探し出してきなさい。」(四〇四―四一〇)

そこで、皆にあっては力強く勇敢な皇太后が命じたとおり、賢者たちは悲しみに打ちひしがれて集会の場を離れ、自分たちがこの国で神に対して犯した罪、すなわち、皇太后が咎めた罪とは一体何であるのかを真剣に考え、思いをめぐらし始めた。その後、弁舌爽やかで言葉巧みな一人の男が——その名はユダ^{ユダ}といった——高貴な人々を前に

して、次のように語った。「人々の支配者、すなわち、あらゆる汚れから解放されておられる神の御子キリストが苦しみを受けられたあの十字架と、かつて私たちの先祖が憎しみのあまり、何の罪もないのに高い十字架の上で磔にしてみましたあの御方について、女王様が尋ねておられることを私はよく知っております。それにしても、わが先祖はなんとという恐ろしいことを考えたのでしょうか。すぐれた古の聖典と先祖の教えを損なうことのないように、あの聖なる木が戦いの後で隠された場所を暴露したり、あの恐ろしい罪を密告することは絶対ないと固く心に決めるべきです。もしもあの事実が知れ渡ったなら、イスラエルの民とこの国の人々の宗教はもはやこれ以上この世を支配することができなくなるでしょう。だからこそ、かつて戦勝の誉れ高く賢明な私の老祖父が——その名はサチアス(一)といいました——私の父(二)に、(そして、この父はその子供たちに)次のように全く同じことを言ってこの世を去ったのです。『おまえが生きている間に、真の王、すなわち、天上の守護者であられる万物の平和の御子が磔にされたあの聖なる木のことを賢者たちが尋ねたり、あの勝利の十字架のことで争いが起こるのを聞き及んだ時は、わが愛する息子よ、おまえが死に運び去られる前に直ちに語り伝えよ。かつての悪事が露顕した後は、ヘブルの民が衆議を重ねたとしても、力を維持し、国民を治めていくことはできない。しかし、磔刑になられた王を喜びに満ちて崇め称える人々の栄光と勇氣は……永遠に残るであろう。』(四一一—四五三)

第六節 ユダの熱弁(二) (四五四—五四六)

そこで、私は古の掟に詳しい私の老父に思い切って返答しました。『もしも私たちの先祖が、あのかたがたが天上の王、すなわち、創造主の真の御息、魂の救済者のキリストであられることを前もって知っていたなら、あの聖なる御方を誤って手にかけて殺すという事件がどうしてこの国で起こったのでしょうか?』(四五四—四六一)

すると、聡明な老父は私に答えて次のように言いました。『ユダよ、神の強大な力と救世主の名前を認めよ。何人^{なんびと}も神の力と名を言葉で表すことはできず、この世で神を探し出すことも不可能である。私はこの国の人々が企てた相談事に進んで加わることはせず、罪深い行いにはいつも近寄らず、わが心に恥ずべき行為をしたことは全くなかった。創造主の御子息であられる民の守護者を、すなわち、すべての天使と人間の支配者であられる最も高貴な御子を処刑しようとして賢者たちが会議を開いて相談した時、私は何度もその悪事に反対し、必死に抵抗した。神の勝利の御子息は十字架の上でしばらくの間、その魂を放棄なされたものの、このように愚かで惨めな者たちは、それまで考えていたように、迫害することによって神を死に委ねることはできなかった。すなわち、万物の最高の栄光であられる天上の王は、十字架から降ろされた後、三日三晩、墓地の中の暗い牢獄の下で留まられたが、三日目になって、最も明るい万物の光であられる天使たちの王は、よみがえられ、この輝く真の勝利の王は栄光に包まれて弟子たちの前にその御姿を現されたのである。その後、しばらくして、おまえの兄ステパノ^{ステパノ}は洗礼の沐浴、すなわち、輝かしい信仰を受け入れた。すると、ステパノは王を愛したという理由で石を投げつけられた。しかし、ステパノは悪に報いるのに悪をもってせず、辛棒強く旧敵をなだめた。そして、サウロが憎しみからキリストの多くの信者を苦しめ、殺害したのと同じように、旧敵がサウロに唆されて、憎しみのあまり、純粹で罪の穢れのない神の御命を奪ったあの悪業に対して、神が復讐なさらないようにと、ステパノは栄光の神に嘆願した。すると、主はサウロ^{サウロ}にさえ御慈悲を示され、そのためサウロは多くの人々の慰めとなった。被造物の神であられる人間の救世主は、その後サウロの名前を変えられた。それ以後、サウロは聖パウロという名前と呼ばれた。かつてサウロはおまえの兄ステパノに石を投げて殺すよう、山上で人々に命じたことがあったが、男女を問わず、この世に生まれた者の中で、サウロほどすぐれた信仰の指

191
導者は、天の庇護の下のこの世ではそれ以後現れなかった。(四六二―五二〇)

さて、わが愛する息子よ、たとえ我々がしばしば罪を犯し、神のお怒りを買うことがあったとしても、その後すぐに罪を悔い改め、二度と同じ過ちを犯すことがなくなれば、万物の支配者であられる神がいかに慈悲深くあられるかということがおまえにも分かるだろう。万物の栄光の神、すなわち、生命の導き手は、人間のあまりにも貧しい心ゆえに忌わしい拷問をうけられたのだということを、わが愛する父親と私はその後：本当に信じるようになった。最愛の息子よ、それゆえ、神の御子に対して軽蔑的な言葉使い、憎しみ、冒瀆、冷酷な反駁は決してしないよう、おまえに内密に諭しておこう。そういうことがなければ、勝利の最高の報いである永遠の生命は天上で当然おまえに与えられるであろう。』(五一―五二七)

その昔、苦勞を重ねて分別を身につけた私の父親は——名前はシメオンといました——まだ幼なかつた私にこのように語って聞かせ、心のこもった言葉で諭してくださいました。さて、私の気持ちと考えはみなさんに御理解いただけたでしょうから、もし女王様があの木について私たちに何か尋ねられることがあれば、どういうことをお伝えするのが最も良いか、すでに御存知であろうと思います。』(五二八―五三五)

すると、群衆の中で最も賢い者がユダに答えて次のように語った。「あなた以外のいかなる兵士、どんな市民といえど、あの秘密の出来事についてこの国でこれほど立派に語るのをこれまでに聞いたことがない。昔の予言に詳しい者よ、もしもあなたが大勢の人々の中で尋ねられることがあれば、どうぞ意のままに振る舞ってください。これほど多くの民衆を前にした集会の場で高貴な人に受け答える者には、知恵と慎重な言葉、賢者としての分別が必要ですから。』(五三六―五四六)

第七節 ユダの召喚（五四七―六一八）

人々はこちらに数人、あちらに数人と集い、次第に多くの言葉を交わし、あれやこれやと考え、思索し、瞑想に耽つた。すると、兵士の一団がその談合の場にやってきた。皇帝の使者である伝令が叫んだ。「皆の者、相談の結果を正しく述べるように皇太后様は招いておられる。会議の席では思慮と分別が要求されるであろう。」（五四七―五五四）悲しみに沈んだ国民の守護者たちは、厳しい命令によって召喚された時、覚悟を決め、悪知恵を働かせるため館へと出かけた。すると、皇太后はヘブル人たちに話しかけ、古の聖典について尋ね、また、予言者である心聖き人々がその昔、神の御子についてこの世で唄った様子や、創造主の真の御子であられる王が私たちの魂を愛されたために迫害を受けられた場所を、悲嘆にくれている賢者たちに尋ねた。彼らは強情で石よりも固く、例の秘密を正確に知らせようとは考えず、それどころか、敵は腹を立て、皇太后が尋ね始めてからというもの、全く返事もせず、問われた言葉に一言づつ内心強い敵意を抱いた。そして、やっと、そのたぐいの話は後にも先にも何一つ聞いたことはありませんと答えた。（五五五―五七二）

ヘレナは声を張り上げ、怒って言った。「よいか、私の前に立っているおまえたちが反抗的で欺瞞的な態度をとり、これ以上嘘偽りに固執するのなら、最も熱い葬送の薪とゆらめく焰が山中の恐ろしい炎の中でおまえたちを焼き殺し、体を粉々にしてしまふであろう。そのため、このように嘘をつくことは結局おまえたちにとってこの世の別れを意味することになるであろう。このことに嘘も偽りもない。おまえたちが不当にも今までずっと罪の奥深い所に隠してきた言葉を正しいと認めることも、あの出来事を伏せておくことも、また、隠された力を覆さかっておくことも、おまえたちにはできないし。」すると、賢者たちは死と炎と命の終わりを予感し、とても弁舌の爽やかな一人の男を連れてき

て——この男は血族の者たちにユダという名前で呼ばれていた——皇太后に引き渡し、この男はとても賢いと前置きしてから、次のように語った。「女王様がお尋ねになれますと、この男は真実を明らかにし、事件の秘密を打ち明け、聖典を初めから終わりまでお伝えできるでしょう。この男はこの国の高貴な一族の出身で、弁舌に秀でており、また、予言者の息子であり、会議の場では毅然としています。この男が分別のある答と知識を心に秘めているのは当然のことです。女王様が納得されますように、この男は大勢の人々の前でその持てるすぐれた力を発揮し、天賦の知恵をお見せすることでしょう。」（五七三—五九七）

そこで、ヘレナは全員を放免してそれぞれの家に帰らせ、このユダだけを人質として捕らえ、長い間墓の中に隠されているあの十字架について真実を明らかにするよう熱心に説得した。令名高い女王ヘレナはユダをそばに呼び寄せ、この孤立無援の男に語った。「選ぶ値打ちのある生と死の二つがおまえに用意されている。自分の運命としてどちらを受けるかすぐに言いなさい。」（五九八—六〇八）

ユダはヘレナに向かって次のように語った——彼は苦痛を取り除くことも女王の敵愾心をかわすこともできず、女王に掌握されるだけの身であった——。「砂漠の中で疲れ果て、食べ物もなく、空腹に悩まされて荒野をさまよううちに、パンと石ころという、軟らかいものと硬いものが同時に見つかり、しかも、どちらでも自由に選べるというのに、空腹を凌ぐためにパンには目もくれず、石ころを手にし、困窮に身を投じて食べ物放棄し、好ましい方のパンを拒否するというのが一体ありうるでしょうか？」（六〇九—六一八）

第八節 ユダの抗弁、陥落（六一九—七〇八）

すると、至福に満ちたヘレナは高貴な人々を前にして、容赦なくユダに応酬した。「もしもおまえが天上において

は天使たちに囲まれた住まいを、地上では命を、さらに、天国では勝利の報いを得たいと望むなら、おまえたちが殺害という大罪を犯し、人の目に触れないように長い間隠し続けてきた天上の王のあの聖なる十字架が地下のどこにあるのか、今すぐ私に言いなさい。」(六一九—六二六)

ユダは語った——心は曇り、胸は熱くなった。天上の王国における心の喜びと、現在天の下で住んでいるこの国を放棄するにせよ、あの十字架のことを白状するにせよ、どちらもユダには苦痛であった——。「ずいぶん遠い昔に起こった出来事をどうしてこの私が明らかにできましようか？ 数えてみますと、二百年、あるいはそれ以上の多くの歳月が流れてしまっています。その年の数さえ分からないのですから、私に説明などとてもできません。私たちはよりも以前に生きておられた、賢明で善良で、しかも分別のある多くの人々は、遠い昔に亡くなりました。私はそれよりも後で生まれた、まだほんの若造です。自分の知らないことをお伝えするわけにはいきません。それに、そんな昔に起こったことは心の中に思い浮かべることすらできません。」(六二七—六四一)

そこで、ヘレナはユダに答えて次のように言った。「おまえたちはトロイ人たちが戦争(truce)によってなし遂げたあの昔の勇ましい功績の数々をすべて記憶に留めているが、一体どうしてこの国の人々にそういうことができたのか？ その名高い古代の戦争はあの貴い出来事(truce)よりはるかに遠い昔のことではないか？ その戦場での殺害者と、楯をかざして倒れて死んだ槍騎兵は数にして全部でどの位だったか、おまえたちはすぐに詳しく報告できるではないか。」(六四二—六五四)

ユダは苦痛を堪えて言った。「女王様、私たちは戦の有り様や兵士たちの功績を記録に留めて置きましたので、あの戦争を身近かなものとして記憶しているわけです。しかし、今のこの場合は例外としまして、いかなる人の口を通し

187
ても、あのことが他の人たちに語られたということを聞いたことはありません。」(六五五—六六一)

高貴な女王はユダに答えた。「おまえはあの生命の木について事実と真相を語ることを強く拒んでいる。つい先ほど勝利の十字架について国の人々に本当のことを伝えておきながら、今は私に嘘をついている。」(六六二—六六六)

ユダはヘレナに言葉を返し、自分は苦痛に耐え、相当の疑念を抱きながらあの出来事について語ったのであり、厭わしい不幸を恐れていると言った。(六六七—六六八)

皇帝の血族ヘレナはすかさずユダに語った。「まあ聞くがよい。私たちが聖なる書から学んだところによると、王の高貴な御子、すなわち、神の魂の御子息がゴルゴタで十字架にかけられたという事実はすでに人々に広く知れ渡っている。罪ゆえに破滅がおまえを連れ去る前に、地名について文書に記録されているとおり、その場所はゴルゴタのどの辺りなのか、おまえの知っていることを全部白状させてやる。そうなれば、キリストの御意志に添い、人々の助けとして、私はその場所を清めることができ、また、聖なる神、すなわち、強力な王であり、軍隊の栄光の付与者であられる魂の救済者は、私の心の中にある願いと希望をかなえてくださることでしょう。」頑なユダはヘレナに答えた。「私はその場所も地域も、また、その事実すら全く知りません。」(六六九—六八四)

ヘレナは心の底から腹を立て、次のように言った。「そのような嘘偽りをやめ、真実をはっきりと私に伝えないというのなら、創造主の御子息、磔刑を受けられた神に誓って、一族の面前でおまえを餓死させてやる。」(六八五—六九〇)

そして、ヘレナは家来に命じてユダを連れて行かせ、この罪人を生きたまま空の井戸に投げ込ませた——家来は躊躇しなかった——。ユダはその井戸の中で喜びを奪われ、空腹に苛まれ、足枷を掛けられ、苦しみながら、七日

間牢獄に止まった。そして、七日目になると、苦痛で弱り果て、疲労と空腹のあまり次のように叫んだ——ユダの体力は衰えていた。「どうかお願いします。天上の神様に誓って、惨めな私をひどい空腹から救い、この窮地から助け上げてください。空腹のためにもうこれ以上隠し切れませんから、喜んであの聖なる木のことを打ち明けます。何日にも及ぶこの束縛はあまりにもきつく、苦痛は全く耐えがたく、拷問は厳しすぎました。最初、愚行に取り付かれたため、真実を認めるのが遅くなりましたが、これ以上耐えることも、あの生命の木について隠しだてすることもできません。」(六九一—七〇八)

第九節 ユダの訴え(七〇九—八〇二)

この国で兵士たちを支配しているヘレナは、この男の挙動を聞き知ると、拘束している狭い牢獄からユダを直ちに解放するよう部下に命じた。そこで、部下は女王の命令どおり大急ぎで事を行い、ユダを鄭重に牢から引き上げた。それから、勇敢な人々は主であられる天上の王国の守護者、すなわち、神の御息がかつて十字架の上で磔にされた丘の目指す場所まで登っていった。ところが、空腹で弱り切ったユダは聖なる十字架が敵の奸計により大地の下に葬られ、長い間墓に閉ざされ、人間の目から隠され、死の床に横たわっているのは一体どこなのか正確には分からなかった。そこで、途方にくれて声を張り上げ、ヘブル語で次のように語った。(七〇九—七二四)

「救世主であられる王よ、あなたは運命を定める御力をもっておられ、その栄光の力によって、天と地、波立つ海、広大な海の広がり、すべての生き物を同時に創られました。さらに、この天体と天空のすべてをその御手で計測なされ、また、御自身は勝利の支配者として光に包まれ、素晴らしい栄光の御力によって、空を飛ぶ最も高貴な天使たちの上に君臨しておられます。人間の魂は体の中にいたのでは、地上から燦然と輝く天上の伝令たちの一団の中へ昇るこ

とはできません。清浄で聖なる神は天使たちをお創りになりました。このうち、六天使には階級ごとに名前がつけられ、永遠の喜びに浸っています。さらに、これらの天使たちは六枚の翼で包まれ、飾られ、美しく輝いています。

そのうちの四天使はいつも飛び回り、永遠の審判者の目の前で栄光に包まれて奉仕活動に励み、いつも喜びに浸りながら、天上の王の讃歌である最も美しい歌を綺麗な声で唄い、澄んだ声で次のように言います——人はそれらの天使たちをケルビム^(二五)という名前で呼んでいます——『聖なる大天使たちの神、万民の支配者は清浄なるかな！天と

地は神の栄光に満ち、神のあらゆる偉大な力は榮譽で印されています。』これらの大天使たちの中には、セラピム^(二六)と呼ばれる、天上で勝利の誉れの高い二天使がいます。彼らは樂園と聖なる生命の木とを燃え立つ剣で守らねばなりません。鋭い刃はきらめき、象眼を施された刀はゆれ、強く握られてその色が変わります。主なる神よ、あなたはその刀を永遠に保持なされ、罪深く悪事を働く愚かな敵^(二七)を天上から振るい落とされました。そのため、哀れな者たちは暗いすみかへと、責め苦による破滅へと落ちねばならなかったのです。墮落天使たちは今その地獄の中で熱い炎に包まれ、闇に閉ざされ、龍^(二八)に捕らえられて死の苦しみを味わっています。その龍はあなたの支配に反発しています。それというのも、あらゆる不浄なるものや憎悪すべきものを惨めにも耐えねばならず、苦役を忍ばねばならないからです。それに、地獄ではあなたの言葉に逆らうことはできませんし、あらゆる罪の源である龍は、厳しい責め苦をうけ、拷問に縛られているからです。(七二五—七七二)

天使たちの支配者よ、かつて十字架の上におられ、聖母マリア様から子供の姿をしてこの世にお生まれになられた御方、すなわち、天使たちの王であられるキリストがこの世を支配なさることをお望みでしたら——もしもキリストが何の罪もないあなたの御子息ではなかったとしたら、この世において定められた日に数多くの真実や奇跡を行わ

れなかったでしょうし、また、もしも栄光に包まれて輝ける御方からお生まれになられたキリストが、あなたの御子息でなかったなら、あなたは人々の指導者キリストを大勢の人々の目の前であれば見事に死からよみがえらせることはなかったでしょう——天使たちの父よ、今すぐあなたの御標識をお示しください。強力な神よ、あなたはあの聖者モーセの希望をその祈りから聞き入れられ、険しい山の斜面の下で、あの栄光の時刻に、ヨゼフの骨をモーセに示されました。魂の創造主よ、もしも御意にかなうのでしたら、長い間人々の目から遠ざけられているあの黄金の宝物を、あの時と同じようにこの私にぜひお見せくださることを、あの輝かしい被造物にかけて、万民の喜びであるあなたにお願い申し上げます。生命の創造主よ、天の広がりの下この場所で、空中に浮かぶ快い煙を今すぐ立ち昇らせてください。そうすれば、キリストが本当に魂の救済者であられ、永遠にして全能のイスラエル人たちの王であられること、また、キリストが天上の栄光と永遠のすみかを途絶えることなくずっと長く支配なさるであらうことを、この私はより一層信じ、(そうでありますようにという)揺ぎない期待をより強く心に抱くことでしよう。」(七七一—八〇一)

第一〇節 十字架の発見 (八〇二—八九三)

すると、その場所から、煙のような蒸気が空の下で立ち昇った。この男はその煙を見て胸をときめかせた。至福に満ち、戒律に詳しいユダは天に向かって両手を合わせた。思慮深いユダは次のように語った。「頑固な私も、あなたがこの世の救済者であられるということが今やっと本当に心から理解できました。万民の神よ、これほど惨めで罪深い私にさえ、御自身の栄光によって事件の秘密をお示しくださったことに対し、栄光の座についておられるあなたに永遠に感謝いたします。神の御子よ、人々の喜びの付与者よ、創造主よ、あなたがすべての王の栄光として告知さ

れ、お生まれになられたことが分かりましたから、一度ならず犯した私の罪をもうこれ以上咎め立てなさぬようお願い申し上げます。強力な神よ、この私をあなたの王国の大勢の人々の中に、聖なる人々に囲まれた状態で、輝ける町に、住まわせてください。そこには私の兄ステパノがあり、かつて手で石を投げつけられたことがありましたが、あなたに対する忠誠を守り通したおかげで栄光に包まれ、崇拜されております。兄は（信仰を守る）闘いの報酬を、すなわち、限らない幸福を得ております。兄の成し遂げた奇蹟は本や聖典に記されております。」（八〇二―八二六）

喜んだユダはそれから決然として力を発揮し、栄光の木を求めて芝土で覆われた大地を掘った。そして、険しい崖の下の暗い場所です〇フィートの深さの所に埋めて隠されている木を発見した。不名誉なユダヤの一族の者たちは、かつてその悲しむべき場所で三本の十字架が土で覆われたままの状態と一緒に土中に葬られているのを見つけた。ユダヤ人たちは諸悪の根源（である悪魔）の言うことに従わなかったら決して抱かなかったであろうような敵意を神の御子に対して露にしたのである。ユダは神聖な御標識を大地の下に見た時、その聖なる木によって大いに心を躍らせ、魂を勇気づけられ、興奮で胸が一杯になった。そして、その栄光の喜びの十字架を腕で抱きかかえ、他の人々と協力して大地の墓から引き上げた。この土地への訪問客である高貴な人々はそれから町へと引き返した。（八二七―八四五）

そして、勇敢で大胆な兵士たちはその三本の勝利の十字架をよく見えるようにヘレナの膝の前に立てた。女王はその手柄に心から喜び、人々の喜びの付与者、すなわち、神の御子が磔になられたのはそのうちのどの十字架であるのかと尋ねた。「よく聞きなさい。私たちが学び得たところによると、キリストと一緒に二人の御供の者が迫害を受け、キリスト御自身は三番目の十字架におられたと聖書の中で記されています。あの恐怖の刻限に空は全く暗くなりまし

た。もしもおまえが知っているのなら、天使たちの王であられる栄光の守護者がこれら三本のうちの十字架で苦しみを受けられたのか言いなさい。」(八四六―八五八)

ユダは救世主であられる神の勝利の御子が掲げられたあの勝利の十字架について女王にはっきりと説明することができず、また、詳しくは分からなかった。そこで、ユダはこれらの十字架を掛け声もろとも輝かしい町の真中に立て、全能の神がその栄光の木について群衆の面前で奇跡を自分のために示してくださるまで、その場で待つよう人々に命じた。勝利の誉れ高い賢明な人々は腰を降ろし、その三本の十字架の回りで第九時^(nine)まで歌を唄った。賢者たちは栄えある手柄によって新たな喜びを得たのである。その後、ずいぶん多くの人々がその場にやってきた。彼らは命を失った人間を、すなわち、魂を奪われた若者を棺に入れて大勢の群衆の近くへと運んできた——第九時のことだった——。すると、その場にいたユダは心の底から大いに喜んだ。そして、魂を失った者、すなわち、命を奪われ、生命をなくした体を地上に置くよう命じた。真実の語り手であり分別に富む思慮深いユダは死すべき運命にあった館^(三)の上に二本の十字架を抱いて持ち上げた。亡骸^{なきがら}はそれまでと同じように死んだまま棺にしっかりと横たわっていた。肢体は冷たく苦渋に満ちていた。次に、三番目の神聖な十字架が立てられた。高貴な御方の十字架、すなわち、天上の王の木である真の勝利の御標識が上に立てられるまで、死体はそのままの状態であった。ところが、その死体は魂を与えられ、肉体と魂とが一緒になると、すぐに立ち上がった。素晴らしい感嘆の声が人々の間から沸き上がった。人々は主である父を称え、神の真の御子息を言葉で賛美した。すべての被造物からの榮譽と感謝の気持ちが絶えることなくいつまでも神に与えられますように。(八五九―八九三)

第一一節 惡魔とユダの論争（八九四―九六六）

その時、これまでと同じように、大勢の人々の王であられる生命の導き手が人類を救うために行われた奇跡が人々の心に刻み込まれた。その瞬間、罪深い惡魔が空中に飛び上がった。そして、地獄の惡魔である恐ろしい怪物は惡事を胸に秘めて次のように言った。「ええい！昔の争いごとにかこつけて、またもわしの家来を傷つけ、かつての憎しみをつのらせ、わしの財産を奪おうとするのは一体何者だ。こんな争いをやっていたのではきりが無い。罪惡に満ちた魂はこれ以上わしの手におえん。かつて惡業で全く身動きできないと思っていた奴がやってきて、わしの權利を持ち物をすっかり奪い去った。立派な振る舞いとは決して言えん。ナザレで育った救世主とやらがこのわしを何度も傷つけ、酷な仕打ちをした。少し大きくなって子供離れしたとたん、奴はわしの財産をいつも横取りした。今ではわしには何の權限も認められておらん。奴の權力は全世界に及んでいる。それにひきかえ、わしの力は天の下ではじり貧だ。この十字架を喜んで称えようという気持ちなど沸くはずがない。見ろ、救世主とやらは苦しみに喘ぐ^{あえ}このわしを何度となく狭い地獄に閉じ込め、苦しめた。かつて、わしはユダのおかげでずいぶん楽しい思いをしたものだ。ところが、今度はその（同じ名前の）ユダのために恥をかかされ、物を奪われ、罪を背負い、一人ぼっちにされてしまった。しかし、今度こそ、罪のおかげで再び忌まわしいすみから抜け出す道を見つけてやる。わしはおまえを攻撃できる別の王^{せい}を擁立しよう。そいつはおまえの教えを拒絶し、わしの罪深い習慣に従い、おまえを最も暗く、最もひどい責め苦の恐怖のどん底にたたき込むことだろう。そうならば、おまえは苦痛に苛まれ、かつて従っていた磔刑になった王に断固反抗するようになるさ。」（八九四―九三三）

すると、賢明で戦において勇敢なユダは惡魔に答えた——ユダには聖靈と燃えるような神の愛、それと沸き上が

る分別が予言者の賢明な計らいによってしっかりと授けられていた——。分別あるユダは次のように言った。「恐ろしい罪の主よ！悪事ばかり企んでいるおまえには、そんなに強く苦痛を新たにすることも、争いを引き起こす必要もないはずだ。数多くの死者を言葉でよみがえらせてくだされた強力な王が、悪事に走って名譽を奪われたおまえを奈落の底、苦痛のどん底に投げ込んでくださるからだ。おまえが最も輝かしい光と神の愛、それとあの心地よい喜びを愚かにも放棄したからには、苦しみに苛まれ、火に焼^{あぶ}られながら地獄の炎の中に住まねばならない。さらに、邪^{よこしま}な心の持ち主であるおまえはそこで際限なく刑罰と苦痛に耐えねばならない。これらのことをもつとよく弁^{わきま}えろ。」一方、ヘレナは敵と友人、すなわち、悪魔と栄光の人、罪深い者と至福に満ちた者とが両側で論争の火花を散らしている様子を聞いて知った。そして、地獄の敵である悪事の張本人が打ち負かされたのを知ってヘレナの心は一層明るくなった。それと同時に、これほど短い間に分別に満ちあふれ、これほど忠実になり、物分かりがよくなった男（ユダ）の賢明さに目を見張った。勝利の十字架を自分の目で見ることができ、また、その男の胸の中に信仰心を、すなわち、栄光の神の恩寵をこれほどはっきりと認めることができ、自分の希望が神の御子によって叶えられたため、ヘレナは栄光の王であられる神に感謝した。（九三四—九六六）

第二節 ユダの改宗（九六七—一〇四二）

翌朝、これまで天の下で栄光に満ちて掲げられたキリストの十字架が、すなわち、今まで地中に埋もれていた最大の勝利の御標識が発見されたという輝かしい知らせがこの国に伝わり、人々の口伝えによって遠くにまで知れ渡り、主の掟を隠そうとした多くの人々が恐れる中を、海が取り巻く村やすべての町へ告げられた。ユダヤ人たちはキリスト教徒たちの喜び（である十字架）を人々の前から隠し通すことができなかったため、その知らせはこれらの不幸な

人々にとって最も大きな悲しみであり、最も厭わしい出来事であった。さて、皇太后はさっそく多数の高貴な人々を通じ、伝令たちに命じて旅の仕度を急がせた。彼らは波高い海を越えてローマ人たちの皇帝のところへ行き、これまでもずっと隠されていたために聖なるキリスト教徒にとっては悩みの種となっていたあの勝利の御標識が創造主の恩寵のおかげで地中から発見されたという最も大切な吉報を帝に伝えねばならなかった。さて、この素晴らしい報告に帝の心は躍り、胸は高鳴った。この（ローマの）町では、黄金で飾られた衣服を身にまとい、遠くからやってきた伝令たちに質問を浴びせる人が途絶えることはなかった。伝令は、はるか東方から兵士たちが勝利の誉れ高い皇太后と共に白鳥の通り路である海を越えて順調にギリシア人たちの国まで航海した様子を軍隊の指揮者コンスタンティヌスに伝えた。その時、帝はその喜ばしい知らせにこの世で最も大きな慰めを心に感じ、飛び上がるほどの喜びを覚えた。帝は伝令たちに大急ぎで再び旅の準備をするよう命じた。そして、帝の部下は高貴な人から返事の言葉を聞くと、（再度の旅立ちを）全くためらはなかった。帝は勇敢な兵士たちが海を越えて無事聖都へ旅することができたら、戦の誉れ高いヘレナに^{ねぎら}労いの言葉を掛けるようにと命じた。さらに、コンスタンティヌスは地上の住民が聞いて知っている最も輝かしい御標識である聖なる十字架が発見されたゴルゴタの山の斜面に、キリストの御魂と兵士たちの救いという二つの安寧のために、ヘレナが教会を、すなわち、王の神殿を建立するようにと伝令たちに命じた。ヘレナは味方の部下が西方から海を越えて多くの吉報を伝えたと、そのとおり直ちに実行した。（九六七—一〇一六）

そして、女王は、天から魂の守護者に忠告されたとおり、石を積んでその場所に主の神殿を最も美事に建立できると公言している腕に自信のある最高の技術者を各地から連れてくるよう命じた。さらに、ヘレナはその十字架を黄金と宝石で飾り、最も貴重で高価な宝石を上手にはめ込み、銀の棺の中に納めて施錠をするよう命じた。最高の勝利の

御標識であるこの生命の木は、それ以後、崇高さに包まれ、不滅の状態で安置された。その場所では、常に、すべての苦しみ、争い、悲しみを感ずる人々に対する救いが準備されていた。このような悩める人々は聖なる被造物(三六)によって、救済が、すなわち、神聖な御加護が、その場ですぐ与えられることが分かるであろう。キリストに忠実な、生命の守護者に愛された男ユダも定められた時が経ってから、洗礼の沐浴を受けて清められた。慰めの魂がこの男の胸に宿り、彼を勇気づけて救済して以来、彼の信仰の気持ちは心の中にしっかりと根付いた。ユダは天上の至福というよりよき道を選び、悪である偶像崇拜をやめ、偽りの信仰である異端を放棄した。永遠の指導者、創造主、そして神であられる諸々の力の支配者は、ユダに慈悲深くあられた。(二〇一七—二〇四二)

第三節 十字架の釘の発見 (二〇四三—二〇四六)

さて、かつて何度も神の光を(好んでひどく軽蔑した)者もこのように洗礼を受け、彼の心はより好ましい生活へと駆り立てられ、天上へと向けられた。事実、ユダはこの世の王国においてきわめて神に忠実で、しかも、神に愛され、キリストに喜ばれたが、これは運命によって定められていた。このことが知れ渡ったのは、ヘレナの命令によって、エウセビウス(三九)というとても賢明なローマの主教が人々の調停役、会議の場での補佐として聖都に連れてこられ、そして、この主教がユダを都エルサレムの神の教会堂で知恵ゆえに聖霊の恩寵によって選ばれた市民のための司教として聖職につけた時であった。その後、ヘレナは賢明な配慮によってユダを新たにキリアクスと名づけた。この男の名前は後にこの町で「救世主の掟」という良い名に変えられた。ところで、ヘレナは救世主の手と足を貫き、天上の支配者であられる強力な王が十字架上に固定された釘のことで、依然としてあの栄光の出来事が気かりであった。キリスト教徒である女王はその釘のことについて尋ねた——彼女は、聖霊の力を借り、神の恩寵によって、もう一度

177
自分の願いを叶え、あの素晴らしい出来事の秘密を明らかにしてくれるようキリアクスに頼んだ。そして、この司教に

はつきりと次のように言った。(一〇四三—一〇七二)

「兵士たちの保護者よ、あなたはこの私にあの高貴な御標識、すなわち、魂の救済者であり、神の御子であられる人間の救い主が異教徒たちの手によって掲げられた天の王の十字架をありのまま見せてくれました。しかし、好奇心のためか、私にはどうしてもあの釘のことが気になります。地中深く秘かに埋められ、暗闇に閉ざされている物をもう一度あなたに見つけ出してもらいたいのです。全能の父であり、兵士たちの指導者であられる聖なる人類の救済者が天上からあの釘を目の前に見せてくださり、そのことで私の願いが叶えられるまで、私の心はいつまでも痛み、悲しみに疼き、永遠に休まることはありませんでしょう。だから、最もすぐれた神の使者よ、全く謙虚な気持ちになって、今すぐあなたの祈りを崇高な創造物である天上の喜びへと送り込んでください。今だに隠され、人目に触れず、秘密のままになっている地下の宝物をあなたに見せてくださるよう、兵士たちの栄光であられる全能の神にお願いしてください。」(一〇七三—一〇九二)

すると、この国民の聖なる司教は胸をときめかせ、固く心に決めた。そして、神を称える多くの人々と共に喜んで出かけた。そして、ゴルゴタでキリアクスは熱心に頭を下げ、心の秘密を隠すことなく、また、全く謙虚な気持ちになり、聖霊の力を借りて神に向かって叫んだ。そして、この新たな困難に直面して、未知の物、すなわち、あの釘は草原のどの辺りで最も確実に見つけれられるか、天使たちの守護者がお示しくくださるようにとお願いした。すると、父は、すなわち、喜びの聖霊は、人々の目の前で最も高貴な物である釘が人々の陰謀のために密かに地中に隠されている場所で、火の形をした物を用いて、その印を天高く立ち昇らせた。すると、あつという間に太陽の光よりも明るい

炎が飛んできた。その釘がまるで空の星や黄金の宝物のように地表の辺りで、暗がりから、隠されている場所から、明るく輝く光を放った時、人々は喜びの付与者が奇蹟を示されたのを目のあたりにしたのである。人々はかつて悪魔の破滅のために長い間、誤ちを犯し、キリストから目を背けたままであったが、その奇蹟に喜び、兵士たちは心を躍らせ、全員が異口同音に栄光の神に語った——彼らは次のように言った。(一〇九三—一一一九)

「私たちはこれまで虚偽のために勝利の御標識を非難してきましたが、今この目で神の真の奇蹟を見ました。そして、運命のたどる道が明るみに出され、はっきりとしました。このことに對して、高い天上の国の神が榮譽をお受けになられますように。」(一一二〇—一一二四)

さて、神の御子のおかげで悔い改めた男、すなわち、国民の司教は、再び喜びにあふれた。そして、畏怖の念を抱きながらその釘を手にし、高德の女王のもとへ持ち帰った。キリアクスは高貴な女王に命じられたとおりその望みをすっかり果たしたのである。そして、悲しみの環である熱い涙が頬に流れた——涙は苦痛のためにねじ曲った釘の上にこぼれたのでは決してなかった——。皇太后の希望は見事に叶えられたのである。ヘレナは明るい信仰の氣持ちを抱いて跪き、幸福に酔いしれ、そして、悲しみの慰めとして自分にもたらされた贈り物を謹んで受けた。この世の初めという遠い昔から、人々の慰めとしてしばしば予言されてきた真実をたった今自分が知り得たことに對して、ヘレナは数々の勝利の支配者であられる神に感謝した。皇太后は知恵という恩寵で満たされ、聖なる天上の靈がヘレナの心の中というすみかに宿り、その心を、尊い胸を守った。このように、それ以降、神の全能の勝利の御子はヘレナを守護されることとなった。(一一二五—一一四六)

175
第一四節 釘の用途（一一四七—一二三五）

それ以後、ヘレナは熱心に、心の中で熟慮しながら、信心深く、栄光への道を求めた。事実、万民の神は、天上の父であられる全能の王は、皇太后がこの世でその願いを叶えられるよう手を差し伸べられた。予言は予言者たちによって初めからすっかり前もって唱えられていたが、いずれの場合にもそのとおりになった。さて、この国民の女王はあの釘をどうしたら最も有効に、しかも大切に、人々の喜びとして使うことができるか、また、このことについての神の御意向はどうであるかということを、聖霊の恩寵を受け、熱心に、しかもずいぶん慎重に考え、思いを巡らした。

そして、ヘレナは知力によって十分助言できるとも賢い者、すなわち、心の経験の豊かな人物を会議の席に直ちに連れてくるよう命じ、この目的を実行するにはその心に照らして考えてみて、どうするのが最善であると思われるか尋ね、そして、（その男の）助言を教えどおり受け入れることにした——男は自信に満ちて答えた。（一一四七—一六七）

「最もすぐれた女王様、人類の救世主であられる神が魂の勝利と分別の力を与えてくださったのですから、主の言葉である聖なる秘密を心の中にしっかりと抱き、熱心に神の命令を果たされるのがふさわしいでしょう。町々を所有しておられるこの地上の王の中で最も高貴な王のために、その馬の鞍の一部分としてあの釘を轡くわに取り付けるよう命じてください。^(四)そうすれば、勇敢な者、刀を携えた者たち、すなわち、敵同士が勝利を求めて両側に分かれて戦をする時、その王は釘のおかげですべての敵を倒すことができるでしょう。その時、その釘のことがこの世の多くの人々によく知れ渡ることでしょう。戦勝の誉れ高く、頼もしい男が戦闘において楯と槍とを携える時、白馬に跨またがって手綱をとり進軍する者は、（その釘のおかげで）戦の成功、試合での勝利、各地における平和、戦場における安全を得る

ことでしょう。すべての人にとってこの釘は戦場における恐ろしい敵に対する無敵の武器となるでしょう。分別に富む賢明な予言者はこの釘について歌っています——その胸は、知恵にあふれる心は、深く沈潜していました——予言者は次のように言っています。(一二六八—一九〇)

『王の馬が勇者たちに囲まれていても、その轡、すなわち、手綱にとりつけられた輪状の釘によって、王が尊敬されていることがどこから見ても分かるでしょう。その御標識は神にとって聖なるものと呼ばれ、また、その馬に乗る勇者は戦で尊敬されることでしょう。』(一一九一—一九五)

そこで、ヘレナは高貴な人々の前で急いで忠告どおり実行した。皇太后は国民の宝物の付与者である高貴な人の轡を(その釘で)飾るよう命じ、さらに、その神の栄光の恩寵を贈り物として潮の流れる海を越えて自分の息子のもとに送り届けるよう指示した。それと同時に、女王がユダヤ人たちの中で最もすぐれていると思った人々に、聖なる都であるこの町へ来るよう命じた。そして、女王は、これらの愛する人々に向かって、日常生活においては主の愛を固く守り、互いの愛と友情も同様に高め合い、潔白であるように努め、指導者の教えには耳を傾け、そして、書物の知識に詳しいキリアクスが述べたキリスト教徒の習慣に従うよう諭した。司教の威厳は見事に確立された。脚の不自由な人、肢体の具合の悪い人、虚弱な人、足の悪い人、血に汚れた人、癩を患う人、目の不自由な人、赤貧に喘ぐ人、悲嘆にくれる人々が遠方からしばしば司教のもとを訪れた。そして、彼らは司教の手からいつでも、しかも生涯にわたって、健康と救いとを得た。さて、ヘレナは帰国の旅の準備ができた時、その司教にさらに宝物を与えた。そして、ヘレナは、男女を問わず、この王国で神を敬慕するすべての人々に対し、落葉に覆われて育ち、大地の下から大きく出て出てきた聖なる十字架、すなわち、最も輝かしい御標識が発見された栄えある日を、誠心誠意、心を込めて祝

173
うよう命じた。それから、春が過ぎ去り、夏の到来まであと六夜という（古代ローマの暦で）五月の朔日（ひたち）となった。

万物の中で最も強力な支配者がその腕で守っておられる天の下の十字架のための一番大切な祭礼を忘れずにいるすべての人々に対して、地獄の扉は閉ざされ、天の扉は開かれ、天使たちの国と際限のない至福は永遠に開かれ、さらに、これらの人々の運命はマリア様と共にありますように。終り。（一一九六―一二三五）

第五節 詩人の述懐（一二三六―一三二一）

私はこのように年をとり、頼りにならない体のために死にかかっておりますが、夜はかろうじて詩の技法を凝らし、言葉をうまく寄せ集め、何度も熟慮し、考えを選びすぐてきました。神の輝かしい御力によって、神の御知恵によって、より広い知識が私の心の中に与えられるまで、私はあの十字架についての事実を詳しく知りませんでした。強力な王が老齡の私を慰めようとなさって、美しい御姿で助言を与えてくださり、清浄な恩寵を分け与えて私の心の中へと注いでくださり、そして、その輝かしさを發揮されては時おり大きくされ、また私の体を解放され、さらに、私の心を開いて詩の技法を明かしてくださるまで、私は自分の成してきた行為で穢れ、罪に縛られ、悲嘆にくれ、また、苦痛に取り巻かれ、困難な事に悩まされておりました。その作詩法を喜んで意のままに今までこの世で使ってきました。書物や文書の中であの勝利の御標識について語られていることに自然と気がつき、至高の木についての奇蹟を発見するまで、私は何度となく、それこそ再三にわたって、栄光の木のことを心の中で思い描いてきました。かつて酒宴の席で宝物を、すなわち、りんごの形をした黄金を拝領したことがあったものの、その時が来るまではずっと、この男（すなわち、この私）は打ち寄せる苦痛に虐げられ、くすぶって燃える松明（四）（C）のようでした。この男はその黄金（Y）を、すなわち、窮乏の時の味方（N）を嘆き、押し潰されそうな悲哀や偏狭な謀議を耐え忍んだものです。

もっとも、この男の馬(E)はかつて何マイルもの道を駆け、針金細工の飾りをつけて勇敢に走ったことがあったのですが。何年も経つと、希望(W)も喜びも去り、青春は過ぎ、それと共に昔の元氣も消えてしまいました。かつては野牛(U)のような青春の喜びがありました。今や定められた時は過ぎ、寿命は尽き、人生の楽しみは消え去りました——まるで海(L)が、すなわち、激しい潮流が引いていくように。空の下では富や財産(F)はだれにとってもはかないものです。風は人々の前で音をたてて舞い上がり、雲の間を通り抜け、荒れ狂いながら進み、そして、突然狭い牢獄に閉じ込められ、強い力に押されて再び静かになります。その風と全く同じように、大地の上の宝物は雲の下では消え去るのです。(二三六—二七六)

この世のすべてはこのように消滅してしまいます。そして全く同様に、主が天使たちの群れの中で最後の審判を下される時^(四)、破壊的な炎はこの世に生まれたすべてのものを連れ去ることでしょう。そして、言葉を授けられた者はだれでも、そのすべての行為について審判者の口から判決を聞かねばならず、さらに、以前愚かにも語ったすべての言葉と不敵な考えとに誓約を与えねばならないでしょう^(四)。その次に、この広い大地に長く住んでいたすべての人々は炎に包まれ、三組に分けられるであろう。真実を守り通した者、至福に満ちた人々、それに天上の栄光を熱心に求める者は、炎の最も上の所に位置し、そのためにこれら崇高な精神の持ち主の集団は何の苦もなく、たやすく耐え忍ぶことができます。主はこれらの人々のために、最も心地よくて快適なように、火の光をすっかり和らげてくださいます。罪を背負っている者、悪事に染まっている輩、心の貧しい人間は中間に位置し、熱い焰の中で煙に包まれて罰を受けねばならないでしょう。第三番目の集団、すなわち、呪われ、罪に穢れた敵、信仰心の薄い虐待者たち、神の恩寵を失った者たちは炎の底で火にすっかり取り囲まれ、猛暑の中で身動きがとれなくなるでしょう。神の御怒りを買った

者たちは、その後、処罰の場から逃れて栄光の王であられる神の意を迎えるということは決してなく、恐ろしい炎の中から地獄の深淵へと投げ込まれてしまうだけです。他の二つの集団の人々はこれとは異なっています。これらの人々は天使たちの王、すなわち、勝利の神にお目にかかれます。すべての不浄な物は、溶かされる純金のように、揺らめく焰の中で炉の火によってすっかり除かれ、綺麗になり、それらの人々は浄められ、罪から解放されます。このように、これらのすべての人々は煉獄の炎によってあらゆる罪や隠された違反から解放され、浄化されます。そして、それ以後は幸福と永遠の富を享受できるのです。これらの人々は各自の罪や悪業を嫌悪し、創造主の御子息に言葉で嘆願しましたから、天使たちの守護者はこれらの人々に寛大で慈悲深くなられることでしょう。そのため、人々は天使たちのように美しく輝き、栄光の王から与えられた運命を永遠に享受することでしょう。アーメン。(一二七七—一二八二)

ユリアナ

第一節 エウロギオスの求婚(一一一〇四)

さて、勇敢な兵士たちが語り伝えるのを聞いたところによると、この出来事はマクシミアヌスの治世に起こった——帝は残忍な王で、異教徒たちの頭^{かしら}であった。彼はこの世の至る所でキリスト教徒を迫害し、殺傷し、教会を破壊し、神を称える人々、すなわち、心が清く行いの正しい聖者たちの血を大地へと流した。この帝の王国は他のどの

国よりも広くて大きく、立派で、すべての広大な大地をほとんど覆い包むほどであった。力の強い家臣は帝に命じられるがまま村々へと出かけ、主の掟を憎み、正しい行為を逸脱したこれらの者たちは邪惡にもしばしば暴力に訴えた。彼らは主に対して憎しみを募らせ、偶像を建て、聖者を殺し、学者の命を奪い、神に選ばれた人々を焼き殺し、神を守る兵士たちを槍と火で脅した。(一一一七)

その帝の家臣の中に、富裕で高貴な家柄の一人の領主^(三)がいて、権勢を誇っていた。彼は堅固な都を治めていて、ほとんどいつもニコメディア^(三)という町に住み、財貨を蓄えていた。彼は神の言葉に逆らい、みずから好んで心の底から異教を崇め、偶像を度々拝んでいた。この男の名はエウロギオス^(四)といい、並々ならぬ強大な権力を握っていた。彼はいつの頃からかユリアナ^(五)という一人の娘を心の底から好きになり、欲望の虜^(六)となつてしまった。一方、彼女は尊い信仰心を抱き、キリストを愛するがゆえにいかなる惡も退け、自分の操を守り通すことを強く心に決めていた。ところが、この乙女は父親の意志によつてその金持ちの男と婚約させられてしまった。父親は自分の若い娘が男の好意をひどく嫌っているという事実をよく知らなかった。彼女にとって、裕福な男の財産に含まれるすべての宝物よりも、神に対する畏怖の気持ちの方がずっと大切であった。(一二一三七)

さて、黄金に恵まれた裕福な男は彼女と結婚したいという強い欲望に駆られ、花嫁となる娘を直ちに自分の屋敷に迎え入れるための準備をさせた。男はこの世の財産として宝石箱の中に夥しい飾り物を蓄えていたが、彼女は男の愛を強く拒んだ。娘はそのような物をすべて輕蔑し、大勢の人々の前で次のように言った。「はつきりと申し上げますが、これ以上強く思われる必要はありません——真^(七)の神を愛し、信じ、信仰心を抱き、魂の守護者をお認めになるのでしたら、私はためらうことなく、すぐにでも御希望に添う覚悟はできておりますから。それと同時にお伝え

せねばならないことは、もしも悪魔を崇拜し、劣悪な異教の神に御身の行為を委ね、異教に対して貢ぎ物を約束なさるのでしたら、私を妻として手に入れることも無理強いすることもできないということです。私の言葉を反故にさせるのがねらいで、激しい憎しみを抱いて、恐ろしい拷問や残酷な罰を私にあてがうことはできません。」(三八一五七)

罪深い行為で穢れた領主は、乙女の言葉を聞くとたいそう腹を立て、野卑で心の暗いこの男は聖女の父親を急いで裁きの場へ連れてくるよう、迅速な伝令たちに命じた。(五八一六二a)

兵士たちは槍を構え、高々と声を張り上げた——二人は義理の親子となっていて、罪で穢れた異教徒だった。残忍な心の持ち主、槍を携えた王国の守り手は聖女の父親に言った。「おまえの娘はわしの面^{おもて}に泥を塗った。いとおしく思うわしの気持ちなど全く意に介してないと公然と言いつ張っているのだ。腹立たしいことに、公衆の面前で罵^{ののし}詈^り雑言^{ざうごん}を並べたて、わしを攻撃し、おまけに、わしらがこれまで親しんできた神々を退け、全く馴染みのない神を豊富な供物を捧げて崇拜し、言葉で称え、心の中で賛美しなければ、自分を娶^{めと}ることはできませんと、このわしに指示しておる。わしの心を傷つけるこれほどひどい侮辱は他にはない。」すると、娘の父親であり、男の義理の父でもある兵士はこの言葉を聞いてひどく腹を立て、自分の思うがままを述べた。「この私めが神々の手から永遠に御慈悲を得られますように、さもないければ、御領主様からこの快適な都で御愛顧を賜われますように。真の神々に誓って申し上げますが、最も大切な御方よ、仰せのとおり、そのお言葉に間違いないのでしたら、名高い御領主様、私は自分の娘を惜しむどころか、この手で始末するか、それとも御身の手に委ねるか、いずれかにいたしましょう。死罪に処するのがよいとお考えでしたら、娘を殺してやってください。生かしておくのが好ましいとお思いましたら、命を与えてやってください。」そして、憤然と決意した父親はたいそう怒って娘と話ができる場所へと急いだ——自分の若

い娘がどこで楽しく過ごしているのか彼はよく知っていた。(六二b—九二a)

父親は娘に言った。「なあ、ユリアナよ、おまえはこのわしにとってだれよりも大切に可愛い、この世でたった一人の娘だ。わしの目の光だ。それなのに、おまえは愚かなことに敵愾心を抱くあまり、年長の人々の判断より一人よがりの道を優先させてしまった。自分の意見を楯にして、おまえは自分の婿殿に強く反発しすぎる。婿殿はおまえより立派で、この世の位も高く、財産も豊富に蓄えておられる御方だ。寄り添う相手としては申し分のないお人だ。だから、御領主様の気持ち、永遠に幸福な愛情を、無にしないのが得策だ。」(九二b—一〇四)

第二節 ユリアナの抵抗(一〇五—一二四)

すると、至福に満ちたユリアナは父親に答えた——彼女には神に対する愛が強く不動のものとなっていた。「光、天と地、それに広大な海と大地の広がりとを創造なされた多くの人々の神を、領主様が今までよりも熱心に崇拝され、貢ぎ物を捧げて大切になさらない限り、私は領主様との縁組みに同意するつもりはありません。そればかりか、私を御屋敷に連れて行くのも無理です。金品を貢いで外の女の人から花嫁としての愛を得ねばならなくなるでしょう。私からはとても無理なことです。」すると、父親は花嫁衣装を娘に約束するどころか、怒って増々しげに答えた。「わしの眼が黒いうちに、おまえが愚かな考えを捨てず、依然として異国の神々を拝み、わしらにとって大切なこの国の人々の救済者であられる神々を捨てて顧みないなら、それに、もしも求婚を受け入れてあの勇ましい人と連れ添うことに同意しないのなら、わしは直ちに獣の爪にかけておまえの命を奪い、死に到らしめるつもりだ。おまえのような小娘がわしらの領主様を軽蔑するとは、なんと大それた恐ろしい行為であることか。」すると、神聖で分別に富み、神に愛されたユリアナは父親に答えて言った。「ありのままを申し上げます。私に命のある限り、嘘偽りは言いません。私

はお父様が決心なさったことを恐ろしいとは思いませんし、悪意を込めて激しい口調で私に強迫なされた拷問や流血の恐怖も、私には痛手にはなりません。それに、キリスト様を崇拜する私の気持ちを、お父様のお考え違いから変えさせることは無理な話です。」すると、父親は娘に対して怒り狂い、腹に据えかねて激怒し、短気をおこして残忍な気持ちになった。そして、人に命じて彼女を鞭で打たせ、拷問で苦しめ、責め苦で悩ませてから、次のように言った。

「おまえはさきほどわしらが自分たちの神々を崇拜するのを侮辱したが、その折、愚かにも並べたてた言葉の数々を、今その考えを改めて取り消すのだ！」物に動じないユリアナは分別深く父親に答えた。「お父様、虚偽で文盲の偶像に對して、魂の敵である極悪の拷問の手先に對して、貢ぎ物を捧げよと私に諭すことはできません。それどころか、私は天と地と一群の天使たちの王を称え、そして、異教の敵に對して主が私の守護者、慰安者、救世主となられますよう、私は主だけにすべてを託すつもりです。」すると、父親のアフリカヌスは怒って娘をエウロギオスへ、悪魔たちの支配下へと委ねてしまった。(一〇五—一六〇a)

夜が明け、日の光が現れると、エウロギオスは手下に命じてユリアナを裁きの場に連れてこさせた。兵士も村人も、だれもかれも、この乙女の美しさには驚嘆した。一方、花婿である領主はうれしそうな声を出して早速彼女に言葉をかけた。「ユリアナよ、可愛いいのう。太陽の光のように眩しいぞ。美貌も、豊かな気品も、はちきれんばかりの若々しさも、みんな美事なものじゃ！もしもおまえが今からでも我々の神々の怒りを鎮め、とても慈悲深い神々からの庇護と清い聖者からの恩寵をみずから求めるというのなら、おまえが眞の神々に對して貢ぎ物を捧げようとしないうちに備えて用意されている物も、すなわち、残酷にもしつらえられた無数の罰と、ひどい苦痛の数々も、おまえから遠のいていくことであろう。」高貴な乙女は彼に答えて言った。「虚偽と異教崇拜をおやめになり、すべての被造物を永

遠に支配下におかれている栄光の神を、魂の創造者であられる人類の主を、賢明にもお認めにならない限り、御領主様と姻戚関係を結ぶことを好ましく思う気持ちは、強迫によって無理やり出てくるものではありませんし、恐ろしい罰の数々を準備されることで得られるものでもありません。」すると、領主は残忍な気分を催し、人々の目の前で威し文句を並べたてた——人々の支配者は彼女にすっかり腹を立て、残酷さをむき出しにした。そして、裸にした乙女の手足を伸ばさせ、何の罪もない娘を鞭で打ちすえるように命じた。そして、この武將は高笑いして、口汚い言葉を発した。「これは、ひとまず挑まれた我々二人の争いのほんの前哨戦にすぎない。これまでおまえは不謹慎な言葉を度々使い、真の神々を愛することに強く抵抗しすぎた。とはいえ、命だけは当分助けてやろうと思う。しかし、悪意に満ちた文句を述べたてたからには、まず神々を宥め、しかるべき貢ぎ物を神々に供え、平穏な状態を築かない限り、強情なおまえには責め苦という褒美が後で与えられることになっておる。憎しみに満ちた戦いや非難はやめにせよ！今後、これ以上いつまでも、愚かしくも妄想に捕らわれるというのなら、わしは憎しみに急ぎ立てられて止むなく、最も残酷な方法でおまえの不敬と冒瀆ぼうとくに対して報復をせねばならない。だれもが知っており、しかも、この国の住民が長年親しく崇拜してきた最も神聖で最も慈悲深い神々に対し、おまえは罰当たりな言葉を用いて争いを挑んできたのだ。」すると、高貴な心の持ち主はびくともせずには答えた。「呪われた悪魔よ、そのような裁きや罪の痛みなど恐れるものですか！私には自分の希望の星として、天の王国の保有者であり、慈悲深い守護者であられる万民の主がおられる。主はあなたの妄想とあなたが神とみなす化け物たちの攻撃の手から私を守ってくださいます。あなたがたの神々はあらゆる恩寵を奪われており、怠惰で、不潔で、しかも無用の長物です。そういう神々に愛を求めたところで、だれ一人恩寵や真の平和を得られはしません。悪魔に囲まれて功德を積むのは無理なことです。栄光とすべての勝利の

165 永遠の所有者として、すべての力の上に君臨しておられる主に対して、私は自分の心を定めています。主こそ真の王

です。』(一六〇b—二二四)

第三節 悪魔の誘惑 (二二五—三四四)

さて、そうすると、娘の心に秘めた決意を変えさせることができないのが領主には恥かしく思われた。そこで、彼は部下に命じて彼女を髪の毛で高い木につるして掲げさせた——燦然と輝く乙女はこの木の上で六時間もの間、とても過酷な罰となった殴打の刑に苦しめられた。それから、憎むべき虐待者は直ちに彼女を引き降ろすように命じ、牢獄へと連行するよう指示した。彼女の胸の中では、心優しいが不撓不屈の力を込めた神への称賛の気持ちが固く根付いていた。(二二五—二三五)

さて、鉄槌で鍛え上げられた牢獄の門扉は門で閉ざされた。信心深い聖女ユリアナはそこに留まっていた。牢獄の中で闇に包まれながらも、彼女はたえず天上の王国の神を、人々の救世主であられる栄光の王を心から称えた——彼女にとって聖霊は永遠の伴侶であった。すると、悪事に長けた人類の敵が突然その牢獄の中に闖入してきた——苦痛を極め尽くした魂の敵である地獄の捕虜は、天使の姿を借りて聖女ユリアナに言った。「我々の主であられる栄光の王にとって最も愛すべき、しかも最も大切な人よ、何を苦しんでおられる？ あなたが賢明にも領主の崇拜する神々に貢ぎ物を捧げ、宥めるつもりがない場合に備え、領主は極悪の懲罰を用意しています。彼はあなたをここから連れ出すよう命じますから、あなたが死という破滅によって人々の目の前から連れ去られる前に、贈り物と勝利の犠牲を捧げるよう急ぎなさい。至福に満ちた乙女よ、あなたは何としても領主の怒りから逃れねばなりません。」すると、物に動じない、キリストに愛された乙女は直ちに天使に向かってあなたは一体どこから来られたのかと尋ねた。神に

見捨てられた者は彼女に答えて言った。「私は天から旅して来た神の天使であり、品行方正な従者です。聖者として、天の高みからあなたの元へと遣わされました。途方もなく残酷で無情な拷問が恐ろしい罰としてあなたに準備されています。主の御子であられる神は、あなたがそれらの苦痛から逃れるよう諭せと私に命じておられます。」すると、娘は天の王国の敵である悪魔が言葉で述べ伝えた恐怖の神託のために恐れ戦いた。そして、若く清浄無垢な乙女はしっかりと心を定め、神に向かって呼びかけた。「永遠にして全能の、人々の保護者よ、天使たちの父よ、最初にお作りになられたあの高貴な創造物にかけてお願いします。私の目の前に立っている伝令はひどく恐ろしい言葉を私に告げましたが、その言葉どおりに私が神の恩寵を称えるのを止めさせないようお願い申します。諸王の栄光であられる万民の守護者よ、慈悲深くあられる神様にも一つお尋ねします。神の使いと称して私に厳しく急ぎ立てている天駆ける従者は一体何者なのか明らかにしてください。」すると、雲間から荘嚴な声が彼女に語りかけ、次のような言葉を発した。「その悪辣な者を捕らえよ。その者が用件を初めから偽りなく語り尽くし、自分がどういう素姓のものか白状するまで、離してはならない！」(三六—二八六)

すると、乙女の心は大いに躍った。彼女はその悪魔に掴みかかった……(二八七—二八八)

……諸王の王を死に委ねるために。そればかりか、兵士が主を傷つけるようわしは画策した——大勢の者が主の方を見上げた——そのために、主の血も体液も共に大地に流れた。そればかりか、わしはヘロデ王の心をも惑わせた。そのため、王の妃に対する愛と不正な婚姻に対して聖ヨハネが口出しをした折に、王はヨハネの首を刎ねるよう命令を下した。まだある。わしは策略を巡らしてシモンに教示した。そこで、彼は選び抜かれたキリストの弟子たちに対して反抗し始め、大變な妄想を抱いて——彼は弟子たちを魔術師だと触れ回った——悪罵の限りを尽くして聖者

たちを攻撃した。わしはネロを誑(一〇) たぶちかした際に、手の込んだ策略を敢行し、おかげでネロはキリストの使徒ペテロ(一一)とパウロを殺すよう命じたのだ。かつてピラトはわしの教えに従って強力な神である天上の主を十字架の上につるした。(一二)同じように、わしはアイゲアテスにも教えてやった。そこで、彼は愚かにも聖者アンデレ(一三)を高い木の上で処刑するよう命じ、そのため、アンデレは十字架の上で自分の魂を天上の輝きの中へと送り出したのだ。このように、わしは兄弟と共に、数えあげることも十分に説明することも出来ないほど多くの残酷な悪事と暗澹たる罪業を重ねてきた——悪意に満ちたひどい企みは数知れない。」聖女ユリアナは聖霊の恩寵の助けを借りて悪魔に言った。「人類の敵よ、おまえの用件と、おまえを私の元へ遣わしたのは一体だれなのか、これから白状させてやる。」(一四)悪魔はしつかりと掴まれて恐れ戦(一五)き、逃れる望みを断たれて彼女に答えた。「地獄の住人の王であるわしの親父がおまえの元へと旅して行くよう、わしを送り出したのだ。親父は惨めなすみかにいて、わしよりも熱心に悪事を渴望している。廉直な者の心を奸計を用いて誑(一六)かすようにと親父がわしらを送り出す時には、わしらの心は痛み、臆病な気持ちになる。あの恐ろしい王はわしらには慈悲深い主人ではないのだ——もしもわしらが悪事を未遂に終わらせようものなら、親父の目の届く所はどこでも、以後絶対に歩き回ることはいけないのだ。もしもわしらが地上にいる所を見つかったり、あちこちうろつき回っているのが露見した場合には、親父は暗闇から広大な地上中に自分の家来を遣わし、わしらを縛り、燃え盛る火の中で拷問にかけて懲らしめるなどの迫害を加えるよう、家来たちに命令するのだ。有徳の士の心や聖者の気持ちを邪道に導びくことができれば、わしらは痛烈な殴打を浴び、最も残酷で悪辣な罰を受けることになる。もうこれですっかり真実が理解できただろう——わしが止むなくこんな暴拳に駆り立てられ、再三再四苦難を忍んでいることと、わしがおまえの所に現れたことの顛末を。」(一七)（二八九—三四四）

第四節 惡魔の告白（三四五―四五三）

すると、聖女は罪の策士に、すなわち、大罪の張本人である人間の敵に向かつてさらに言葉で詰問した。「魂の敵よ、邪心に捕らわれたおまえが一体どのような方法で心正しい人々を罪に陥れ、最もひどく迫害しているのか、今からおまえの口を割らせてみせよう。」不信の追放者である敵は彼女に答え、言葉で述べた。「深い罪を負い、わたしは何度もありとあらゆる悪業を成してきたが、これは本当のことであり、決して嘘ではないということがはっきり理解できるよう、始めから終わりまで、わたしはおまえに分かり易く説明できる。わたしはおまえをこの腕一本の力で難なく神の救いから遠ざけることができ、その結果、おまえが勝利の支配者である天上の王に背き、より劣った神に屈服し、罪の創始者に貢ぎ物を捧げるようになるはずだと大胆にも心の底から期待し、信じて疑わなかった。わたしは様々な姿を変えることによって、心の正しい者の気持ちを惑わすのだ。自分の心を神の意志に委ねる者に気づいたら、わたしは直ちに準備万端整えて、そいつの顔の真ん前に心の様々な悪徳を、すなわち、恐ろしい考えとか密かな妄想の悪徳を突きつけてやるのだ。罪に溺れかけている者が直ちにわたしの教えに従うよう、数多くの妄想を抱かせ、罪の樂しみや偽りの欲望を倍加させてやる。わしがあまりにも強く罪を焚き付けるため、そいつは燃えながら、祈りを止めて大胆な行動をとり始める——堅物の男も悪徳を焦がれるがゆえに祈禱の場には長く留まることはできないのだ。このように、生活や輝かしい信仰が妬ましく思える者に、わたしは敵意に満ちた恐怖をもたらしやる。もしも心の底からわたしの教えに従いたいと熱望し、罪を犯すのなら、後で必ず立派な美德を喪失して（地獄の底を）うろつき回ることになる。わたしの弓の攻撃に抗して王の教えを守る勇敢で大胆な兵士を見つけることがあれば、すなわち、このわたしの戦いから遠く逃げ去ろうとはせずに、あつぱれにもわたしに向かつて神聖な楯を、神々しい武器である板を構え、

しかも神から離れることなく、敵の部隊の包囲の中にあっても、確固として大胆にも祈りながら窮地に留まるような兵士がいたら、わしは喜びを奪われ、恥じ入ってその場から遠くへと立ち去り、ゆらめく焰に取りまかれ、自分が力を労しても戦いに勝つことが出来なかった無念さを嘆かねばならなくなるのだ。しかし、嘆いてばかりはいられない。軍旗がはためく所で、別の兵士を、そうだ、もっと弱くて頼りない、わしが引き金となって扇動でき、しかも戦では邪魔ができるような、そんな兵士を探さねばならない。そいつが心の中で何か善行を積もうと試みたところで、わしは直ちにそいつの魂胆をすっかり見通し、どの程度心が定まり、しかも誘惑に抗し得るのかも見破る準備は出来ている。わしはそいつの罅壁の門戸を侮辱しながらこじ開けてやる。櫓は穿たれ、入口が開けられると、わしは矢を放ち、まず、そいつの中に、すなわち、胸の中に様々な心の欲求を抱かせ、残忍な考えを送りこむ。すると、神を称賛することよりも悪徳の方が、すなわち、肉体の快楽を追求することの方がそいつには好ましく思えてくるのだ。わしは教育者だから、そいつがキリストの掟とはきっぱりと縁を切り、わしの奴隸として、魂を崩壊させて罪の深淵へと落ち込み、わしの悪業の習慣に従って生活していくよう、切に願っている。靈魂を破壊するとなれば、この世の墓場で土に埋もれて虫けらどもの餌食にならねばならない肉体よりも、魂の方がずっとわしには好ましいのだ。」(三四五—四一七a)

すると、乙女は再び口を開いた。「惨めで不潔な霊よ、おまえは悪事の扇動者として一体どのような方法で清浄な人々の群れの中へと分け入るのか白状せよ。かつておまえは不実にもキリストに刃向かい、戦いを挑み、あの聖なる御方に対して策を弄したことがある。その傲慢さのため、おまえが惨めさに困り果てて自分のすみかを探し回った時に、そのおまえのために地獄の窪みが深く掘られたのだ。私が思うには、おまえの欲望をしばしば挫いてこられたあ

の心正しい御方に、栄光の王の助けを借りて対抗するのだったら、おまえはもっと慎重で、しかももっと細心であるべきだった。」(四一七b—四二八)

すると、呪われた不幸な化け物は彼女に答えて言った。「このように全く抵抗できないほど強くわしに足枷をはめ、縛りつけてしまうほどの豊かな分別を持ち、おまえが他のすべての女よりすぐれ、わしとの戦いに勇敢で大胆になれるのは一体どうしてなのか、まずわしに教えてくれ。わしが地獄の住民の王である自分の親父に慰めを置いているのと同じように、栄光の座にあって人類の王となっている永遠の神をおまえは信じている。悪意に満ちた行為によって、わしが心正しい者たちの気持ちと考えを神からの救済から遠ざけるように、(地獄の底から)彼らの元へと送り出されると、今ここで旅の途中のわしに悲しみが降りかかってきたのと同じように、時折わしの欲望や期待は聖者の手によって阻まれ、認められないことがある。その事実にみずから気付くのがあまりにも遅すぎた！そのため、これから長い間悪事を重ねながら恥を忍んでいかねばならんのだ。だから、十字架の上で受難なされた栄光の王、すなわち、天の王国の主であられる至高の御方の力と慈悲にかけて、わしはおまえに頼みがある。どうか惨めなわしを哀れみ、わしが全く祝福されない状態で滅びることがないようにしてくれないか。大胆不敵で無謀にも、おまえの所に旅してきてしまったが、ここでこんな苦境に陥いるとはこれまで思ってもみなかったのだ。」(四二九—四五三)

第五節 悪魔の地獄への放逐(四五四—五五八)

すると、栄光の燭灯とも言うべき美貌の乙女は、この裏切り者に向かって言葉で述べた。「惨めな地獄の霊よ、おまえがここから立ち去る前に、もっと多くの悪事について、陰鬱な妄想を抱いて人の子を傷つけるために行ってきた多くの邪悪な罪について、白状させてやる。」悪魔は彼女に答えた。「全くのところ、おまえの言うことを聞いてば

かりいと、わしはどんなことがあっても、おまえの命じるとおりに、おまえの敵意に急かされて、心を割って苦痛を忍ばねばならない。苦境はともつらく、難儀は計り知れないのだぞ！おまえの審判に従えば、わしはこれまでずっと画策してきたすべての事柄、あらゆる陰惨で悪辣な行為に耐え、苦しみ、そしてそれを暴露せねばならんのか！わしはこれまでしばしば腹黒い魂胆から多くの人間の視力を奪って盲目にしてきた——わしの毒の混ざった息を吹きかけ、黒い俄か雨に濡らして、目の光を霧の帳で覆い隠してきた。そして、意地の悪い罠を仕掛けて、ある者の足をずたずたに破き、またある者を燃え盛る火の中へ、焰の包囲の内へと投げ込んだ——だから、彼らの足跡が見られるのはそれが最後となったのだ。また、わしは何人かの体から血を噴出させたため、血管が壊れて突然彼らは命を失った。わしの策略のために、ある者は海の波の上で、荒海の上で、水に溺れ、激しい流れの下へと沈んでいった。わしが十字架へと委ねたため、高い絞首台の上で哀れにも命を捨ててしまった奴もいた。わしが唆して喧嘩させたおかげで、酒に酔った者たちは突然かつての恨みを蒸し返した——つまり、このわしが酒杯から奴らに敵意を移したため、死すべき運命にあった奴らは酒宴の席で刀で渡り合い、激痛に襲われて肉体から魂を急に解放させてしまったというわけだ。神の恩寵が現れず、無頓着で、しかも神の祝福を受けていないとわしが思った者たちに対して、わしは自分の手を汚して、大胆にも恨みを込めて奴らを殺害し、種々の死に様にしてやった。たとえ夏の日長に一日中坐っていたとしても、天が確立し、星の軌道と大地が定まり、最初の人間であるアダムとエバが生まれて以来——もっとも、この二人の命はわしが奪ってやったし、神の愛とその永遠の恩寵、それに輝かしい天国とを捨て去るよう唆してやったので、この二人とその子供たちにも同様に、惨めさと悪業、最もひどい暗黒とが永遠に降りかかることになったのだが——新田を問わず、わしが悪意ゆえに成し遂げてきた苦難のすべてをおまえに語って聞かせることはできん。

際限のない悪事をなぜこれ以上数えあげねばならんのか？この世の始めからこれまでずっと、今の今まで、どの国でも見られるように、大地に住む人間どもに降りかかったすべての恐ろしい憎しみは、すべてわしが引き起こしたものだ。神聖な今のおまえのように、これほど大胆にこのわしに手で触れようなどと思った奴はだれ一人いなかった。司教であれ、予言者であれ、聖なる力によってこれほど勇敢になりうる者はこの世では皆無だった。天上の主であられる万民の神は、司教や予言者たちに知恵の魂という、この上限りない贈り物を授けたが、それでもわしは奴らに近づくことが出来た。おまえには罪惡が素晴らしい物だと思わせるべく、地獄の王であり人類の敵でもあるわしの親父が地獄の暗闇から地上へとわしに旅するよう命じた時に、父がわしに授けてくれた絶大な力をおまえは圧倒して強く押えつけてしまった。今の今まで、これほど勇敢にわしを束縛して包囲し、悲惨な目にあわせて苦しめた者はだれ一人いなかった。重苦しい戦いという悲しみがわしに降りかかったのはその後のことだ。惨めにもわしが陰鬱な館の中で報いを受け、厳しい懲罰を加えられたからには、仲間の者たちと共に今回の使命を楽しく語り合うことなどありえないのだ。」(四五四―五三〇a)

ところで、凶悪な男である例の領主は、心清いユリアナを狭い牢獄から異教徒との謁見えっけんの席へと、すなわち、裁きの場へと連れ出すよう命じた。神から心に靈感を与えられた聖女は、固く縛られた異教の惡魔と一緒に連れ出した。すると、落胆した惡魔は今回の使命を嘆き、拷問を憂い、みずからの境遇を悲しんで、次のように言葉に出して語った。「わが友ユリアナよ、神の誼よみでおまえに頼みたい。おまえの敵の都にある牢獄の暗がりの中で、最も賢明な地獄の住人の王に——それはわしらの父であり、意地の悪い殺戮王なのだが——その王におまえが打ち勝った時に、わしに対して行った侮辱や非難を、人々の前でもうこれ以上くり返さないでくれ。これを見てくれ。おまえは痛烈な

打撃をくらわして押しを押しつけているではないか。おまえほど大胆な目標を持ち、これほど片意地な人間は、後にも先にもこの世では女の中に見当らないことがわしには実際よく分かった。おまえの心は全く何の穢れもなく、分別に満ちていることがわしにははっきりと見てとれる。」(五三〇b—五五三a)

そこで、娘は魂の敵である悪魔をしばらく懲らしめた後、放免して暗闇へと、すなわち、黒い地獄の底へ、罪による破滅へと向かわせた。そのため、悪業の告白者となった悪魔は、拷問の手先である自分の仲間たちに旅の途中で起こったことを語って聞かせねばならなくなったが、そのことを一層はっきりと認めざるをえなくなったのである。^(八)
(五五三b—五五八)

第六節 ユリアナの殉教(五五九—六九五)

：彼らのはかつて天上の主とその聖なる創造物とを喜んで称えた。あらゆる創造物に優って、主だけがすべての勝利と永遠の繁栄の贈り物を手中に収めておられますと彼らは心から述べた。すると、飾り物で輝く神の天使がやってきた。天使はその火を押しつけ、邪心がなく悪徳の覚えのないユリアナを解き放って守り、恐ろしい火を投げ捨てた——その火の真中にあっても、女の鏡とも言ふべき聖女は無傷のままであった。このことは例の金持ちの領主にとって耐えがたい苦痛であった——この苦しみをこの世で他に転じることさえできればと思った。罪に穢れたこの男はどうすれば最もひどい拷問にかけて痛々しく女を死に追いやれるかと考えた。(五五九—五七三a)

悪魔は決してためらわなかった。大勢で力を合わせ、^{かちどき}勝鬨の声を上げながら粘土の器を作り、森の木を薪にし、その器の回りに集めるべく命令するよう悪魔は領主に唆した。そこで、この残忍な男はその土製の瓶^{かぶ}を鉛で一杯にするように命じ、その次に、たくさんの薪に点火し、その火葬用の燃料を燃え上がらせるよう指示した。瓶の周囲は火に

包まれた。鹽は熱く煮えたぎった。そして、怒りに燃えた領主は、せっかちにも、部下に命じて何の罪もなく咎もないユリアナを沸騰した鉛の中へとほうり込ませた。すると、火が突然勢いよく分かれて飛んだ。熱く恐ろしい鉛は四方八方に飛び散った。人々はこの激しい勢いに圧倒され、恐れ戦いた。数にして七五人もの異教徒たちがこの火の熱風のためにその場で焼き殺された。しかし、それでもなお、聖女ユリアナは美貌を損なうことなくその場に留まっていた——彼女の衣服も、その縁どりも、それに髪も肌も、また体も手足も、火で焦げることはなかった。炎の中でも全く無傷のままの彼女は、これらすべてに対して諸王の王に感謝の気持ち述べた。すると、領主は荒々しく残忍となり、自分の衣服を引き裂いた。また、彼は白い歯を見せて軋ませ、獣のように気を乱し、恐ろしく猛り狂った。そして、自分の信じる神々がたかだか一人の女の意志を力で押え込むことすら出来なかったことに対して神々に悪態をついた。栄光の乙女は決然として何物も恐れず、自分の力と主の意志を決して忘れはしなかった。苛立った領主は、心聖く、キリストに選ばれた少女の首を一刀両断のもとに切り捨て、彼女の命を奪うよう命じた——もっとも、後で彼がその結果を知るに至ったように、彼女の死は決して彼の利益とはならなかった。(五七三b一六〇六)

さて、ユリアナの苦闘の一日を終わらせ、命を奪おうとの悪意に満ちた相談事を兵士たちが声高にするのを聞くと、聖女の心は改まり、乙女の気持ちはずいぶん勇気づけられた。罪深い男はついに貞淑で神に選ばれた罪のない乙女を死に追いやるよう命じた。すると、直ちに、卑劣な地獄の精が姿を現した。ユリアナが少し前に縛りあげ、苦痛を与えて懲らしめた、不幸で惨めな呪われた者は、情けない言葉を並べた——大勢の群衆の前で悲嘆にくれて叫び声を上げた。「わしらの神々の力を軽蔑し、わしを最もひどく萎縮させ、裏切り者にしてしまったことに対して、今こそこっぴどく仕返しをすべきだ——刀で傷つけ、憎むべき返報を受けさせろ——罪に穢れた人々よ、今までの

恨みを晴らせ！忘れるものか、あの苦しみを——固く縛られ、無数の苦痛と嘆き、それに夥しい数の災難を被ったあの夜のことを。」聖者ユリアナが化け物の方を見ると、地獄の悪魔がみずからの苦悩を嘆く叫び声が聞こえた。そして、この人間の敵は罰を受けるために急いで飛び去り、次の言葉を吐いた。「ああ、破滅したこの身が嘆かわしい！以前と同じように、ユリアナが惨めなわしをまたもやひどく叱責して恥をかかせるいやな予感がしてきた。」（六〇七—六三四）

一方、ユリアナは残酷な者たちが憎さのあまり自分を殺そうと考えている国境に近い所定の場所へと連れてこられた。すると、彼女はこれらの人々が罪から離れて神を称えるようにと諭し、励まし、そして、慰みと天上への道とを約束して、次のように言った。「人としての喜びと天上の栄光、それと聖者たちによる慰めと天使たちの神を決して忘れてはいけません！人々とあらゆる階級の天使たちが上の天国において称えるのは主とその至高の御力です。そして、その天上では、神の御力を受けることになる人々には神の永遠の援助の手がいつまでも与えられます。ですから、正しい行いをなさる親愛なる皆さん！風がその強い吹く力によって皆さんがたの家を飛ばし去らないよう、強固なものとするよう御忠告したいと思います。堅固な壁はそれだけ一層強く、罪惡に扇動された嵐の襲来に持ちこたえることでしょう。勇敢な皆さん、平和を愛する心と清らかな信仰をお持ちになって、生きた巖(イオ)の上に基礎を定めてください。皆さんがたがお互いに真の誓いと友情と神々しい神秘感を、心の底から沸き上がる願望として胸の内にお持ちください。そうすれば、全能の父は皆さんがたに御慈悲をお垂れくださいます。さらに、悲しい出来事の後で、万民の神の御手からは慰めという最高の御利益(ベリヤク)が与えられます。こういう風に申し上げますのも、つまりは皆さんがた御自身ではここからの出発を、すなわち、命の終わりを御存知ないからです。用心深い皆さんがたが、敵

が天の都への通り路を塞がないよう、敵による流血の恐怖から身を守るのが賢明だと思ひます。人類の主であり、勝利の付与者であられる天使たちの王が私に慈悲深くあられますよう、どうか皆さん、神の御子にお願ひしてください。平和と眞の愛は永遠に皆さんがたの元にあることでしょう。」すると、刀が振り降ろされ、ユリアナの魂は肉体から離れ、永久の喜びへと向かった。(六三五一六七—a)

さて、臆病になった邪惡な敵エウロギオスは部下の一隊と共に船で海に逃れ、白鳥の通り道である潮の流れの上で長い間揺られていた。^(二二)そして、一行が陸地に着く前に、彼は恐ろしい慘禍のために兵士たちの一隊もろとも死に奪い去られた。逆巻く波のために、三四名もの惨めな兵士の一行はその主人と共にその場で命を奪われた——喜びを喪失し、希望をなくして、彼らは地獄へと向かった。その暗い館では、奥深い巢窟では、領主とその仲間の者たちは自分たちの頭から^(かしら)宝物を授けられる望みも、酒宴の館の席上で宝環や黄金細工を拝領する希望もなくしていた。(六七—b—六八八a)

彼らとは対照的に、夥しい^(おびただ)数の人々が聖女の遺体を町の中へと運び込み、そして、この亡骸は^(なきがら)称賛の歌声の中を、大勢の人々によって大地の中の奥津城へと運ばれた。その後、その地では、年を経るにつれて、住民の間には大きな誇りを抱いて神を信仰する気持ちが芽生え、今日に至っている。^(二二)(六八八b—六九五a)

第七節 詩人の述懐(六九五b—七三二)

(肉体と魂という)すべての中で最も大切な二つの同志が私を分断し、双方の間柄と深い相互の愛を隔てしてしまう時に、あの聖女が私に援助の手を差し伸べてくださることが是非とも必要です。私の魂は、その行き着く所を知らぬまま——私自身もどこへだかは分かりませんが——私の肉体から離れて旅に出かけねばなりません。私は過去の

行為、すなわち、これまでに成してきた事柄に應じて、この世から別の世へと行かねばなりません。人 (CYN)⁽¹¹¹⁾ は惨めにもさまよい歩きます。審判者が私たちの生存中の報酬として私たち各自の行為に應じて与えようと望まれる物を、罪に穢れた私たち羊 (EWI) が戦々競々として待っている時、勝利の付与者であられる王は、(私たちの罪惡に對して) 激怒なさることでしょう。私の肉体 (E) は震え、悲しみにくれて後に留まり、時期を問わず私がこの世で成したあらゆる苦痛や罪惡の傷を決して忘れ去ることはないでしょう。私は泣いて涙を流しながらこのことを嘆くことでしょう。かつて魂と肉体とが共に傷つくことなく、この大地の上を旅している間に、私は自分の邪惡な行為を後悔するのがあまりにも遅すぎました。ですから、あの聖女が至高の神に私のことを弁じてくださる御慈悲が私にはぜひとも必要なのです。私の嘆きが、大きな心の悲しみが、私にそのことを教えてくれるのです。(六九五b-七一八a)

この詩を読んでくださるすべての人にお願います。どうかこの私の名前を決してお忘れにならないでください。そして、次のことを神様にお祈りしてください。栄光と統一の座にあられる三位一体が輝かしい天空の中で人類に對して、すべての人々について、生前の行為に應じてその報いを決定なさる大切な日と恐怖の時刻に、天国の創始者、強力な王、私たちの父、それに、慰めの靈でもあられる行為の審判者が、その最愛の御子と共にこの私に援助の手を差し伸べてくださらんことを。万民の神よ、喜びの王よ、あの偉大な刻限に、御慈悲にあふれるお顔を私たちにお見せくださいますようお願いいたします。^(二四)アーメン。(完) (七一八b-七三一)

ユデト

第一節 ユデト、敵将ホロフェルネスの首を刎ねる（一一二一）

（…ユデトは）この広々とした大地の上で神の恩寵を疑うことは（なかった）^{（c）}。被造物の王がユデトを最も危険な事態から救わねばならなくなった時、ユデトは栄光の王から、最高の審判者である王から、その恩寵として保護をこの大地の上で得た。ユデトは全能の神に対して確固たる信仰心を絶えず抱き続けたことにより、天上の高貴な父は彼女に恩恵を授けられた。さて、私が聞いた話では、ホロフェルネスはありとあらゆる珍しい物を取り揃えて美事な宴会の準備を整え、人々を酒宴の場へと熱心に勧誘した。この兵士たちの頭は最年長の家来たち全員に宴席に来るよう命じた。楯を携えた兵士たち、その国の部将たちは、直ちに招きに応じ、屈強の將軍の元へと駆けつけた。妖精のように美しい婦人ユデトが初めてホロフェルネスの元を訪れたのは、それから四目目のことであつた。（一一一四）

さて、將軍の邪惡な味方であり、傲慢で大胆な兵士たちは、全員酒盛りの席に出て、腰を降ろした。底の深い大盃が席から席へと何度となく運ばれ、なみなみと酒の注がれたコップや細口びんも同じように宴席の客の所へと運ばれた。勇敢ではあるが運の尽きた兵士たちは盃を受けた——もっとも、権勢を誇る恐ろしい戦士たちの將軍はその運命を知る由もなかった。そのため、兵士たちへの黄金の分配者であるホロフェルネスは酒盛りに満足して、笑い、叫び、騒ぎ、そして、大声でわめいた。そのため、この残忍で高慢な醉漢がわめき散らし、声を張り上げ、招待客たち

151
に陽気に振る舞うよう頻りに勧める様子は、遠くからでも、土地の子供たちにまで、聞こえるほどであった。(一五一

二七)

このようにして、邪悪で傲慢な宝物の付与者は自分の家来たちが酔い潰れるまで、終日酒を浴びるほど飲ませた——彼はまるで自分の部下たちが全員死に倒され、すべての物を奪われたかのごとく酔わせてしまったのである。このように、人の子らに暗い夜が訪れるまで、兵士たちの頭は宴席に居並ぶ人たちに酒を勧めるよう部下に命じた。そして、罪惡に染まった將軍は、腕輪をはじめ、指輪で飾られ、神に祝福された婦人ユデトを急いで連れてくるよう指示した。家来たちは戰士たちの頭である自分たちの將軍に言いつけられたとおりにすぐに実行に移した——兵士たちは宴席に急いで駆けつけ、聡明なユデトを見つけると、直ちにその美しい女性を高い天幕のある所へと連れて行った。救世主に憎まれ、権勢を誇る男は、夜はいつもその天幕の中で泊まっていた。この国の支配者である男のベッドの回りには純金製の美しいカーテンがつるされていた。そのため、兵士たちの頭である残忍な男は中に入ってくる者ならだれでもカーテンを通して見ることができが、この傲慢な男が戦で勇敢な兵士にもっと近くで話すよう命じない限り、だれ一人この男を見ることはできなかった。さて、兵士たちは急いで賢明な女性をベッドに連れて行き、そして、これらの大胆な男たちは聖女を天幕の中へ連れ込んだことを將軍に告げた。すると、悪名高い都の支配者は心から喜んだ。男はこの綺麗な婦人を汚らわしくて罪深い行為で凌辱しようと考えた。しかし、栄光の審判者であられる万民の守護者はそれを許すことは望まれず、万物の支配者であられる神は男がその行為を実行に移すことを防がれた。さて、極悪非道で好色で残忍な男は、一夜のうちに一瞬にして命を失うことになるとはつゆ知らず、お供の者たちに付き添われて自分のベッドに行った——傲慢な兵士たちの支配者は、これまでこの世の上と雲の屋根の下で暮らして

いる間に他人に対しては求めてやまなかった悲惨な人生の結末を、今度は自分がこの大地の上で待つことになった。ところで、この力の強い男は酒に酔い潰れていたため、まるですべての感覚が麻痺したかのようにベッドの真中に倒れ伏した。酒で腹を膨らませた兵士たちは大急ぎでその臥所から出た——この兵士たちが不信心で憎むべき暴君をベッドに案内するのはこれが最後となった。さて、比類のない救世主の侍女ユデトは、不潔で罪深い男が目覚ます前に、どのようにしたらこの恐ろしい者の命をたやすく奪うことができるかしらと思ひ悩んだ。しかし、髪を編み上げた創造主の侍女は百戦錬磨の鋭い刀を右手で握りしめ、鞘から抜き放った。そして、地上に住む万物の救世主であられる天の守護者の名を呼び、次のように言った。(二八—八二)

「被造物の神よ、喜びの霊よ、三位一体の栄光であられる万物の支配者の御子よ、お願いがございます。神様の御慈悲がぜひとも必要なのです。私の胸は今激しく燃え、心は乱れ、苦痛にひどく悩まされています。天上の主よ、この刀で悪の張本人を倒せますよう、この私めに勝利と真の信仰をお授けください。力強い人々の王よ、私に救済の手を差し伸べてください。神様の御慈悲をこれほど必要に感じたことはかつてありません。力強い主よ、輝かしい栄光の付与者よ、このように私の心を惨めにし、胸を熱くさせる者の仇をとらせてください。」すると、最高絶対の審判者は、分別と正しい信仰を持って自分に助けを求めるこの世のすべての住民に対してなされるとおり、直ちにユデトに勇気を与えて励まされた。すると、ユデトの心は軽くなり、聖女には新たな自信が湧いてきた。そこで、ユデトは異教徒の男ホロフェルネスの髪をしっかりと掴んだ。そして、この男にとってはなほだ不名誉なことに、男は手で引っ張られてユデトの方へと引き寄せられた。呪わしい男をいともたやすく扱うことができたので、彼女は邪悪で憎むべき男を手際よくベッドから引きずり降ろしてしまった。そして、おさげ髪のユデトは憎みて余りある敵を光り

輝く短剣で突き刺し、男の首を半分ほど切り裂いた。そのため、傷ついた醉漢は氣を失って倒れた。男はそれでも死んで完全に命を失ったわけではなかった。そこで、勇敢な婦人ユデトはもう一度異教の犬に鋭く切りつけた。すると、男の首は床の上に転がった。忌まわしい胴体の方は生命を奪われて横たわり、魂は深い地獄の崖の下どこかへと消え去った。魂は、命を奪われると、その後は地獄の中で永遠に辱めを受け、拷問に縛られ、蛇に取り囲まれ、苦悩にさいなまれ、地獄の火の中に容赦なく閉じ込められてしまう。その男は暗闇に包まれ、大蛇の棲む館から逃れる願いは全く叶わず、喜びを奪われたまま、陰鬱なすみかの中で永遠に、それこそ果てしなく暮らさねばならないのだ。

(八三―一二二)

第二節 ユデトの凱旋(一二二―一九八)

こうして、ユデトは天上の王である神が勝利を授けようと望まれたとおり、敵将との対決において栄えある勝利を手にした。そこで、聡明な婦人ユデトは血だらけになった將軍の首を急いで器の中へ入れた。その器は、頬が綺麗で容姿端麗な彼女の侍女が二人の食事を入れて運んできたものである。そして、この血まみれの首を持ち帰るため、自分より若くて思慮深い侍女の手に首を持たせた。勇敢な二人の婦人は直ちにその場を立ち去った。そして、勝ち誇った得意満面の婦人たちはやつの思いで敵軍のもとを擦り抜け、美しい都ベツリアの城壁がはつきりと輝いて見える所まで来た。そこで、指輪で飾られた二人はさらに歩を速め、笑みを浮かべて裏門に走り寄った。勇敢で分別がある女性ユデトが今回の企てのために出かける折に、意気消沈している人々に命じておいたとおり、兵士たちは砦の中に腰を降ろし、二人の婦人のことを氣遣いながら歩哨を続けていた。すると、愛すべき女性たちはそこへ、都の人々の元へと戻ってきた。慎重な婦人ユデトは直ちに一人の男に命じて広大な砦から自分の所へ来させ、城門から急いで中

へ入れさせた。そして、ユデトは勝利を誇った人々に向かって叫んだ。「皆さんがたがもうこれ以上嘆き悲しまなくてすむ記念すべき出来事をお伝えできます。諸王の栄光であられる創造主はあなたがたには慈悲深い御方であられます。輝かしく名誉ある勝利が皆さんがたに訪れ、長い間耐えてきた苦しみに対して栄光が授けられるということが、この世の隅々にまで知れ渡っています。」(一二二—一五八)

聖女が高い城壁の上で叫ぶのを聞くと、都の人々は喜んだ。大勢の者は喜々として砦の門へ向かって急いだ。男も女も、老いも若きも、大勢が群れをなし、一団となり、隊列を組み、幾千となく集い、主の侍女ユデトの方へと駆けていった。ユデトが再び国に戻ってきたのを知ると、お祭り気分にあふれた都の人々はだれもかれも喜び、急いで恭しくユデトを招き入れた。(一五九—一七〇)

それから、黄金で飾られた聡明なユデトは慎重な自分の侍女に向かってあの男の首の包みを解き、自分が今回の企てに成功したことの証拠として血まみれの首を都の人々に見せるようにと命じた。そして、高貴な婦人は都の人々全員に向かって叫んだ。「勇敢な戦士の皆さん、都の指導者の皆さん、最も憎い異教の兵、今は亡きホロフェルネスの首をここではっきりと見ることが出来ます。この男は私たちに対して最もひどい責め苦と苛酷な苦痛を与え、しかも、それらをなお一層増やそうと望んでいました。しかし、神はこの男にこれ以上長い命をお与えになりませんでした。それで、この男は危害を加えて私たちをこれ以上苦しめることはできなくなりました。私は神の御力添えを得て男の命を奪い取りました。この都の兵士の皆さんがた全員にお願いがあります。今すぐ急いで戦の準備をしてください。被造物の神であられる栄光の王が明るい光りを東方から送ってくださるとすぐ、死ぬべき運命にある敵の指導者たちを、将官たちを、きらめく刀によって打ち倒すため、胸の前に楯と胴鎧を携え、燦然と輝く兜を被り、敵の隊列の中

147
へと突き進んでください。敵は死ぬべき運命にありますが、強力な神が私の手に示されたとおり、皆さんがたはこの

戦いで名誉と栄光を得られます。」(一七一一一九八)

第三節 アッシリア軍の敗走、ヘブライ軍の勝利(一九九―三三〇)

すると、機敏で勇敢な兵士の一隊は直ちに戦闘の準備をした。名だたる勇士たちとその従者たちは、夜が明けると、兜を被り、戦旗を掲げて進軍し、その神聖な砦から真っすぐに戦いへと出向いた。楯がぶつかり、大きな音を響かせた。瘦せた狼と殺戮を好む鳥、黒い大鴉は森の中でその様子に喜んだ。いずれも、兵士たちはか弱い自分たちに餌を与えてくれるであろうことを知っていた。おまけに、羽を露に濡らした鷺は餌を頻りに欲しがり、兵士たちの後を追った。そして、黒ずんだ羽毛に包まれ、角形つがひのくちばしを持つこの鳥は戦の歌を唄った。兵士たちは進軍した。これまでに長い間、野蠻人たちの横柄な振る舞い、すなわち、異教徒たちからの虐待の被害にあった男たちは菩提樹の木でできた半円形の楯に守られて戦闘へと歩を進めた——もっとも、ヘブライ人たちは、軍旗を掲げて敵の陣営に突入した時、アッシリア人との槍試合で全員の敵に対してかつての虐待の恨みを思う存分に晴らした。ヘブライ人の兵士たちは戦場の虻あぶしとも言うべき強い矢を角で作られた弓から雨霰のように激しく放った。勢いづいた兵士たちは大声を張り上げて勇敢な敵の隊列の中へと槍を投げつけた。この土地の住民である戦士たちは敵に怒りをぶつけ、容赦なく決然と進軍し、酩酊した旧敵の目を無理やり醒ませた。勇者たちは美しい飾りのついた確かな切っ先を持つ刀を鞘から引き抜き、悪の張本人であるアッシリアの兵士たちに激しく切りつけた。打ち負かすことのできる敵の兵士なら身分の上下を問わず、ただの一人も容赦しなかった。(一九九―三三五)

このように、ヘブライの一族は午前中は休みなく異国の民を追撃した。そして、恐ろしいアッシリア軍の哨兵たち

は味方の兵士たちがヘブライの兵士たちに痛烈な打撃を浴びせられているのを目撃した。哨兵たちはこのことを將軍の最年長の近侍の將官たちに直接告げに行った。哨兵たちは兵士たちを起こし、酔っ払った者たちに突然の知らせを、すなわち、朝の恐怖を、恐ろしい戦鬪の有り様を、恐れ戦いて告げた。^{おの}私が聞き及んだところによると、滅ぶべき運命にあった男たちは直ちに眠気を振り払い、落胆した者たちは一団となって残忍なホロフェルネスの天幕へと急いだ。

——危機が、すなわち、ヘブライ人たちの軍勢が、將軍の身邊に及ぶまでに、戦の有り様を將軍に急いで伝えようと思ったのである。だれもかれも、兵士たちの頭と美しい婦人、すなわち、淫らで恐ろしい残忍な男と高貴なユデトが、美しい天幕の中で一緒にいるものだと思っていた。しかし、鬪將ホロフェルネスを思い切って起こしたり、その武將が創造主の侍女である神聖な婦人に対してどのように振る舞ったのか尋ねる者はだれ一人いなかった。ヘブライ人の部隊は進軍し、鋭い刀で果敢に挑み、きらめく刃によって自分たちの古くからの憎しみとかつての恨みを晴らした。アッシリア人たちの栄光と誇りはその日の戦鬪によって崩れ、地に落ちてしまった。兵士たちは大そう心を掻き乱し、打ちひしがれ、自分たちの頭の大幕の回りに屯するだけであつた。そして、神から見離された者たちは全員、共に嘆き、大声で叫び、齒を軋ませ、まるで齒で苦痛に耐えているようであつた。このように、アッシリア人たちの名譽と繁榮と果敢な行為の数々は終わりを遂げた。近侍の戦士たちは味方の將軍を起こしたかった——もっとも、これはうまくいくはずはなかったのだが。すると、一人の兵士が必要に迫られ、洩々、しかも遅ればせながら、例の件について大そう大胆になり、思い切つて天幕に入つて行つた。そして、自分の黄金の付与者が魂を失い、命を奪われ、青ざめてベッドの上で横たわっているのを見つけた。その瞬間、男はぶるっと身震いして地面の上に倒れた。悲しみのあまり、男は髪の毛と衣服を引き裂き始めた。そして、天幕の外でしょげ返っていた兵士たちに向かつて次の

145
ように叫んだ。(二三六―二八四)

「わしらの終わりが、共に戦で確実に命を落として滅びる時が、苦難を伴って近づいてきた。ここにそのことが歴然と現れている。わしらの守護者は刀で切られ、首を刎ねられ、ここで倒れておられるぞ！」すると、兵士たちは悲しみのあまり武器を投げ捨て、落胆して急いで逃走した。余力のある者たちは部隊の後方で戦ったが、一隊のほとんどの者はついに戦闘のために戦場で倒れ、刀で切られ、狼たちの楽しみ、飢えた鳥たちの喜びとなってしまった。命拾ひした者たちは楯で武装した憎むべき敵の手から逃れた。勝利に祝福され、名譽に意気の上がつたヘブライの兵は敵の後を追った。全能の王であられる主なる神は、正しくもヘブライの民に援助の手を差し伸べられたのである。さらに、勇敢な男たちは輝く刀で力強く敵の軍勢の中で進路を開き、楯を叩き切り、亀の甲形の大楯を割った。ヘブライの戦士たちはその争いで奮闘した——その時点で兵士たちは戦を大いに望んでいた。敵の民アッシリア人たちの指揮官の大部分は戦場の土の上に倒れた。生きて故国にたどり着いた者はほとんどいなかった。勇敢な兵士たちでさえ屍しかばねへと、すなわち、悪臭を放つ腐肉へと、姿を変えてしまった。一方、土地の住人たちには、憎みて余りある者たちから、死んでしまった旧敵から、血だらけの戦利品、美しい飾り物や楯、それに幅広い刃の剣や褐色の兜、高価な宝石を奪い取る機会が与えられた。土地の守り手たちは名譽なことに戦場で敵を打倒し、遠い昔からの敵を刀で眠らせてしまった。活気あふれるヘブライの民にとって生前は最も憎むべき相手であった敵も路上に横たわっていた。さて、諸民族の中で最も名高く、誇り高い巻き毛の民は、全員がそれから一ヶ月かけて、兜と短剣、灰色に輝く胴鎧、黄金で飾られた兵士たちの武具、それと、いかなる賢者も説明できないほど見事な宝石類を美しい都ベツリアへと運び込んだ。軍旗の下で勇敢な兵士たちは、勇気ある婦人ユデトの賢明な計らいのおかげで、戦場においてそれらすべ

ての品々を堂々と獲得できた。勇敢な戰士たちはホロフェルネスの刀と血のついた兜、純金で飾られた幅の広い鎖帷子かたびら、あの傲慢な將軍が所蔵していた宝物や所持品、指輪や美しい寶石類のすべてをその遠征から土産品として持ち帰り、美しく分別に富む婦人ユデトに手渡した。ユデトはこれらすべての名誉の品々は万民の神様のおかげですと述べた。全能の主に対して真の信仰を持ち続けたため、神はユデトに、地上の王国においては尊敬と名誉を、そして、天上の王国においては当然受けるべきもの、すなわち、栄光の天国における勝利という褒美を与えられたのである。事実、ユデトは長い間望んで止まなかった褒美を最後まで疑うことはなかった。それゆえ、慈悲深い御心から、風と大気、天と広大な大地、それに逆巻く海と天上の喜びを創造なされた尊い神様にとって、栄光が永遠に存続しますように！（二八五—三五〇）

第三節 寓意詩

不死鳥

伝え聞くところによると、ここから遠く離れた東方に、人々によく知れ渡った最も壮大で立派な国があるという。

この国はどの地域でも世の多くの支配者たちが近づくこと許さず、また、創造主の力によって罪深い人々から隔てられている。この国の平原ははてしなく美しく、喜びと大地の最も甘い香りに包まれている。この島に匹敵する所はどこにもない。この国を定められた創造主は高貴で、誇り高く、諸々の力に富んでおられる。この国では神に祝福された人々に天の王国の扉がしばしば開かれ、人々は歌を楽しむことができる。その国には快適な草原があり、緑の森が空の下に広がっている。そこでは、雨と雪、降りる霜、燃え立つ火、落ちる霰、降りる白い霜、熱い太陽、絶え間ない寒さ、暑い天気、冬の雨が、被害をもたらすことはなく、草原は平穩で無事なままである。この素晴らしい国では花が咲き乱れ、険しくそびえる丘も山もなく、我々の国にあるような鋭く切り立った崖はない。その国には大きな狭谷も小さな谷もなく、山の洞窟も塚も堤もない。また、その素晴らしい平原では荒々しい物はすべて長く存続することなく、花は広々とした雲の下で咲き誇っている。(一一二七)

知識の豊富な賢者たちがみずからの見聞に基づいて書物の中で語っているとおり、その栄光の国は星空の下この世で我々の目の前で素晴らしく高くそびえるどの山よりも一二尋^{ひろ}高い。この勝利の平原では草木が繁茂し、日当たりのよい茂み、快適な森は、明るく輝いている。綺麗な花と木の実は落ちることはなく、また、木々は神に命ぜられたとおり常に緑を保っている。森の木々には冬も夏も果物が重く垂れ下っている。葉は空の下で枯れることはなく、この世に終わりが訪れるまで永久に、炎によって葉が痛められることはない。かつて洪水という水の攻撃が全世界の大地の表面を覆った時、この素晴らしい平原は神の恩寵によって荒々しい波の襲来から守られ、全く無事で、荒れずにすんだ。墓と呼ばれる人間の暗い部屋が曝かれ、神の裁きが下って(煉獄の)火が到来するまで、平原はこのように花に覆われたままである。(二八一四九)

その国には危害を加える者はおらず、嘆き、憎しみ、苦惱、老い、悲しみ、苛酷な死、生命の喪失、悪魔の到来、罪、争い、困窮、貧困との戦い、富の欠乏、落胆、眠り、恐ろしい病氣も全くなく、吹雪などの空の下での激しい氣候の変化もなく、激しい降霜が冷たい氷柱を伴って人々を苦しめることもない。雹も白霜も大地に降ることはなく、雲が風に吹き飛ばされることはなく、水が強風に煽られて降ることもなく、その平原では泉が美しい流れを、不思議なほどに綺麗な川を、湧き出させる。泉は森の中央から澄んだ水を注ぎ、大地の土の中から毎月海水のように冷たい水を噴出させ、時おり森全体を水で浸す。喜びにあふれた川はその栄光の国を一二回流れ通るが、これは神の命ぜられるところである。森の木々には神聖な森の飾りとも言うべき花と美しい果物が垂れ下がり、空の下で永遠に朽ちることはなく、森の木々の顔とも言うべき黄色の花は地面に落下することはなく、枝は森の中で次々と新しい果物を見事につける。その草深い平原では、聖なる神の御力によって森の中の最も輝かしい木は綺麗に飾られ、いつも青々と茂っている。森は決して色を失うことはない。昔の被造物である森を最初に創造なされた主が終わりを告げられるまで、聖なる香りはその快適な国全体に満ち、永遠に変わることはない。(五〇—八四)

その森には翼の強い驚くほど美しい鳥が住んでいて、不死鳥と呼ばれている。孤独ではあるが勇敢なこの生き物は、その森に居を構えて暮らしている。この世が存続する限り、快適な平原に住むこの鳥は死に襲われることはない。この鳥は太陽の運行を眺め、神のろうそくとも言うべきこの輝かしい宝石をじっと見つめる。星の中で最も高貴なこの星、すなわち、父なる神の太古の創造物である主の栄光の印が昇って、波立つ大海原を東から照らし、宝石のように輝く時、この鳥はこの眩しい宝の石を熱心に見守る。星が隠れ、西方の波の下に去り、夜明けの中に姿を消し、黒く暗い夜が飛び去る時、旅に強く、翼に自信のあるこの鳥は、空の明かりが東から広大な海の上へと滑るように昇って

141
くるまで、空の下と海の上にある山並みを熱心に見渡す。(八五—一〇三)

美しさが変わることのないこの高貴な鳥は、泉のそばの水が湧き出る所に住んでいる。神に祝福されたこの鳥は、そこであの印の到来まで、すなわち、天のろうそくがやって来るまで、泉の中で一二回水浴し、沐浴ごとに、海水のように冷たいおいしい泉の水を何度も飲む。この沐浴の後、この鳥は喜びにあふれ、高い木の上で体を持ち上げる。そうすることによって、この鳥は、空の細いろうそくである光の筋が波立つ海の上で綺麗に輝く時に、この鳥は東方の太陽の通り道を容易に見ることが出来る。星の中で最も素晴らしい栄光の宝石が海水の通り道の上を越え、この世の至る所の大地を照らす時、大地は飾り立てられ、この世は美しくなる。太陽が塩の水の上に高々と昇ると、灰色に輝く鳥は直ちに森の木から飛び立ち、翼で空中を素早く飛び、太陽に向かってさえずり、歌を唄う。その時、鳥の鳴き声はとても綺麗で、心も軽やかで、喜びにあふれている。この鳥は明るい声で歌を唄うが、その歌は、至高の王であられる栄光の創造主がこの世と天と地を定められて以来、人の子が空の下でいつも聞いているどんな歌よりも素晴らしい。その歌の調べはあらゆる楽器の演奏よりも甘く、美しく、そして、どんな曲よりも魅惑的である。トランペット、角笛、竖琴の調べ、地上のすべての人の声、パイプオルガン、調和した鳥のさえずり、白鳥の翼が立てる音、そして、神が悲しみに満ちたこの世の人々の楽しみとして創造なされたいかなる音楽も、この鳥の鳴き声に優ることはない。この鳥は太陽が南の空に沈むまで唄い、さえずり、喜びで満たされる。勇敢で慎重なこの鳥は、その後、沈黙し、聞き耳を立て、頭を上げ、そして、軽々と飛べる翼を三度羽ばたく。すると、この鳥は静かになってしまふ。この鳥は昼と夜に必ず一二回時間を測る。このように、森の守護者であるこの鳥はこの世で千年の寿命を終えるまで楽しく平原に住み、幸福、生命と喜び、大地の恵みを享受できるが、これは神がこの森に住む鳥に定められたことなのである。

そして、羽毛が灰色に輝く鳥は年を経て老いると、衰えてしまう。すると、鳥たちの喜びの主は緑の大地である花咲く国から飛び去り、人間が一人も住んでいないこの世の広大な地域、すなわち、自分の先祖伝来の地を探し求める。そこで、傑出した力の持ち主であり、群れの中で最高の位を占めるこの鳥は鳥類の上に君臨し、他の鳥たちと一緒にしばらく荒れ地に住む。その後、飛翔に強く翼の速いこの鳥は長い歳月に弱り果て、西の方へと飛び去る。すると、他の鳥たちはこの高貴な鳥の周囲に群がり、大編隊を組み、どの鳥も自分たちの栄光の王の従者や召使になることを願いながらシリア人たちの国^(四)に向かう。シリアに着くと、この清純な鳥は多くの人の目から逃れた隠れた状態で、荒れ果てた土地の茂みの中の日影に住めるよう、仲間の鳥から急いで遠ざかる。そして、この鳥は空の下^(五)の森の中で居を構え、根が強く張った高い木に住む。人々はこの鳥の名前に因^{ちな}んでその木を「地上の不死鳥」と呼んでいる。伝え聞くところでは、素晴らしい力を持つ王、すなわち、人類の創造主は、地上のすべての喬木の中でこの木だけが最も見事な花を咲かせることをお認めになられた。いかなる邪悪なものといえど、この木を傷つけたり危害を加えたりすることはできず、この世が存続する限り、この木は永遠に保護され、無傷なままである。(一〇四—一八一)

この鳥が大枝の上で巣作りの準備にとりかかるのは、天氣がよくて風がなぎ、明るい空の寶石が神々しく輝き、雲が流れ去り、水の力が弱まり、すべての嵐が空の下でおさまり、熱い空のろうそくが南方から輝き、人々を照らす時である。この鳥には、胸の中で燃える激しい情熱によって老齡を大急ぎで新たな生命へと変え、若い魂を受け取るという大切な義務がある。そのため、この鳥は、栄光の王であられるすべての被造物の父が人類を祝福するために地上に創造なされた最も素晴らしいもの、すなわち、綺麗な草や森の花、ありとあらゆる甘い香り、美しい植物、空の下のすべての好ましいものをあちこちから拾い集め、自分のすみかまで持ち帰る。この鳥は独力でこれらの美しい宝物

を木の中へ運び込む。美しく魅力的なこの野生の鳥は荒野の高い木の上に家を作り、日当たりのよい部屋の中で一人で住み、葉の影に隠れた体と翼を神聖な薬草と高貴な大地の花で包み込む。この鳥はこうして旅立ちの準備を整えて座る。そして、夏になって空の宝石である最も熱い太陽が木影の上で輝き、定められた軌道を運行してこの世を眺める時、この鳥のすみかは明るい太陽によって熱せられる。すると、草は暖かくなり、快適なすまいは甘い香りに包まれて蒸気を発する。そして、鳥は巢と共に火に包まれ、炎の中で燃える。(一八二—二二五)

薪に火がつくと、この瀕死の鳥のすまいは炎に包まれ、激しく迫る黄色い炎は薪を焼き尽くし、長い歳月を経て年老いた不死鳥にも火がつく。火が鳥の弱々しい体を襲うと、死すべき運命にあるこの鳥の胸の中の命は旅立つ。次に、火葬の炎は鳥の肉と骨を焼き尽くす。しかしながら、定められた時が過ぎると、すなわち、猛威をふるった火がおさまリ、灰が固まり、縮んで一つの塊となると、直ちにこの鳥に再び新たな生命が訪れる。もっとも、火葬の後、最も輝かしい巢であるこの勇敢な鳥の館はすでに火によって完全に破壊されていて、火が消えた後の鳥の遺体は冷たくなり、体は散らかり、火は消えてしまっている。しかし、その後、薪からできた灰の中にりんごに似たものが見つかる。そして、この灰の中から、驚くほど綺麗で輝かしい生き物が、まるで玉子か貝殻から生まれたかのごとく出てくる。その後、この生き物は隠れ家で密かに成長する。そのため、この生き物は最初のうちは驚の幼鳥か綺麗な若い小鳥のようであるが、神の祝福をうけて成長を続けた結果、成鳥の驚ほどの背丈となる。その後、この鳥は以前と同じように羽毛で飾られ、明るく華やかになる。そして、この鳥は完全に肉がつき、罪や穢れから解放されてよみがえる。このことは、食料となる大地の産物が成熟する収穫の時期を迎えると、人々がおいしい食べ物が冬の降雨によって痛まないように家に運び入れるのとよく似ている。そして、冬装束の霜と雪が強い力で大地を覆い尽くす時、人々は命の

糧である食べ物の喜びを家の中で見出す。かつてはただ単に種として蒔かれたにすぎないが、穀物に内在する性質おかげで、これらの穀物から人間に幸せをもたらすものが再び生まれてくる。春になると、太陽の明かり、すなわち、生命の印はこの世の富を産み出す。大地の宝物とも言うべき穀物はその固有の性質によって再び（この世に）生み出される。これと同じように、この鳥は年を経て老いると、（よみがえって）若さを取り戻し、肉に包まれる。この鳥は真夜中にしばしば降りる甘露を少し取る以外は地上で食べ物や肉を取ることは全くない。この勇敢な鳥は自分の住まいである昔の家を再び訪れるまで、甘露によって命をつなぐのである。（二二六—二六四）

それから、翼に自信のある鳥は草に囲まれて育つ。生命は改まって若返り、神の恩寵に包まれる。すると、この身軽な鳥は以前に火によって破壊された自分の体を、火葬の残り物を、土の中から集め始める。この鳥は火の猛威がおさまってから、破壊された骨を巧みに集め、火の残りかすとなった骨と燃えさしを一緒にし、次に、美しく飾られたこの鳥は遺骨を香り高い草で包む。すると、この鳥は再び自分の故郷を訪れたい衝動に駆られ、焼け残った物を脚で握り、爪で掴み、再び自分の郷里である太陽の光で輝く住まいを、幸せな故国を、喜んで訪れる。その時、この鳥の生命と翼は、勝利の神によって初めてあの素晴らしい草原に置かれた時と同じようにすっかり改まっている。この鳥は、かつて葬送の薪の上で激しい火と炎で包まれた時にできた自分の骨と灰を、その場で拾い集め、この勇敢な鳥はその遺骨と灰と一緒にその島に埋葬する。寶石の中で最も輝かしいもの、高貴な星の喜び、空の明かりが、東から海の上へと昇って輝く時、太陽の召使（である不死鳥）は、このようにみずから復活するのである。この鳥の色はいつも綺麗で、胸の前の回りはとりどりの色で輝いている。後頭部は緑色で、鮮かなまだら模様になっていて、紫が混ざっている。一方、尾は美しい班入りになっていて、ある所は茶色、また、ある所は深紅色で、白い班点に綺麗に覆われて

いる所もある。翼の端は白く、首は上下とも緑色で、くちばしはガラスか宝石のように光り、あごは中も外も輝いている。目は鋭く、その色は金細工師が黄金の土台に巧みに据え付けた石、すなわち、きらめく宝石の色に似ている。

首の回りには太陽の球体のように最も明るい羽毛の輪がちりばめられている。腹部の下の方は美しく、驚くほど綺麗で、明るく、そして、輝いている。一方、この鳥の羽毛の一部は上の方、すなわち、背中の上で綺麗につながっている。脚は、黄色の足は、鱗片で覆われている。この鳥は、書物に述べられているとおり、色は孔雀に似ていて、匹敵するものは外になく、神に祝福されて成長する。また、翼で空中を飛ぶ鳥の中には、のろく、鈍く、重々しく、不活発なものがあるが、この鳥は機敏で迅速、そして、きわめて軽く、美しく、快活で、綺麗に飾られている。この鳥にこれほどの祝福をお与えになられた神よ、永遠なれ！（二六五―三一九）

さて、不死鳥はこの父祖の国から生まれ故郷の草原を訪れるために旅立つ。そして、この鳥が飛ぶと、人々は、すなわち、この世の多くの人間は、その姿を見ることになる。そこで、人々は南から、北から、東から、西から、連れ立って集まる。すなわち、彼らは遠近を問わず大勢で集団となって（この鳥を見に）出かける。勝利の真の王はこの鳥に他の鳥類に優れた比類のない性質と宝石のような美しさを最初に与えられた。人々は創造主のこの素晴らしい恩寵がそのまま変わることなくこの鳥に現れていることを知る。そして、素早く飛ぶ宝石のような鳥が大勢の人々の前に姿を見せる日と時間がくると、地上の至る所の人々はその美しさと姿に驚き、書物にそのことを書き記し、大理石に手で刻む。一方、仲間の鳥たちは不死鳥の周囲に群れをなして押し寄せ、遠くから近づき、歌で称え、この勇敢な鳥を力強い声で賛美する。こうして、この聖なる鳥は空を飛ぶ鳥たちに回りを取り囲まれ、不死鳥は鳥の群れの中央に位置する。人々はこの様子を眺めて驚く。楽しげな鳥の一隊は次々に群れをなしてこの野生の鳥を称賛し、力強く語

りかけ、そして、不死鳥を自分たちの王、大切な支配者であると宣言し、喜んでこの高貴な鳥をすみかに案内する。しかし、翼の迅速なこの孤独な鳥はついに飛び去り、大勢の人々の喜びであるこの不死鳥が大地のこの場所から故国へと行く時には、うれしそうな鳥たちの群れは後を追うことはできない。(三二〇―三四九)

このように、神に祝福された鳥は死という時を経た後、以前の住まいである美しい国を再び訪れる。一方、悲しみに満ちた鳥たちはこの勇敢な兵士の元を離れ、自分たちのすみかに戻る。その頃、若い高貴な鳥は自分の住まいにいる。全能の王である神だけがこの鳥の性が雌か雄かを知っておられる。神以外の人間はだれ一人この鳥の性質についての事実を、すなわち、素晴らしい古代の掟がいかに驚くべきものであるかということを知らない。この幸せな鳥は千年の歳月が過ぎるまで家に住み、森の中の湧き出る水を飲むことを許される。そして、この鳥に生命の終わりが訪れると、火葬の薪は炎でこの鳥を包む。しかし、この鳥は不思議にもよみがえり、驚くべきことに、再び生き返るのである。それゆえ、この鳥は衰えることはあっても、死とその恐ろしい苦痛にひるむことなく、炎の猛威の後で生命が復活し、破壊の後で体はいつもよみがえることを知っている。それゆえ、この鳥は天の保護の下で灰の中から鳥の姿をして直ちによみがえり、再び若くなる。この鳥は一羽で息子と情け深い父を兼ねていて、常に古い遺骨を受け継ぐ。強力な人類の創造主は、とても驚くべきことに、たとえ火がこの鳥を奪い去ろうとも、かつて羽毛に包まれていた時と同じものになることをこの鳥に許されたのである。(三五〇―三八〇)

このように、神に祝福された者はだれでも辛苦の後、暗い死を経てみずから永遠の生命を選ぶ。すなわち、人は寿命が尽きると、神の恩寵を受けて永遠の喜びに包まれ、生前の行為の報いとして、永久に栄光に包まれて暮らすことが許される。不死鳥はキリストの弟子に選ばれた者たちとよく似ている。すなわち、この鳥は彼らが恐怖の時に父な

る神の御慈悲によって天の下で栄光の喜びを手にし、天上の国で至高の祝福を得る様子を町や村で人々に示す。我々が聞いたところによると、全能の神は驚くべき力を發揮されて男と女を創造なされ、人の子らが樂園と呼ぶこの世の最高の場所にこの二人を住まわせられた。そのため、二人が新たな喜びに包まれて永遠の主の言葉である聖なる神の掟を守ろうと望む限り、彼らの幸せに欠けるものは何もなかった。しかし、憎しみ、すなわち、彼らに木の実という食べ物を差し出した旧敵の悪意によって、彼らは墜落させられた。彼らは共に神の意志に背き、愚かにもりんごを受け取り、禁じられた物を食べた。すると、りんごを食べた後、激しい苦悩が二人とその子孫を襲った。それゆえ、りんごという食べ物は息子と娘たちにとっても悲しむべきものとなった。このように、二人の貪欲な心はこの犯罪の後厳しく罰せられた。彼らは神の怒りによって激しく恐ろしい苦しみを受けた。二人が永遠の神の言葉に背いてりんごを一口食べたため、彼らの子孫も悲しいことにその報いを受けることとなった。二人は蛇の憎しみのために、心に悲しみを抱きながら大地の喜びを放棄せねばならなくなった。我々の先祖はその昔ひどい悪意に満ちた心を抱いた蛇に騙されたため、その場から遠く離れた死の谷へと、悲しみにあふれた住まいを求めて旅立った。彼らは暗闇によってより良き生活を隠され、神聖な世界は、栄光の王、人類の喜び、打ちひしがれた者たちの慰め役、また、唯一の希望であられる神がみずから訪れて聖なる者たちのために再び開かれるまで、悪魔の奸計によって長い間固く閉ざされた。

(三八一—四三三)

学者たちが我々に言葉で述べ、書物が語っているように、年経た鳥が国と故郷を捨て、老いた時にとる行動はアダムとエバの場合に似ている。すなわち、不死鳥は歳月に苦しみ、疲れ果てて飛び去り、森の中に高い隠れ家を見つけ、最も素晴らしい枝と草で森の中に新しい住まいである巣を作るが、この鳥が強く望むことは、火の炎を浴びることによつ

て若い体を再び受け取り、死後に生命を得て再びよみがえり、火を浴びた後に自分の故郷の日当たりのよいすみかを訪ねることが認められることである。これと同じように、我々の両親に当たる二人の先祖は、美しい平原と快適な栄光の館を放棄し、悪意に満ちた者たちのもとへと長い旅をした。そして、そこでは惨めな悪魔である敵がしばしば二人を痛めつけた。(四二四—四四二)

しかし、天の下には、聖なる習慣と称賛される行為によって創造主に忠実に従い、その結果として、天上の至高の王であられる神が心から慈悲深くなられた人や生き物はたくさんいた。たとえば、現在高い木に住んでいる聖なる鳥たちがそれであり、その木では、この恐ろしい時代でも、旧敵はだれ一人毒という罪の象徴を用いて彼らを苦しめることはできない。また、その木では神の兵士(である鳥)は称賛に価する行為によって、あらゆる攻撃に備えてみずから巢作りを行う。そして、この鳥は貧しい者たち、すなわち、富を奪われた者たちに施しをし、救済が必要な時には父なる神の名を呼ぶ。この鳥はこの世の束の間の生活から急いで立ち去り、暗い悪い行為である罪を消し去り、創造主の掟を心の中でしっかりと守る。そして、この高貴な鳥は清浄な気持ちで祈り、大地に向かって膝を屈め、すべての悪と恐ろしい罪を避け、神を畏怖するがゆえに、この快活な鳥は良い行為を最大限実行することを強く望む。勝利の支配者であり万民の王であられる神はどんな時にもこの鳥の守護者であられる。この野生の鳥が空の下に至る所で自分のすみかへ集めてくるものは、香り高い草と木の実である。この鳥はそこであらゆる攻撃に備えて驚くほどしっかりとした巢を作る。このように、創造主の兵士たちは、現在、住まいの中で心と力を込めて神の意志を実践し、栄誉を求めて努力している。永遠の全能者はこの努力に対して彼らに十分報いることを望まれる。彼らが神聖な掟を心の中で大切に守ったため、その行為の報いとして、栄光の都において香り高い草で住まいを作ることができる。彼ら

は昼も夜も熱心に神に愛を示し、純粹な信仰心から、この世の富よりも大切な主の方を選ぶ。このはかない生活に長く留まることは彼らにとって喜びではない。このように、神に祝福された者は永遠の喜びを、至高の王と共に天上の館を、正々堂々と手に入れる。定められた命の終わりがやってくる時、武器を手にとると強く、殺戮を好む兵士である死はすべての者の命を奪い去り、魂を抜かれたはかない肉体を大地の懷に送り込む。これらの肉体は火がやってくるまで、土を被って長い間地中に留まる。(四四三―四九〇)

次に、人類の多くは一カ所に集められ、天使たちの父であり勝利の真の王であられる万民の神は會議を開かれ、正義に照らして審判を下される。力強い王、天使たちの頭、魂の救世主が、トランペットの音を響かせて広いこの全世界に宣告なされると、すべての人間は地上でよみがえる。その時、神に祝福された者にとって不吉な死は主の力によって終わりをとげる。そして、不名誉なことに罪に穢れたこの世が炎に包まれて燃え上がる時、彼らは栄光に包まれて活動し、大勢で急ぐ。火がこの世のはかない富を破壊し、炎が大地の宝物をすっかり滅ぼし、りんご形の黄金(8)を力づくで捕らえ、地上の宝を貪欲に飲み込む時、だれもかれも心の底から恐怖におののく。そして、力強い神がキリストの膝の前ですべての人を墓から起き上がらせ、骨、手足、胴、および生命の魂を集められる啓示の時、美しく心地よい印であるこの鳥は太陽の光の下の人々の前に姿を現す。その時、王は美しい栄光の寶石である神聖な鳥の上を高い玉座から力強く照らされる。悲しい時に神を喜ばすことのできる者に幸あれ！(四九一―五一七)

火が高く天国まで昇る時、肉体は罪を洗い浄められて喜んで出かけ、魂は肉体の中で動き回る。すべての心清き人と罪深い人が、肉体を持った魂が、恐怖におののきながら墓の中から創造主の審判を求める時、この恐ろしい火は多くの人にとって熱いものとなる。この火は広がり、罪を焼き尽くす。神に祝福された者たちは、地上での苦しい時を

過ぎした後、彼らが成した仕事、すなわち、彼らの数々の行為と一緒に炎に包まれる。これらの行為は不死鳥にとっては高貴で心地よい香り高い草であり、この野生の鳥は自分の巢の回りをこの草で囲む。すると、この巢とその中の鳥に突然火がつき、太陽の下で燃え上がる。そして、不死鳥はこの火災の後で新たに生命を授けられる。これと同じように、力強い栄光の王が最後の審判の席で慈悲深くなられるようお願いながら、自分の意志に従ってこの世で行動するすべての人間は、肉体に包まれて再び美しく若くなる。そして、聖なる魂は歌い、神に祝福された魂は歌声を張り上げ、清い心を持ち、神に選ばれた者は王の威厳を称える。これらの声は、彼らが成した立派な行為と共に、素晴しい香りを放ちながら天上へと昇って行く。そして、人々の魂は火の炎によって素晴しく浄化され、清められる。(五一八―五四五)

私が偽りの言葉で歌を作り、詩を書いているのだとだれも思いませんように！ヨブが歌で伝えた予言を聞いてください。彼は魂の靈感によって心を動かされ、輝かしい名譽を与えられ、次のような言葉で堂々と語った。⁽¹⁾「私は肉体が疲れ果てた人間であるが、自分の巢の中に死の床を選び、泥にまみれ、過去の行為に悩まされながら、そこから惨めな思いで大地の底まで長い旅に出かける。そして、死後に復活した後、不死鳥と同じように、神に愛された多くの人々が貴い主を称える場所で、神の恩寵によって新たな生命と神と共にある喜びが得られることを心の中心で嘆くいわれはなくなる。私がこの新たな生命と光と慈悲の終わりを経験することは永遠にありえない。私の肉体は虫けらの喜びとして墓の中で滅びることになるであろうが、万民の神は死の時の後、私の魂を解放してください、栄光の中で目覚めさせてくださる。この期待は私の胸の中で弱まることは全くない。それというのも、私は自分の永遠の喜びを天使たちの王にしっかりとつなぎとめているからである。」(五四六―五六九)

このように、その昔、思慮深い賢者である神の予言者は自分が永遠の生命へと復活することについて歌った。そのため、我々のはあの輝かしい鳥が燃えることによって表す栄光の印を一層はっきりと理解することができる。火が燃え上がった後、この鳥は骨の残りや灰と燃えさしをすべて拾い集め、これらを脚で主のすみかである太陽の方へと運ぶ。その後、これらの焼け残りは復活した肉体と共に再び完全に若返り、何年ものすみかに住む。その家ではだれも危害を加えて脅かすことはできない。このように、魂はその死後、不死鳥の場合と同じように、神の力によって美しく飾られ、喜びに包まれ、高貴な香りを放ちながら、栄光の都にいる大勢の人々の頭上で正義の太陽が綺麗に輝く所へ向かって肉体と共に旅をする。(五七〇―五八八)

そして、空の屋根のはるか上では、救世主キリストが自分に忠実な魂の上で明るく輝く。眩^{まぶ}しい鳥たちも、選ばれた魂も美事に復活し、喜びに満ちあふれ、その快適な住まいの中で永遠にキリストに従う。そのすみこでは、悪意に満ちた恥知らずの敵が妬みを抱いて魂に罪深い害を加えることはできず、栄光に包まれた楽しそうな魂は、不死鳥という鳥の場合と同じように、光に包まれて神の庇護の下で永遠に暮らす。すべての人の行為はその快適な家の中で祝福され、永遠の主の目の前で太陽のように明るく輝く。そこでは、神の祝福を受けた人の頭上に宝石が綺麗にちりばめられた光り輝く冠が載せられ、人々の頭は栄光に包まれてきらめく。主の王冠の光はそこで暮らす忠実なすべての人を神々しく包む。そこでは、永久不変で常に新鮮な喜びは決して減少することはなく、人々は美しい場所で綺麗な飾り物で神々しく包まれ、天使たちの父と共に暮らす。(五八九―六一〇)

そのすみかでは、不運、貧困、苦役の日々、不愉快な空腹、ひどい喉の渇き、苦しみ、老齢のいずれも決して人々を悩ませることはない。高貴な王は好ましいすべての物を人々にお与えになれる。そこでは、魂は集団で救世主を

称え、天の王の力を祝福し、創造主を称賛する歌を唄う。天上の大勢の者は神の聖なる玉座の回りで最も大きな声を出してはつきりと賛美歌を唄う。幸せな者たちは天使と一緒に楽しそうに斉唱し、次のように至高の王を祝福する。

「真の神よ、平和と知恵が主のものでありますように！ 新たな恩寵とすべての施し物に対して、栄光の座におられる神に感謝いたします。神の力の強さは尽大で無限、堂々として神聖であります。全能の父であられる諸王の中の王よ、天は主の栄光で綺麗に満たされ、天上でも地上でも天使と共にあります。起源の創始者よ、我々を守りたまえ！ 主は高い王国の全能の父、天上の支配者であられる。」（六一—六三一）

罪を清められて栄光の都で正しい行いをする人々はそのように語る。神に忠実な人々の一団は主の栄光を宣言し、天国において帝を称賛する歌を唄う。永遠の名誉は神だけに存在し、常に果てることはない。主にはこれまで起源が訪れたことはなく、主の幸運の始まりもなかった。主はこの世の大地の上で、子供の姿でお生まれになられたが、主の力の強さと永遠の栄光は高く神聖な天の王国においても変わることはなかった。キリストは、木の十字架の上で恐ろしい拷問と死の苦しみを受けねばならなかったが、肉体の破壊から三日たって、父なる主の助けによって再び生命を得られた。このように、すみかで若返った不死鳥は灰から目覚めて生き返り、翼と脚が成長することによって、神の御子息キリストの御力のすごさを示すのである。救世主も不死鳥と同じようにみずからの肉体を消滅させることによって、我々に援助を、終わりのない生命を、もたらされた。これと同じように、不死鳥はこの世を去る時、香り高く魅惑的な草とおいしい大地の果物で両方の翼を取り囲む。（六三—六五四）

聖書が我々に語っているとおり、以上は聖なる人々の言葉であり歌である。彼らの魂は天国へ、慈悲深い神へ、最高の喜びへと駆り立てられる。そこで、彼らは創造主であられる神への贈り物として、自分たちの言葉と行為の心地

よい香りを栄光の被造物である天国へ、あの輝かしい生活へと運ぶ。神々しい天の王国において、称賛、栄光の豊かさ、名譽、および威光が永遠に神のものでありますように！神はこの世と天の万民の正当な王であり、歓喜にあふれる都で栄光に包まれておられる。光の創造主は、我々がこの世で立派な行爲をすることによって天国で喜びを得られることを我々にお認めになられた。天国では、我々は最も広大な王国を訪れ、高貴な席に着き、光と平和の喜びの中で暮らし、快適な喜びの住まいを手に入れ、祝福の日々を楽しみ、慈悲深く温和な勝利の主をいつまでも眺め、そして、天使たちに囲まれ、幸せそうに、永久の崇拜心を抱き、主のために賛歌を唄う。ハレルヤ！（六五五―六七七）

訳注

ベオウルフ

- (一) さて 数編の古英詩はHwæt!で始まっている。吟唱された詩の聴衆の注意を喚起するための語であろうが、この種の散文訳では「さて」ぐらいが妥当であろう。

- (二) 槍で名高いデネ族 Gar-Dene デネは現在のデンマーク近辺に住んでいたゲルマンの部族の名。彼らは、「槍の、西の、輝く、南の」などの名称を付けて呼ばれることがあるが、これらは頭韻音をそろえるためであって、部族の違いを表すためのものではない。

- (三) シューフの子シュルド Scyld Soefing シュルド、シューフ (Soef) はいずれもデンマークの伝説上の王。

- (四) 鯨の道 hron-rād ケンニング (kenning) と呼ばれる代称表現の一例で、「海」を表す。

- (五) ベオウルフ Beowulf デネ族の王。この物語の主人公とは別人。

- (六) シェドランド Seodeland スカンジナヴィア半島の最南端のデネ族の領地の名。

- (七) シュルディング族 Scyldingas 文字どおりには「シュルドの子孫」を意味するが、「デネ族」と同義でよく用いられる。

「誉れの」、「勝利の」などの名称が付加されることもある。

- (八) ヘアルフデネ Healfdene デネ族の王、フロースガールの父。
- (九) ヘオロガール Heorogār フロースガールの兄。
- (一〇) フロースガール Hroðgār デネ族の王。
- (一一) ハールガ Halga ヘアルフデネの子。
- (一二) ユルゼ Yrse 写本では彼女の名前は記されていないが、頭韻上母音で始まるユルゼなどの名前が提案されている。
- (一三) シュルヴィング族 Scyldingas 現在のスエーデン人。「戦の誉れ高い」などの名称を付けて呼ばれることもある。
- (一四) オネラ Onela スエーデン王オンイェンセーオウ (Ongenbeow) の息子。
- (一五) ヘオロット Heorot 古英語の heorot は「雄鹿」を意味する。破風の先端が雄鹿の角の形に似ていたか、あるいは角そのものが破風に取り付けられたか、それとも雄鹿を神聖なものとして崇めた古代の風習にちなむものか、いずれかに基づく名であらう。(cf. Klaeber 1950:129)。
- (一六) この二文は火災によってヘオロットが崩壊すること、フロースガールとその娘婿インィェルド (Ingeld) の不和に言及していると言われている (cf. Klaeber 1950:129-30)。
- (一七) グレンデル Grendel ベーオウルフによって殺される怪物。
- (一八) カイン Cain アダムとエバの長子。神への供え物をめぐって弟アベル (Abel) を妬み、殺す。悪人の原型とみなされている。
- (一九) 広間の守り手 グレンデルのこと。ヘオロットの館がグレンデルの手中に落ちたことを皮肉を込めて言ったもの。

- (二〇) イェーアト族 *Ġeatas* スエーデンの南部にいたゲルマンの一部族。
- (二一) ヒイエラーク *Higelāc* イェーアト族の王。
- (二二) 白鳥の道 *swan-rād* 「海」を表すケンニング。
- (二三) 海を進む木 *sund-wudu* 「船」のケンニングの一つ。
- (二四) ウェデル族 *Wederas* イェーアト族の別称。
- (二五) エッジセーオウ *Ecgþeow* ベーオウルフの父。
- (二六) ベーオウルフ *Bēowulf* エッジセーオウの子。イェーアト族の伝説上の英雄。この物語の主人公。
- (二七) ウルフガール *Wulfgar* ヒイエラークの宮殿に仕える家臣。
- (二八) ウェンデル族 *Wendel* ヴァンダル族のことか、それともスエーデンないしは北ユトランド半島に住んでいた部族なのか、はっきりとしたことは分らない。

- (二九) フレーゼル *Hreþel* イェーアト族の王、ヒイエラークの父、ベーオウルフの義理の祖父。
- (三〇) 頭を布で包む これはアングロ・サクソン族やスカンジナビア人たちの習慣であったと思われる (cf. Klaeber 1950:144)。

- (三一) ウェーランド *Weland* ゲルマンの伝説上の有名な鍛冶師。
- (三二) ウィルフイニング族 *Wylfingas* バルト海の南に住んでいたと思われるゲルマンの一部族。
- (三三) ヘアゾラーフ *Heaþolāf* ウィルフイニング族の男。
- (三四) エッジラーフ *Ecgþāf* デネ族の一人、ウンフェルス之父。

- (三三) ウンフェルス Unferð フロースガールの廷臣。
- (三六) ブレカ Breca ブロンディング族 (Brondingas) の領袖。
- (三七) ヘアズ・レーム族 Heaðo-Ræmas ノルウェー南部のオスロ付近に住んでいた部族。
- (三八) ブロンディング族 Brondingas この部族に関しては厨川 (1941:198) が詳しい。
- (三九) ベーアンスターン Beantān ブレカの父。
- (四〇) フィン族 Finnas ノルウェー北部にいたフィン族もしくはラップ族。詳しくは厨川 (1941:196) を参照。
- (四一) ウェアルフセーオウ Wealhþeow フロースガールの后。
- (四二) ヘルミング Helmingas ウェアルフセーオウが属している一族の名。詳細は不明。
- (四三) シェムンド Sigemund ウェルス (Wels) の息子。フィテラ (Fietla) の叔父。
- (四四) ヘレモード Heremōd デネ族の王。
- (四五) フローズルフ Hroþulf ハールガの息子。
- (四六) フローズルフが後で裏切ることを暗示した一文。
- (四七) イングの味方 Ing-wine デネ族の別称。
- (四八) 歓楽の木 gomen-wudu 「竖琴」のケンニング。
- (四九) フィン (王) Fin(n) 東フリジア族の王。
- (五〇) フネフ Hneaf ヘアルフデネ族の部将。
- (五一) フリジア族 Fresan オランダの最北端のフリースランドに住んでいたゲルマンの一部族。

- (五二) ヒルデブルフ Hildeburn フリジア族の王フィンの後。
- (五三) ジュート族 ¹Eotan フリジア族の王フィンの配下にあった部族。
- (五四) ホーク H²oc ヒルデブルフとフネフの父。
- (五五) ヘンイエスト Hengest (ヘアルフ) デネ族の部隊に属する兵士。
- (五六) フォルクワルダ Folcwalda フィンの父。
- (五七) フーンラーフの息子 Hunlafing ヘンイエストの部隊に属する兵士。
- (五八) 戦の光線 hildeleoma 剣のケンニング。
- (五九) グースラーフ Gūðlaf デネ族の兵士。
- (六〇) オースラーフ Oslaf デネ族の兵士。
- (六一) 注(四六) 参照。
- (六二) 意味不明の箇所。一行分欠落しているとみなす説もある。
- (六三) フレースリーチ Hreðric フロースガールの息子。
- (六四) フロースムンド Hroðmund フロースガールの息子。
- (六五) ハーマ Hama ヨート族の伝説上の人物。Klaeber (1950:177-8) 参照。
- (六六) ブローシング族 Brosingas 北欧神話の女神フレイヤ (Freya) の首飾りで知られる部族。Klaeber (1950:178-9) 参照。
- (六七) エオルメンリーチ Eormenic 東ゴート族の王。

- (六八) スウェルティング Swerting ヒエラークの母方の叔父。
- (六九) 波の大杯 yda ful 「海」のケンニングの一つ。
- (七〇) フランク族 Francan ライン川流域に住んでいたゲルマンの一部族。
- (七一) この期間は実際には「晩であるため、「長く」という表現は明らかに誇張である。
- (七二) 鎖帷子のデネ族 Hring-Dene 「鎖帷子の」には特別な意味はない。注(二)参照。
- (七三) しかし、後述のように、ベーオウルフにとって彼女は実際にはグレンデルよりも手ごわかった。
- (七四) アッシュヘレ Aschere フロースガール王の相談役の高位の兵士。
- (七五) ユルメンラーフ Yrmenlaf デネ族の男。アッシュヘレの弟。
- (七六) 「宝物の付与者」は一般に王を指すが、アッシュヘレの地位がかなり高かったため、この表現が用いられたものと思われる。

- (七七) フルンティング Hrunting ウンフェルススの剣の銘。
- (七八) 鈍 刃の表面に現れる細かい粟粒状の模様。
- (七九) 空のろうそく rodores candel 「太陽」のケンニングの一つ。
- (八〇) 第九時の刻 non 午前六時の日の出から数えて九番目の時刻、すなわち、午後三時。
- (八一) シェデンイーイ Sceden-ig スカンディナヴィア半島の最南端の地域の名で、デネ族の領地。
- (八二) エッジウェラ Ecg-weala デネ族の王。伝未詳。
- (八三) 海鳥の水浴場 ganotes baed 「海」のケンニングの一つ。注(四)、(二二)、(六九)を参照。

- (八四) 注(二三)参照。
- (八五) ヘレス Hæreb ヒュイドの父。
- (八六) ヒュイド Hygd ヒエラークの後。
- (八七) モードスリーン Mōðþrýðo アングル族の王オッフアの后。
- (八八) ヘミング Hemming オッフアとエーオメールの血族の一人。
- (八九) エーオメール Eomer アングル族の王オッフアの息子。
- (九〇) ガールムンド Garmund アングル族の王オッフアの父。
- (九一) オンイェンセーオウ Ongendēow スウェーデン族の王。
- (九二) フレーアワル Frēawaru フロースガールの娘。
- (九三) フローダ Frōða ゲルマンの一部族ヘアゾベアルド (Heaðo-Beard) の族長。インイェルド (Ingeld) の父。
- (九四) ヘアゾベアルド族 前項参照。
- (九五) ウィゼルユルド Wīðergyld ヘアゾベアルド族の兵士。
- (九六) 天の宝石 heofones gim 「太陽」のケンニング。
- (九七) ホンドシオーホ Hondscioh ベーオウルフの同士でイエーアト族の兵士の一人。
- (九八) ヘオロウェアルド Heoroweard フロースガールの息子。
- (九九) ハイド hīde (古英語はhīd) 自由民が一家を養うのに十分と考えられた土地の広さ。
- (一〇〇) ヘアルドレード Heardrēd イェーアト族の王。

- (一〇一) ヘレリーチ Hereric ヘアルドレードの叔父、ヒュイドの兄弟。
- (一〇二) この辺りの写本の破損はひどく、補填不能となっている。
- (一〇三) 以下四行以上にわたり写本不鮮明。
- (一〇四) 歟案の木 注(四八) 参照。
- (一〇五) ヘトワレ族 Hetware ライン河下流域にいたフランク族。
- (一〇六) オーホトヘレ Onthere スウェード族の王オンイエンセーオウの息子。
- (一〇七) シュルフィング族 Scylingas スウェード族、すなわち、現在のスエーデンの中心部にいた住民。
- (一〇八) エーアドイルス Eadgils スウェード族の王子。オーホトヘレの息子。
- (一〇九) ヘレベアルド Herbeald イェーアト族の王子。フレゼルの長男。
- (一一〇) ヘスキュン Hæðcyn イェーアト族の王子。フレゼルの次男。
- (一一一) スウェーオン族 Swēon 現在のスエーデンの東部地方に住んでいたゲルマンの部族。
- (一二一) フレーオズナベオルフ Hreosna-beorh イェーアト国にある山の名。
- (一二三) エオヴォル Eofor オンイエンセーオウを殺害したイェーアト族の一人。
- (一二四) イフス族 Gifðas 東ゲルマン部族の一つ。
- (一二五) フーグ族 Hugas フランク族の別称。
- (一二六) デイフレヴン Dæg-hrefn フーグ族の戦士。
- (一二七) ウィーイラーフ Wīglaf ウェーイムンディンク族の出身で、ベーオウルフの血族の一人。

(一一八) ウェーオホスターン *Wēoh-stān* ウィーイラーフの父。

(一一九) エルフヘレ *Elf-here* ウィーイラーフの血族の一人。

(一二〇) ウェーイムンディンク族 *Wæg-mundingas* 注(一一七)参照。

(一二一) エーアンムント *Eannund* スウェード族の王子。オーホトヘレの息子。

(一二二) オネラ *Onela* スウェード族の王。オンイエンセーオウの息子。

(一二三) この半行の表現は、かつてゲルマン部族の間で金属が珍しく、鉄は輸入に頼らざるを得なかった頃からの名残りであることの指摘がある (cf. Klaeber 1950:221)。

(一二四) メレウィーオイング *Mere-wioing* フランク族の王。

(一二五) ウォンレド *Won-rēd* イェーアト族の男。ウルフとエオヴォルの父。

(一二六) ウルフ *Wulf* イェーアト族の兵士。

(一二七) (シェアト) *seatt* この単位の名前は *Klaeber* (1950:224) に基づく。古英語期には一シリングの二〇分の一の価値がある銀貨または金貨として用いられていた。

モールドンの戦い

(一) 現存の唯一の写本では、この詩の冒頭の部分は破損しているため不明である。

(二) 第三節を参照。味方の砦があったらしい。

(三) この川の下流は現在ブラックウォーター (*Blackwater*) と呼ばれている。

(四) デーン人とも呼ばれている。いわゆるバイキングたちのことである。

- (五) 当時のアングロ・サクソン人たちはこのようにして突き刺さった槍を抜いたのであろう。
 - (六) 写本では間隙は認められないが、韻律上明らかに半分分が欠落している。
 - (七) レーオフスヌの郷里。多分、エセックスのストゥール川の河口のことであろう。
 - (八) 人質が自分を人質にとっている敵方のために戦うことが当時あったらしい。
 - (九) この渾名は第二節のエアドウェルドとは別人であることを示すためのものと思われる。
 - (一〇) 第三節を参照。
 - (一一) この詩は末尾も欠落しているため、以下不明。
- キリストとサタン
- (一) 『創世記』第一章参照。
 - (二) サタン (Satan) 神に反逆を企てたため、七天使の一人ミカエル (Michael) によって地獄に追放された悪魔、ルーキフェル (Lucifer) のこと。
 - (三) 『イザヤ書』第四章一三節参照。
 - (四) 注(二)参照。
 - (五) シモン・ペテロ Simon Petreus キリストの十二使徒の一人であり、その頭であった。他の使徒たちと共にキリストから遣わされてガリラヤで宣教し、病気を癒した。
 - (六) ガリラヤ Galilee パレスチナの北部に位置し、キリストの宣教の主要舞台となった所。十二使徒の大部分はこの出身者であった。

- (七) トマス Thomas 十二使徒の一人。デドモ (Didymus) とも呼ばれる。懷疑家であったが、復活した主に接してすぐれた告白をし、主の祝福にあずかった。『ヨハネによる福音書』第二〇章二四―二九節参照。
- (八) ユダ Yudas 十二使徒の一人で、キリストを裏切った。後に後悔し、絶望して自殺した。ガリラヤ出身ではなかったため、生地の名をつけてイスカリオテのユダと呼ばれる。
- (九) 大天使 Archangel ミカエル、ガブリエル、ラファエルなど七人から成る天使長のこと。
- (一〇) 以下、次の節の終わりまで、『マルコによる福音書』第四章を参照。ただし、古英詩の内容は聖書の記述とはかなり異なる。

創世記 A

- (一) 以下、写本が一葉欠落していると考えられている。
- (二) 古英詩には、「神の子」と並んで「人の子」という表現がよく用いられている。
- (三) 聖書ではクシ (Cush) とも呼ばれている。
- (四) 次行から八五一行まで『創世記B』とよばれる部分が挿入されている。
- (五) 喉仏か、それとも、恥ずかしい気持ちなのかははっきりしない。
- (六) 聖書では「ちり」であるが、古英語の *ereot* 'grit' は「砂」のことである。
- (七) 聖書では「皮の着物」(coats of skins) と記されている。
- (八) 生命の木の警護者ケルブのこと。
- (九) 『エゼキエル書』第九章四節一二には「…嘆き悲しむ人々の額にしるしをつけよ。」と記されている。

(一〇) エデンの東にあるノド (Nod) という地。

(一一) しかし、『創世記』第四章一七節には「カインは町を作り、息子の名をとってその町をエノクと名づけた」と記されている。

(一二) しかし、家畜を飼って幕屋に住む人々の先祖となったのはヤバルである。『創世記』第四章二〇節を参照。

(一三) トバルカインはチラの子であるが、前節のユバルと、言及されていなかったヤバルは、アグの子である。

(一四) 『創世記』にはこのような記述は見当たらない。この種の表現はむしろゲルマンの英雄の描写に時おり用いられるものである。たとえば、『ヘレナ』(一二五六―九)を参照。

(一五) 『創世記』第五章一八節では一六二歳と記されている。

(一六) 『創世記』第五章二〇節には九六二歳と書かれている。

(一七) 『創世記』第五章二四節には、「エノクは神と共に歩み、神が彼を取られたので、いなくなった」と記されている。エノクは信仰によって死を見ないように天上へと移されたため、その死と墓のありかはだれにも知られていない。

(一八) 『創世記』第五章二七節では九六九歳と記されている。

(一九) しかし、レメクがノアをもうけた時は一八九歳になっていた。『創世記』第五章二八節参照。

(二〇) 古代の長さの単位。前腕、すなわち、ひじから手首までの長さを指す。

(二一) 第三節の末尾を参照。

(二二) 『創世記』では一五キュビトと記されている。一エル (e) は四五インチ、一キュビトは二〇インチ前後であるため、『創世記A』と聖書の記述の間には倍以上の深さの違いがあることになる。

(二三) しかし、この山は一般にアララテ (Ararat) と呼ばれている。

(二四) 天国と地獄に対するこの世のことか。この世は一般に midan-eard 'middle region' すなわち、天国と地獄の間にある中間の地域とみなされている。

(二五) 『創世記』第九章四節には、「しかし肉を、その命である血のままで、食べてはならない。」という表現になっている。

(二六) この部分の解釈には、写本の状況や韻律の面などから判断して、後に誤って挿入された、とするなど、諸説があり、学者の意見は一致していない。いずれにせよ、『創世記』には四人の名は記されていない。

(二七) ノアは一般に沃地におけるぶどうの栽培者の元祖とみなされている。

(二八) ケルビムのこと。『創世記』第三章二四節を参照。

(二九) 『創世記』第一〇章八、九節によると、ニムロデは「世の権力者となった最初の人」、「主の前に力ある狩獵者」であった。

(三〇) いわゆるバベルの塔のこと。

(三一) 聖書では、テラにはアブラム、ナホル、ハランの三人の子が生まれたことになっている。

(三二) この行(一七六八行)は、聖書の記述と明らかに矛盾し、学者の意見も一致しない校訂上問題の残る箇所となっている。

(三三) 古代エジプトの王ファラオ (Pharaoh) のこと。ただし、ここでは、パロは地方の小さい君主だったかも知れないと言われている。

(三四) 古代ゲルマン民族によく用いられた飾り物の一種。

(三五) 聖書によると、上記の二名の王にゴイムの王テダル、エラサル、エラサルの王アリオクが加わる。

(三六) 『創世記』第四章八節では、五人の王の中にソドムとゴモラの王も含まれている。

(三七) 彼については「ヘブライ人の手紙」(第七章)と詩編(一一〇・四)で詳しく言及されている。

(三八) 『創世記』第四章一八節では、パンとぶどう酒を持ってきたと記されている。

(三九) 半行、すなわち、二二四三bに相当する部分が欠落か。

(四〇) アブラム、ロト、および彼らの二人の妻のこと。

(四一) 聖書にはこの川の名は挙げられていない。大河ナイルではなく、その支流の小川であったろうと言われている。

(四二) 割礼のこと。『創世記』第十七章九—一四節参照。

(四三) アブラムとサライは神の命令に従い、すでにそれぞれアブラハムとサラに改名している。『創世記』第十七章五、一五節

参照。

(四四) 以下、写本一葉(『創世記』第一章一一一節に相当する部分)が欠落。

(四五) 以下、写本一葉(『創世記』第一章三二—三三節に相当する部分)が欠落。

(四六) 以下(二四四一行の後半)、半行以上が消し去られている。

(四七) 以下、写本一葉(『創世記』第一章一四—一七節に相当する部分)が欠落。

(四八) 『創世記』第一章二六節参照。

(四九) 以下、写本一葉(『創世記』第一章三一—三三節に相当する部分)が欠落。

(五〇) 『創世記』第一章三一—三三節参照。

(五一) 注(四二)参照。

- (五二) 『創世記』第二章九節では、イシマエルが「イサクと遊ぶのを見て」とある。
- (五三) 写本二葉(『創世記』第二章一五―二二節に相当する部分)が欠落。
- (五四) 石造りの祭壇で供物として動物の血と肉を焼いて神に捧げた古代ユダヤ教の儀式。
- ヘレナ

- (一) この年号は実際には十字架が地中に埋められてから数えられたものである。
- (二) コンスタンティヌス一世(西暦二七四頃―三三七)のことで、大帝と呼ばれる。ローマ帝国を再統一し、最初にキリスト教に改宗した皇帝で、その在位は三〇六年から三二一年間に及ぶ。ヘレナの子。

- (三) 西暦三二二年のこと。リキニウスを倒して単独帝となったのは三二四年。

- (四) ゲルマン民族の一部族。東ゴート族と西ゴート族に分かれるが、四世紀末にイタリアに侵入したのは後者である。

- (五) フランク族の別称。『ベーオウルフ』二五〇二、二九一四行参照。

- (六) 辺りがバツと明るくなったことをいう。

- (七) ^{Asia} 西洋とねりこ。北半球の温帯地方に広く見られる落葉喬木で、その材は固く、弾力性に富み、家具や道具類のほか、古来、槍の柄としても用いられた。

- (八) 伝説では、大帝はラテラノでシルヴェステル一世(教皇、在位三二四―三五)から洗礼を受け、キリスト教徒を迫害した罰としてかかったハンセン氏病が治ったとされているが、臨終の床にある大帝に洗礼を授けたのはニコメディアの主教エウセビオス(Eusebius、三四―一二年頃没)である。

- (九) <レナ(Flavia Julia Helena Augusta、一五〇頃―三三〇頃)のこと。コンスタンティウス・クロルス(三〇六年

没)の妃。熱心なキリスト信者であり、大帝の改宗は彼女によるともいわれる。晩年、聖地を巡礼(三二六年)、オリブ山とベツレヘムに壮麗な聖堂を建立し、さらにゴルゴタにも聖堂を建て、聖十字架を発見したとも伝えられている。この物語の中心はその時の巡礼に基づいている。

- (一〇) ローマ皇帝ハドリアヌスによって一三五年に異教都市として再建され、後にヘレナの巡礼の前年にあたる三二五年に、コンスタンティヌス大帝はここをキリスト教都市とした。

- (一一) イスラエルの出エジプトを指導して約束の地まで導き、また、シナイにおける契約によって旧約宗教の基礎を築いた人と考えられていて、旧約聖書の最初の五書は「モーセの律法」、または、「モーセ五書」と呼ばれ、伝説的にはモーセの著作とされている。

- (一二) 『イザヤ書』第七章一四節への言及か。

- (一三) イスラエル統一王国第三代の王(紀元前九六一―九二二)。その記録は旧約聖書王第一―十一章、代下第一―十九章に収録されている。母バテシバからダビデの末子として生まれ、紀元前九六一年に即位、王国の繁栄を築いた。政治的手腕のみならず、すぐれた知恵で知られ、箴言、伝道の書、多くの詩篇がその著作とされるが、事実は不詳。

- (一四) イスラエル統一王国第二代の王。イスラエルの最盛期を築いた名君。首都エルサレムに神の箱を移し、祭司制度を定め、エルサレムを中心とするイスラエル宗教の基礎を築いた。また、多くの美しい詩篇を残し、後世に信仰の感化を及ぼした。後代の人々は彼を理想的な王とみなし、イエスは「ダビデの子」とさえ呼ばれた。

- (一五) 詩篇一六の八を参照。

- (一六) 旧約聖書中にその書物を残したいわゆる記述予言者の中で最大の人物といわれる。エルサレムで生れ育ち、約二〇歳で

予言者としての召命を受けた（紀元前七四二年頃）。

- (二七) いわゆるイスカリオテのユダのこと。シモンの子で、十二使徒の一人。キリストを裏切ったが、後に後悔し、絶望のあけく自殺し、悲惨な最後をとげた。イスカリオテのユダを四世紀初頭のこの物語に登場させるのはもちろん時代錯誤である。しかも、このユダは実際には後に司教となり、改名してキリアクスと呼ばれるようになった同名のユダのことであるため、人物が混同されている。

- (二八) シモンの父、ユダの祖父。

- (二九) シモンのこと。「ヨハネ福音書」第六章七一節参照。

- (三〇) キリスト教会初の殉教者として聖書に記された人物。ユダヤ教を批判し、イエスを「正しい方」、「キリスト」とする信仰を大胆に告白したため、反感を買い、神を冒瀆した咎により死罪を宣告され、石をもって撃ち殺された。

- (三一) パウロの青年期の呼び名。純粹のユダヤ人、熱烈なユダヤ教徒としてキリスト教徒に対する迫害に参加したが、後に回心し、宣教者へと大転回した。かつてステパノの処刑に賛成し、それを目撃したが、後には彼の信仰を弁明している。二千年近くにわたるキリスト教史上、最大の宣教者といわれる。

- (三二) トロイ戦争のこと。

- (三三) キリストの磔刑を指している。

- (三四) キリストが十字架にかけられた丘の名。ギリシア語で頭蓋骨を意味する。多分その地形から呼ばれたものであろう。位置はエルサレムの郊外という以外は必ずしも明らかでない。

- (三五) 旧約聖書の言語。出エジプトの後、イスラエル人たちがバレスチナ地方の聖地カナンに入ってから用いたと思われる。

(二六) 『イザヤ書』第四〇章一二節参照。

(二七) ケルブの複数形。『創世紀』第三章二四節では、生命の木への入口の守り手とされている。

(二八) 『イザヤ書』第六章三節参照。

(二九) セラフの複数形。神の玉座に仕えていたと考えられている。六枚の翼をもつ天使。『イザヤ書』第六章二節参照。

(三〇) 墮落天使のこと。『イザヤ書』第一四章一二節、『ユダの手紙』六節、などを参照。

(三一) 『ヨハネの黙示録』第二章参照。

(三二) 『出エジプト記』第二章一九節参照。

(三三) 午後三時を指す。新約聖書では昼間は日の出から日没まで一二等分されている。『ヨハネ伝福音書』第一章九節、『マ

タイ伝福音書』第二〇章五節を参照。

(三四) 死体のこと。

(三五) イスカリオテのシモンの子ユダを指す。

(三六) 後の司教キリアクスのこと。

(三七) ローマ皇帝ユリアヌス (Flavius Claudius Julianus 在位、西暦三六一―六三) のこと。コンスタンティヌス大帝の

異母弟の子であるが、キリスト教を棄てて異教の復興を計ったため、背教者ユリアヌスと呼ばれている。

(三八) 十字架を指している。

(三九) 第三一代ローマ教皇エウセビウス (St. Eusebius) のこと。ただし、ここでは西暦三一八年にニコメディアの主教となっ

たエウセビウスと混同されている。この主教は臨終の床にあるコンスタンティヌス大帝に洗礼を授けた。(注(八))を参照。

(四〇) 『エゼキエル書』第一章二〇節を参照。

(四一) 以下、ルーン文字によってCYNEWULFという署名がなされているが、各ルーン文字が何を表しているかについては説の分かれるところである。したがって、ルーン文字を含む段落の解釈は何通りも考えられるが、ここではその一つを示した。

(四二) 『ペテロの第二の手紙』第三章一〇節から一二節を参照。

(四三) 『マタイ伝福音書』第二章三六節、第一章三七節参照。

ユリアナ

(一) Maximianus, Marcus Aurelius Valerius (c. 311-310) ローマ皇帝 (286-305、306-8)。共同の統治者ディオクレティアヌス帝と同様に、勅令を發布してキリスト教徒を迫害し、死刑によって処罰するよう規定した(三〇四)。一度は退位したが、再び即位(306)。しかし、二年後に女婿コンスタンティヌス大帝暗殺の陰謀が発覚し、自決した。

(二) 古英語の *gerefa* は裁判官、知事などの意味であるが、ここでは領主としておく。領主には裁判権があったから。

(三) 紀元前二六四年、ニコメデス一世によって建設されて以来、ニコメディアと呼ばれ、ローマ時代はディオクレティアヌス帝とコンスタンティヌス大帝の王城であった。現在はトルコ北西部にあるコジャエリ県の県庁所在地で、イズミットまたはコジャエリと呼ばれている。

(四) 古英語では *Heilsen* となっているが、ラテン語の文献では様々な呼び方が見られる。ここではエウロギオスとしておく。この人物の詳細は不明。

(五) 古英語名はJuliana。四世紀初頭に殉教したと伝えられるニコメディアの聖女。分娩および伝染病の保護者とされ、祝祭日は二月一六日。

(六) 以下、写本一葉欠落。ラテン語本文より補填すると、ユリアナは伝令が悪魔であること、および、アダム、エバ、カインなどを唆したのも自分であることを白状させ、最後にユダにけしかけてキリストを裏切らせたことも認めさせる。以下はこの告白の続きと思われる。

(七) キリストの降誕を恐れて、ベツレヘムの幼児を殺害したことで知られるヘロデ大王の子、ヘロデ・アンティパス(Herod Antipas)のこと(在位、紀元前四―後三九年)。父の大王と同様、親ローマ政策をとったが、ローマ反逆の謀叛ありとの讒言によって流刑となり、ガリアで死亡。兄弟の妻を王妃に迎え、先の王妃を離婚したことでバプテスマのヨハネから非難されたため、ヨハネを殺害した。『マタイ伝福音書』第十四章一一二節、『マルコ伝福音書』第六章一四―二九節を参照。

(八) バプテスマのヨハネ。イエスの時代に予言者的活動をし、イエスに洗礼を施した。『マルコ伝福音書』第一章一一節、『マタイ伝福音書』第三章一一七節を参照。

(九) Simon Magusのこと。サマリアの町で魔術を行って人々を驚嘆させ、みずからを傑物と称し、多くの人を引きつけていた。最初の異端者、宗教詐欺師と呼ばれている。新約聖書の『使徒行録』第八章九―二四節を参照。

(一〇) Nero, Claudius Caesar (三七―六八) キリスト教徒を迫害した最初のローマ皇帝(在位、五四―六八)として知られる。最初の五年間は哲人セネカからの補佐の下に善政を施したが、後に乱れ、ペテロもパウロも彼の手によって殉教したと伝えられる。

(一一) キリストの十二使徒の一人で、その指導的立場にあつて活躍し、パウロと共に原始教会の最大の使徒と目される。

(一二) 二千年近くに及ぶキリスト教史上最大の宣教者であり、キリスト教の世界性を理論的に説き明かし、福音を世界中に普及するのを実現させた最初の人物と評されている。

(一三) ユダヤ、サマリア、イドマヤを治めたローマの第五代総督(二六―三六)であり、残忍で横暴な政策で民衆を苦しめ、虐殺し、また、イエスの無罪を認めながらも、民衆の暴動と皇帝の不興とを恐れてイエスを十字架につけた。『ルカ伝福音書』第三章一節、『マルコ伝福音書』第一章一五節、『ヨハネ伝福音書』第一章一二節、などを参照。

(一四) 古英語では *Egberts* と綴られている。ローマ帝国の属州であり、マケドニア以南のギリシア全土に相当するアカイアの総督。アンデレに対し異教の神々に供物を捧げることを強要し、これが入れられないと知るや、アンデレを×印の十字架にかけた。

(一五) 古英語では *Andreas*。アンドレアス、アンドレアなどとも表記される。十二使徒の一人で、聖ペテロの兄弟ヨハネの弟子となり、二人で最初にキリストに従う者となった。キリストの昇天後は、主に黒海沿岸地方で伝道し、後に殉教した。

(一六) うら若い乙女が悪魔を取り押えて罪を告白させる光景は、読む人に異様な感じを与えるのは確かであり、このような行動をとるように神が指示した部分と合わせて、詩人が原典を省くことなく描写したことを非とする学者がいる。しかし、この詩が依頼に応じて書かれたため、この箇所は省けなかったのではとする説もある。

(一七) 『創世紀』第二章―六章を参照。

(一八) 以下、写本数葉欠落。ラテン語の原典からこの部分を補填すると、次のようになる。「ユリアナは領主の前に連れ出され、そして、どのようにして拷問から生き延びたのかと領主に問い詰められた。神様が自分を支援してくださるために天使を

遭わされたのだと彼女は答え、そして同時に、領主に対して、その残酷な行為のために永久に苦しむことになるであろうと警告した。そのため、ユリアナは刀を縛りつけた車輪の上で責め苦を受けるが、信念を守り通す。次に、火責めの刑にあうが、天使がその火を消す。ユリアナが神に救助を請うと、刑の執行人たちは後悔し、改宗してユリアナの信ずる神を崇めるようになる。ところが、改宗者たちは全員マクシミリアヌス帝の命令によって首を刎ねられてしまった。次に、領主はユリアナを生きたまま火あぶりの刑に処すように言いつける。そこで、彼女は祈って助けを求める。」なお、次節はユリアナの祈りのほぼ終わりの部分から始まっている。

- (一九) これまでにユリアナに加えられたさまざまな拷問は、史実に基づくものではなく、また、彼女を傷つけることはできず、後で述べるように、当時の通常の処刑手段であった打ち首によってユリアナが殺されたということは注目に値すると記す学者もある。

(二〇) 天国のこと。

- (二一) キネウルフの他の作品では素晴らしい海の描写が見られるのに対して、『ユリアナ』ではここが海に言及した唯一の部分となっている。

(二二) ちなみに、六世紀後半になってユリアナのなきからはCunaeという町に移されたと言われている。

(二三) 以下、ルーン文字によってCYNEWULFという署名が埋め込まれている。

- (二四) この述懐は、キネウルフの他の作品、たとえば『ヘレナ』や『使徒の運命』などの場合と異なり、詩人が老齢に達していることを全く感じさせないことから、この作品が初期のものであると評される根拠の一部となっている。

ユデト

- (一) 写本は冒頭の一部が欠落している。聖書外典の物語から推測すると、アッシリア王ネブカドネザルの將軍ホロフェルネスは大軍を率いてユダヤに侵入し、ベツリア (Bethulia) を包囲した。寡婦ユデトは召使の女性一人を連れてアッシリア軍の陣営へと赴いた。自分の美貌でホロフェルネスを誘惑し、ベツリアの町を救いたかったからである。この断章は、ユデトが神への加護を願って祈りの言葉を発する辺りから始まっている。

不死鳥

- (一) 「ふち」 (fathom) は六フィート (=1.83m) の長さ。
- (二) プリニウスの『博物誌』によると、不死鳥は一羽しかおらず、これが巣の中で焼かれ、その遺体から一匹の虫が出てきて、新しい不死鳥に姿を変える。Gordon (1954:239) 参照。
- (三) organan (一二七行) の解釈には諸説があるが、¹じつじふ Blake (1964:70) に従っておく。
- (四) シリア人たちの国 (Syrwara lond 一六六行) は現在のシリア (Syria) 辺りを指すものと思われる。
- (五) 古英語の fenix は鳥 (phoenix) と木 (date-palm) の双方を表すが、これに対応する現代英語の phoenix は一般に鳥だけを指す。
- (六) 『ヘレナ』(一二五九行) にも「りんご形の黄金」という表現が用いられている。
- (七) ヨブ (Jobb) は旧約聖書「ヨブ記」の主人公。きわめて敬虔な人物であり、苛酷な試練にも耐え、神への信頼を失わなかった。新約聖書「ヤコブの手紙」(5. 11) にもヨブへの言及がある。
- (八) 「ヨブ記」(29. 18; 19. 25, 26) 参照。

あとがき

古英語の韻律、語形成、語順などの研究対象の一部として読んだ古英詩を翻訳し始めてから二〇年になる。翻訳は、いかにすぐれたものであったとしても、どのような言語で書かれていようと、また、いかなる内容のものであれ、さらには、いかに古い時代のものであれ、その存在価値や必要性は認められたとしても、学術論文に匹敵する評価は与えられることはないというのが学者の間での通念である。しかし、古英詩の翻訳という作業は私にとっては「学術上」まさに革命的な出来事であった。古英語の研究が頓挫した折、翻訳でもと思い立ったのが発端であるが、いざ始めてみると、日本語という大きな壁にぶつかり、まったく先に進めなかった。古英詩を文単位に現代英語に訳するという常に行っている作業はさほど困難とも思わないが、邦訳は「難しい」の一語に尽きる。訳文が日本語にならないのである。爾来、しばらくの間、古英詩と日本語との格闘が続いたが、結局、古英詩を深く正確に読み解く力の無さが邦訳を阻む主な原因と分かった。以来、より多くの時間を投入して古英詩の読解に努めたところ、訳文も多少さまになってきた。予想外の収穫となったのは、古英詩をなるべく深く正確に読んでから邦訳をするという過程で、いくつかの新たな研究テーマが見つかり、さらに、良いデータが採れ、古英語の研究が飛躍的に進展したことであった。

古英詩の翻訳そのものが目的ではないことから、訳業ははかどってはいないが、すでに古英詩全体の約三分の一は終え、一冊の本になりそうな分量であるため、今回、旧稿すべてに加筆・削除等を施して彫琢し、体裁を整え、冒頭に古英詩全般が通覧できる概説を添えて刊行することにした。古英詩全体の三分の二が訳出されないで残っているという現実を前にすると、日暮れて道遠しの感が強いが、この辺りで一区切りをつけて新たな一歩を踏み出すことは、これから先の研究の見通しをつけ、目標を鮮明にするためには必要なことであると私は思う。

この二〇年間、思えばさまざまなことが身辺で起こり、その都度、実に多くの人々の恩恵を受けてきた。本書がこれらの恩に報いるささやかな一部になればこんなうれしいことはない。

参考文献

古英詩全般

(一) テキスト

Gollancz, Israel, and W.S. Mackie. (eds.) 1895, 1934. *The Exeter Book*. (EETS. OS. 104, 194) 2 vols. (repr. 1978) Millwood : Kraus Reprint.

Krapp, George Phillip, and Elliot Van Kirk Dobbie. (eds.) 1931-1941. *The Anglo-Saxon Poetic Records*. 6 vols. New York : Columbia University Press.

Muir, Bernard J. (ed.) 1994. *The Exeter Anthology of Old English Poetry*. 2 vols. Exeter : University of Exeter Press.

Shippey, T.A. (ed.) 1976. *Poems of Wisdom and Learning in Old English*. Rowman and Littlefield : Brewer.

鈴木重威(編) 一九六七『古代英詩 哀歌』東京、研究社。

鈴木重威(編) 一九七二『古代英詩 宗教詩』東京、研究社。

Thorpe, Benjamin. (ed.) 1842. *Codex Exoniensis: A Collection of Anglo-Saxon Poetry*. (repr. 1975) New York : AMS.

(1) 古英語・中英語・現代英語

Anderson, George K. 1949. *The Literature of the Anglo-Saxon*. (repr. 1962) New York : Russell.

Bjork, Robert E. (ed.) 1996. *Cynewulf: Basic Readings*. New York and London : Garland.

Brooke, Stopford A. 1892. *The History of Early English Literature*. 2 vols. London and New York : Macmillan.

Godden, Malcolm, and Michael Lapidge. (eds.) 1991. *The Cambridge Companion to Old English Literature*.

Cambridge : Cambridge University Press.

Greenfield, Stanley B. 1965. *A Critical History of Old English Literature*. London : University of London Press.

Kennedy, Charles W. 1930. *The Earliest English Poetry*. (repr. 1961) London : Methuen.

岡川文夫 一九五二『中世の英文学と英語』(英米文学語学講座一) 東京、研究社。

Malone, Kemp, and Albert C. Baugh. 1967. *The Middle Ages*. (A Literary History of England. Vol. 1. London and New York : Routledge.

松浪 有 一九七二『講座 英米文学史一(詩一)』東京、大修館。

O'Keefe, Katherine O'Brien. (ed.) 1994. *Old English Shorter Poems: Basic Readings*. New York and London : Garland.

101 Pearsall, D. 1977. *Old English and Middle English Poetry*. London and New York : Routledge.

Sear, C. 1949. *Critical Studies in the Cynewulf Group*. (Lund Studies in English, XVII) (repr. 1968) Nendeln : Kraus Reprint.

Shippey, T.A. 1972. *Old English Verse*. London : Hutchinson.

——. 1976. *Poems of Wisdom and Learning in Old English*. Cambridge: Brewer.

Sisam, Kenneth. 1953. *Studies in the History of Old English Literature*. Oxford : Clarendon Press.

Wrenn, Charles Leslie. 1967. *A Study of Old English Literature*. London : Harrap.

(三) 翻 訳

Alexander, M. 1966. *The Earliest English Poems*. (Penguin Classics) Harmondsworth : Penguin Books.

Cook, Albert S., et al. 1970. *Translations from Old English*. Hamden : The Shoe String Press.

Gordon, R.K. 1954. *Anglo-Saxon Poetry*. London & New York : Dent and Dutton.

羽染竹一(訳)一九八一『古英詩大観』東京、原書房。

羽染竹一(訳)一九九二『続古英詩大観』東京、原書房。

Kennedy, Charles W. 1916. *The Caedmon Poems Translated into English Prose*. London and New York : Routledge.

——. 1949. *The Poems of Cynewulf : Translated into English Prose*. New York : Peter Smith.

——. 1952. *Early English Christian Poetry : Translated into Alliterative Verse with Critical Commentary*.

London : Hollis and Carter.

鈴木重威、鈴木もと子（共訳）一九七八『古代英詩』東京、テロリア出版。

（四）韻律

Bliss, Alan J. 1962. *An Introduction to Old English Metre*. Oxford : Blackwell.

——. 1967. *The Metre of Beowulf*. Oxford : Blackwell.

Cable, Thomas. 1974. *The Meter and Melody of Beowulf*. Urbana, Chicago, London : University of Illinois Press.

——. 1991. *The English Alliterative Tradition*. Philadelphia : University of Pennsylvania Press.

Creed, Robert Payson. 1990. *Reconstructing the Rhythm of Beowulf*. Columbia and London : University of Missouri Press.

藤原保明 一九九〇『古英詩韻律研究』広島、溪水社。

藤原保明 一九九〇『古英詩の中の脚韻と韻律』島利雄（編）『言語文化の理論的・実践的研究』（昭和六三年度・平成元年度

文部省特定研究経費研究成果報告書）

Fulk, Robert Dennis. 1992. *A History of Old English Meter*. Philadelphia : University of Pennsylvania Press.

Halle, Morris, and Samuel Jay Keyser. 1971. *English Stress : Its Form, Its Growth, and Its Role in Verse*.

New York : Harper and Row.

Hoover, David Lowel. 1986. *Old English Meter : A Reconstruction*. Ann Arbor : University Microfilms

66 International.

- Hutcheson, Bellenden Rand. 1995. *Old English Poetic Metre*. Cambridge : Brewer.
- Kendall, Calvin B. 1991. *The Metrical Grammar of Beowulf*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Lehman, Winfred P. 1956. *The Development of Germanic Verse Form*. Austin : University of Texas Press.
- Pope, John Collins. 1966. *The Rhythm of Beowulf*. New Haven and London : Yale University Press.
- Russom, Geoffrey. 1987. *Old English Meter and Linguistic Theory*. Cambridge : Cambridge University Press.
- . 1998. *Beowulf and Old Germanic Metre*. (Cambridge Studies in Anglo-Saxon England 23) Cambridge : Cambridge University Press.
- Schipper, Jakob. 1895. *Grundriss der Englischen Metrik*. Wien and Leipzig : Wilhelm Braumüller.
- . 1910. *A History of English Versification*. (repr. 1971) New York : AMS.
- Sievers, Edward. 1893. *Altgermanische Metrik*. Halle : Max Niemeyer.
- Suzuki, Seichi. 1996. *The Metrical Organization of Beowulf : Prototype and Isomorphism*. Berlin and New York : Mouton de Gruyter.
- Witman, F.H. 1993. *A Comparative Study of Old English Metre*. Toronto, Buffalo, London : University of Toronto Press.

作品別

『ベオーウルフ』

(一) テキスト

Harrison, James A., and Robert Sharp. (eds.) 1893. *Beowulf and The Fight at Finnsburh*. Boston : Ginn.

Klaeber, Frederick. (ed.) 1950. *Beowulf and The Fight at Finnsburg*. Boston : Heath.

Mitchell, Bruce, and Fred. C. Robinson. (eds.) 1998. *Beowulf : An Edition with Relevant Shorter Texts*. Oxford : Blackwell.

Nickel, G. (ed.) 1976. *Beowulf*. 3 vols. Heidelberg : Carl Winter.

Schnaubert, Else von. (ed.) 1963. *Heyne-Schückings Beowulf*. 3 vols. Paderborn : Ferdinand Schöningh.

Stevick, Robert D. 1968. *Suprasegmentals, Meter, and the Manuscript of Beowulf*. The Hague and Paris : Mouton.

鈴木重威(編)一九六九『古代英詩 ベオーウルフ』東京、研究社。

Swanton, Michael. (ed.) 1978. *Beowulf*. Manchester : Manchester University Press.

Wrenn, Charles Leslie, and W.F. Bolton (eds.) 1973. *Beowulf with the Finnsburg Fragment*. London : Harrap.

Wyatt, A.J., and R.W. Chambers. (eds.) 1914. *Beowulf with The Finnsburg Fragment*. Cambridge : Cambridge University Press.

Zupitza, Julius, and Norman Davis. (eds.) 1959. *Beowulf* (Facsimile). (EETS. 245) London : Oxford University

Press.

(1) 研究書

Bjork, Robert E., and John D. Niles. (eds.) 1997. *A Beowulf Handbook*. Lincoln : University of Nebraska Press.

Brodeur, Arthur Gilchrist. 1959. *The Art of Beowulf*. Berkeley and Los Angeles : University of California Press.

Chambers, R.W., and Charles Leslie Wrenn. (eds.) 1959. *Beowulf*. Cambridge : Cambridge University Press.

Chase, Colin. (ed.) 1981. *The Dating of Beowulf*. Toronto, Buffalo, London : University of Toronto Press.

Clark, George. 1990. *Beowulf*. Boston : Twayne.

Davis, Craig R. 1996. *Beowulf and the Demise of Germanic Legend in England*. New York and London : Garland.

Robinson, Fred C. 1993. *The Tomb of Beowulf*. Oxford : Blackwell.

Schneider, Karl. 1986. *Sophia Lectures on Beowulf*. Tokyo : Taishukan.

Shippey, T.A. 1978. *Beowulf*. London : Edward Arnold.

Sisam, Kenneth. 1965. *The Structure of Beowulf*. London : Oxford University Press.

Whitelock, Dorothy. 1951. *The Audience of Beowulf*. London : Oxford University Press.

(11) 翻記

Clark Hall, John R., and Charles Leslie Wrenn. 1950. *Beowulf and The Finnsburg Fragment*. London : Allen and Unwinn.

Crawford, D.H. 1966. *Beowulf*. New York : Cooper Square.

Kennedy, C.W. 1940. *Beowulf : The Oldest English Epic*. London : Oxford University Press.

厨川文夫(訳)一九四一『ベীオウルフ』(岩波文庫)東京、岩波書店。

Morgan, Edwin. 1952. *Beowulf : A Verse Translation into Modern English*. Berkeley : University of California Press.

長埜 盛(訳)一九六五『ベীオウルフ 附・フィンネスブルグ争乱断章』東京、吾妻書房。

忍足欣四郎(訳)一九九〇『ベীオウルフ』(岩波文庫)東京、岩波書店。

Pearson, Lucien Dean. 1965. *Beowulf*. Bloominhon : Indiana University Press.

『モールドンの戦い』

テキスト

Sedgefield, Walter John. (ed.) 1904. *The Battle of Maldon and Short Poems from the Saxon Chronicle*. (The

Belles = Lettres Series, Section I, Vol. 9) (repr. 1972) New York : AMS.

『キリストとサタン』

(一) テキスト

96 Clubb, Merrel Dare. (ed.) 1925. *Christ and Satan : An Old English Poem*. (repr. 1972) Hamden : The Shoe

String Press.

(1) 研究書

Sleeth, Charles R. 1982. *Studies in Christ and Satan*. Toronto, Buffalo, London : University of Toronto Press.

『聖書』

テキスト

Doane, Alger N. (ed.) 1978. *Genesis A : A New Edition*. Madison and London : University of Wisconsin Press.

Wells, David Marsden. (ed.) 1970. *A Critical Edition of The Old English Genesis A with a Translation*. Ann

Arbor : University Microfilms International.

『＜＞』

テキスト

Kent, Charles W. (ed.) 1889. *Elene : An Old English Poem*. (repr. 1973) New York : AMS.

『＜＞』

テキスト

Strunk, William. (ed.) 1904. *Juliana*. (The Belles=Letres Series, Section I, Vol. 8) (repr. 1972) New York :

AMS.

『チキム』

チキム

Cook, Albert S. (ed.) 1904. *Judith : An Old English Epic Fragment*. (The Bells = Lettres Series, Section I,

Vol. 7) (repr. 1972) New York : AMS.

Timmer, B.J. (ed.) 1978. *Judith*. Exeter : University of Exeter Press.

『不死鳥』

チキム

Blake, N.F. (ed.) 1990. *The Phoenix*. Exeter : University of Exeter Press.

その他

Brooks, Kenneth R. (ed.) 1961. *Andreas and The Fate of the Apostles*. Oxford : Clarendon Press.

Bussman, Hadumod. (ed.) 1996. (translated and edited by Gregory Trauth and Kerstin Kazzazi) *Routledge*

Dictionary of Language and Linguistics. London and New York : Routledge.

Cassidy, Frederic G., and Richard N. Ringler. 1971. *Bright's Old English Grammar and Reader*. New York :

Holt.

藤原保明・近藤健二 一九九三『古英語の初歩』(英語学入門講座 第四巻) 東京、英潮社。

泉井久之介(訳)一九七九『タキトゥスゲルマーニア』(岩波文庫) 東京、岩波書店。

国原吉之助(訳)一九六五『タキトゥス』(世界古典文学全集三二)東京、筑摩書房。

Mossé, Fernand. 1952. (translated by J.A. Walker) *A Handbook of Middle English*. Baltimore: The Johns Hopkins Press.

O'Connor, Joseph Desmond. 1980. *Better English Pronunciation: New Edition*. London: Cambridge University Press.

Wells, John Christopher. 1990. *Longman Pronunciation Dictionary*. Essex: Longman.